

●和歌山城址 (紀伊)

和歌山市の中央虎臥山に在り。東北は漆池を繞らし、西南は石牆を以て圍み、天守閣は蒼鬱たる翠松の間に屹として聳え頗る壯觀なり。當城は天正年間羽柴秀長の臣桑山重晴の築く所にして關原の役重晴當城に在りて關東軍に應ず、戦後大和の布施に移封し、淺野幸長代りて四十萬石を以て之に居城し大に修築を加ふ、後二十餘年を経て淺野氏安房に徒るに及び徳川頼宣代りて和歌山に來り更に修理を施し大に壯麗を示し爾來相承きて明治維新に至れり、廢藩後、外圍を除きし爲め太だ昔時の壯觀を殺ざたり。城内の一部は今陸軍の兵營となり、一部は公園とし、西の丸は中學校を置けり。

頼山陽

藩府形便接鎖臺

吾公昔日剪蒿萊

山分畿甸逶迤遠

海擁西南滌混開

平蔡功勳憑胤氏

殲殷戈戟誠廉來

移封二百星霜變

誰識孤臣頭數回

本居 宣長

ほろ／＼と和歌の浦わのいそ山に月のよろしきと和歌山の御城

●小竹行宮址 (紀伊)

傳へて神功皇后の行宮址と云ふ。那賀郡長田村に在り。即ち粉川寺の西方にして此地北方を大字北志野と云ひ、南方を南志野と云ふ。日本書紀に依れば神功皇后は南、紀伊國に詣り遂に忍熊王を攻めんと欲して更に小竹宮に遷る云々とあり小竹の宮は後に志野に作る。或は云ふ産土の神地は其跡にて東屋御前は則ち神功皇后を祀ると一書に記せり附近に櫻池と稱する大池あり堤の長さ百五十間、志野谷の水之れに瀉ぎ入る。神功皇后行宮の舊址は南北兩志野の中にありしならんも今其跡詳にし難きを遺憾とす。

●日前、國懸兩神宮 (紀伊)

海草郡宮村大字秋月に在り。二宮相並びて鎮座す、共に官幣大社なり。二社一境にして、俗に爾知勝車と唱へ奉る。日前の宮は神鏡を御靈代として石凝姥命、思兼命を相殿とす。國懸の宮は天日矛を御靈代とし、細女命、玉屋命を相殿とす。此二種の神寶は天照大神が瓊々杵尊に賜ひたる三種の神寶に添へ給ひし第二の神寶なれば歴代天皇は伊勢神宮に亞ぎて崇敬あらせられ社殿の修造を怠らせ給はず神域も廣大なりしが、天正年間の兵亂に際し豊臣氏の破却沒收する所となり。宮司紀忠雄は兩宮の御靈代を奉じて、兵難を高野山の麓に避け暫く潜伏したる後、歸りて小祠を營みたり。其後徳川頼宣、國守たるに及び兩宮を再營し神領を寄附し稍々舊時の盛觀の幾分に回復し神威再び輝くに至れるなり。兩宮の周圍には八十八社の末社建ち並び、別に天道根命等を祀れる攝社三社あり。兩宮の例祭は九月二十六日にして天道根命の例祭は二月十五日と八月十五日なり。境内一萬八千四百四十餘坪老樹鬱蒼として幽趣を極め苑内櫻樹多く風景又佳なり神宮の大華表前は龍神街道にして田野連り眺望快潤なり

本居 宣長

雄たけひの神世の御聲おもはえて

嵐はけしき龜山の松

●紀三井寺 (紀伊)

有名なる寺刹にして一名を金剛寶寺護國院と云ふ。和歌浦の東岸、名草山の西端なり。眞言宗にして寶龜元年唐僧爲光上人の開基に係る。本尊は十一面觀世音菩薩、脇立は梵天王、帝釋天王にして共に爲光上人の作る所と傳ふ。本堂は十一間四面、建坪百二十四坪、創建後廢し、再建を重ねたり、山門、鐘樓、開山堂、二層塔、大師堂、如意輪堂、六角堂等あり。本坊は頗る宏壯にして本堂の後に在り。境内建物敷地二千九百七十二坪、寺域約五町歩に及ぶと云ふ。和歌浦は宛かも手を伸べて取り得べく、雜賀崎、友ヶ島、淡路島等悉く一眸の裡に收められ眺望爽快風景頗る明媚なり。寺寶の鈴、五鈿、錫杖等は開山爲光上人が龍宮より得來りしものと傳ふ又本坊庭園内にある一椀四幹の應同樹と稱する異木は花なくして實を結ぶ木にして高さ三十尺以上に達し、其實は年々結ばず十年に一回乃至二回結ぶと云ふ。

祇南 海

潮揉山門飛閣重

丹梯過響吟竚

亦當海岸孤絕處

況是蓬萊第二峰

海獻聖燈藏寶氣

山稱名草採芝蹤

惜他千載少題咏

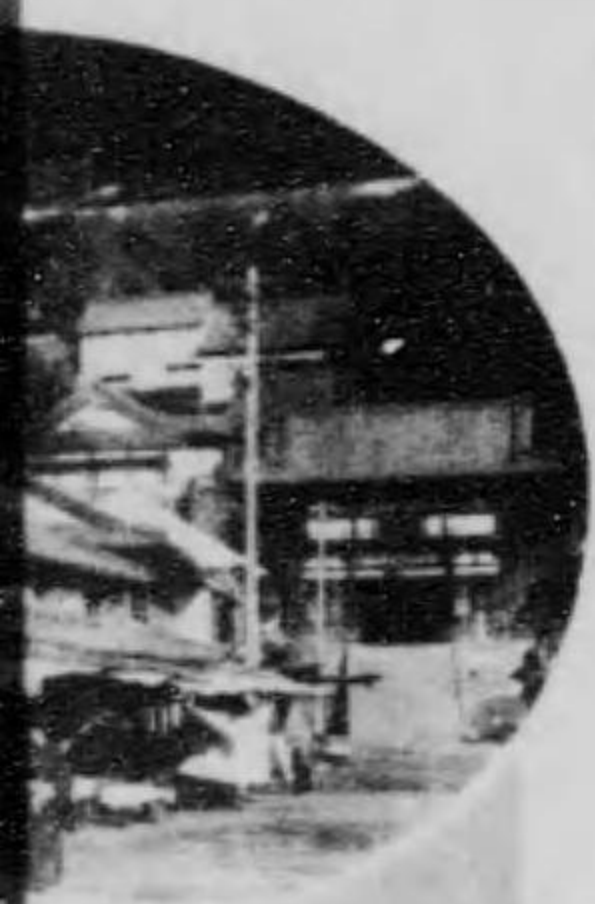
醉筆爲揮滿壁龍

舟近南方小補陀

遊人齊仰碧巖巖

一痕月印水心夕

若箇松嶺鶴唳多



寺井三紀



宮幡八竹小



社神山巖



社神慈國前

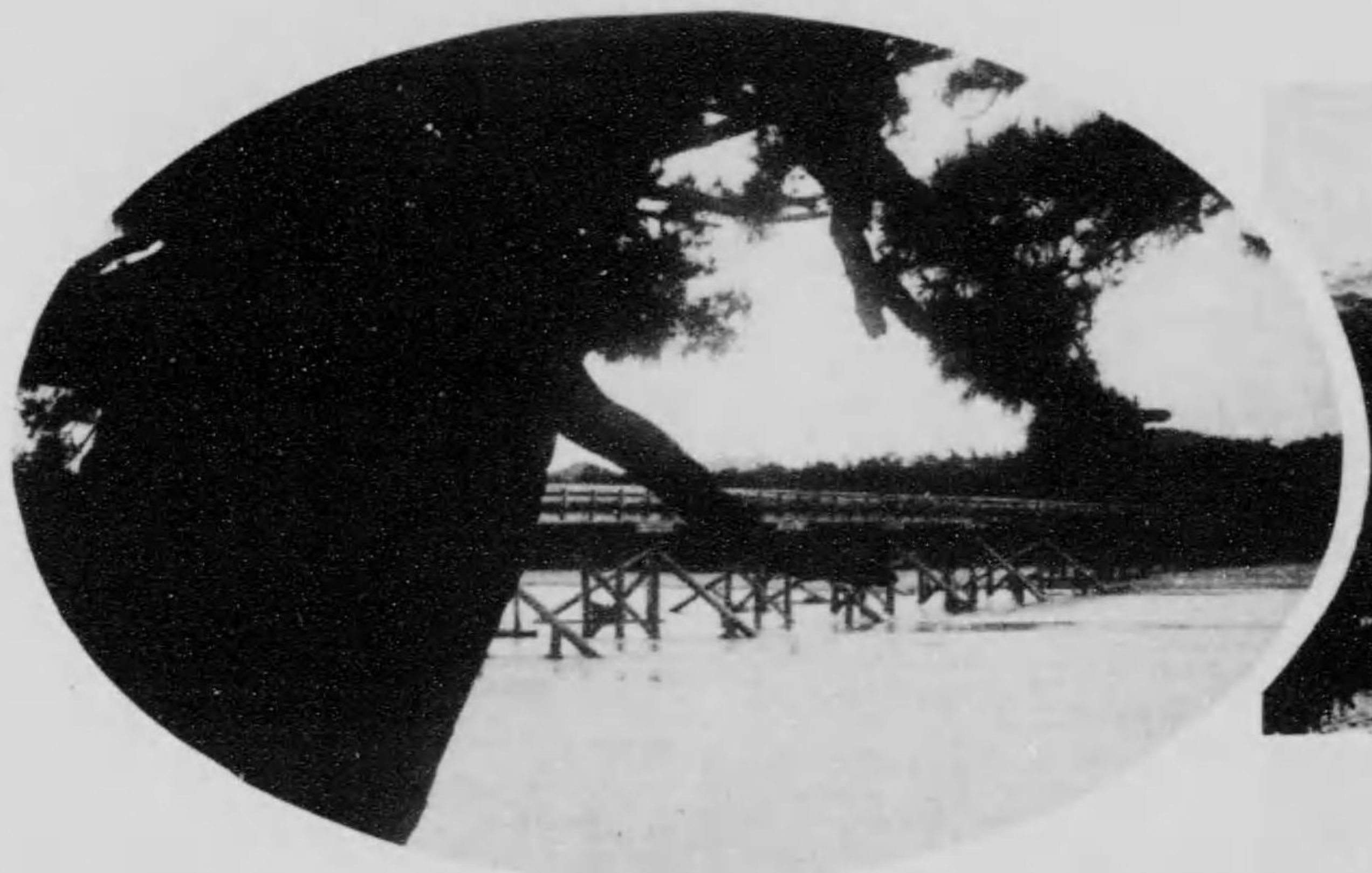
城山歌和

稱する大池あり堤の長さ百五十間、志野谷の水之れに瀉ぎ入る。神功皇后行宮の舊址は南北兩志野の中にあらしならんも今其跡詳にし難きを遺憾とす。

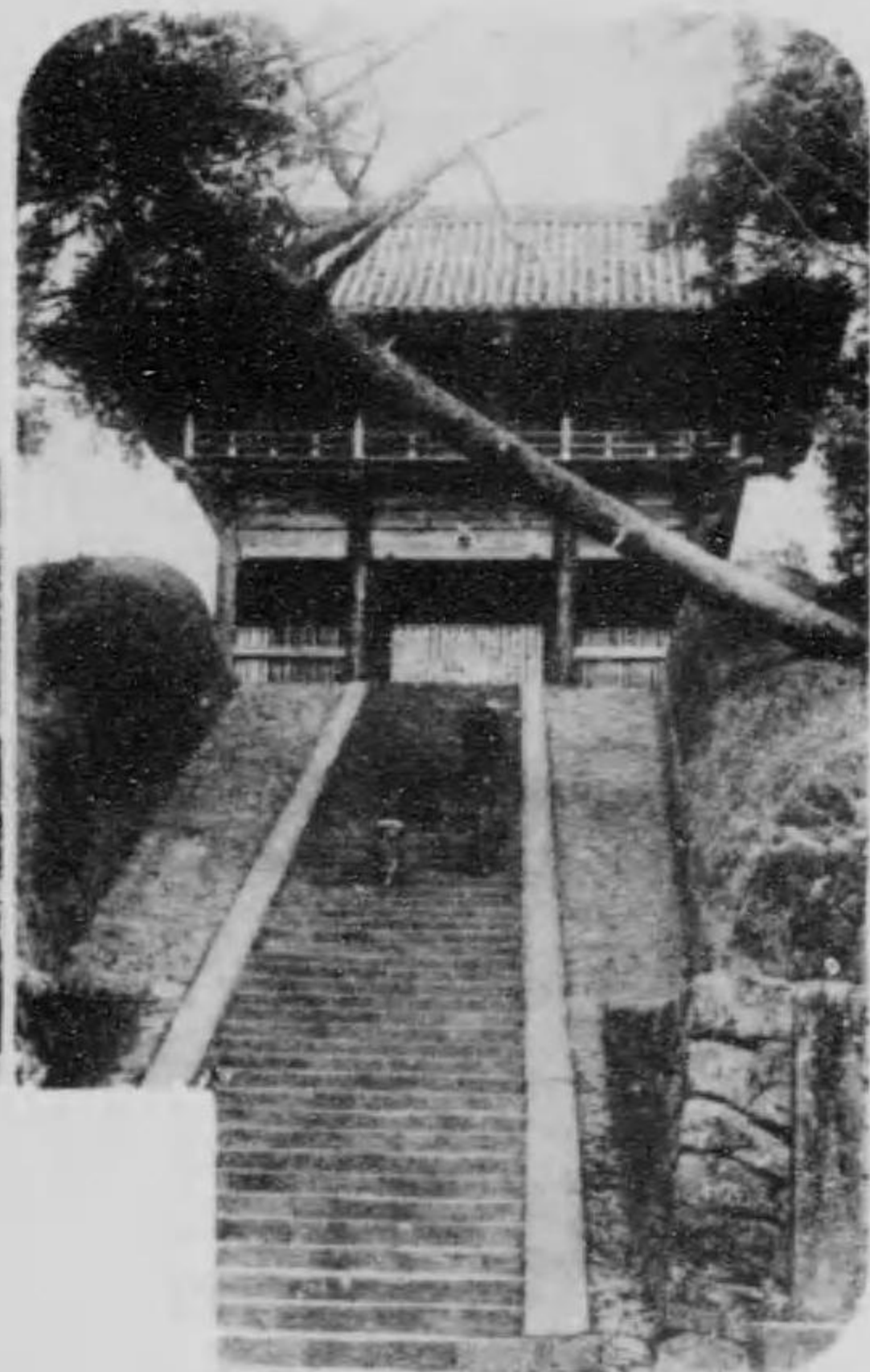
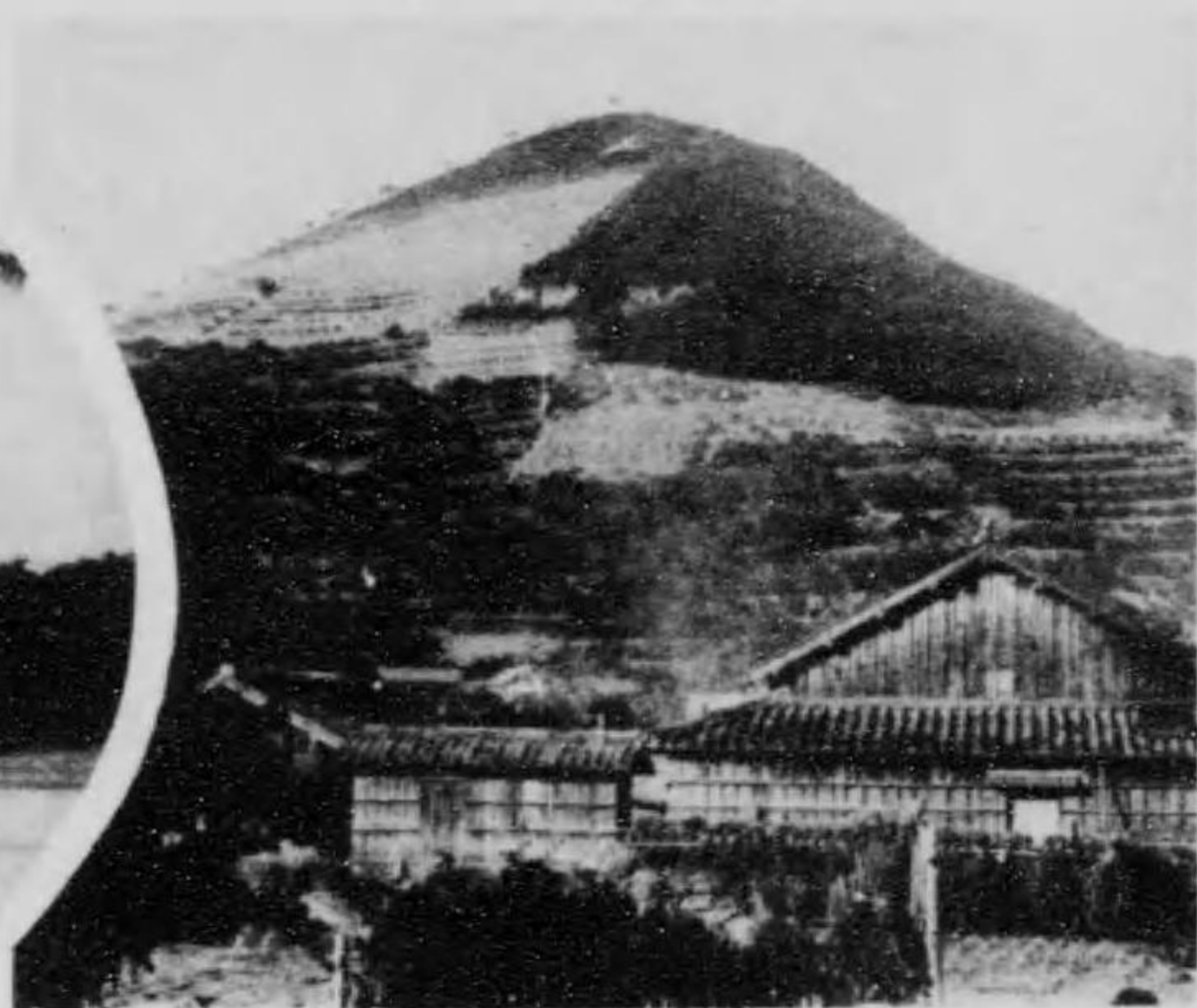
其の創建の年代は詳ならざれども、徳川頼宣の再建に係る。明治十八年兆域を改修して官幣中社に列せらる。按ずるに彦五瀬命は神武天皇の皇兄にて天皇と共に

惜他千載少題咏 醉筆爲揮滿壁龍
藤井 竹外
舟近南方小補陀 遊人齊仰碧嵯峨
一痕月印水心夕 若倚松嶺鶴唳多

川 高 日



園 橋 柑 田 有



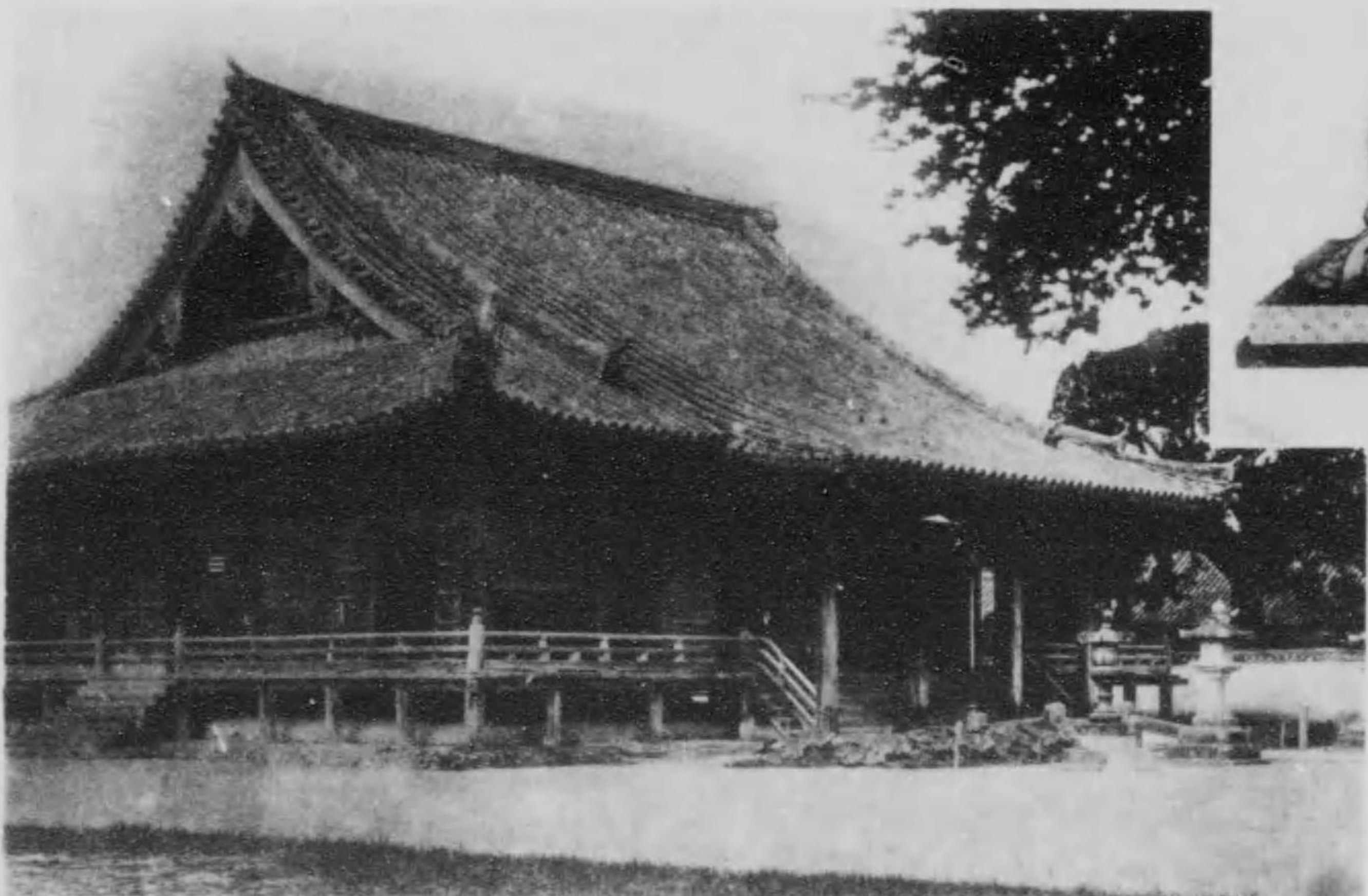
門 大 寺 成 道



安 珍、清 姫 木 像



岸 海 高 日



堂 本 寺 成 道

● 道成寺本堂 (紀伊)

日高郡矢田村大字土生に在り。天台宗にして天香山と號す、堂宇は小高き丘岡の上に建立せらる。此地東南には日高川

道成寺本堂に安置す。安珍は頭巾を冠り、鈴懸の山伏姿にして、清姫は被衣をうち被りたり。是れ傳説の生めるものなるや否やを知らざるも、世に奇怪なる事歴の此の古刹と共に尠からず傳はり、鐘

出し筏に組み流れて下すに棹の操縦難る困難にして一とたび過つ時は、忽ち肢體を粉碎せらるべしと云ふ。

● 日高海岸 (紀伊)

●道成寺本堂 (紀伊)

日高郡矢田村大字土生に在り。天台宗にして天香山と號す、堂宇は小高き丘岡の上に建立せらる。此地東南には日高川の長流を負ひ、北には大和に聯なる連山を背景とせり。大寶元年文武天皇の勅願に依り、紀道成奉行して創建する所にして義淵正の開基に係る。本堂は表行十間半、裏行九間半、前後とも兩正面の構造にして御建後屢々修繕を加へられたり。屋上の瓦には天授二年季春一方修葺大檀那吉田藏人源頼秀三男源金毘羅丸等の銘を残せり。實に一千二百年に及ばんとする古堂なりと云ふ。本尊は前後兩堂とも千手觀世音菩薩にして前堂の本尊は長一丈二尺、日光、月光の兩菩薩を脇士とす、各々長八尺、共に弘法大師の作と傳ふ。後堂の本尊は義淵僧正の作にして長一寸八分の觀世音を胸佛とす。其他三重塔、護摩堂、念佛堂、釋迦堂、十王堂等あり。寺域は五千三百三十五坪を有す。本堂の傍に有名なる入相櫻あり、老樹にして枝葉四方に擴がり、花時頗る美觀を呈す。塔の下には傳説に有名なる安珍が清姫に鎔かされて遺骨を葬れりといふ塚あり。更に境外の田中には清姫塚あり、土俗稱して蛇塚と呼べり。尙當寺の什寶中には安珍清姫の傳説を解説せる『鐘卷の縁起』と稱する繪卷物あり、其畫は土佐光重の筆に係り、繪詞は後小松天皇の宸筆なりと言ひ傳ふ。傳ふる所に依れば、安珍清姫の怪事ありてより當寺にては鐘を鐺る事を禁じたるが、正平十四年に至り之を鐺たるに障りありて其鐘は山中に打ち棄てたり、然るに天正の兵亂に際して、打ち棄てし鐘を上方勢の軍器に使用する所となりて、今は京都の妙心寺に存す。

●安珍清姫木像 (紀伊)

道成寺本堂に安置す。安珍は頭巾を冠り、鈴懸の山伏姿にして、清姫は被衣をうち被りたり。是れ傳説の生めるものなるや否やを知らざるも、世に奇怪なる事歴の此の古刹と共に尠からず傳はり、鐘巻と呼べる地名さへも存しつゝありて事實に奇怪事の演せられたらん如くに想はる。當寺縁日は一年四回あり、參詣者雜沓す。

出し篋に組みて流れを下すに棹の操縦頗る困難にして一とたび過つ時は、忽ち肢體を粉碎せらるべしと云ふ。

●日高海岸 (紀伊)

日高川の海に瀉く河口附近一帯は日高海岸にして、日高郡の最西端なる海中に突出せる岬角を比井崎と稱し、紀州灘の西北端を成す、岬頭に第一等燈臺あり、水面上二百六十呎と註せらる、岬下の海岸に一奇岩あり、崩岩と稱す、其狀恰も人の拜屈するが如し、附近に産湯浦あり應神天皇湯沐の遺址なりと傳ふ。其他附近の三尾には三穗の石室と稱する一大石窟あり、深さ十六間、幅五六間、高さ七八間より十二三間に及ぶ。

●有田蜜柑園 (紀伊)

紀州蜜柑の産地として古來有名なる有田の蜜柑園は、有田郡有田川の兩岸を以て最とす。蜜柑園は山に據りて設けられ、其形狀疊壁の如く、五層乃至七層に達するものあり。而して其實るや戸々之れを摘み取りて函に客れ、此淡より諸國に向つて輸送さるゝなり。其産額の如きは本郡中のみにても一個年約四五萬圓に上り、實に當郡の一大富源と稱すべし。其の質頗る良好にして味ひの甘美なること他國産に其比を見ず、果實成熟の時期に當りては、瀟山綠葉の間に黃顆累累として其の香氣芬々、遠く四國地方の海岸にまで及ぶと云ふ。傳ふる所に依れば紀州蜜柑の繁盛を示すに至りたるは天正年間開始に始まる、當時嘗て徳川頼宣此地を巡行し、村民の貧きを見て大に嘆じ、肥後八代より蜜柑の種子を得て之を植えしめ、斯くて年々歳々播植して遂に有田川の兩岸數里に亘る一大蜜柑園を爲し、蜜柑の産地は紀州を以て稱首とする今日の盛況を呈するに至りたりと云ふ。

●日高川 (紀伊)

其水源を大和に隣接せる龍神村の山中に發し、亥子川、丹生野川、笹子川、小又川、古釜川、水谷川、鷲野川、三津川等の諸流を併合し蜿蜒曲折し西流して海に注ぐ、陸路約二十里、河程は四十八里の長域に達す、然かも舟楫の通するは僅に下流七里の間に過ぎず。上流は急流奔湍迸激恰も瀑布の如し、是を日高川の五瀧と稱す、就中鳴瀧、手早瀧、大瀧等最も名あり、殊に手早の瀧は飛沫雲霧を捲きて斷崖の間を速下し、山より木材を伐

●同 大門 (紀伊)

道成寺の大門は正面礎道を登り盡したる所に在り巍然たる樓門にして、之を入りて本堂に詣るなり。本堂と共に創建以來幾たびか修繕を経たるものなり、而かも其構造は一千二百年來の古構にして、去る明治十八年内務省より保存資金を下賜せられたり。又後堂の本尊は海中より出現せしと傳へらるゝものにして、是れ亦曩年内務省より美術優等の鑑査狀を下附されたるものなり。

齋藤 拙堂
蕭寺千年樓峻岡 埋沙缺瓦色猶蒼
春風好在老櫻樹 花撲客衣吹古香

●高野山一の橋 (紀伊)

高野山奥院なる開祖弘法大師の廟所に一橋を架す、御廟橋と稱す、長さ四間四尺、幅五尺五寸、橋板三十七枚あり、是れ金剛界の三十七尊を表はせるものなり板裏には其が種子を書す、古へより罪障深き者は渡るを得ずと言ひ傳ふ。一書に記す所に依れば、往時豊太閤此茲に至りて畏縮時を移し、夜竊かに應其上人を從へて此橋を渡り試み、翌日東帯し、諸侯を率ゐて廟所に詣てたりと云ふ

●美福門院御陵 (紀伊)

高野山中、蓮華谷の西方に一陵あり、菩提心院陵と云ふ、即ち鳥羽皇后美福門院藤原得子の納骨所なり。兆域三百八十歩、今、宮内省の所管に屬す。續後選集に左の如く記せり

美福門院のかくれさせ給ひて後、高野のみやに納め奉りけるよし消息して侍りけるによめる

俊成

おくれ居て思ひやるこそ悲しけれ

高野の山のけふの御幸は

美福門院は、鳥羽天皇崩じたまひし後紀伊國那賀郡の荒川に御所を營み、終身佛に仕へ永曆元年を以て崩じ給ふ、御遺命に依り尊骸を茶毘に附し奉りて高野山に葬り奉り。因に曰ふ、菩提心院は往生院谷の東北一町に在り、美福門院の弟備後守時通遺旨により御骨を首にかけて高野に登る事は世繼物語に載せたり。

●荻萱堂 (紀伊)

高野山登山の途次、學文路村の驛所に在り、殿堂具備せり。是れ戯曲小説に傳へられて有名なる加藤重氏の遺跡なりと云ふ。刈萱の物語は異説區々にして一定せず。一書に記す所に依れば、加藤繁氏

は筑紫博多の守護職加藤兵衛尉繁昌の子にして幼字を石堂丸と呼びたり、繁氏長じて高野山に登り、剃髮して等阿法師と稱し、同山に隠棲せり、嘗て刈萱の關に在りたるを以て世人繁氏を稱して荻萱道心と呼べり。然るに繁氏の妻千里の前夫の行方を尋ねて播州に來り明石の大山寺に於て出産したる男子に夫の幼字を名づけて石堂丸と名づけ、十四歳の時母子諸共携へて高野山に繁氏を尋ね來り遂に歿したるを石堂丸は母の墓所に供養し、仁安元年の秋、始めて父の法師に尋ね逢ひしが、法師は我父なりと言はざるも、出離の要を説きて、未來永劫の値遇を誓ひ、是れこそ眞實の孝心ならめと諄々説示したるに、石堂丸は理に伏し、即ち等阿法師の弟子となり、信生法師と號したり。云々

因に云ふ、學文路は或は禿に作る、高野山の北にして紀之川の南岸に沿ふ、大和、河内街道より高野詣でを爲す者は皆茲に至る、世に稱する高野山七口の一なり、又高野山中、本中院谷に至るの途に、高く石を積み上げたる上に鐘樓を築きたるあり、稱して六時の鐘と云ふ。是れ福島正則の寄進に係る、後ち火災の爲め焼失す、其子正利再び鑄造して寄進せり。鐘には前の銘と、後の銘とを並べ鑄りたり。

●善名稱院 (九度山)

是れ嘗て大阪籠城の軍師として著名なる眞田幸村が其父昌幸と共に流浪隠栖したる山にして、伊都郡九度山村に在り。即ち高野山の北谷にして學文路、河根の西に列る。和歌山市を距る八町、高野山上の大門まで百八十町を隔つ、山上に一刹あり、信羅陀山善名稱院と云ふ、往時眞田昌幸父子の邸宅なりしを寛保元年大安上人が精舎となしたるなりと云ふ。故に一名を眞田屋敷と呼べり、兆域五百三

十餘坪、一方は長屋門にして三方は土塀なり、茲に地藏尊を安置せる本堂あり、大安上人の開基に係る、此他上人の廟所土砂堂、客堂等あり。

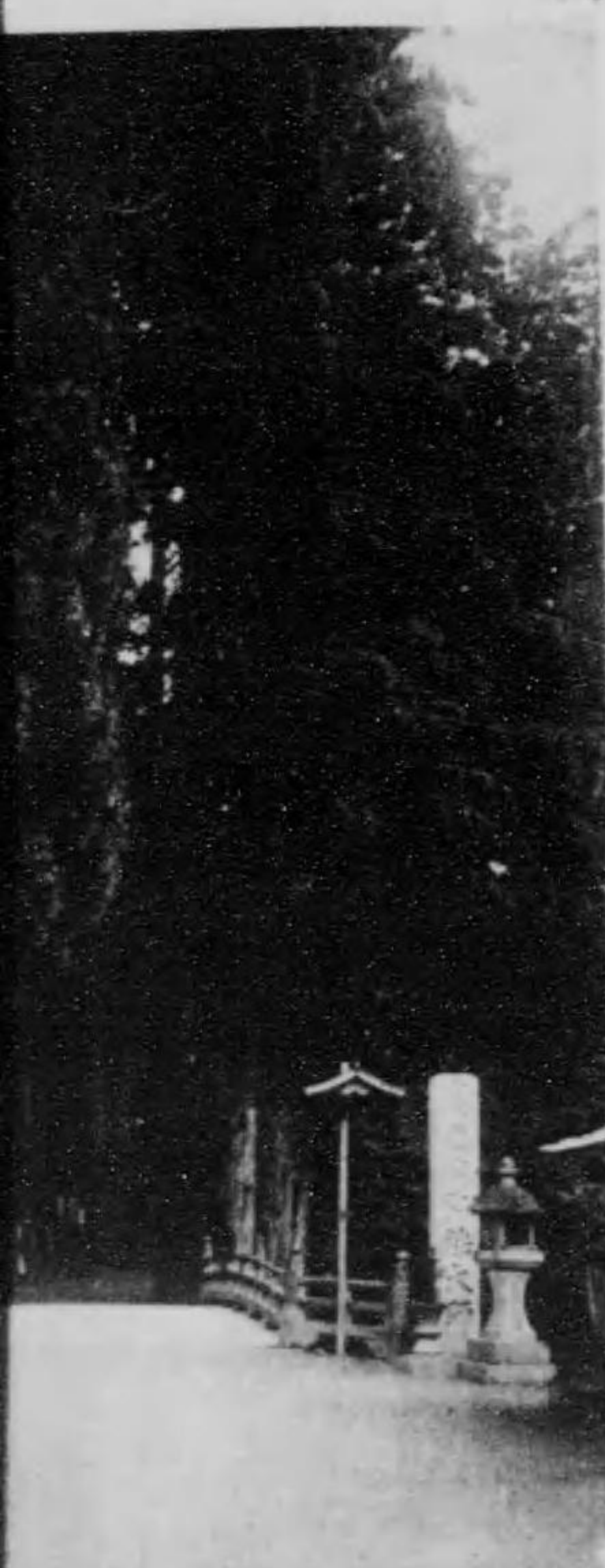
昌幸、幸村父子は關ヶ原の役に際し、西軍に與みして信州上田の城に據り、徳川秀忠の軍を阻止し、秀忠をして關ヶ原の役に參加し能はざらしめたり。然るに關ヶ原の役、西軍は大敗に終りたるを以て、眞田父子は流浪して九度山に蟄伏し、潜に時機の至るを待ちつゝありたるが、昌幸は病に罹りて遂に茲に歿し、後、幸村は大阪に迎へられて入城し寡を以て能く徳川の大兵に抗し神策奇計を以て屢々能く東軍を敗り智勇の名を轟せり。世に眞田紐と稱するは幸村が此山に浪居中生計の爲に製し始めたものなりと云ふ。

●眞田昌幸墓 (九度山)

九度山上、眞田屋敷の長屋門を入りたる右方に、僅に雨露を凌ぎ得べきのみ多年経し巨松の下に在り。墓は寶篋印塔にして、其傍に一體の地藏尊寂しく立てり是れ幸村が大阪入城に際し、己れて代りて父昌幸の墳墓を守護せしめんが爲めに建立せるものなりと。又別に一小祠あり、昌幸を地主神として茲に崇め祀れり。善名稱院の什物中には昌幸の船幕、幸村の鎧等あり。昌幸慶長十六年六月四日歿し法名を一翁千雪大居士と云ふ。

●弘法大師筆蹟 (九度山)

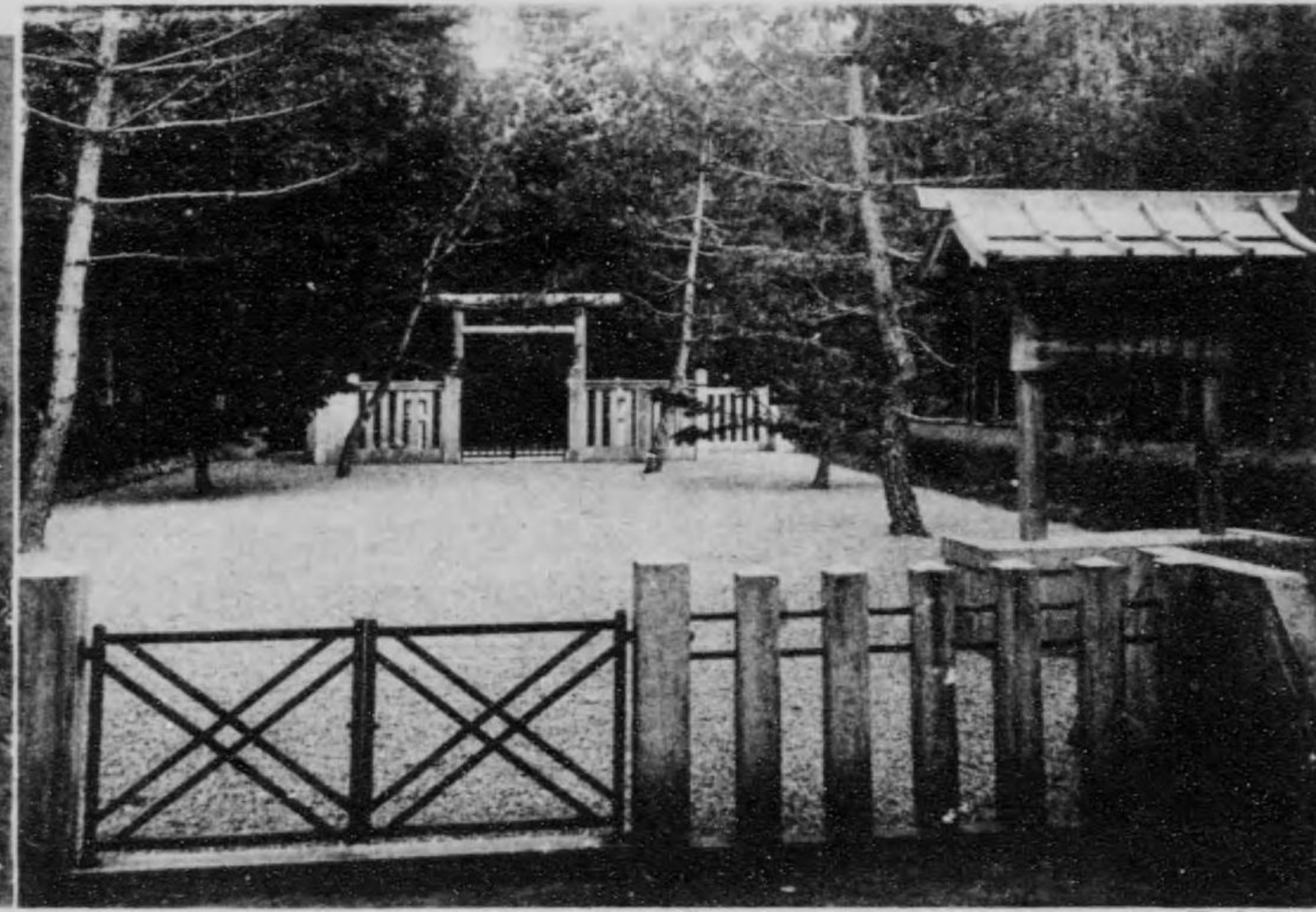
是れ弘法大師の自筆に係る風信帖と稱して有名なるものなり、風信帖なるものは三卷あり、是れ其一にして、原書は山城國教王護國寺の所藏にして、豎九寸五分、横一尺八寸九分あり。本帖の宛名に東嶺金蘭と署したるは傳教大師の事なり。又本帖を風信帖と稱するは其帖初に風信云々とあるより名けたるものなりと云ふ。



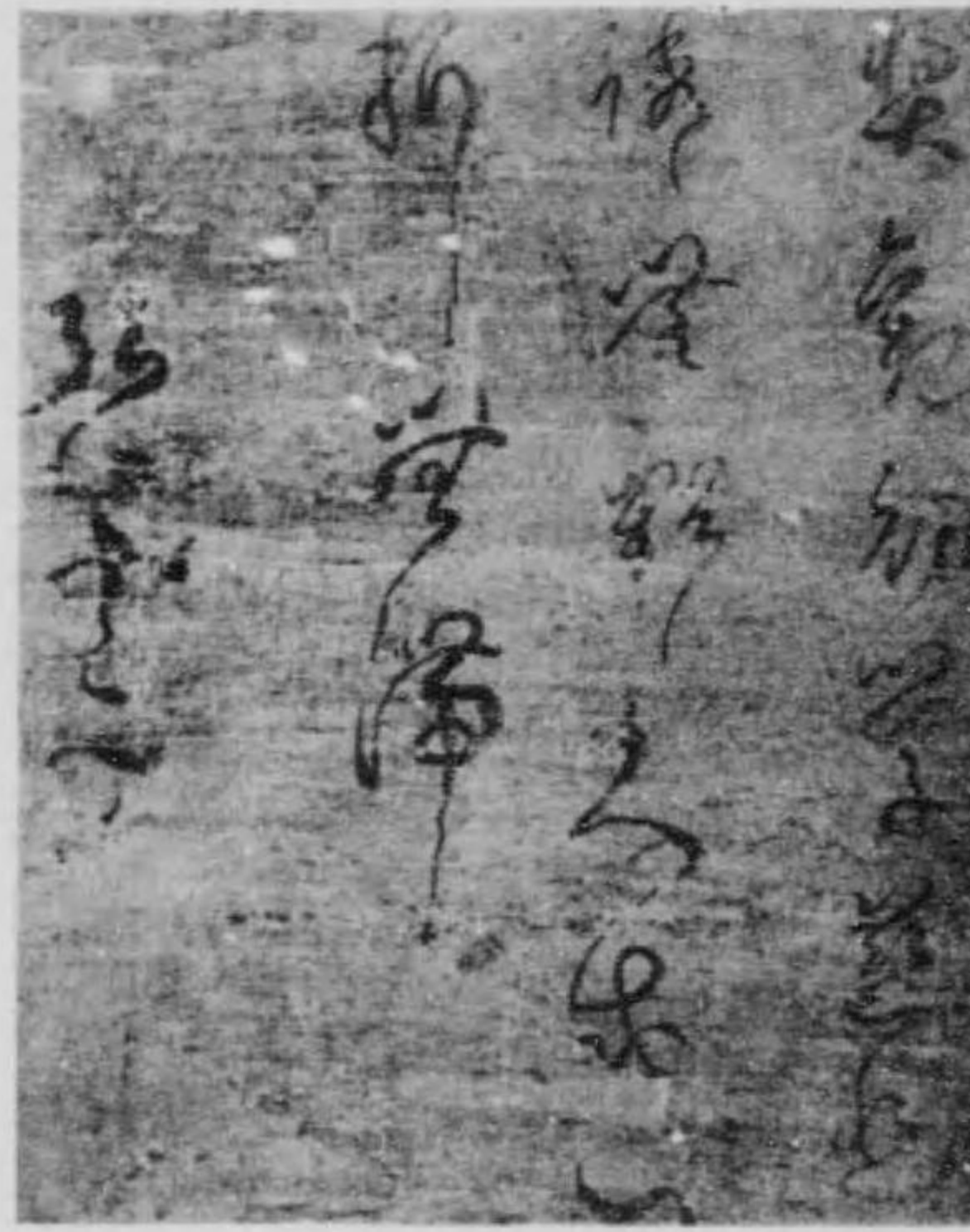
橋の一山野高



陵御院門福美



筆蹟師大法弘



へられて有名なる加藤重氏の遺跡なりと云ふ。刈萱の物語は異説區々にして一定せず。一書に記す所に依れば、加藤繁氏

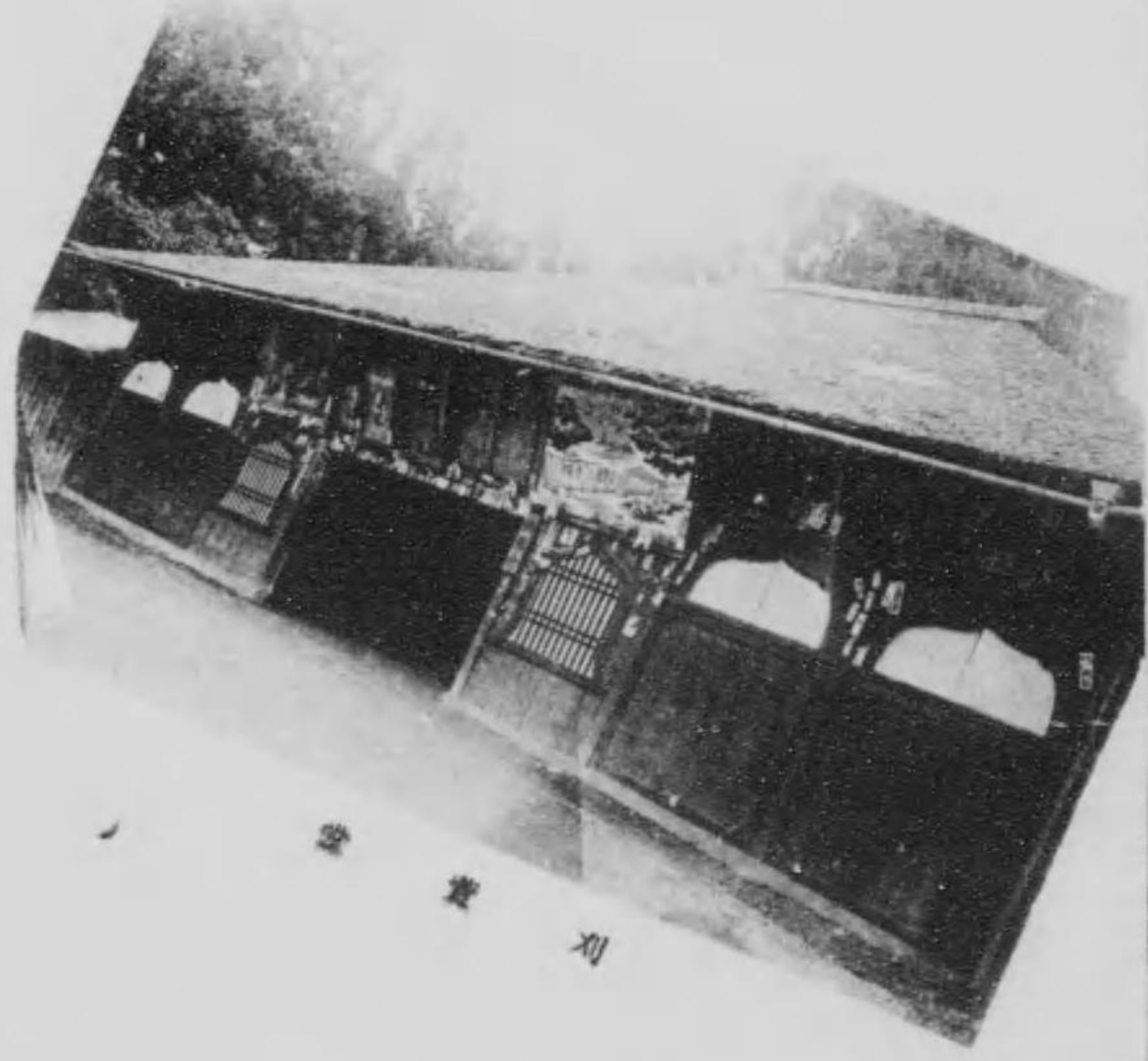
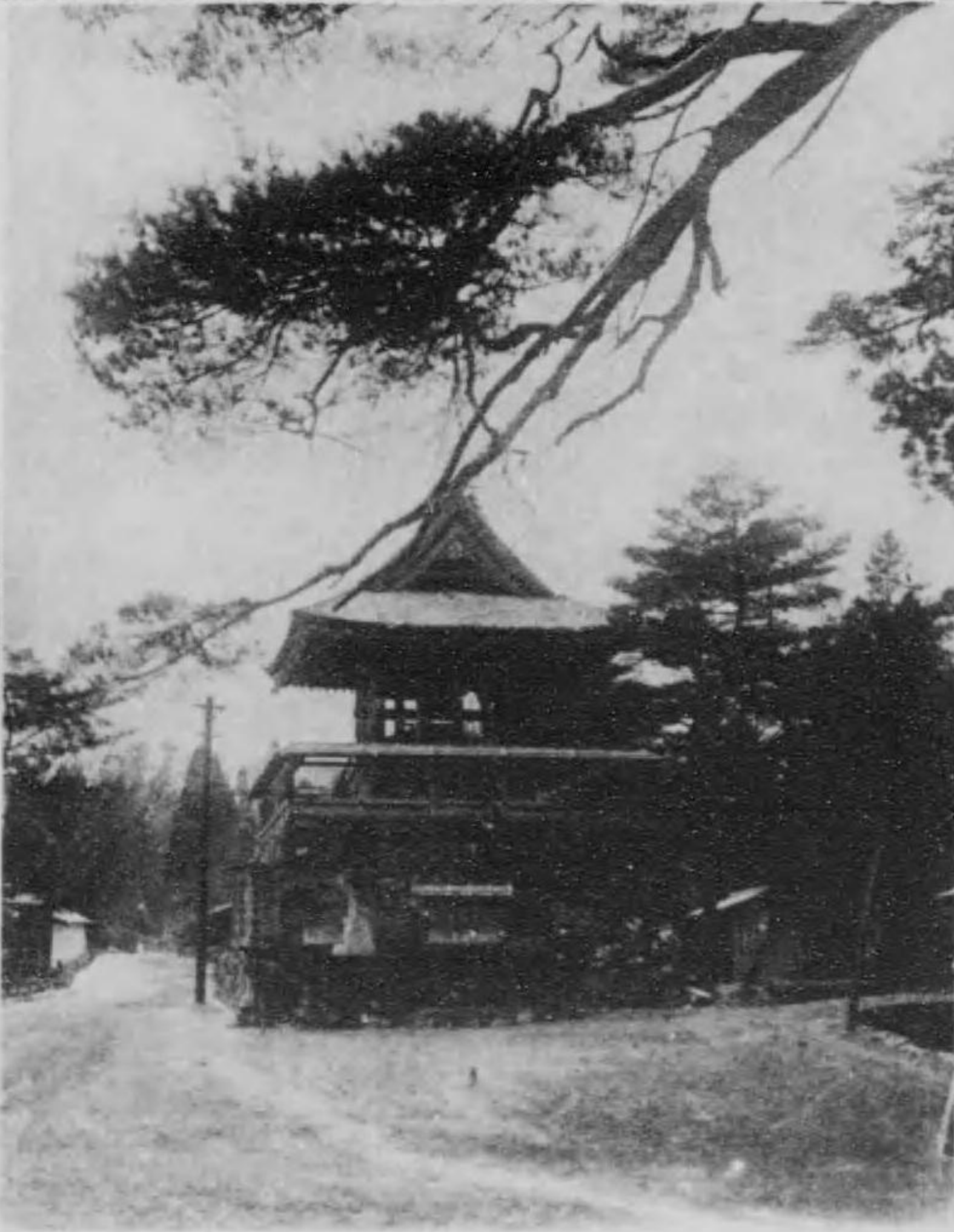
糸あり、信濃院山善名稱院と云ふ、往時真田昌幸父子の邸宅なりしを寛保元年大安上人が精舎となしたるなりと云ふ。故に一名を真田屋敷と呼べり、兆域五百三

横一尺八寸九分あり。本帖の宛名に東嶺金蘭と署したるは傳教大師の事なり。又本帖を風信帖と稱するは其帖初に風信云々とあるより名けたるものなりと云ふ。

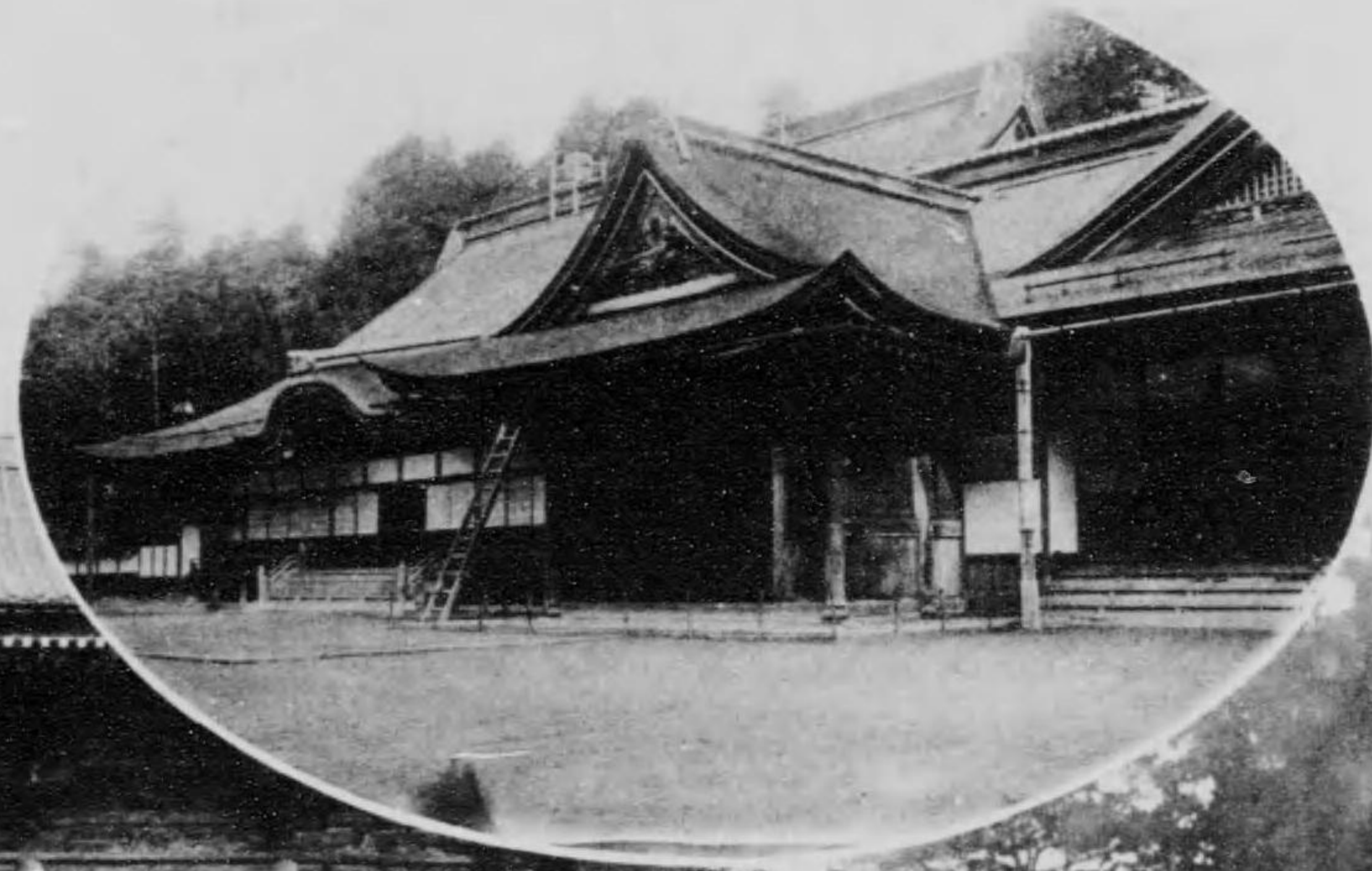
墓幸昌田重



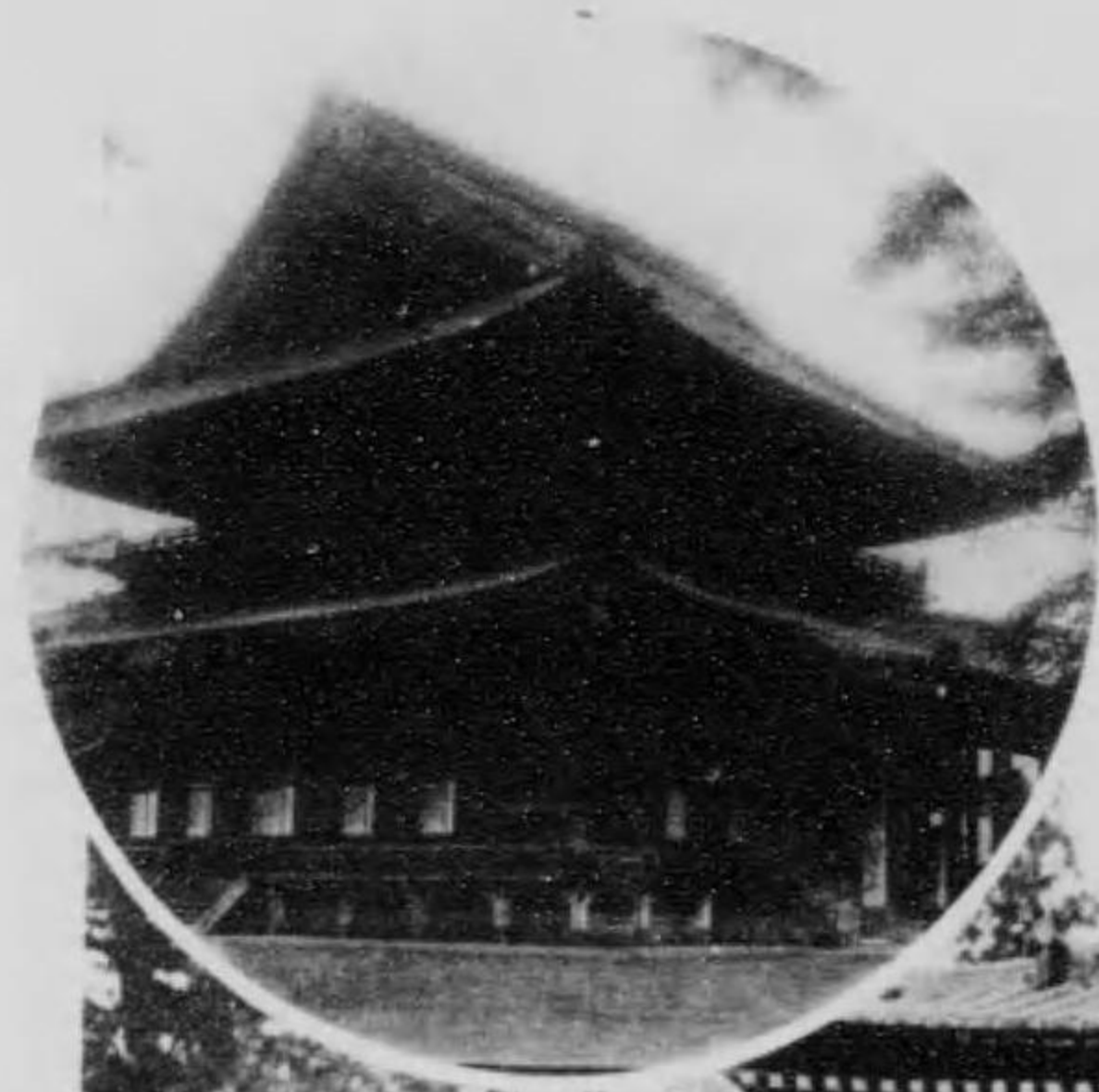
鐘の時六



高野山金剛寺

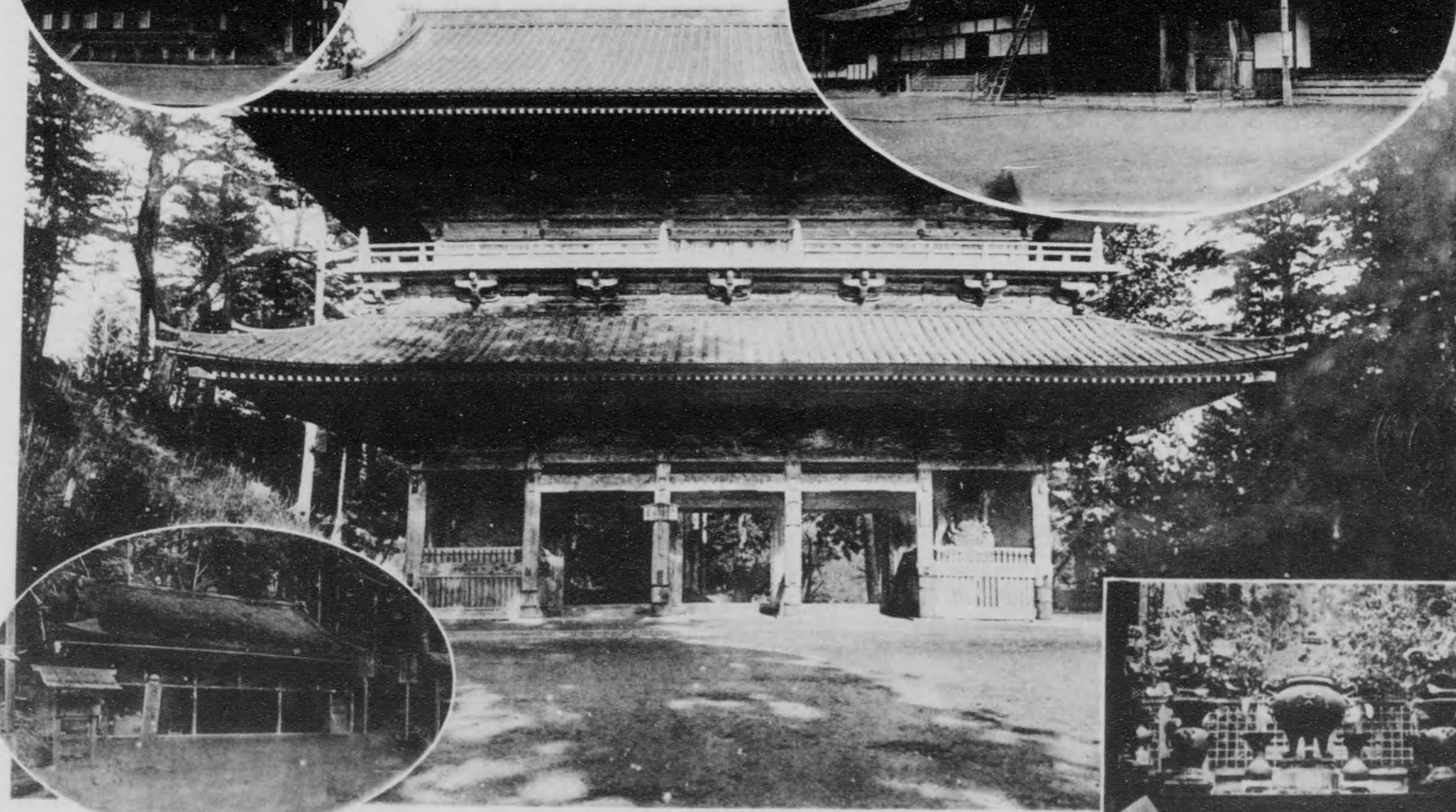


高野山金堂

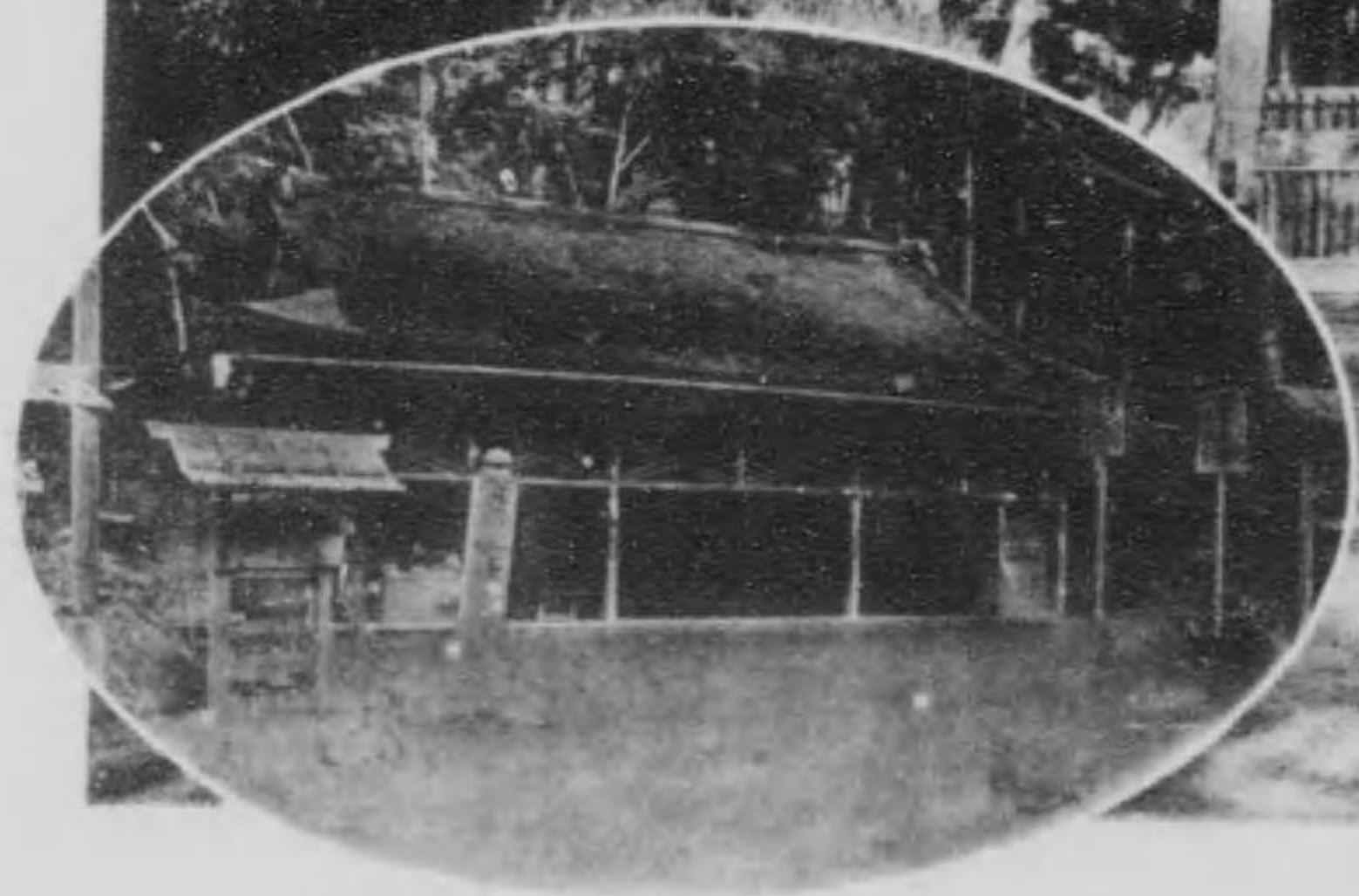


奥の院

高野山山門



女人堂



●高野山金剛寺 (紀伊)

伊都郡の南部に聳ゆる高野山上に在り
高野山は所謂高野山脈の中心にして寺を
金剛峯寺と稱す。寺域二里餘に亘り、山
上は東西五十町南北二十町、中に許多の

尊佛たり、之が脇士として金剛薩摩、不動
明王等の六體を左右に置く、但し萬延元
年の再建なり。金堂の傍に大塔あり高十
六丈、十六間四面にして日本一の最高塔
と稱せられたるが天保十四年の火災に罹
り後再建に着手し未だ竣功を告ぐるに至

動に逸す、即ち茲にて旅中の不淨を清じ
るもの、是より岩不動、袈裟掛櫻、稚兒ヶ
瀧、花折坂等を越ゆれば、一堂あり女人堂
是れなり。往時高野山は女人の登り入る
を嚴禁したるが爲めに、婦人の參詣者は
此所にて逸し、是より内へは入るゝを許



●高野山金剛峯寺 (紀伊)

伊都郡の南部に聳ゆる高野山上に在り高野山は所謂高野山脈の中心にして寺を金剛峯寺と稱す。寺域二里餘に亘り、山上は東西五十町南北二十町、中に許多の堂塔建ち、一百三十餘の僧坊あり、當寺は弘仁七年嵯峨天皇の勅允を蒙りて僧空海之を開基し茲に七堂伽羅を創建し、名けて高野山金剛峯寺と稱す、斯くて眞言宗の大本山とし一宗の弘通に傾注し承和二年三月二十一日を以て茲に入寂し後に弘法大師の諡號を賜はりたる海内無双の一大靈場たり。當山の主坊たる金剛峯は一山百三十餘坊を總轄する所にして金堂の東方に位置す、開山第二世眞正僧正の廟所たりしを文祿年間豊太閤登山の際、寺と爲して大法會を修せり、爾來累代貫主の住寺となれり。寺域所在の堂塔殿宇、僧房等は一々枚舉に遑あざれば茲に其二三を擧げて之を略す。

●同 大門 (紀伊)

大門口は表門にて和歌山より來る正路に當る。即ち麻生津峠を越え花坂を経て大門に達するなり。門は高二十二間、表行十五間、奥行九間、當寺の西方に位す屋根は銅瓦を以て之を包みたる二重の樓門なり。寶永二年の再建に係り、丈け一丈六尺の金剛力士左右に立つ、是れ佛工康意の造る所なり、壯嚴雄偉先づ其壯觀に目を驚かさずんばあらず。

●同 金堂 (紀伊)

大門を距つ十五丁にして建てるものを金堂とす。一名御願堂とも稱す、構造は二重の高閣にして、高二十二間、周圍十三間、本尊は一丈六尺ある金色藥師如來の座像にして金色燦然たる扉の裡儼然と安置せらる、實に是れ當山開創地鎮の本

尊佛たり、之が脇士として金剛薩摩、不動明王等の六體を左右に置く、但し萬延元年の再建なり。金堂の傍に大塔あり高十六丈、十六間四面にして日本一の最高塔と稱せられたるが天保十四年の火災に罹り後再建に着手し未だ竣功を告ぐるに至らず。其他瀧頂、御影、准眠、大會等の諸堂は再建概ね竣成せり。

●同 奥の院 (紀伊)

奥の院は蓮花谷の東にあり、茲を奥院谷と稱す、千年の古杉、百丈の老檜、鬱蒼として天を蔽ひ、陰森として晝尚暗き所、二十町許にして奥の院に達するなり、途中に豊太閤の墓、明智光秀墓、多田浦仲墓、曾我兄弟墓、親鸞上人墓、契沖阿闍梨墓、平教盛墓、徳川秀忠墓、同頼宣墓、淺野長矩墓、芭蕉石碑、朝鮮役士碑等在り、此邊玉川の清流ありて御廟橋を架す所謂是れ全國六玉川の一にして高野の玉川なるもの彼の『忘れても涙みやしつらん旅人の高野の奥の玉川の水』の古歌を以て其名著はる。之を過ぐれば靈元、中御門、櫻川、桃園、後櫻町、後桃園、光格、仁孝諸帝及明治天皇の御寶塔あり、是れより數十歩にして廟前の拜殿に達す、是れ奥の院の開祖大師入定靈廟の拜殿なり。廟の周圍には瑞籬を繞らし、石壇の上に寶形の堂を建つ左の壇下に經藏あり、右の壇下に骨堂ありて何人にも其遺骨の一部を茲に收むるを許す、是れ開祖弘法大師が、我山に送る所の亡者の遺骨は我れ三密の力を以て淨土に往生せしめんと宣言したるに由るものなり。

●同 女人堂 (紀伊)

高野山に詣づるには其登路數條あり、俗に之を七口と云へども必ずしも一定せず就中最も大なる登路口を不動坂とす。賽者は不動坂の峻坂を攀ち盡くせば清不

動に達す、即ち茲にて旅中の不淨を清むるもの、是より岩不動、袈裟掛櫻、稚兒ヶ瀧、花折坂等を越ゆれば、一堂あり女人堂是れなり。往時高野山は女人の登り入るを嚴禁したるが爲めに、婦人の參詣者は此所にて遙し、是より内へは入るゝを許さざりしなり。今は何人と雖も自由に入るを得るに至れり。然れども今尙參詣人取調所なるものあり、恰かも古への關所の如く參詣人の族籍を尋ね各府縣に於て宿泊すべき坊舎を指示す。是れ高野山は旅舎なきを以て參詣者は孰れも乞ふて寺坊に宿泊する事なれば、山内の各寺坊をし全國を區劃し其所縁の區域を定め宿泊の便宜を與ふる厚意に出でしなり。

奥の院の森林中には『佛法僧』と稱する奇異なる一種の山鳥棲息し、其鳴くやブツボウソウと云ふ、是れ其名ある所以にして古來高野山の一名物と稱せらる而して其雄は鳩に似て瘠せ、尾の端黒く嘴細く脚と、もに赤色なり。

高野山を詠せる詩歌古來甚だ多し、今左に其二三を掲ぐ。

新 千 載

跡たえて世を通るべき道なれや

岩さへ苔のころも着にけり

新 葉 集

高野山あかつき遠くまつの戸に

光りを残す法のともし火

夫 木 集

むかし思ふ高野の山の深き夜に

暁とほく澄める月影

草 庵 集

登りては心の霧もはれぬべし

高野の山の峰のあらしに

弘 仁 帝

問僧久住雲中嶺 遙想深山春尙寒

松柏斜知其靜默 烟霞不解幾年食

禪關近日消息斷 京邑如今花柳寬

菩薩莫嫌此輕贈 爲救施者世間難

●田邊鬼橋岩 (紀伊)

西牟婁郡田邊町の南部、海に瀕する一帯は之を田邊海と稱す、灣口は瀬戸崎鉛山に扼せられて恰も括囊の如く、而して無数の岩嶼灣頭に恭布す。奇なるもの、怪なるもの、異なるもの、千態萬狀を呈しつゝあり。鬼橋岩即ち其一にして、形狀恰も橋梁を架したらんが如きより名づく、蓋し田邊島嶼中の奇勝たり。因に云ふ田邊は熊野路街道に當り巡禮の徒は茲處を過ぎて此の奇勝に接して旅情を慰むるもの尠からず。

●田邊港 (紀伊)

舊名を牟婁港と云ふ、熊野浦第一の盛港にして、商船常に來泊し、交易頗る盛なり。此地和歌山市を距る二十七里十一町日高郡界を距る一里餘、市街は北に山を負ひ秋津川の下流に跨る、市街の廣袤は東西六町、南北四丁餘、水陸の要衝に當り商業繁盛にして、郡役所、區裁判所支署、稅務署、中學校等あり、物産としては晒葛粉、鹽辛等盛んに産出す。

●瀬戸崎の奇巖 (紀伊)

瀬戸崎は田邊灣の灣口を扼する一岬にして、田邊港の南方を塞ぐ、即ち湯崎溫泉の所在地たり(溫泉は別項に詳記せり)怒濤岸を洗ふて壯快言ふべからず。眼を展すれば、無数の岩嶼は奇狀怪態、人目を娛ましめて終日飽くを知らざるなり。大八洲遊記は叙して曰く「茲地横出於瀛海中、假蹇蟠屈、如臥龍奔蛇、北與田邊城相對、面勢海灣、灣大有餘里、其間蒼嶺秀壁之削立、曲浦長洲之聯互、漁村之點綴、島嶼之恭散、異態詭狀、不可縷形、憑高望之、恍如入仙都、其遠望、則峻嶽疊峰、濃淡分彩、聳拔於雲表、大瀛萬里、渺無際涯、賈帆商船、往來出沒於風

濤雲烟之中者、一舉目而足矣、誠海南之壯觀也云々。

●同 子舞岩 (紀伊)

是れ亦田邊灣頭、瀬戸崎海濱に於ける奇巖の一にして、其狀宛として獅子活躍起つて舞ふが如きものあり、呼んで獅子舞岩と云ふ、岩根怒濤に没して獅頭に白浪を銜いて現はるゝ所、壯絶悽絶快言ふべからざるものあり。

●鬮雞神社 (紀伊)

西牟婁郡田邊町の東南、湊村字神田に鎮座す、土俗鳥合宮と呼ぶ、舊稱は田邊の宮と云へり、蓋し田部連の祖神なり。當社は允恭天皇の八年始めて此地に勧請し田邊の宮と稱したりしが後、藤原實方の子にして熊野別當たりし泰教の曾孫、湛快に至つて當社を熊野神社に擬して更に同社より勧請し、新熊野權現と稱し其子湛増此地に住みて田邊の別當と稱し、當時熊野黨の頭目たりき。元暦元年源平合戦の際湛増は源平孰れへか屬せんと躊躇し七日間當社に參籠して祈誓を凝らし社頭に於て赤白の鷄七羽づゝを聞はしめて其勝たらん方へ屬せんと勝負を決せしめたるに赤鷄七羽とも盡く負けたるを以て斷然意を決して源氏に付き屋島の戰に従軍せり。爾來當神社を鬮雞神社と稱するに至れり。社殿は本殿、中神社下神社と別ち、末社は伊耶弉弉尊及び天照大神とを證誠殿、若殿とに齋き祀り、速玉男命と事解男命とを西殿に合祀せり、中神社には天之忍穗耳命、邇々瓊尊、穗々出見尊、鞆草葺不合尊の四神を祀り、下神社には大産靈命、彌都波能賣命、埴山毘賣神、雅產靈神の四神を祀れり。其他攝社一社、末社二社あり、社殿都べて八字社格は縣社にして郷社を兼ねたり。社域宏壯にして、地坪一町七反五畝一步を有し、老杉

古松蔚然として境内の四周を圍み、翠嵐颯々の韻は自ら神域の神々しさを増すの想ひあり。當社の什寶中には源義經の龜愛せしといふ白龍の鎧、ある横笛、別當湛増の冠りたりと傳ふる鐵の烏帽子、及び辨慶の産湯の釜と稱する鐵釜等あり。

因に曰ふ、辨慶は當社の別當たる湛増の子なることは源平盛衰記に載せられたり。湛増は初め熊野の別當なりき。熊野連玉神社の什寶たる「熊野別當代々記」に據れば、第十八代の別當湛快の次男にして文治三年、熊野別當に補任せらるゝ、即ち二十一代の別當なり。建久九年六十九歳にして入滅す、男子七人、女子五人あり。辨慶は此地に於て呱呱の聲を揚げたりと傳へられ、當郡福路町に。今尚ほ辨慶誕生の松と稱する古松存せり。又西牟婁郡御船村には辨慶産家楠跡といふものあり。

平家物語に曰ふ、熊野別當湛増は平家重恩の身なりしが何としてか開きいたしけん新宮十郎義盛こそ高倉皇の令旨賜ひ既に謀反を起すなれ、那智新宮の者ともは定めて源氏の方人をせんすらん、湛増は平家の御恩を天山に蒙りたればいかで反き奉るべき一矢射かけて其後都へ仔細申さんとて、ひた兜一千餘人新宮の港へ發向す、新宮には鳥居の法眼高房の法眼、侍には宇井鈴木水屋龜の甲、那智には執行法眼以下其勢一千五百餘人閣を作て、矢合し源氏の方にはとこそ射れ平家の方にはかくこそ射れと、三日の程戦ひたれ云々。

●椿崎の景 (紀伊)

西牟婁郡東富田村大字朝來歸の海濱市江崎に一溫泉あり椿崎と稱す。此湯あるを以て椿崎とも稱す。此地僻陬にして險阻なるも前に百丈の怒濤を望み後に千仞の翠巒を負ひ風光絶勝の地なるを失はず

獅子舞岩

鬼橋岩



田邊港戸崎の奇巖



獅子舞岩



鬼橋岩



田邊港



関羅神社



橋崎

形、憑高望之、恍如入仙都、其遠望、則
 峻嶺疊峰、濃淡分彩、聳拔於雲表、大瀛
 萬里、渺無際涯、買帆商船、往來出沒於風
 末社二社あり、社殿都べて八字社格は縣
 社にして郷社を兼ねたり。社域宏壯にし
 て、地坪一町七反五畝一步を有し、老杉
 を以て椿崎とも稱す。此地僻陬にして險
 阻なるも前に百丈の怒濤を望み後に千仞
 の翠巒を負ひ風光絶勝の地なるを失はず

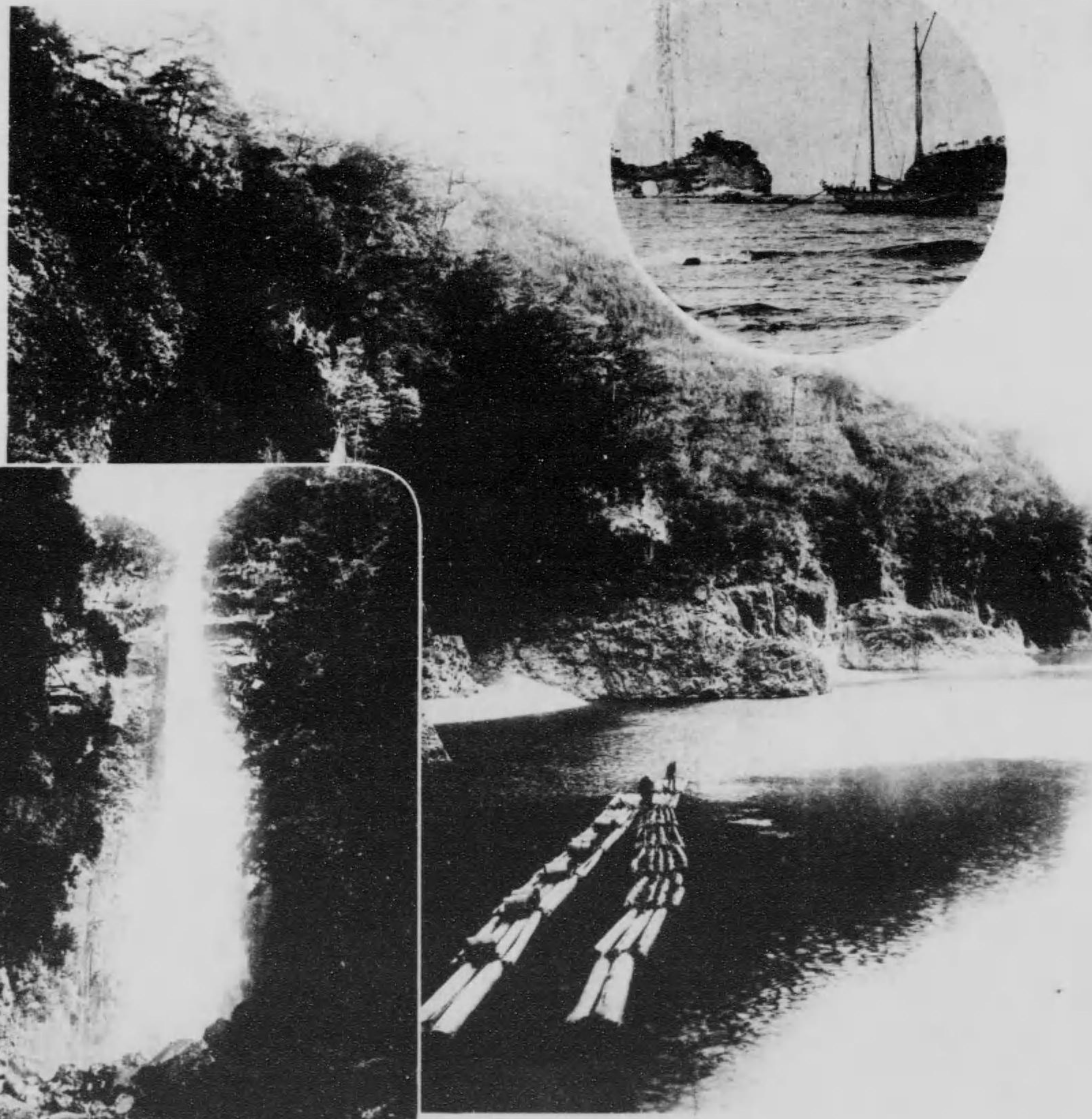
瀬の抗横野熊



芝幸御泉温崎湯

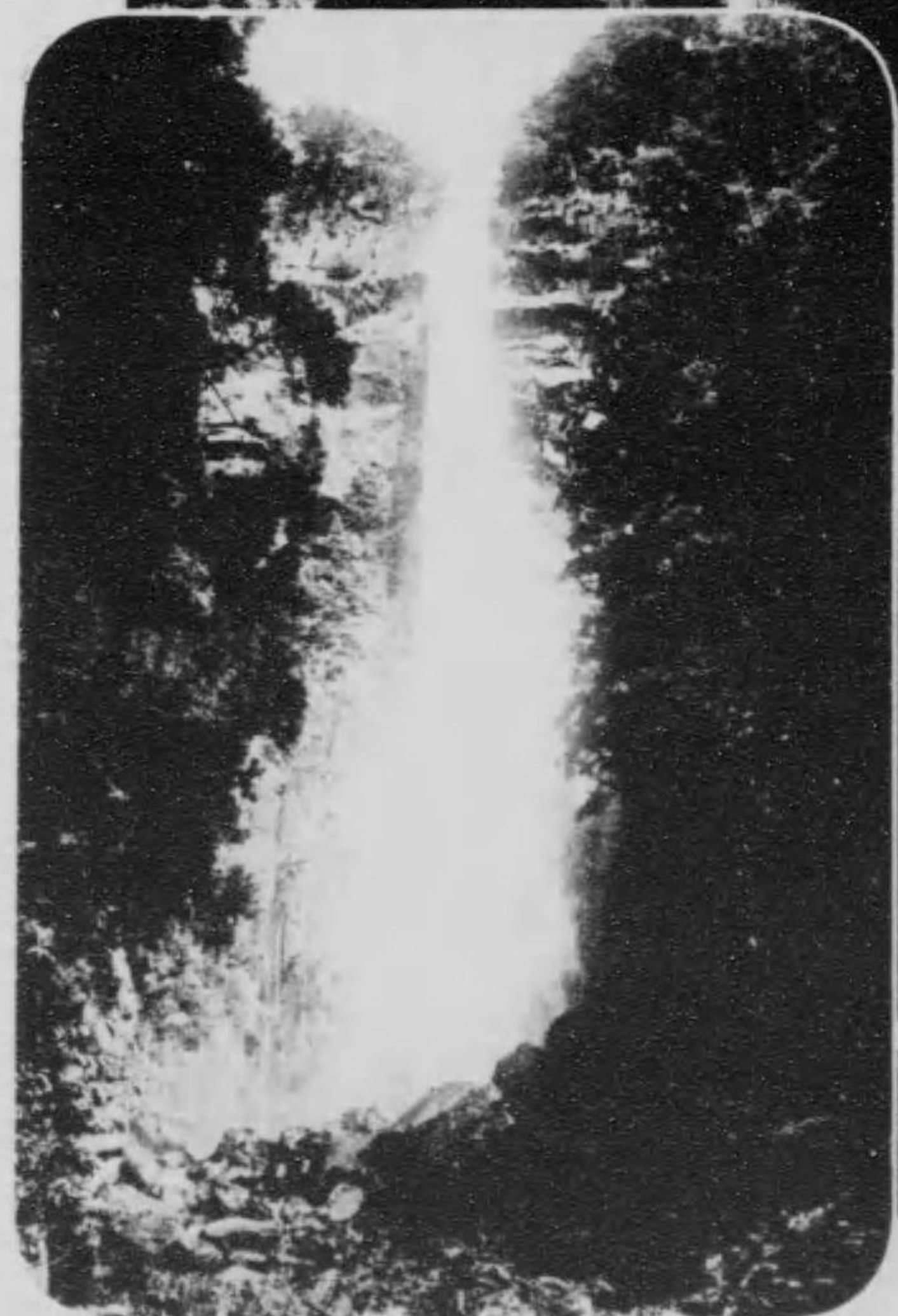
上ノ九八

島月圓崎湯



丁八湯

瀧の智那



●瀧八丁 (紀伊)

紀國素より景勝に富む。然かも怪景奇越の絶勝に至つては瀧八丁に如くものあらず、瀧八丁は南牟婁郡に屬する熊野川の一支流なる北山川に沿へる多度と玉置との中間八丁の溪水を稱す。北山川の奔

三重縣に屬し、東口の外は則ち大阪府の管する所、亦奇なり云々。瀧八丁の盡くる所に僅に三四軒の人家あり。此地を田戸と稱し大和十津川に赴く間道に當れり。因に此溪の發見は明治以後に在りて石井邦猷氏三重縣知事たりし當時縣下を巡回し始めて此勝あるを知りたりと云ふ。

なり。古來本邦第一の瀑布と稱されつゝ、あるも水量は極めて多からず、瀧壺も亦甚だ大ならず。瀑布の下に一祠あり飛瀧神社と云ふ、是れ瀑布の神體と稱せらる。瀧は重蒼積翠の間に宛かも白布を懸けたるが如く巖石水苔の裡に流下し、文覺の瀧に落ちて平流となる、是より四丁餘に



● 瀧八丁 (紀伊)

紀國素より景勝に富む。然かも怪景奇趣の絶勝に至つては瀧八丁に如くものあらず、瀧八丁は南牟婁郡に屬する熊野川の一支流なる北山川に沿へる多度と玉置との中間八丁の溪水を稱す。北山川の奔流この溪間に至つて淀み、水聲死して靜寂太古の如く、而して水面滑かにして明鏡に對するの思あり。兩岸の壁崖は削絶屏風を立てたるが如し。溪水の深き所は十五尋、舟を鼓に泛べて仙遊を試む、恰も是れ赤壁の勝を弄するに似たらんか。大阪の儒者藤澤南岳嘗て茲に遊び其名稱の俗なるより之を洞溪と稱し其勝を記す、頗る詳細を極む、其一節に曰く『溪は竹筒を距る事一里、山路險惡故に舟以て之を探る、北山川を折る一里湯之口を過て小川に到る、勢之入鹿川來注す、迂回數里、玉井口に至る。一棹して崖を廻れば則ち溪口峻崖數尋屹立して門を作す、門の内は左右石壁直立千尺、頂に稚松雜木を戴き、一撮土なき者の如し、水は則ち深綠色にして巨巖底を作すに似たり、而して深さ數十尋測るべからざる也。漾々として流れず、舟子櫓を按じ緩々として進む難壁幾曲觀、曲に隨て改まり、崖岩盡く奇なり、右崖にして而て跌石、蛭岩、牌石、雞冠石、大黒石、條石、左崖にして而して屏風巖、船岩、冷門、釜洞、皆觀るべし。釜洞、口は僅に身を容れ其中嵌空、五六十人の坐を爲す、實に奇觀なり。之を要するに一巖一洞を以て論ずべき者に非ず蓋し左右の壁、奇狀前後相對して僅に十餘歩、左凸すれば則ち右凹、一盤ゆれば則一伏し、呼應映發して自然に章を爲す。仰げば青天帶の如く、伏せば碧潭、絶淨、恍として洞中に入るに似たり。溪の長さ八丁八丁の外は皆凡山常水、奇と謂つ可し。左崖は即ち和歌山縣に屬し、右崖は則ち

三重縣に屬し、東口の外は則ち大阪府の管する所、亦奇なり云々。瀧八丁の盡くる所に僅に三四軒の人家あり。此地を田戸と稱し大和十津川に赴く間道に當れり。因に此溪の發見は明治以後に在りて石井邦猷氏三重縣知事たりし當時縣下を巡回し始めて此勝あるを知りたりと云ふ。

● 湯崎温泉御幸芝 (紀伊)

田邊町の南、海灣を隔て、一村あり瀧戸鉛山村と云ふ、村の西方は瀧戸岬にして湯崎温泉は此の岬南に在り、湯は八ヶ所に分れり、曰く、崎の湯、曰く、濱の湯、曰く、元の湯、曰く、屋形湯、曰く、磯湯、曰く、疝氣の湯、曰く、粟湯、曰く、目洗の湯。而して泉質は總て炭酸泉なり。此地海中に突出し小嶼點在して畫圖の如く風景佳美なるを以て四方より來遊するもの頗る多し。田邊町より毎日渡船の便あり行程四里一時間を出でずして達するを得、海は穩かにして灣内の航行亦太だ爽快なり。大寶元年九月太上天皇持統天皇と俱に紀伊國に行幸し給ひ、冬十月車駕牟婁の温泉に着御ありて温泉の美、海山の勝を賞し給へり、村内に存する御幸の芝は蓋し當時臨幸の遺跡として傳へらるゝものなり。

まくらるゝ瀧のはしり湯浦さひて
今は御幸の蔭もうつらす
因に白良濱は鉛山村の瀧戸より鉛山に至る間の海濱を云ふ
又、瀧戸岬附近島嶼多くして蒼影綠波に映じ水天を彩る青螺中、圓月島の如きは最も景趣を添ゆる一勝嶼といふ可し。

仲 實

● 那智の瀧 (紀伊)

東牟婁郡那智山中に在り、俗に那智四十八瀧と稱し、瀧の數大小四十八あれども、就中最も有名なるものは一の瀧なりとす。高さ八十四丈、幅十八間極めて壯觀

なり。古來本邦第一の瀑布と稱されつゝ、あるも水量は極めて多からず、瀧壺も亦甚だ大ならず。瀑布の下に一祠あり飛瀧神社と云ふ、是れ瀑布の神體と稱せらる。瀧は重蒼積翠の間に宛かも白布を懸けたるが如く巖石水苔の裡に流下し、文覺の瀧に落ちて平流となる、是より四丁餘にして二の瀧あり、高十丈八尺幅三間之を如意輪瀧といふ、五町にして三の瀧あり、高七丈八尺、幅三間あり、茲に至つては山愈よ深邃を極め、水亦清冽なり、是より一嶺を躋りたる所に華山法皇の幽棲し給ひたる行宮址あり、一石櫃ありて法皇の常に用ひ給ひし御器二個を收むと云ふ。茲に法皇が櫻を植え給ひて『木の下を棲家とすれば自ら花見る人になりぬべきかな』と詠ませられたる櫻は今や既に枯朽し後に植えたる櫻の昔を想ひ氣に榮え居れり。因に云ふ、那智は熊野三山の一にして俗に那智權現と稱す。

花山院
石はしる瀧にまかせて那智の山
高根を見れば花の白雲
鎌倉右大臣
三熊野の那智の御山に引くしめの
打はへてのみ落る瀧かな
因に云ふ。瀧下千手堂址は安和二年僧仲算の開基にして真義範俊等の修法したる所なり、即ち那智山寺是なり、後世青岸渡寺起り彼如意輪堂を本堂と定めたり近年此堂廢頽し千手像は青岸渡寺へ移せり。又一書には一之瀧の上に劔ヶ淵あり、古へは瀧禪定と稱して身を清めて之に上りたるなり。不動堂並びに花山法皇の御庵址と云ふものあり少平地にて狹隘石と稱する石あり。

山家集
木の下に住けん路をみつる哉
那智の高根の花を尋ねて

篠山城址 (丹波)

多紀郡中央の一市街たる篠山町の南方に在り。大阪を距る十五里八町、福知山を距る八里三十二町、黒岡川は街の中央を北流し、篠山川は南方を流る、京口、監物の二大橋を架す。篠山城は此の流に臨めり。此地慶長時代までは黒岡、澤田、野中等の村里にして田畝の間、一面に竹森繁茂したる小山ありしを以て篠山と呼ばれたるが、慶長十三年松平周防守、幕府の命を以て入國し新たに此處に築城するに際し、藤堂、池田、福島、加藤、淺野の諸侯をして課役せしめ、同十五年に至りて全く竣功を告げたり、篠山城即ち是なり。山上に春日神社あり、昔は山の南に白鯨の坪と稱する一古池ありたり、是れ今の南澤なりとす。當時黒岡川は分流して篠山の北麓を繞り更に西折したるが築城の際その深淵に石垣を疊積して井戸と爲せり、舊城玄關前の大井戸是れなり。又追手を流る、水殊に深くして俗に薬研堀と呼びしが松平氏築城と同時に之を掘り擴げて追手門の濠となしたり。

篠山城は、大阪落城の後、松平康長移封して居城し、松平信吉、其子忠國相承け、慶安三年松平康信より信岑に至り、寛延六年青山忠頼六萬石を以て茲に居城し、多紀郡の内安口、原山、敷村の外は悉く其領邑たりき。

保津川 (丹波)

流末山城に入りて大堰川となり、所謂嵐峽を形成し流れて更に桂川と爲るもの即ち是れ保津川なり。水源を北桑田郡の奥大悲山に發し屈曲して幾多の細流を併合して山城に入る、流域約二十里、其の流路、北桑田郡保津村と山城國嵯峨との間に於ける水流は奇岩怪石凸凹起伏し、激流奔湍、瀬となり瀧となり、淵となり潭

となり千態萬狀、種々なる名勝を作す、是れ嵐峽の景にして儼舟楫を下るを保津川下りと稱す、詩人の所謂「禽聲隔水亂紛紛、十里峽中春十度」又「一棹穿雲沂花去、斷無俗韻到君船」と吟せしもの、以て其景趣を想ふべし。

世に保津川下りと稱するは、龜岡より嵐山に至る三里餘の流域にして、茲に遊びて風景の奇を賞せんとするものは、先づ京都鐵道に依りて龜岡驛に下車し、夫より保津瀨にて儼舟するを最も便とす、水石の風趣奇異を極むる他に、此川に最も賞すべきものは新緑、杜鵑、鶯、河鹿、香魚狩、螢等の耳目を娛ましむるもの妙からず、四時の風光、悉く快哉を叫ばざらむしるものあらざるも、而かも就中首夏新緑の候を以て第一とす。

法常皇寺 (丹波)

南桑田郡畑野村大字千ヶ畑に在り臨濟宗にして、寛永十八年後水尾天皇其舊殿を移して造營せしめられしものにて一絲和尚を以て開山とす。方丈、庫裡、唐門等は當時の建築にして、殊に其勅使門は當寺勅創當時宮中より移されしものにて平唐門にて屋上に御紋章を表はす。其他後水尾帝より御生前賜ひし聖齒を納めたる寶塔及び同帝宸筆の梅山法常寺の勅額あり、一絲和尚は巖に妙心寺の愚堂國師に就て法を修し後ち丹波の桑田郡に隱遁して草庵を結び桐江庵と號す、當寺の方丈は蓋し其遺址なり。明治十八年火災に罹り庫裡方丈等悉く烏有に歸したりしも翌年再興せり。本堂は寶曆年間の建立にて釋迦如來を安置す。境内九百廿五坪、寺背に一丘陵あり九路峯と云ふ、堂宇の前面に一巨巖屹立し岩下に清泉湧出す、泉上一橋を架す名けて錦臺橋と稱す風韻掬すべく眺望頗る佳なり。毎年四月十一日を以て後水尾帝の御追福を執行す。因

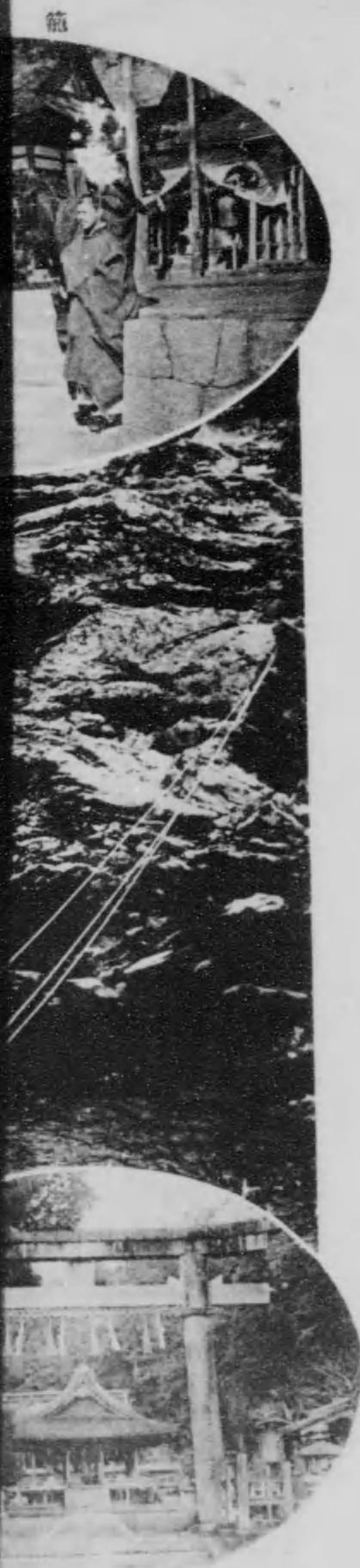
に曰ふ、桐江庵の舊址は當寺の山上に在り、其數尺の下に開祖の塔ありて影像を置けり。

出雲神社 (丹波)

桑田郡千歳村なる千歴山麓に在り、國幣中社にして素盞鳴尊、奇稻田姫命を祭り、和銅四年の創建に係る、本殿、拜殿、祝詞舎、神饌所、繪馬殿、祭器庫、社務所等あり。社記に依れば昔時は壯嚴を極めたる神境にして社殿を始め本社、華表、瑞籬整然とし社司家は軒を並べて壯嚴を示したるが足利の末葉末社以下兵燹に罹り天正年中明智光秀の當國を領せる際大半廢棄せられ神領を失ふに至りたりと云ふ。社地後背は千歳山を負ひ前面は展開して龜岡市街を望み、且つ境内花樹を載先頗る風趣に富む。

籠神社 (丹波)

是れ伊勢大神宮の舊社と稱せらる、丹後與謝郡府中村大字大垣に在り。國幣中社に列す。祭神は天水大神(或は火之出見尊又は海神)にして、境外真井原に攝社真井神社ありて豊受大神を祭る、今は本殿に豊受皇太神を祭り、籠神を別殿となすと云ふ。傳ふる處に依れば雄略天皇の廿二年九月豊受大神を真井より伊勢度會郡山田に遷せし時其分靈を茲に留め祀りしに後來頽敗せしを以て更に籠神社に合祀し又之を分ちて境外攝社となせりと云ふ。境内千六百十九坪、社殿は本殿、幣殿、拜殿、社務所及び真井神社、末社與謝宮、春日神社、佐田神社等あり。社域平坦にして老樹鬱蒼し、山を負ひ海に面し、東北には天橋立を望み、夕日の浦、芳野、金剛の諸峯指呼一眸の裡に收め、眺望佳絶の地として知らる。大祭は毎年四月廿四日小祭は毎月二十四日執行す。小野道風の筆に係る古額の本神社の寶物として著はる。



常照皇寺勅使門



篠山城址



籠神社

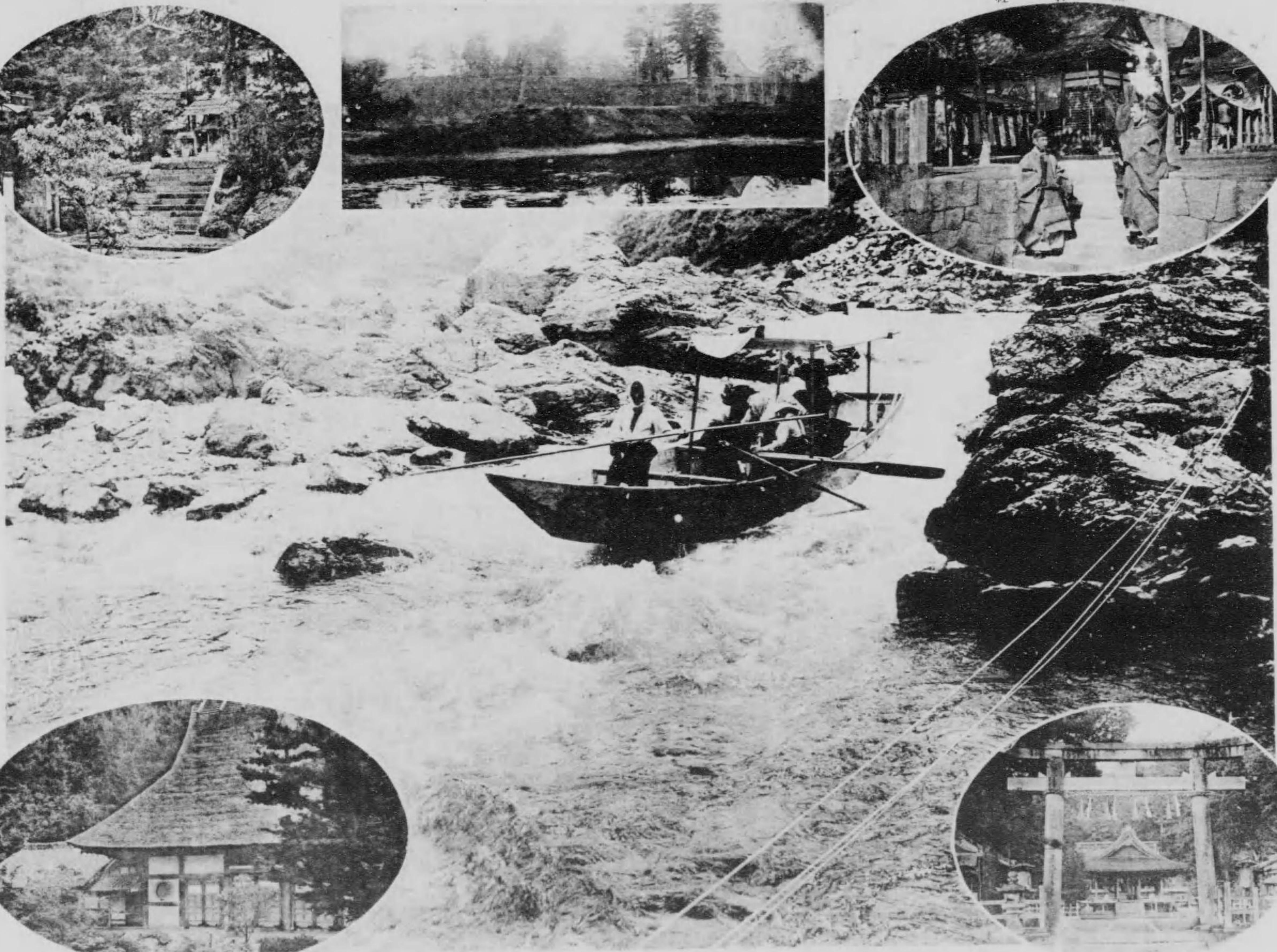


常照皇寺本堂

保津川



出雲神社



合して山城に入る、流域約二十里、其の流
 路、北桑田郡保津村と山城國嵯峨との間
 に於ける水流は奇岩怪石凸凹起伏し、激
 流奔湍、瀬となり瀧となり、淵となり潭
 前面に一巨巖屹立し岩下に清泉湧出す、
 泉上一橋を架す名けて錦臺橋と稱す風韻
 掬すべく眺望頗る佳なり。毎年四月十一
 日を以て後水尾帝の御追福を執行す。因
 峯指呼一眸の裡に收め、眺望佳絶の地と
 して知らる。大祭は毎年四月廿四日小祭
 は毎月二十四日執行す。小野道風の筆に
 係る古額は本神社の寶物として著はる。

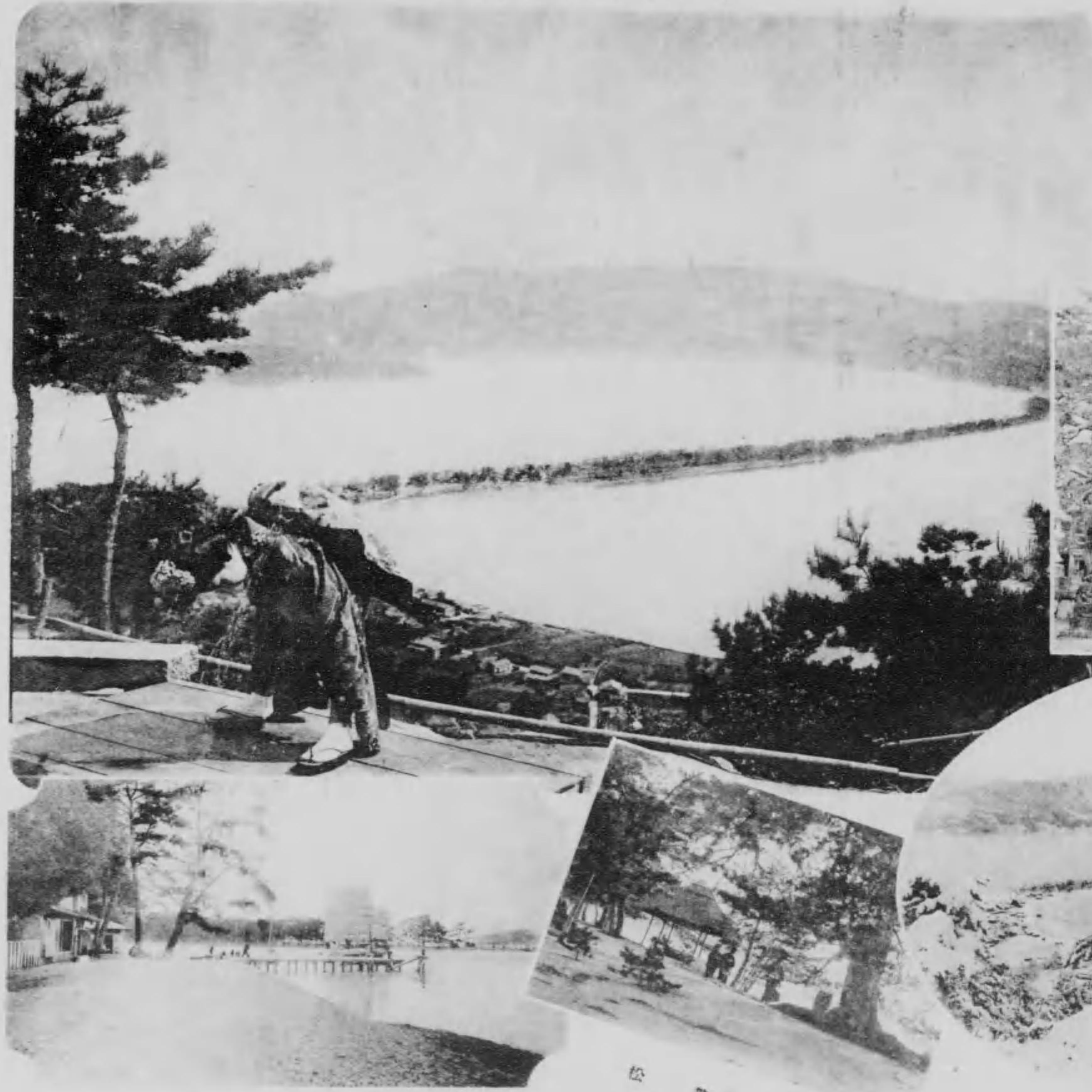
港軍鶴舞



切戸の文珠



(き観股の松傘)立橋の天



上ノ一〇〇

立橋の雪



松島下



場船渡珠文

●天橋立(丹後)

陸の松島島の巖島と共に日本三景の一と稱す。與謝の海の中央に横はれる一沙

ゆるるには二ヶ所あり、一は但馬國城崎へ越ゆる舊道中の樽崎とし、一は與謝郡府中

の磯相山となり。前者は橋立の全景を實中に建設せる碑あり。又、文珠堂の南に海岸寺犬堂あり、砥

如借扶搖使 圖南九萬輕

因に曰ふ。天橋立の風景を賞せんとす

文珠閣秀沈清漣。成合寺遙籠暮煙。

秋湖一碧平於席。沙際人呼賽佛船。

と稱す。與謝の海の中央に横はれる一沙ゆるるには二ヶ所あり、一は但馬國城崎へ越ゆる舊道中の樽崎とし、一は與謝郡府中の磯相山となり。前者は橋立の全景を實中に建設せる碑あり。又、文珠堂の南に海岸寺犬堂あり、砥



●天橋立 (丹後)

陸の松島島の殿島と共に日本三景の一と稱す。與謝の海の中央に横はれる一沙嘴にして與謝郡府中村大字江尻より西南に向ひて突出すること二十七町四十間、幅三十七間、其の南端小海峽を隔て、吉津村大字文珠に對す。青松一帯沙嘴の上に茂生し、蒼蔚白沙相彩りて宛然畫圖の如し。而して其松や老幼長短均しからざるも、孰れも偃蹇して垂枝地上を離る、僅に數尺遠見一望宛として一字を畫するに似たり。若し夫れ海に舟して之を眺めんか、水天一碧蒼松海に落ちて、水上松を生ずる如く、天上長く一橋を架すると疑はる。天橋立の名稱蓋し命じ得て遺憾なし。

橋立の沙嘴に抱擁せられたる淺水を内海と稱す、長嘴盡んとする所稍や廣くして茲に橋立神社あり、社殿清整として風趣瀟洒たり、西方に磯の清泉あり、海潮に接近せるにも拘らず清冽にして毫も鹹味を帯びず。延寶六年、宮津の城主永井尙長、茲に新たに井を穿ちて石を疊みて井欄を設け、林大學頭をして井記を作らしめ碑を建て且つ和泉式部の和歌を石欄に刻したり。亦是れ一勝を添ゆるものと謂ふ可し。

思ふこと無くてや見まし與謝の海の天の橋立都なりせば 赤染 衛門
瀟立てる松の下枝を御手にて霞み渡れる天の橋立 俊頼 朝臣
與謝浦入海かけて見渡せば松原遠き天の橋立 教 覺
よさの海や霞み渡れる夕なぎにたえく見ゆる天の橋立 公宗 母
一聲の江に横ふや時鳥 芭 蕉
栗 山

風自西極動 波接北溟平 空裡天橋起
波中寶刹明 龍燈飛岸樹 屢市雜津城

如借扶搖使 圖南九萬里

因に曰ふ。天橋立の風景を賞せんとするには二ヶ所あり、一は但馬國城崎へ越ゆる舊道中の樗峙とし、一は與謝郡府中村の成相山となり。前者は橋立の全景を横一文字形に俯瞰するを得て最も觀賞の好適所たり、而も後者は一望の他の景致をも併觀するの便あれば遊覽者は多く茲處より見るを例とせり。

●成相山傘松の股覗き (丹後)

與謝郡の西北に峙つ山にして古より天橋立を俯瞰する勝地として知らる、山上に眞言宗の刹あり成相寺と云ふ。背面山を負ひ北方一面與謝の海を俯觀す、天橋立脚下に横はるを觀るべし、境内に有名なる傘松あり、之を背景として試みに立ながら身を屈めて股間より橋立を望む所謂是れ俗に天橋立股覗と稱されつゝあるものなり。成相寺は慶雲年間眞上人の創建に係り、寛永中僧別源之を再興す當寺仁王門の仁王は運慶の作なり、境内は六百七十五坪餘にして正面に本堂あり本尊聖觀世音を安置す、之を橋立觀音と稱す、其他方丈、庫裡等數棟の堂宇あり。

●切戸の文珠 (丹後)

與謝郡吉津村大字文珠の海濱にして橋立の南方なる狭水道を云ふ、茲に智恩寺の文珠堂あるを以て名く、古へ此地を久志又は久志備濱と稱し、俗に此地を九世戸の文珠とも云へり。智恩寺は臨濟宗にして寛永年間、僧別源の再興する所、境内風景に富む。有名なる文珠にして、切戸、又は喜瀬戸の文珠と呼び日本三文珠の一と稱さる。昔時細川幽齋此地に在りしが豊前に移封せらるゝに臨み、名残を惜みて左の一首を詠せりと云ふ

立別れ松に名残は惜しけれど
思ひ切戸の天の橋立

五 龍

文珠閣秀沈清漣。成合寺遙籠暮煙。
秋湖一碧平於席。沙際人呼賽佛船。
又、文珠堂の南に海岸寺大堂あり、庭寶中に建設せる碑あり。

べらくと犬の堂より見渡せば霞は舟のほへかゝりけり 幽 齋
切戸の附近に涙浦、涙磯と稱する地あり又少し離れて身投石と稱する巨岩あり我袖は涙の浦にあさりせしあまの袂の劣りやはする 和泉 式部

●橋立公園千貫松 (丹後)

天の橋立は日本三景の一たると共に又本邦有數なる公園地にして、橋立公園と稱す、面積三萬九千四百五十一坪を有す宛然たる長橋地上の虹とも疑はるゝ長嘴一帯の沙上に偃蹇せる蒼松老株一として韻雅幽趣を帯びざるものあらざる中に、特に著名なるものを千貫松と爲す、蒼枝綠葉、白砂を彩り、打ち寄する海波に映ずるところ、橋立風趣中の一風韻たりと謂ふべし。

●舞鶴軍港 (丹後)

加佐郡舞鶴町に在り、舞鶴灣の一部にして明治三十四年開始せらる。即ち第四海軍區にして長門國大津、豊浦郡界より本州西海岸に沿ひ羽後陸奥國界に至る海岸海面及び隱岐、佐渡の海岸海面を管す。舞鶴町は其城の舞鶴に似たるを以て古より有名なる一都會にして、町は東西の二つに分れ、西舞鶴は在來の市街なり、東舞鶴は新舞鶴町と稱し、即ち海軍鎮守府の所在地たり。東西兩市街の相距る一里餘、其の中間の餘部町をも併せて舞鶴と總稱せり。西舞鶴は明治維新は田邊と稱し田邊藩之を領したりしが紀州の田邊と混じ易きを以て舞鶴と改稱せり、當時の舞鶴城址は今尙市街の東偏に存す。舞鶴の港灣は最も船艦の碇繋に適し、日本海第一の要港と稱せられ居れり。

●玄武洞 (但馬)

但州城崎郡田鶴村大字赤石に一勝地あり名けて玄武洞と云ふ。又別に石柱洞、蜂巣窟等の稱あり。土地の人之を石山と呼べり。全山悉く石より成り、其洞の長さは約四十間、左、中、右の三房に分れ、左房間口十三間、奥行十七八間、中房間口十二間、奥行十四五間、内側より泉水流下して洞底に滯留す、透明鏡の如し。古房間口十三間、奥行十六七間高さ四五間、外側の頂上より一小瀧水を瀉ぐあり。其狀百千の石柱を縦横に累積せるが如く仰いで之を觀れば宛かも蜂の巢に似たり、而して其石には悉く六角形の龜甲紋あり儒者柴野栗山嘗て茲に遊び之を見て玄武洞と命名し、且つ玄武洞の三大字を左壁に彫刻せり、爾來其通稱となりて著名なる一勝地となれり。由來我邦は火山に富めるを以て六方石の奇觀亦尠からず、地質學者の説に依れば玄武洞の灘石は富士山、淺間山の如き噴火口より出づる燒石と同質異狀なるものなり、其洞窟の前後左右とも五角乃至八角の標柱形を爲せる緻密にして黒き堅石の長さ數十尺なる石柱が一尺毎に破れ目ありて自然に扁平の切石となるは、是れ猛烈なる噴火山迸發し裂罅より熔解噴出せるものなるべしと云ふ。

●城崎温泉 (但馬)

豊岡町の北貳里餘、城崎川の西岸、城崎町に在り。古來著名なる温泉場として知らる。此地海山の勝に富み、西南には山嶽を繞らし、東は城崎川に臨み、北は一里を出でずして北海々濱に達す、土地は海拔僅に二十尺なるも山水秀麗にして空氣清爽、避暑避寒の浴客常に群集せり。湯は岩罅より湧出する鑛泉にして約六ヶ所あり一之湯、二之湯は一池にして二槽に分ち、三之湯、瘡湯、曼陀羅湯、常湯、新

湯等各別源に發し悉く鹽類泉なり。古來城崎湯と稱して盛名あり。其温泉址また尠からず。諸書を按ずるに城崎温泉は古く舒明天皇の御宇に始めて湧出し、其後

養老年間道智上人佛告に依りて此地に來り始めて浴室を設備し患者を入浴せしむるに至れりと云ふ。温泉寺は市街の西方なる甘露峰の半腹に在り三町の磴道を登りて達す。寺内に觀音堂及び藥師堂あり、温泉の開發者道智上人の開基に係る。天文十七年九月鷹司冬平、飛鳥井雅教の二卿此地に來浴し、當寺に詣で、蹴鞠を催したる際隨身徳丸藏人なる者の詠みたる「かしこくも踏みわけしより絶へやらで道知る山の名こそ高けれ」の歌は今尙當寺に存すと云ふ。附近の日和山は風景に富み眺望頗る佳なり。山麓の本住寺には越中二郎兵衛盛繼の墓あり、又境内に有名なる垂枝櫻あり。

●生野銀山 (但馬)

生野は朝來郡の一市街にして東西三十町、南北二十町、市民は多く鑛山に依りて生計を立つ、此地播但の國境にしに陰陽兩道の交界點たり。銀山は市街の北方に所在す。銀山が延喜式に記されたるは遠き昔時に在るも其開始は詳かならず。天文十一年山名裕豊此地守護の任に當れる時鑛物を掘出したるも、當時未だ之を以て銀と爲す事知らず。織田信長の時に至り代官を置きたるが、石見の商人來りて鑛を買取て歸國し銀を製し得たるより漸次盛大に趣きしと云ふ。豊臣氏に至り伊藤石見守之れが奉行となり、是より以前開始されし中瀬金山をも此時兼領せり。徳川氏慶長三年此地に始めて代官を置き置たり。同十九年大阪冬陣戰役の際、徳川氏は此地の抗夫をして大阪城の濠に抜穴を作らしめしと傳ふ。明治に至り御料局に屬し、支廳を置き鑛坑には鐵道縦横に

敷設せられ、銀、金、銅、鉛の鑛物を採掘精煉せり後ち岩崎氏の有に歸せり。

●若櫻古城址 (因幡)

八頭郡の山間に一驛あり、若櫻と云ふ。八東川の西岸に臨む。播州安栗郡より來る者は戸倉峠を越え、但州養父郡より來る者は氷の山峠を越へて茲に會す。僻陬の一驛又一つの要衝たるを失はず。而して若櫻城址は當驛の西方に在り。若櫻一に若佐と書す、俗に鬼ヶ城と呼ぶ。此地鳥取を距る約八里、明治維新前は備前池田氏の支封として壹萬五千石の別邸ありたり。藩祖は池田光仲の三男河内守清定なり。

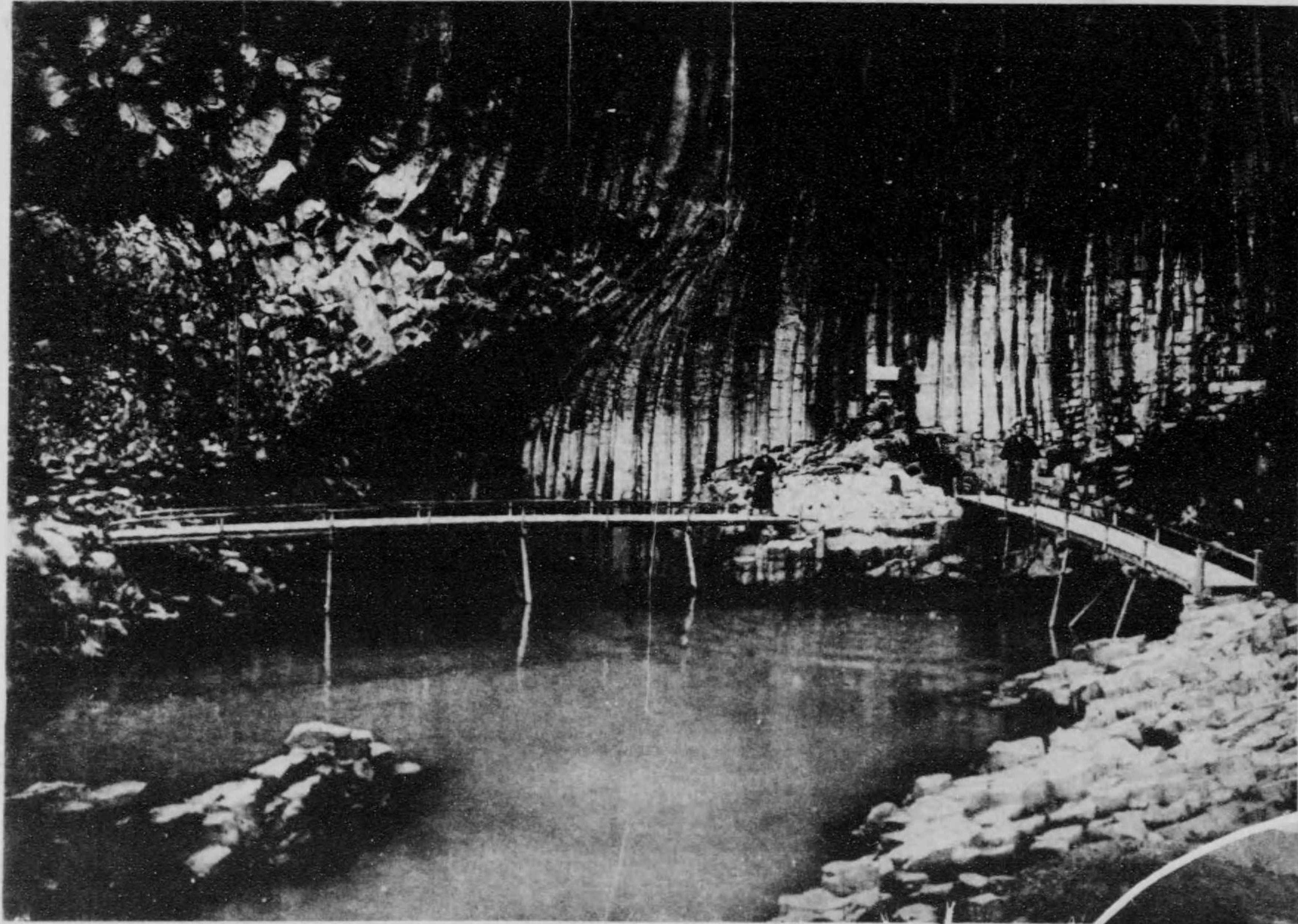
若佐城は矢部若狹守の草創する所にして、其子孫十六代山城守に至つて天正の戰亂に際會し、遂に絶滅するに至れり。天正三年、尼子勝久、鳥取を去り山中鹿之助幸盛を率ゐて若佐の鬼ヶ城に楯籠り草薙加賀守の嫡子三郎兵衛は屢々之れと戦ふ。後ち豊臣秀吉中國を平定せるの後若佐城は木下備中守重賢に賜はり、八東、智頭二萬石の領主として居城せり。重賢は初名を荒木平太夫と稱し羽柴家の子なり。慶長五年重賢西軍に與して封を除かれ、山崎左馬允家盛攝津三田より轉封して三萬五千石を領す。元和三年家盛の子甲斐守家治、備中國成羽に移轉し爾後池田氏の支封となりて以て明治に至れり。因に曰ふ、若櫻市街は東西二丁、南北六町餘にして、人口三千餘を算す。

●荒木又右衛門墓 (因幡)

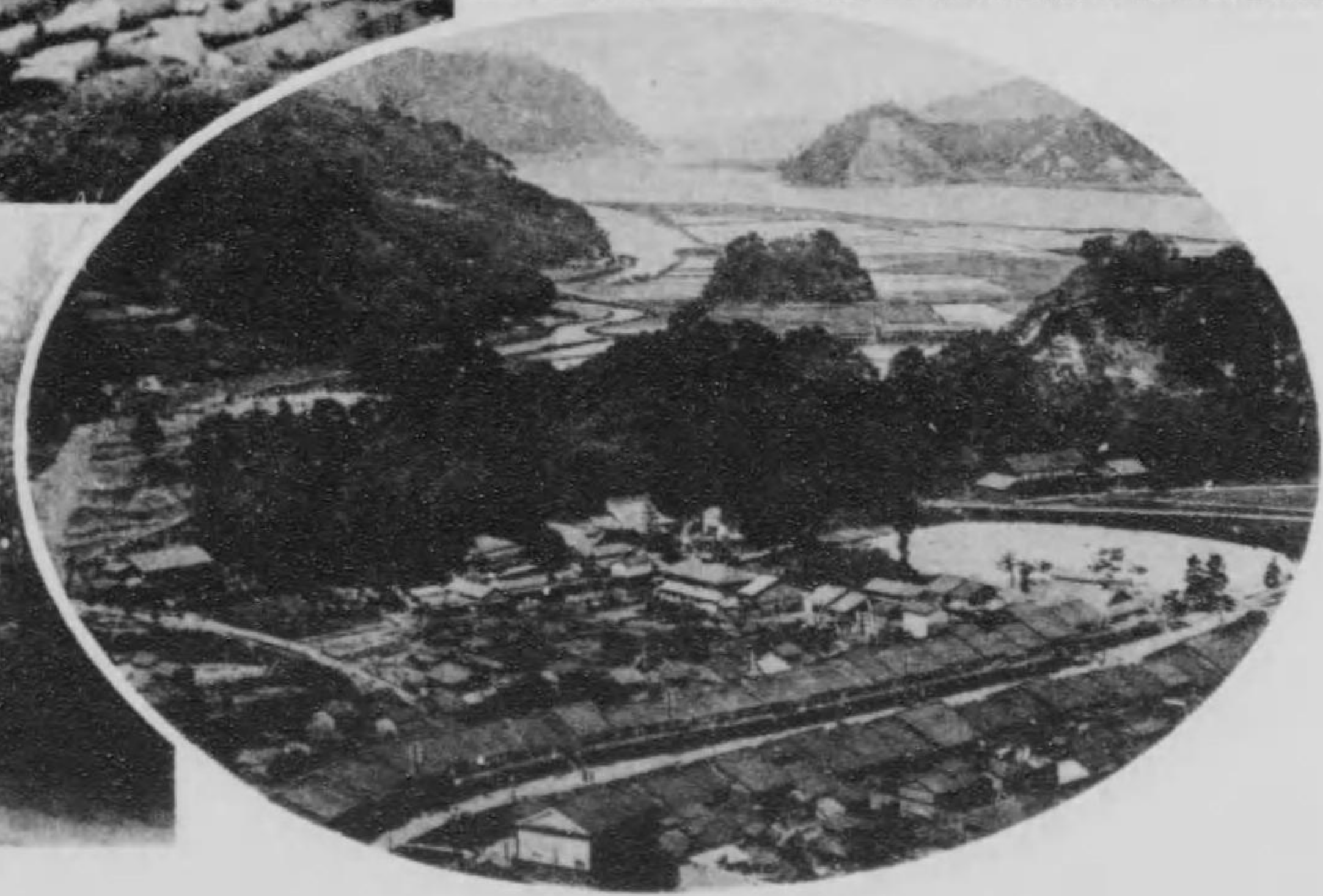
戯曲に小説に、將た講談に、噴々として古來其の馳名を傳へられつゝある伊賀越後警事件の人物、荒木又右衛門の墓は、其の終焉の地なる因州鳥取市に在り。即ち山陰線鳥取驛を距る十七町玄忠寺境内に存す又同復警事件の中心人物たる渡邊數馬の墓は同驛を距る十五町興福寺に在り

玄武洞(二)





玄 武 洞 (二)



泉 温 崎 城



址 城 櫻 若



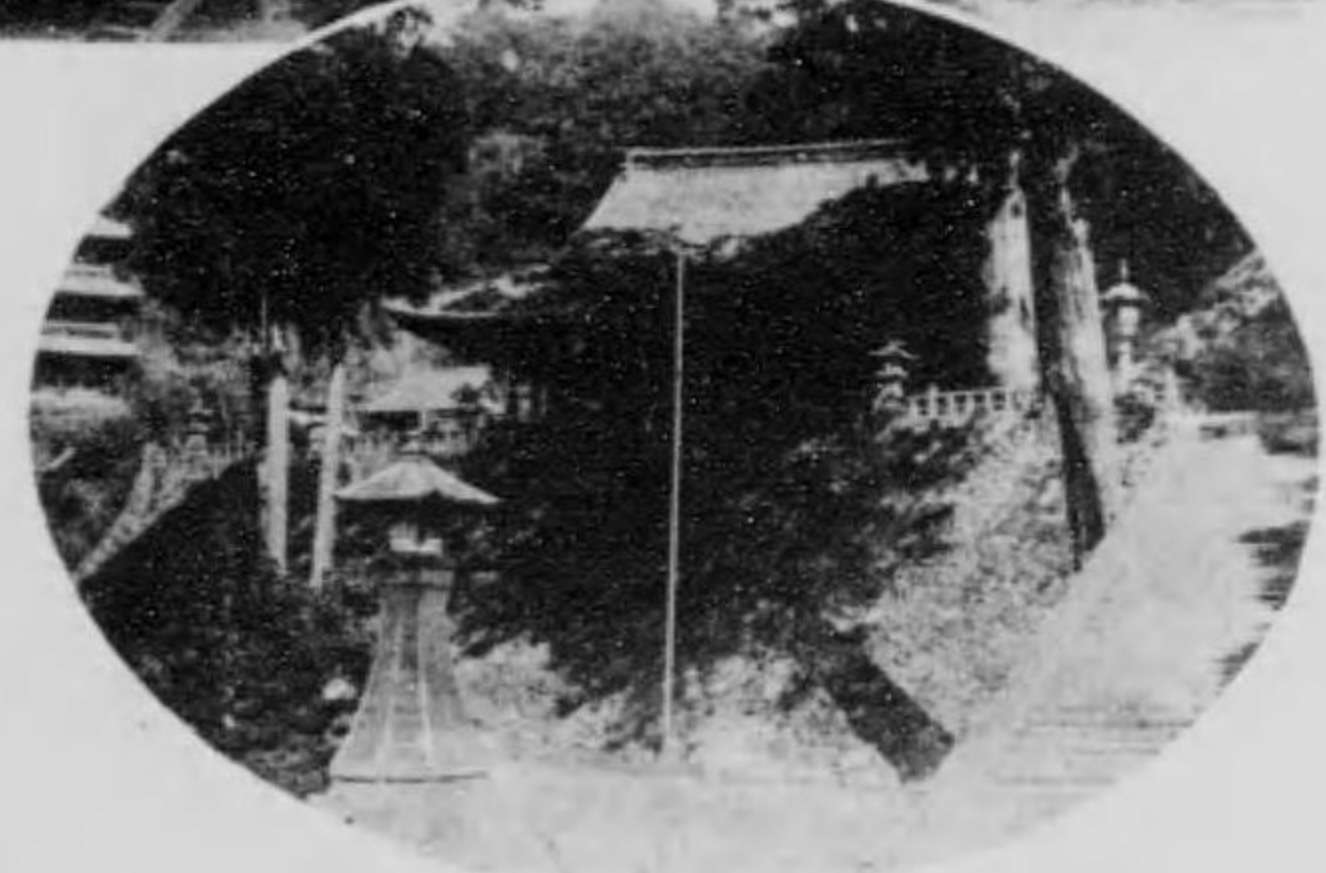
墓 門 齋 右 又 木 荒

は海拔僅に二十尺なるも山水秀麗にして
空氣清爽、避暑避寒の浴客常に群集せり。
湯は岩罅より湧出する鑛泉にして約六ヶ
所あり一之湯、二之湯は一池にして二槽
に分ち、三之湯、瘡湯、曼陀羅湯、常湯、新

徳川氏慶長三年此地に始めて代官をき置
たり。同十九年大阪冬陣戦役の際、徳川
氏は此地の坑夫をして大阪城の深に抜穴
を作らしめしと傳ふ。明治に至り御料局
に屬し、支廳を置き鑛坑には鐵道縦横に

復讐事件の人物、荒木又右衛門の墓は、其
の終焉の地なる因州鳥取市に在り。即ち
山陰線鳥取驛を距る十七町玄忠寺境内に
存す又同復讐事件の中心人物たる渡邊數
馬の墓は同驛を距る十五町興福寺に在り

大 山 寺



米子清水寺



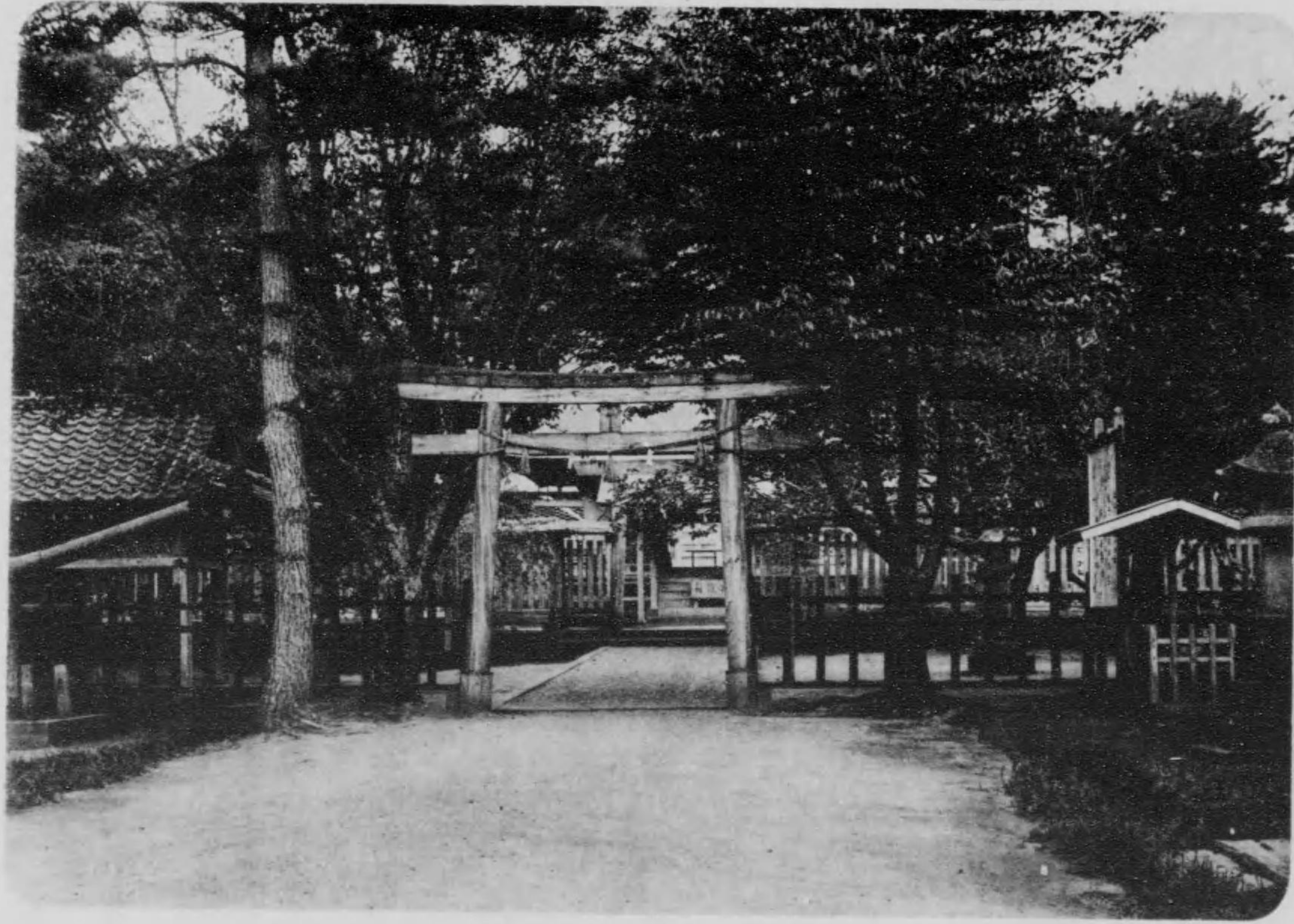
大 山 神 社

上ノ一〇二

夜 見 夕 濱



日 野 川 よ り 大 山 を 望 む



名 和 神 社

● 名和神社 (伯耆)

建武中興の忠臣として忘るべからざる名和長年を祀れるものにして西伯郡名和村に在り。同村は御來屋村の南に接す。御來屋は海濱の一驛にして、美保灣の東

十餘世の齋孫之れが宮司たり、

船上山は赤崎驛の南三里、東伯郡の西隅に位す、山上に船上神社あり、懿徳天皇御宇創の建にして伊弉册尊を祀る、本殿拜殿、奥宮等あり、中世僧智積なる、者佛刹を造營し船上神社を以て鎮守神とし

年間金蓮上人の草創に係り、後慈覺大師の錫を此山に止め丈六の地藏菩薩を安置し茲に始めて大山寺と號せり。享祿中堂宇頽廢し天文六年本堂を再建す。境内五千二百十二坪、本堂、觀音堂、阿彌陀堂鐘樓守あり。賽路の左右には十八ヶ寺の

●名和神社 (伯耆)

建武中興の忠臣として忘るべからざる名和長年を祀れるものにして西伯郡名和村に在り。同村は御來屋村の南に接す。御來屋は海濱の一驛にして、美保灣の東角に當り、昔時名和莊の濱津と稱せられたりし。此地中世名和長年の居邑たりき。長年は名和行秋の長子にして初名を長高と云へり。元弘三年後醍醐天皇潛に隠岐國を發せられて伯耆の名和港に着せらるゝや長年一族を擧げて天皇を扶け奉り二里餘を距ちたる船上山に供奉し、船上山の本堂に入御し奉る。是れ實に元弘三年閏二月二十八日にして、長年は一夜の内に一族郎黨百五十餘人を叫合して船上山に召集し武器兵糧を遺憾なく調へ了り以て敵の來襲に備ふ、翌廿九日隱岐判官清高の數千騎の來襲を撃退し、越へて三月三日進んで敵の小浜城を攻落したり。既にして北條氏亡び六波羅沒落せりとの奏聞船上山に着するや、還幸を仰せ出され五月二十三日を以て車駕船上山を發せられ長年一族供奉して京洛に還幸あらせられたり。斯くて建武中興の役、長年功に依つて因伯二國の守護に任せられ、楠正成と共に決斷所の訟獄を聽斷す、後足利尊氏の叛するや京師守護の任に當り、延元々々尊氏京師を犯すや長年上洛して之を敗り正成と共に京師を復するを得たり。其時長年は宮闕の破毀せられたるを見て馬より下り宸居を拜して泣きしと云ふ。幾くもなく尊氏捲土重來の猛勢を以て大舉京師を犯すや、天皇出で、叡山に幸し、長年は義貞に従つて賊軍を禦ぎ戦ひしが遂に自ら軍門を閉ぢて壯烈なる戦死を遂げたり。名和神社は徳川幕府時代に至つて創建せられたるもの、祠旁に一碑は安政中池田慶徳侯建設する所に係る

明治十一年別格官幣社に列す、名和氏二

十餘世の齋孫之れが宮司たり、

船上山は赤崎驛の南三里、東伯郡の西隅に位す、山上に船上神社あり、懿徳天皇御宇創の建にして伊弉册尊を祀る、本殿拜殿、奥宮等あり、中世僧智積なる、者佛刹を造營し船上神社を以て鎮守神とし寺を智積寺と號せり、後醍醐天皇の一時行宮に充てさせられたるは同寺の本堂なり。明治維新後、智積寺は廢絶に歸し更に船上山神社と稱する事となりたり。

●大神山神社 (伯耆)

西伯郡大高村大字尾高に在り國幣小社にして大山の神を祀る、延喜式には會見郡の宮社也と記す、其舊址は日下郷吉壽村の丸山に在り、近世茲に移建すといふ又別に大山の劍峯に奥院と稱する祀あり祭神は神道家にては大己貴神なりと云ひ舊記に依れば天正慶長の頃、當郡の領主吉川藏人廣家、福萬原の境内に移し、其後五六十一年を経て承應二年當村の大本坊に遷社し、夫より又二十餘年の後、此の地に遷すと云ふ。社の址に土圍、礎等あり、北方數丁を隔りたる處に仁王門、隨神門の礎殘存す皆自然石にして古趣掬すべし

●大山全景 (伯耆)

伯耆の中央に位する居然たる一大山象にして、其主山を大山嶽とし、劍峯、船上山、烏個山、兜個山の諸山は之が別峰として圍繞し方十里許に亘りて盤踞す。其絶頂は直立五千六百呎、山中に大神山祠あり、其舊供僧を大山寺と云ふ。蓋し山陰全道中の最高峰なり。大智明神社は別峰の劍峯に在り。奥の院と稱す。山麓に曠野あり近時軍馬の育成所に充てらる。

●大山寺 (伯耆)

一に大仙寺に作る、大山北方の半腹に所在す天台宗にして延曆寺に屬す、養老

年間金蓮上人の草創に係り、後慈覺大師の錫を此山に止め丈六の地藏菩薩を安置し茲に始めて大山寺と號せり。享祿中堂宇頽廢し天文六年本堂を再建す。境内五千二百十二坪、本堂、觀音堂、阿彌陀堂鐘樓守あり。賽路の左右には十八ヶ寺の末院並列せり。山上風趣に富み夜見の濱美保ヶ關を煙霞香靄の裡に眺め風色の秀麗なる山陰道中第一を以て推さる。

●夜見ヶ濱 (伯耆)

一名月ヶ濱、又濱の目とも言ふ。西伯郡の西北端より海中に斗出せる堆洲にして長五里、幅三町、一帶白砂の上に翠松並列し、風光極めて佳絶、恰も丹後の天橋立の如く、古來大王橋と呼ばれ居れり、海を内外の二つに分ち、外面を美保灣と云ひ、内面を中の海と稱し、内面に望む所を錦浦と云ふ。此地神代は夜見の國と呼びしと、是れ蓋し其稱ある所以か。

●清水寺 (出雲)

雲州安來町の東南、宇賀庄村大字清水に在り天台宗の古刹にして推古天皇五年尊隆上人の草創に係る。當初教吳寺と號せしが大同元年盛縁上人再興して根本堂を再建し毘首羯摩作の十一面觀世音を本尊し同時に清水寺と改稱せり。境内六千二百三坪、根本堂は桁行土間四尺梁間十間あり。歴代の國守修繕を加ふと雖も毫も大同年間當初の舊形を改めず古趣甚だ賞すべし。其他護摩堂、鎮守護法堂、常行堂、文殊堂、吉滿堂、三寶荒神堂、三重寶塔、開山堂、常念佛堂、鐘樓、接待所、二王門、總門及び塔中大寶坊、蓮乘院、松井坊、覺善院、松壽院等あり。寺堂の周圍には老杉鬱蒼として茂生し境内頗る幽邃を極む。山上に砥石ヶ帆あり山中幸盛の陣址と傳ふ。又山麓五輪塔あり是れ兒島高徳の建設に係ると云ふ。

●出雲大社 (出雲)

神社中の神社として盛名古今に隆々たる出雲大社は、簸川郡杵築町の北端八雲山の麓に在り。官幣大社にして大國魂命を祀る。命は素盞鳴尊六世の孫にして少彦名命と共に國土を經營し給ひて大功あり天孫の天下を定めらるゝに及び國土を讓りて退隱し給ふ天照大神依て宮を多藝志小濱に築き天日隅宮と稱し天穗日命を留めて之に仕へしめ給ふ、其の宮殿の構造廣大なるを以て杵築大社と云ふ。即ち是れ出雲大社なり。社殿は宏壯にして古雅を極め、四方に瑞籬を繞らし、前には樓門、左右には神饌所を設けたり。境内攝社頗る多し、社境は三方丘陵を負ひ、後丘を八雲山と云ひ、西を鶴山、東を龜山と稱す、又東方の森を築那杵築森といふ。天穗日命の血統世々祭を掌る。上古之を國造と稱す、現今の宮司は即ち其の後裔にして千家、北島の二氏あり、共に男爵を授けらる。

史を按ずるに當神社は垂仁帝の御宇本社を皇居の如くに改造して之を十六丈の宮制と云ひ後又假殿を築きて之を八丈造りと稱せり。天仁三年七月大木百本偶然杵築の浦に流れ來り武内宿禰本社之造營を司り其材木を以て社殿を新營す後世之を寄木の御造營と云ふ。爾來六十一一年目毎に修繕を加ふる制規たりしも世漸く封亂れて修理意の如くならず毛利氏當國にせらるゝに及んで廢れたる祭典を復興せり然るに豊臣氏社領若干を減じ爲めに社殿衰頽に傾きしを松平直政國主となりて大に社宇を修理したり、明治七年千家尊福、北島恒孝兩人協力して之を造營せり。大祭は毎年五月十四日に執行す。

●美保の關辨財天 (出雲)

松江市の東八里二十五町、境港の東三

海里、地藏鼻の内なる一漕の海村にして美保關村と云ふ。辨天祠あり、古來其の景勝と共に知らる。此地隱岐國に渡航する要津にして昔時は衛兵を置きて以て監視せり。是れ關の名ある所以なりとす。港は東西百五十間南北二百三十間、水深干潮四十尺港内敢て廣からざるも北海の航船は風波を茲に避くる者多し、承久三年後鳥羽上皇隱岐に遷幸の際、此地に着かせ給ひ、夫より御船にて隱岐に渡らせ給へる時。
知るらめやうきめをみまの浦千鳥
鳴々しほる袖のけしきを
と詠ませ給ひし史蹟として知らる。

●美保神社 (出雲)

美保關市街の西北に在り、國幣中社にして事代主命三保津姫命を祀り、出雲國に於ける大社に亞ぐの舊祠なり、是を以て歷代天皇の崇信淺からず殊に後醍醐天皇隱岐遷幸の際、當社に賽して皇室の挽回を祈願あらせられ又明治天皇も御劍を奉納あらせられたり、天文年間には社域二萬六千八百坪を有し社殿壯觀なりしも永祿年間山中幸盛の兵燹に罹りて悉く烏有に歸し、其後社殿を再建せしも昔時の宏壯に及ばず、明治の初年には境内僅に八百五十三坪となれり。此地三面山嶽を繞らし背後には森林を負ひ、前面は華表を出れば數十歩にして海岸に達す。社内には本殿、通殿、拜殿、回廊、舞樂殿、社務所、祭器庫、手水舎、隨神門等あり、當社の祭典中最も盛なるは青柴垣の神事諸手船の神事にして青柴垣神事は毎年四月七日執行す頗る群集雜沓を極む。

●松江城址 (出雲)

松江市の西北、巍然として聳ゆる松江城は一名を千鳥城と云ふ、今其城址を存して城山公園となれり、松江神社は即ち

其地に建設せられ瀋祖の靈を祀る。城址は今尚本丸、二ノ丸、三ノ丸を殘存し、天守閣は公開せられて衆庶の眺望を擅にするを得、一とたび登閣して展望せんか全市を一眸の裡に收め宍道湖の風光大山の雄姿は呼べば答へんとし、松江が本邦十二景の一に數へらるゝ故なきに非ず。

岡本 黄石

舊邦形勢冠山陰 最勝名區景象森
市陌縱橫亞都府 城樓突兀俯湖灣
初來客愛風光美 久住人訪海味深
應似武昌幽絕處 便同坡老滯留心

●宍道湖 (出雲)

松江市及び八東、簸川二郡に跨る有名なる一大淡水湖なり。東西四里十町、南北一里二十二町、周圍十一里三十三町あり斐伊、宇賀、來待、玉造、乃白諸川の水を容れ、松江市より大橋、天神の二川を経て中海に決し佐陀川を以て外海に通ず、東岸に一小島あり嫁ヶ島と云ふ。湖水伯耆富士の秀姿を映じて風光太だ明媚なり。嫁ヶ島は全島岩石より成り、蒼松外面を點綴し頗る風趣に富む、月夜小舟に棹して茲に遊ぶ者多し。湖中又鱈、鯉、鱒、白魚等を産し、就中鱈は第一の名産として賞せらる、其味支那松江の鱈に酷似すと評せらる、市を松江と名くるも蓋し亦茲に基づくと云ふ。

菅 茶 山

亂山高下彩嵐連 中流平湖綠茫然
松江萬家水爲郭 粉壁聖春媚晴漣
沙步西轉幾十里 村々晒網夕陽紫
釣鱸磯出眺霞隈 賣酒家藏楊柳裡
雪天眺望最清妍 白玉倒浸千房顏
地僻從來少遊客 絕勝如此未有佳名
著世間 光師風流惠林徒 今秋卓
錫湖水隅 豊無李白郎官例 自今
呼作碧雲湖 送君北指暮雲橫 恨
不同舟棹空明 好向月中歌此曲



美保の關辨天の島



穴戸湖

出雲大社

美保神社

福、北島恒孝兩人協力して之を造營せり。

●松江城址 (出雲)

松江市の西北、巍然として聳ゆる松江城は一名を千鳥城と云ふ、今其城址を存して城山公園となれり、松江神社は即ち

地僻從來少遊客 絕勝如此未有佳名
 著世間 光師風流惠林徒 今秋卓
 錫湖水隅 豊無李白郎官例 自今
 呼作碧雲湖 送君北指暮雲橫 恨
 不同舟棹空明 好向月中歌此曲

大祭は毎年五月十四日に執行す。

松江市の東八里二十五町、境港の東三

濱田港外の浦



川越觀音瀨



上ノ一〇四

濱田港の島



斷魚溪の内の塚



●濱田港外の浦 (石見)

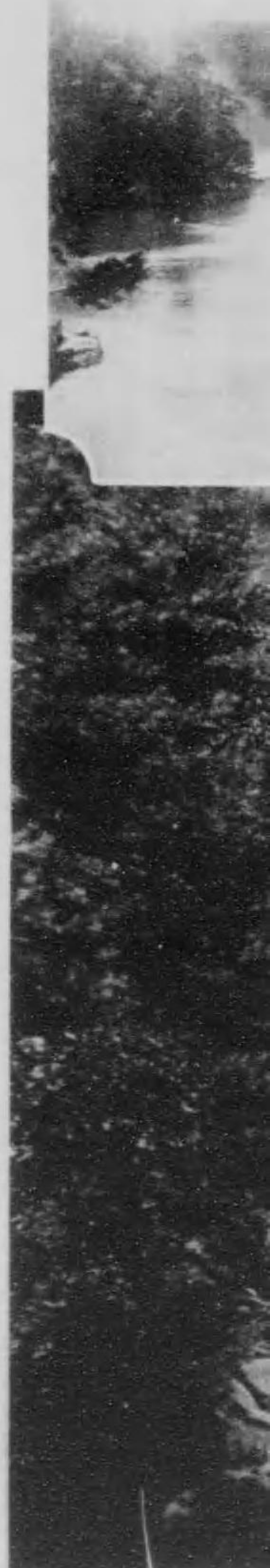
濱田市街の北方にして一名を松原浦と稱す、濱田町は石見第一の都會にて那賀郡の北海岸に臨み、濱田川を挟みて山陰

名松原浦一帯の海濱頗る風光に富み、馬島、瀬戸島、矢野島等の島嶼前面に横はり、鶴島また此の裡に點在せる青螺にし

泉甘谷似盤 瀑懸魚路斷 樹瘦鳥棲寒 捲書望天北 名區欲訪難 福羽 美靜

ひれふりて登りかねたる魚きりの

巖も浪もいさまじきかな



●濱田港外の浦 (石見)

濱田市街の北方にして一名を松原浦と稱す、濱田町は石見第一の都會にて那賀郡の北海岸に臨み、濱田川を挟みて山陰道の要衝たり。東西十二町南北二町、諸種の機關備はり、漁業、製紙業等頗る盛なり。當港は高山岬の東北、約二十六湊に在りて瀬戸島、馬島、矢野島等其の北方を擁す。港門は約一湊、西方に向つて開き西風以外は能く風波を避くべし、外の浦は其北に在りて南東に彎入し。曲折して北に入り濱田川を隔て小舟を以て濱田町に通ず。浦の内部は一尋乃至二尋半にして和船の錨地として適所たるを失はず港内貨物の吞吐頻繁にして其主なるものは、大豆、小豆、雜穀、米、麥、椎茸、木材、燐寸軸木、銅、半紙、清酒、生糸、石油等なり。

明治維新前、此地に濱田城ありたり。元和五年古田大膳重治の創築に係る。重治封六萬石を賜はり三十年間繼續の後、嗣なくして除封後、廣島、津和野兩家より城番を置きて管し、其後本多氏入部し數代の後、天保年間松平齊厚來りて茲に居城し、子孫相承ぎ五代の孫武聰に至り、慶應二年長藩の爲めに追はれ、城又燒かれて廢絶に歸せり。因に濱田舊城内に龜山神社あり、天豐足柄姫命を祀る、創立以來二千年に及ぶ、今縣社にして俗に三の宮大明神と稱す、社殿は文化元年の再興にして社背に石神あり、巨石八個に碎け、方三間の地に散布す。傳ふる所に依れば神代に八束水臣津野命の阿麻杵命、久麻杵命に命じ石を碎きて檢せしめられし古蹟なりと云ふ。又城内の東隅に城主歴代の碑あり。

石見國第一の勝地として著名なる斷魚灣は邑智郡井原、中野二村の間に介在せる溪谷にして冠山の西麓、矢上川の上流に在り。巉々たる巖石突兀として對峙せる中間を貫流する一條の水流は怪巖に觸れ、巨石を衝き、奔湍激し。ては飛散して白玉を碎くが如く、或は瀑布となり、或は瀨となり、潭となり、景趣恰も木曾の寢覺の床に似て、更に一層の雄偉壯觀を示す。而して其の左右の山崖は屹として直立絶壁の如く、山骨現はるゝ處、懐絶幽絶を極め、其間綠樹、櫻楓點綴して自然を彩るあり、春は以て花の艶を賞すべく、秋は以て霜葉の美を味ふべく、月の夕、雪の旦、其時季に依りて其眺望を異にし、爽快言ふべからず。溪中數町に亘るの間、溪底は多く岩石を以て敷き詰めたるが如く、一步を進むる毎に一景奇異の狀態を展開し來る。溪頭の瀧を魚切瀧といふ、斷魚溪の稱は蓋し茲に基くものか。溪中その景趣を異にするもの千態萬狀なるも是を分ちて二十四景となせり。縁ヶ淵は即ち是れが景中の一なり。此地僻陬にして交通に便ならざる爲め其名餘りに都人士に知られざるは甚だ遺憾といふべし。此地國道の大森町より約八里、温泉津より約七里なりとす。

●濱田鶴島の景 (石見)

那賀郡濱田港外にあり。此地外の浦一

名松原浦一帯の海濱頗る風光に富み、馬島、瀬戸島、矢野島等の島嶼前面に横はり、鶴島また此の裡に點在せる青螺にして、所謂石見瀧中の一景致、宛然是れ一幅の畫趣たり、蓋し鶴島の稱は外の浦背後の丘陵龜山に對したるものならんか。

●斷魚溪嫁ヶ淵 (石見)

石見國第一の勝地として著名なる斷魚灣は邑智郡井原、中野二村の間に介在せる溪谷にして冠山の西麓、矢上川の上流に在り。巉々たる巖石突兀として對峙せる中間を貫流する一條の水流は怪巖に觸れ、巨石を衝き、奔湍激し。ては飛散して白玉を碎くが如く、或は瀑布となり、或は瀨となり、潭となり、景趣恰も木曾の寢覺の床に似て、更に一層の雄偉壯觀を示す。而して其の左右の山崖は屹として直立絶壁の如く、山骨現はるゝ處、懐絶幽絶を極め、其間綠樹、櫻楓點綴して自然を彩るあり、春は以て花の艶を賞すべく、秋は以て霜葉の美を味ふべく、月の夕、雪の旦、其時季に依りて其眺望を異にし、爽快言ふべからず。溪中數町に亘るの間、溪底は多く岩石を以て敷き詰めたるが如く、一步を進むる毎に一景奇異の狀態を展開し來る。溪頭の瀧を魚切瀧といふ、斷魚溪の稱は蓋し茲に基くものか。溪中その景趣を異にするもの千態萬狀なるも是を分ちて二十四景となせり。縁ヶ淵は即ち是れが景中の一なり。此地僻陬にして交通に便ならざる爲め其名餘りに都人士に知られざるは甚だ遺憾といふべし。此地國道の大森町より約八里、温泉津より約七里なりとす。

つられれと人にはいはず石見瀧
うらみぞ深き心ひとつに

泉甘谷似盤 瀑懸魚路斷 樹瘦鳥棲寒
捲畫望天北 名區欲訪難 福羽 美靜
ひれふりて登りかねたる魚きりの
巖も浪もいさましきかな
冠山は素と不可志山と稱し中野の東井原村に位す、北は八色石山(布施村に屬す)に連る。山中奇岩怪石に富む、就中その八色石と名付くるもの最も有名なり。是れ太古神靈の遺蹟に成ると傳ふるもの偶然にあらず。

なべてその不可志の山に入ぬれば
歸らん路も知られざりけり。
中野は今、中野村と云ふ、川本驛の南三里に在り。此邊戰國時代に於ける史蹟として知らる。永祿三年十二月上旬毛利元就父子三人、中野の城を攻め落すに際し、城主山城守搦手より切抜け、矢上の城に落ち行き、矢上筑前守と合併し一致して毛利氏に當る、茲に於て毛利氏矢上城を一氣に攻落すべく猛然として陣を進むるや、山城、筑前相共に城を捨て、退去し、中野、矢上の兩城は遂に毛利氏の收むる所となれり。

斷魚溪の下流たる矢上川は其源を矢上村の山中に發し、東北に流れて中野村を過ぎ井原川を併合し、川本村の西方より江川に流入す、長さ約五里に達す其上流即ち斷魚溪の溪頭に落下する魚切瀧は高さ九丈、幅六間、水源は柿木村大字下須に發す。此邊雲母、鐵礦を産し、又鑛泉あり。

石州多怪岩 怪石疊層巒 地險國如蜀

云ふべし。

僧 五 岳

頼 杏 坪

藝微四十八川流 合作一江通石州
兩岸劔鉞千峰碧 斷腸未必待猿愁

此詩、温泉を辭して歸路、江を渡る」の前文あり。是れ矢上、中野、川本附近に於ける山間溪谷の地勢を賦し得たるものと云ふべし。

●津戸港 (隠岐)

隠岐郡の海濱、都萬灣東南にある一港なり、周吉郡の蛸木村と相並びて、島前中の島に對す。津戸村は明治三十七年都萬村に編入さる。海波穩かにして輕風吹き來る所、風光又掬するに足る。都萬村は島後の西南に位し地味豊饒にして田園に富み、水源を鳴澤の地に發する都萬川の流水又砂からず景趣を彩る。一古祠あり、高田明神と云ふ此地の鎮守神たり。

淨阿 上人

花も夏になる鳴澤の蓮かな

准三宮前關白

春さむみ高田の山の高ければ

雪の下より立つ霞かな

●焼火山 (隠岐)

知夫郡西島の東部に位する半島形の島峰なり。恰も島前海の中心に當る形狀圓錐を示して山容頗る雄麗。航海の舟夫は之を以て常に目標とす。此山は蓋し太古の噴火作用に依つて成立せるものたるや疑ふべからず。延暦十八年渤海に派遣せる使者此山の火光に依りて無事歸着せる事あり。山上に大山神社あり、大山明神を祀り、又波上浦に比奈麻呂比賣命神社あり、共に此山の靈と云ひ、繞火權現と稱せらる。承久年間、後鳥羽院此地に遊獵し給ひし際、暴風吹き起りて波濤捲立ち、船將に轉覆せんとす、上皇乃ち

我れこそは新島守と隠岐の海の

荒き波風こゝろして吹け

の一首を詠す茲に於て風波靜に收り上皇の御船は此山の火光に依りて波止浦に安着するを得たりと云ふ。由來此山の火光は舟人に尊敬せらるゝ事厚く、伯耆、出雲の海客は焼火權現を崇拜せざる者無し書て元和年間伯州米子の商船竹島に往來せる途次、風波の靜穩を此神に祈願し梵

鐘を寄進せりと傳ふ。

焼火山は山勢峻峻を極め、岩路九折にして樹木鬱生し登攀甚だ容易ならず山嶺に一巨巖あり、高さ二十丈、半腹に一穴あり俯瞰するも其極底を望むべからず欄干に縋りて窟前に達すれば一堂あり觀音の像を安置す、堂は雲上寺に屬す。傳へ曰ふ、往時一條天皇の御宇、海中に異光を放つこと連夜、光は飛んで山嶺に至る村人望み見て大に怪しみ之に尾して山に登れば山頂一岩の聳立するあり其形薩埵の如し、村人聲首して山を下り、後ち一字を茲に營むと云ふ、今の堂即ち是なり

後鳥羽上皇

なだならば瀧壺やくやと思ふべし

何を焼く火の煙りなるらん

後鳥羽天皇は御尊成、高倉天皇の第四皇子にして御母は七條院藤原稚子なり。安德帝の崩後文治二年七月第八十二代の帝位に即かせらる。天皇常に北條氏の横暴を憎み政權の鎌倉幕府に移れるを憤り給ひたるが、早く位を土御門天皇に譲りて上皇となり院政を聽かる當時の執權北條義時は頑として上皇の意に従はず益々暴威を振へるより上皇意を決して北條氏を滅ぼさんと謀り給ひしが事漏れて義時の爲めに隠岐國に遷され給ふ、上皇遷幸の際、薙髮して良然と稱せられ、隠岐の巖穴を宮とし、悲風慘雨の星霜を過し給ふ事十八年延應元年二月遂に隠岐に崩御あらせらる、寶算六十一。尊骸は海士郡海士村なる勝田山(荊田山、又は勝田山とも云ふ)に埋葬し奉る。廟址は勝田山の中船に存す。方六十間餘の平地にして木柵を繞らし、正面一段高處に二基の燈籠を置けり。上皇此地に崩御あらせらるゝや土人茲處に小祠を營みて後鳥羽神社と號し明治六年神靈を攝津の水無瀨宮に合祀せらる。廟址は近時に至るまで供僧を置き源福寺と稱したりしが明治維新後

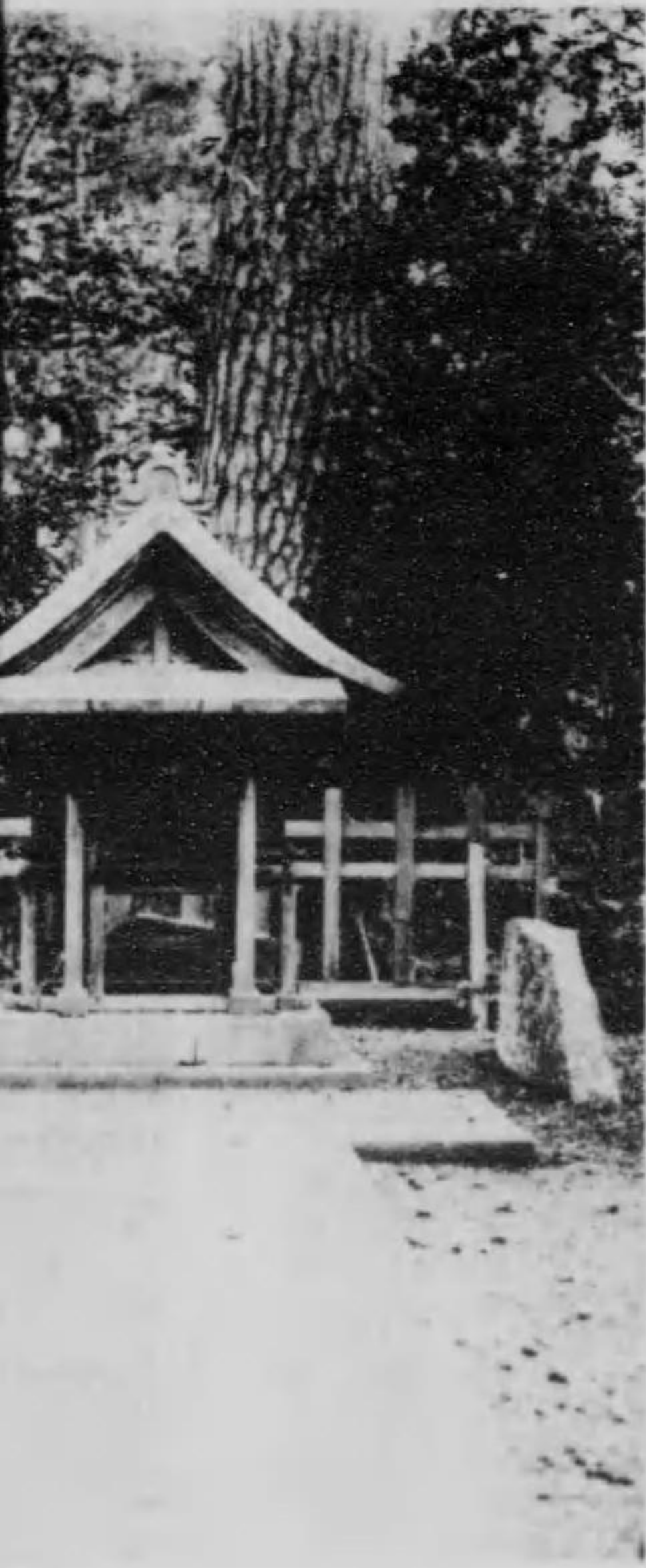
寺僧を廢して更めて廟堂を建設せられたり。

舊記に依れば源福寺の門には二玉有りて、傍に華鯨を懸けたり、此二玉は君御手づから刻み玉ふと云傳ふ、是れより四十間許り石甃を山に上る半過ぎて左に入り左右松竹藁々として綠蘿籬に蔓り、又小門あり鞠躬如として入れば拜處の前に至る、御廟は其後に高し、欄干を設けて階上に登る、四方は皆喬木にして竹籬を引圍む、其間は小石碌々たり、遊客も來訪希に落葉も動て不掃、見るに涙落ち感慨自ら生ず、小門の前より直ちに登れば堂前に至る。前庭廣くして背には樹多し、本堂は護摩を修する所として五大尊を置けり、煙に薫じて佛も黒く阿阿棚に菊楓折亂せり云々。

因に曰ふ。焼火山の南方海岸に文覺の窟と稱する奇勝あり。高さ數丈の一岩嶼にして二穴洞開し、中に窟宅あり、傳へて文覺上人瀆流されて此洞窟中に坐臥修禪して終りたりと云ふ。

●黒木御所址 (隠岐)

知夫郡黒木村にあり、此地舊別府村の海岸にして島前海の一支灣に瀕す。元弘二年後醍醐天皇隠岐に遷幸し給ひて此地に行在所を設けらる、即ち是れ黒木御所にして、今これを黒木神社と稱す。社地は村の東岸堀起せる小丘陵にして神社の床下には大なる壺を埋め其上に磐石を覆ひ壺中には甲冑其他の武器を藏すと云ふ。然れども神靈の怒りに觸るゝを恐れて未だ之を實驗せし者無しとぞ。神社境域の三方は懸崖削壁海に接して屏風を建てたるが如く東南別府灣を距て、海士郡勝田山なる後鳥羽天皇の廟址と相對す。右方には船舶の碇繋所たる大山港を望む。傳へ云ふ。此地古へは一の島嶼たりしが後年陸地と接續するに至りしなりと。又右方の海岸には簾の如き一種の貝を産す。



黒木御所址



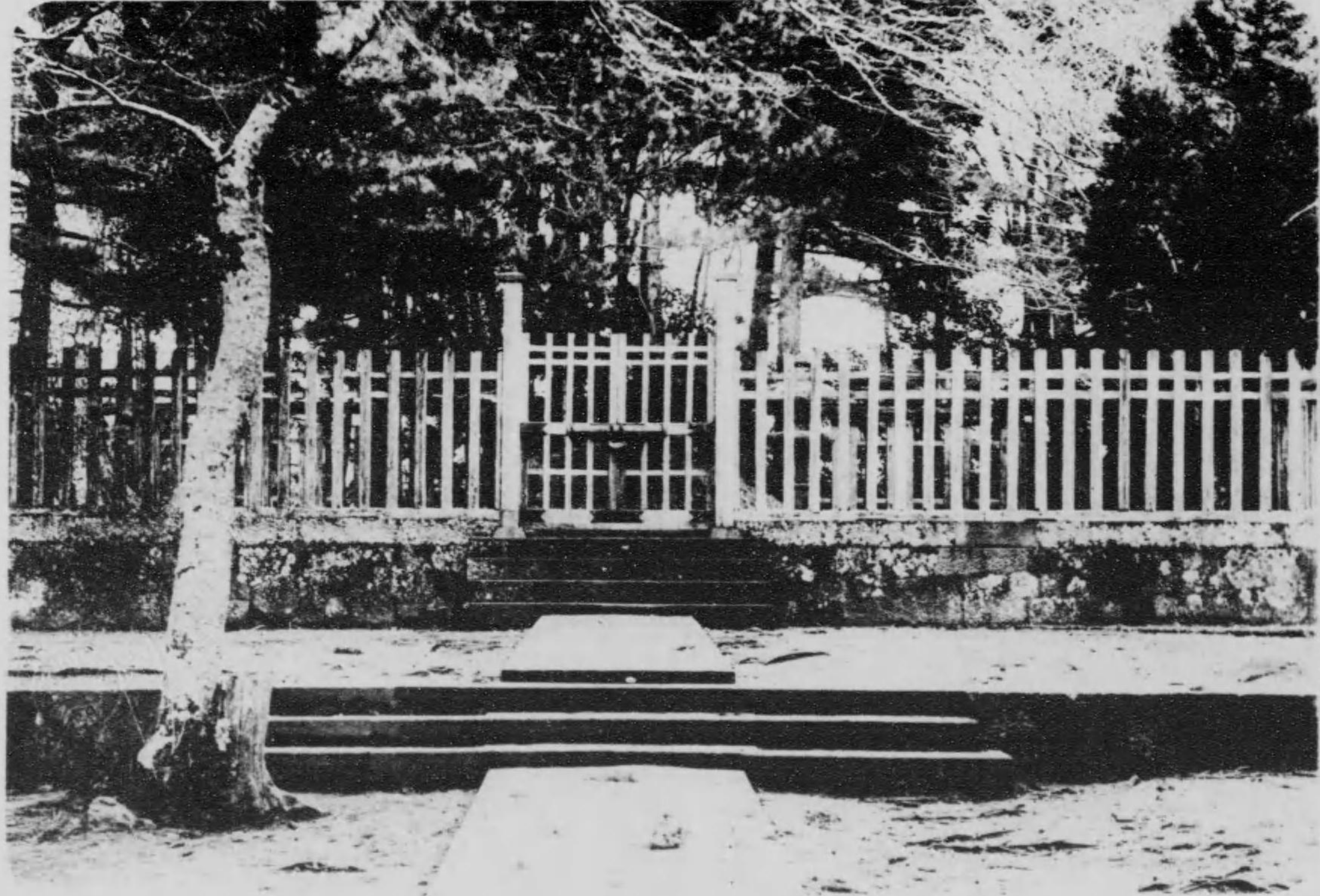
津戸港



後鳥羽院宸翰



明治二十二年三月廿日



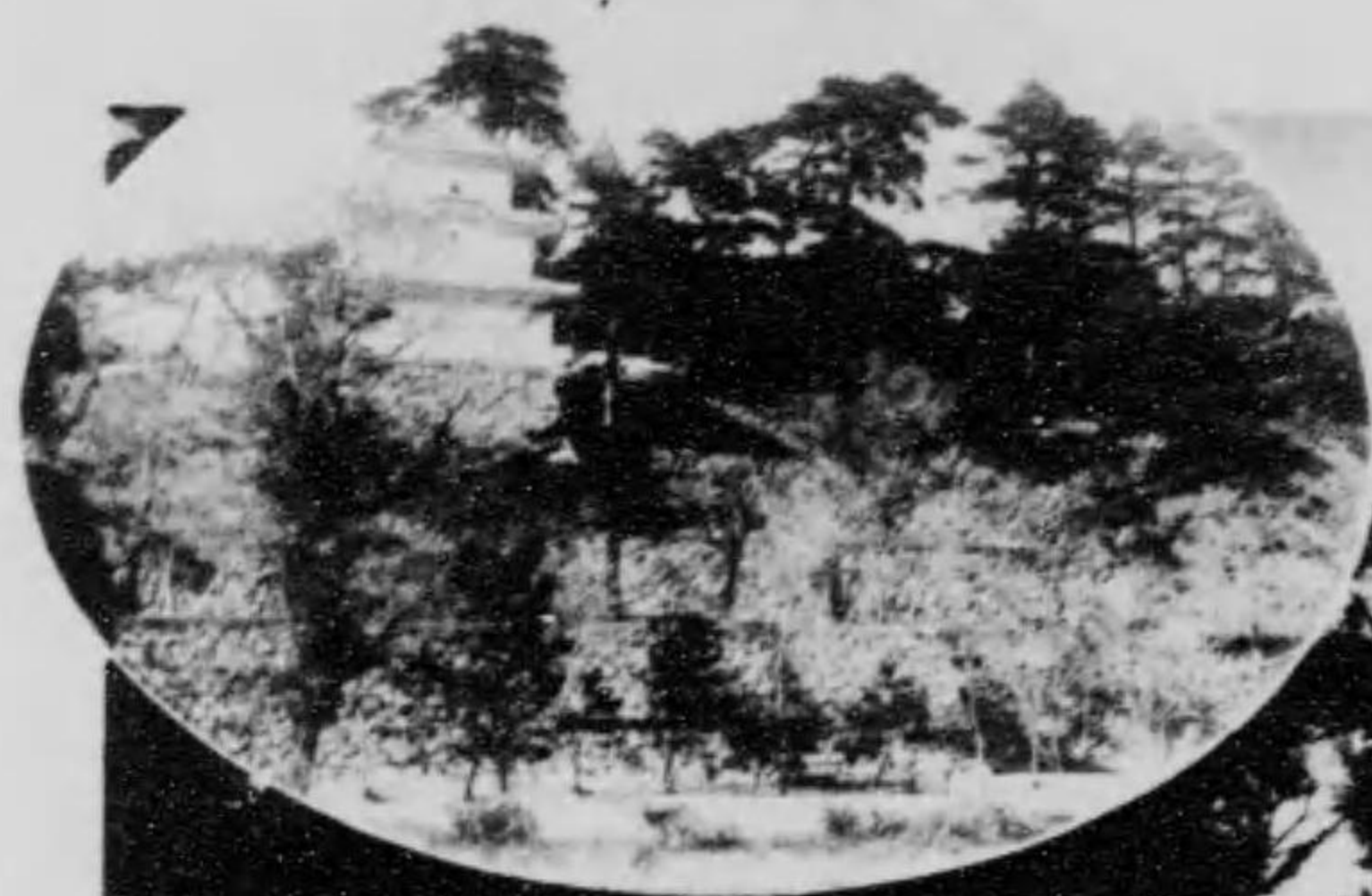
後鳥羽院御火葬所



黒木行在所址

上ノ一〇五

は舟人に尊敬せらるゝ事厚く、伯耆、出
 雲の海客は焼火権現を崇拜せざる者無し
 嘗て元和年間伯州米子の商船竹島に往來
 せる途次、風波の靜穩を此神に祈願し梵
 々や土人茲處に小祠を營みて後鳥羽神社
 と號し明治六年神靈を攝津の水無瀬宮に
 合祀せらる。廟址は近時に至るまで供僧
 を置き源福寺と稱したりしが明治維新後
 には船舶の碇繋所たる大山港を望む。傳
 へ云ふ。此地古へは一の島嶼たりしが後
 年陸地と接續するに至りしなりと。又右
 方の海岸には簾の如き一種の貝を産す。



尾上の鐘



尾上相生の松



明石の浦



尾上の浦

●尾上相生の松 (播磨)

古來播州の一名勝にして著名の古松として知らる。加古川郡尾上村に在り。尾上は高砂町より加古川を渡りたる東方に所在す。其の松林中に一神祠あり、尾上

山に倚り江に面し頗る水陸の要衝に富む此城素と人丸塚と呼びたり。元和三年小笠原氏地を茲に相して始めて築城し以て今日に傳ふ。因に曰ふ、天正以前の明石城は林崎村の船上に在りたり、今尙は船上に明石の古城址存す。

●明石浦 (播磨)

『ほのゝくと明石の浦の朝霧に島かくれ行く船をしぞ思ふ』と柿本人丸の詠を以て古來著名なる勝地として知らる。明石町海濱一帯の總稱にして、明石瀉又は明



●尾上相生の松 (播磨)

古來播州の一名勝にして著名の古松として知らる。加古川郡尾上村に在り。尾上は高砂町より加古川を渡りたる東方に所在す。其の松林中に一神祠あり、尾上神社と云ふ、郷社にして、表筒男命、中筒男命、底筒男命を祭る。即ち是れ住吉の神なり。相生の松は此境内にあり、雌雄一木より生じ、地上を離れて二幹となれり。其他に片枝松あり枝々悉く東に向へり。

又近傍に尾上林と稱する松林あり、樹々各皆其形状を異にし、風光頗る舞子濱に似たり。この松林中多く松露を産し、採りて同地の名物に製せらる。

●尾上の鐘 (播磨)

尾上の鐘は尾上村なる尾上神社境内に在り。高三尺二寸、周囲七尺七寸、厚一寸九分、疣三十六あり。傳へ曰ふ、是れ神功皇后三韓征討より凱旋の際、船載し來れるものなりと。鐘質は青銅にて鐘面に天人樂器寶塔菩薩等の圖像を鑄附けたり、俗に之れを龍宮の鐘と稱し居れり。赤水紀行に云ふ

尾上鐘は銅色麗し、衝と銑とに細密なる紋あり鉦遂に天女の像を鑄付、其模様尋常にあらず外國の物なるべし云々千載集に尾上の鐘と詠せし前中納言匡房の歌を載せたり。

●明石城 (播磨)

因に云ふ、尾上村は加古川驛の南三十町に在り、加古川畔に七騎塚なるもの存す、是れ鹽谷高貞の弟六郎兄の身代りとなりて戦死せる地なりと云ふ。

明石市街の北方に位す、區域八町許、

山に倚り江に面し頗る水陸の要衝に富む此城素と丸塚と呼びたり。元和三年小笠原氏地を竝に相して始めて築城し以て今日に傳ふ。因に曰ふ、天正以前の明石城は林崎村の船上に在りたり、今尙ほ船上に明石の古城址存す。

守屋 東陽
滄州昨夜雨新晴 松樹迎潮寒影清
海上暖雲漁火散 天邊宿霧布帆輕
遙山爭泛澄江浦 初日纔臨赤石城
藉使少文遊此境 歸來詎得畫中成
佐田 竹水

六幅高帆十八洋 舟師乘便太匆忙
須磨赤石好風月 枉付蓬窓夢一場
顧 山 陽
歌神詞外起朝烟 舞妓灣頭酒若泉
借問行人有何急 欲乘兵庫一番船

●高砂相生の松 (播磨)

是れ亦播州名勝の一にして高砂に在り高砂は今高砂町と稱す、加古川の西方に當る一市街なり。市街中一區を残して松原となし茲に一神祠を建てたるもの即ち是れ高砂神社なり。相生の松は茲にあり、一樹双幹にして連理の枝あるを以て名けられたるが、往時の相生の松は枯絶し元祿年間、國主本多政武之れを惜みて植え繼ぎたるもの、現今の名松にして、片楹づ、赤松黒松に分れたり。

由來高砂相生の松の著名なるは、想ふに諸曲の句に基くものなるべし

貫之集
高砂の嶺の松とや世の中を
守る人とや我はなりなん
順 集
打よする浪と尾上の松風と
聲高砂やいつれなるらん
古今集
誰をかも知る人にせん高砂の
松もむかしの友ならなくに

●明石浦 (播磨)

「はのく」と明石の浦の朝霧に島かくれ行く船をしぞ思ふ」と柿本人丸の詠を以て古來著名なる勝地として知らる。明石町海濱一帶の總稱にして、明石瀉又は明石の瀉とも云ふ。明石町の西十餘町を距ちたる船上村の海岸を望海の瀉と稱す、素と明石藩の建設に係る望海樓なるものあり、眺望ただ佳なり。明石浦は水清く波靜にして頗る海水浴に適す。夏季茲に遊ぶもの多し。

十四夕登海樓 梁田 蛻巖
二十三年赤浦秋 瑤簫金管慣同遊
樽前無復暮離思 棘藪如山月滿樓
門 部 王
見渡せば赤石の浦にたける火の
ほにぞ出てぬる妹か悪らし
順 徳 院

あかし瀉あまの管屋の煙にも
しばしは曇る秋の夜の月
俊 恵 法師
夜をこめし明石のせとに漕出れば
遙におくるさを鹿の聲

●尾上の浦 (播磨)

高砂町より加古川を渡りて東に向ふ尾上村の海濱を云ふ。亦これ播州名勝の一たるを失はず。尾上神社、尾上の鐘、尾上の松と共に著るしく知らる。

明石、高砂間に一港あり、二見港と云ふ、古來勝區として著る、浦を東西二浦に分ち、西二見に天神の社あり松樹海邊に連り翠色白砂と相映じ、東南淡路島に對し風光景趣太だ佳なり、又此近海に於て章魚の漁獲頗る多く、味亦美なりと云ふ。

夕月夜おぼつかかさ玉篋
ふた見の浦はあけてこそ見ぬ
中納言兼輔

●舞子の濱 (播磨)

明石海峡の北側にして明石郡垂水村海濱の稱にして、東は須磨浦に連り、西は明石浦に迫る。東西の間約七八町あり。此間古松鬱蒼として林を成し、南方明石海峡を隔て、近く淡路島に對す風景最も佳なり。而して其松は枝幹屈曲、高さ二三丈に過ぎずして、或は蟠り、或は臥し、姿態舞ふが如く踊るが如し。蓋し舞子濱の稱ある所以なり。且つ海邊の白砂清くして白玉を散布せるが如く、頗る漫步散策に適す。夏の納涼、秋の觀月、茲に來り遊ぶもの甚だ多し。播州名勝中眺望に富めるは舞子を以て第一指に屈せらる。

頼山陽

松翠沙明數戸村

每過一醉終成例

粉蝶依稀赤石城

最好舞兒磯上望

鮮鱗上店佐匏尊

不記泥鴻印幾痕

梁川 星巖

香衫爭出踏春晴

●石の寶殿 (播磨)

印南郡阿彌陀村大字生石子なる伊保山の東北麓に在り。生石子は一に大石とも稱す。伊保山の東北麓を龍山と云ふ、茲に一の石殿あり、幅二丈三尺、高さ二丈六尺、宛も社殿を横に倒したるが如き形を示せり。屋根は西に面し、扉は天上に向ふ、其上に土を留めて稚松數本を生ず、之を石の寶殿と稱す、又一名を靜ヶ窟とも云ふ。此石殿を神體として、其前面に拜殿を設く。然して祭る所の神は大己貴命少彥名命の二神にして生石子神社と稱し今縣社に列す。賽する者は寶殿の底に面して拜するなり。石殿の周圍は常に赤土色に濁れる水溜りて一見石殿は池中に浮べるが如し。傳ふる所に據れば此石殿は神代の遺物にして大己貴、少彥名の二神一夜の中に石の御殿を造らんとしたるに

工半ばにして、夜既に明けたれば、其儘に打捨て置けるものなりと云ふ、所謂是れ傳説に過ぎざるも、想ふに上代の遺物たるは疑ふべからず。又社殿は欽明天皇十三年の創建に保り白雉年間千石の社領を有し攝社末社等壯麗を極めたりしも後世兵燹に罹り大に奮觀を失ふに至れりとぞ。

當國風土記は石の寶殿に就て左の如く記せり。

池之原南、有作石、形如屋、長二丈、廣一丈五尺、高亦如之、石號大石、傳云、聖德王御世、弓削大連所造之石也。以てその築造の久しきを知るに足るべし蓋し播州名所中の大奇觀なり。

●曾根天神社 (播磨)

播州印南郡曾根村に在り。縣社にして天穗日命及び昔原道真を祀る。當村の産土神なり、傳ふる所に據れば、道真左遷の際此地を過ぎて一株の松を手栽したるが後人追記して茲に神祠を建てたるもの即ち曾根天神なりとす。後其子敦美丸茲所に閉居して、子孫此地に住居して代々社司となれり。社殿は天正年間の兵燹に罹りたるが其後豊臣秀吉、寺澤越中守に命じて再建せしめたり。

●曾根の松 (播磨)

曾根天神社に存す。即ち道真手植の松にして、幹の周圍一丈七尺、高一丈許にして偃蓋す、丑寅へ十八間延び、戌亥へ十間互り、形狀甚だ奇異なる名松なりしが惜むべし近年枯朽したり。然かも村民之を惜み、今尙枯朽の儘拜殿に保存せり現在の曾根の松は天明元年古松の株より發生せる實生の松にて、年を経る既に百二十餘年、高さ三丈、東西十七間、南北二十間に廣がり居れり。

播州曾根偃松、云是曾公左遷時、所手

栽、實八百年物也、癸酉春適觀之、因賦、
秋山 玉山

昔相祠堂古 孤松久已貞 蟠根餘手澤
偃蓋感精誠 地屬印南郡 年傳昌泰名
後凋憐黛色 遺愛慕風聲 鶴影棲仍密
龍鱗老更生 液堪仙鼎鍊 材使帝家成
應等甘棠思 何論嘉樹榮 悠悠八百歲
不朽托文明

●別府手枕松 (播磨)

尾上の東方三十町、別府村大字別府に一村社あり、住吉神社と云ふ、社地海濱に接し、鬱然たる松林、神社を圍繞す、境内の右方地に蟠れる古松あり、手枕の松と云ふ。幹の大き二抱へに餘り枝葉の延長東西四十八間餘、南北十三間餘、而して其一枝は地上に横はり、宛も人の腋を枕として眠れるに似たり、蓋し其名ある所以なり。

富小路貞直

風吹けば木蔭も涙の荒磯に
誰かいをねし手枕の松

別府は高砂、曾根以外、松の名所として遜色なし。左に柳北紀行の一節を抄す。高砂曾根は古より人の云ふ松の名所に、其木高く緑深きさま、云ふ迄も無けれど、年月の移行くに付けて、今見る所にては此二本よりも別府の松の遙に立勝りて見ゆるに、此浦にて漁人の捕りし章魚を買ひて食ふ其味の美なるにはとく驚きたり。

高砂や歌人もしらの蛸の味

此他、千歳の松も亦播州名松の一として知らる。

因に云ふ、生石明神の後山、西の峯(一名伊保山と稱す)に石舟と稱するものあり、長さ九尺、横四尺、厚さ二尺四五寸、全部一石にて抉り抜きしものなり、是れ太古時に於ける石棺の蓋なるべしとの説あり。

石の寶殿



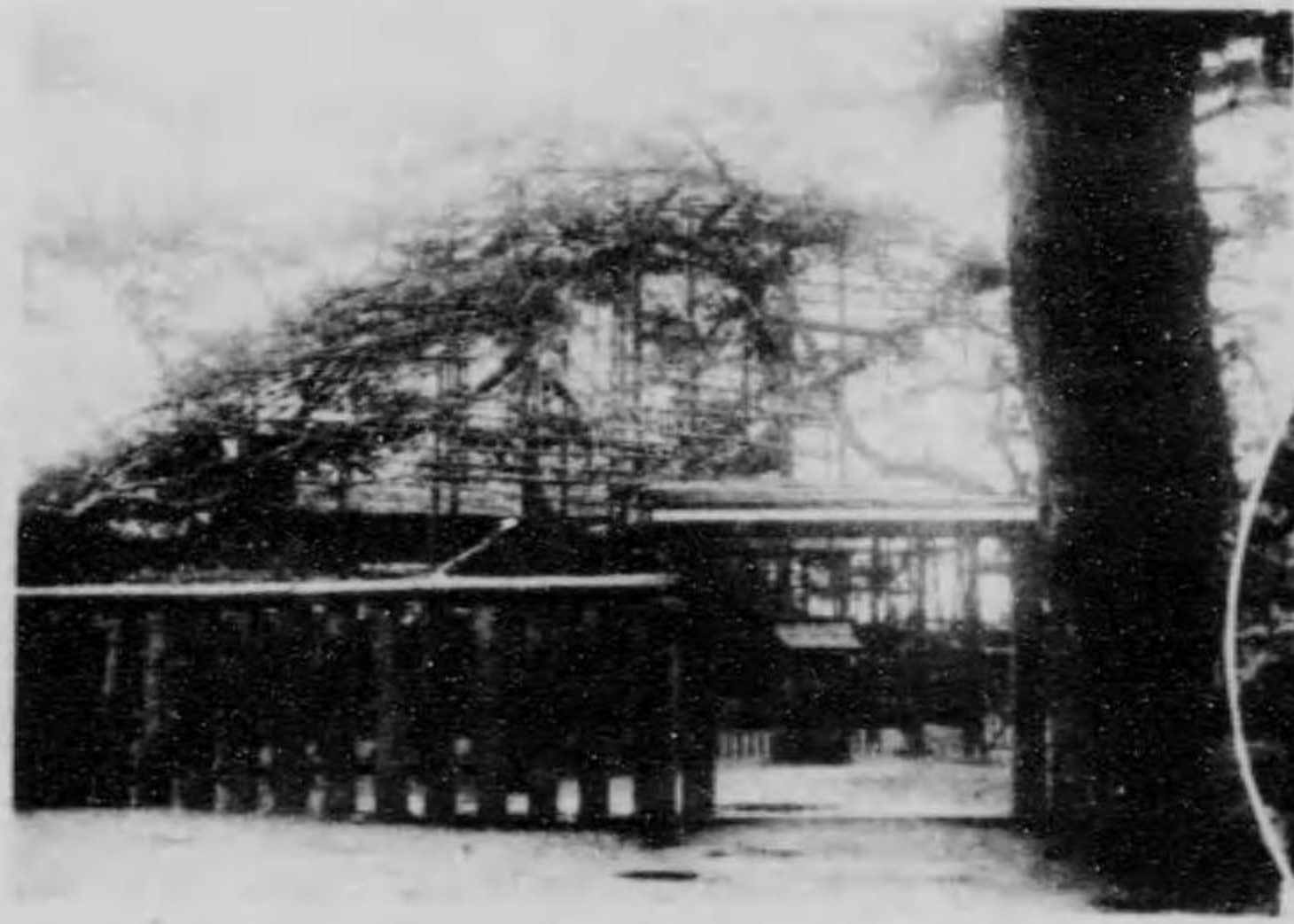
松の嵐干



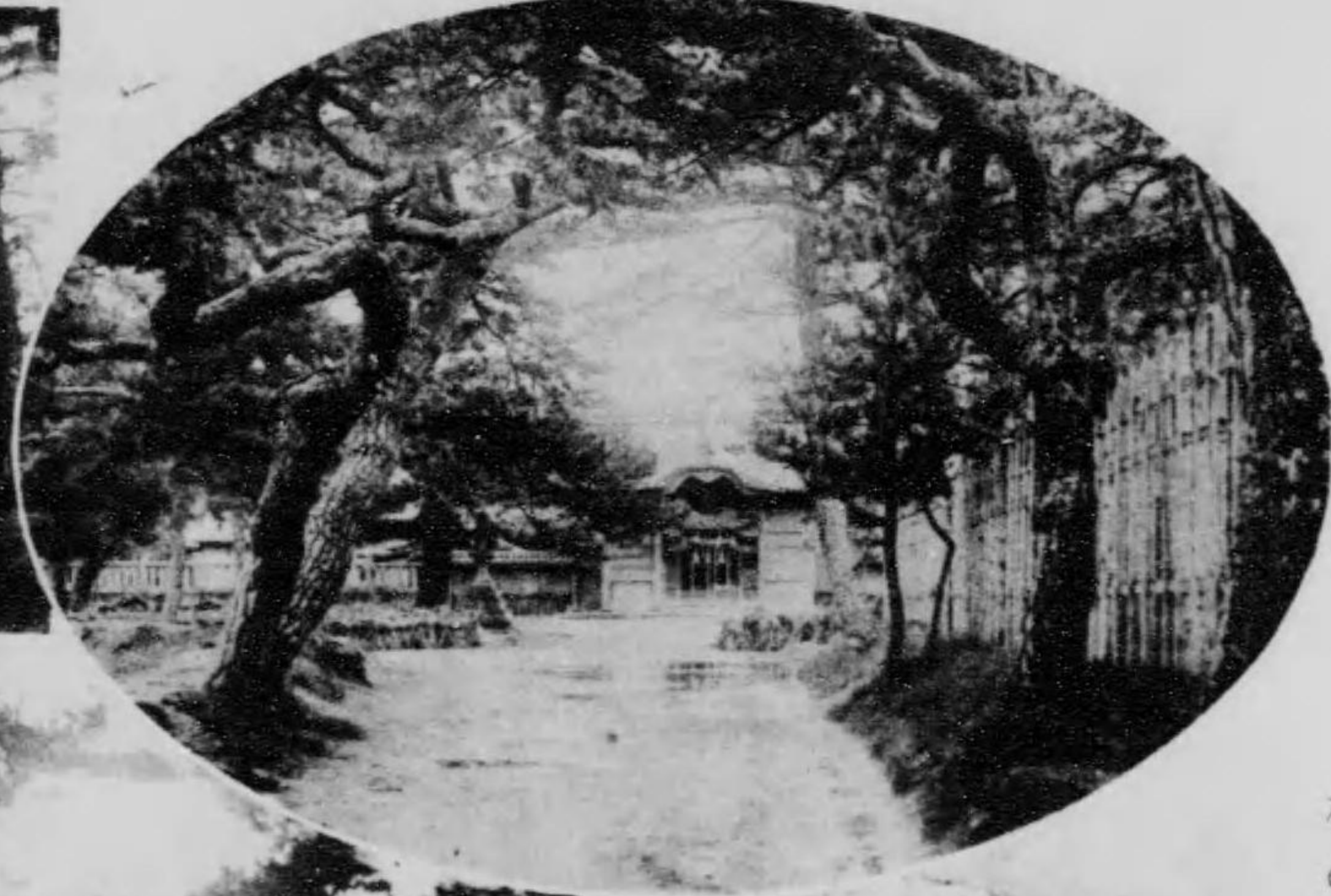
會根天神



別府手枕の松



會根の松



石の寶殿

して拜するなり。石殿の周囲は常に赤土色に濁れる水溜りて一見石殿は池中に浮べるが如し。傳ふる所に據れば此石殿は神代の遺物にして大己貴、少彥名の二神一夜の中に石の御殿を造らんとしたるに

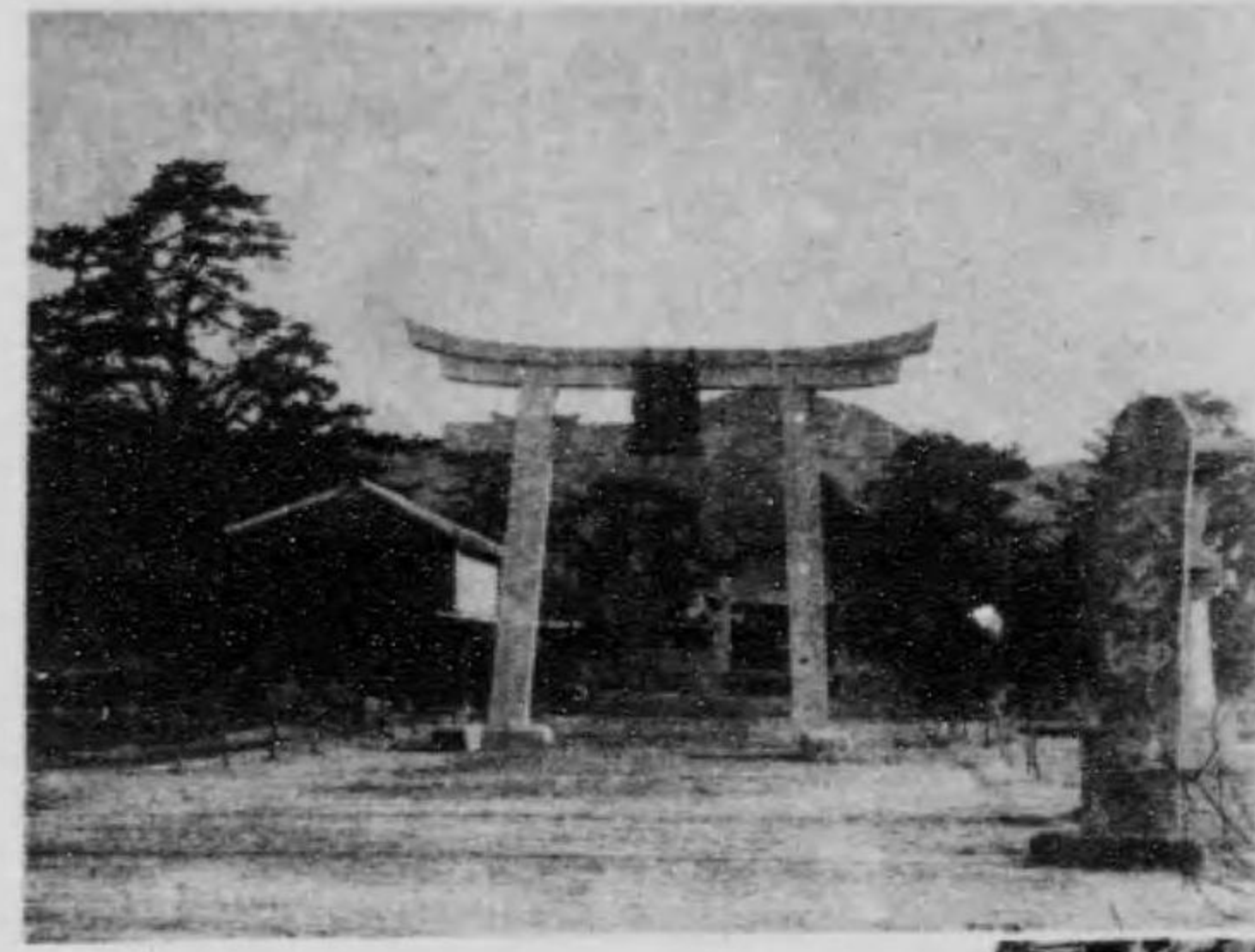
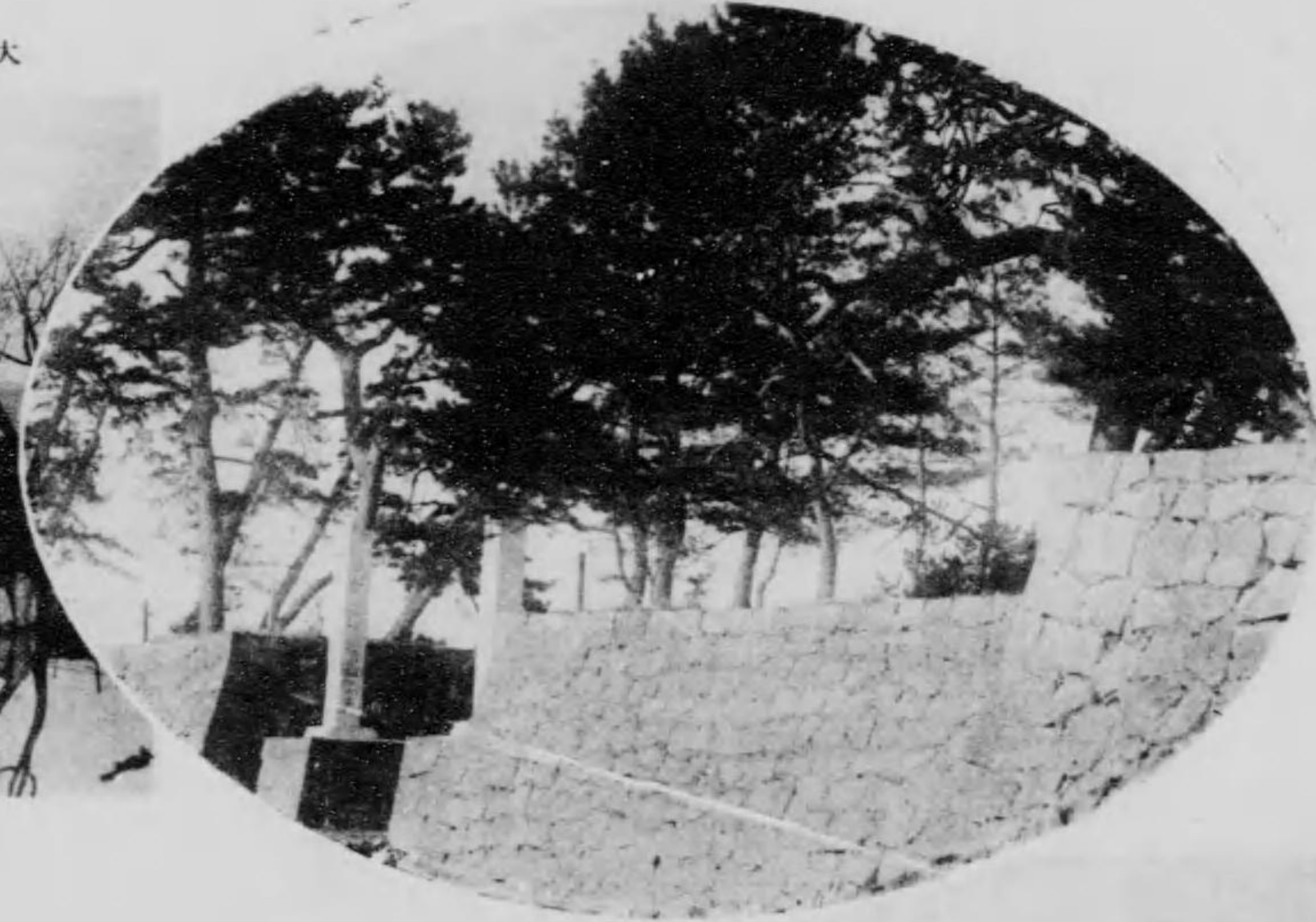
現在の曾根の松は天明元年古松の株より發生せる實生の松にて、年を経る既に百二十餘年、高さ三丈、東西十七間、南北二十間に廣がり居れり。
播州曾根偃松、云是曾公左遷時、所手

名伊保山と稱すに石舟と稱するものあり、長さ九尺、横四尺、厚さ二尺四五寸、全部一石にて抉り抜きしものなり、是れ太古時に於ける石棺の蓋なるべしとの説あり。

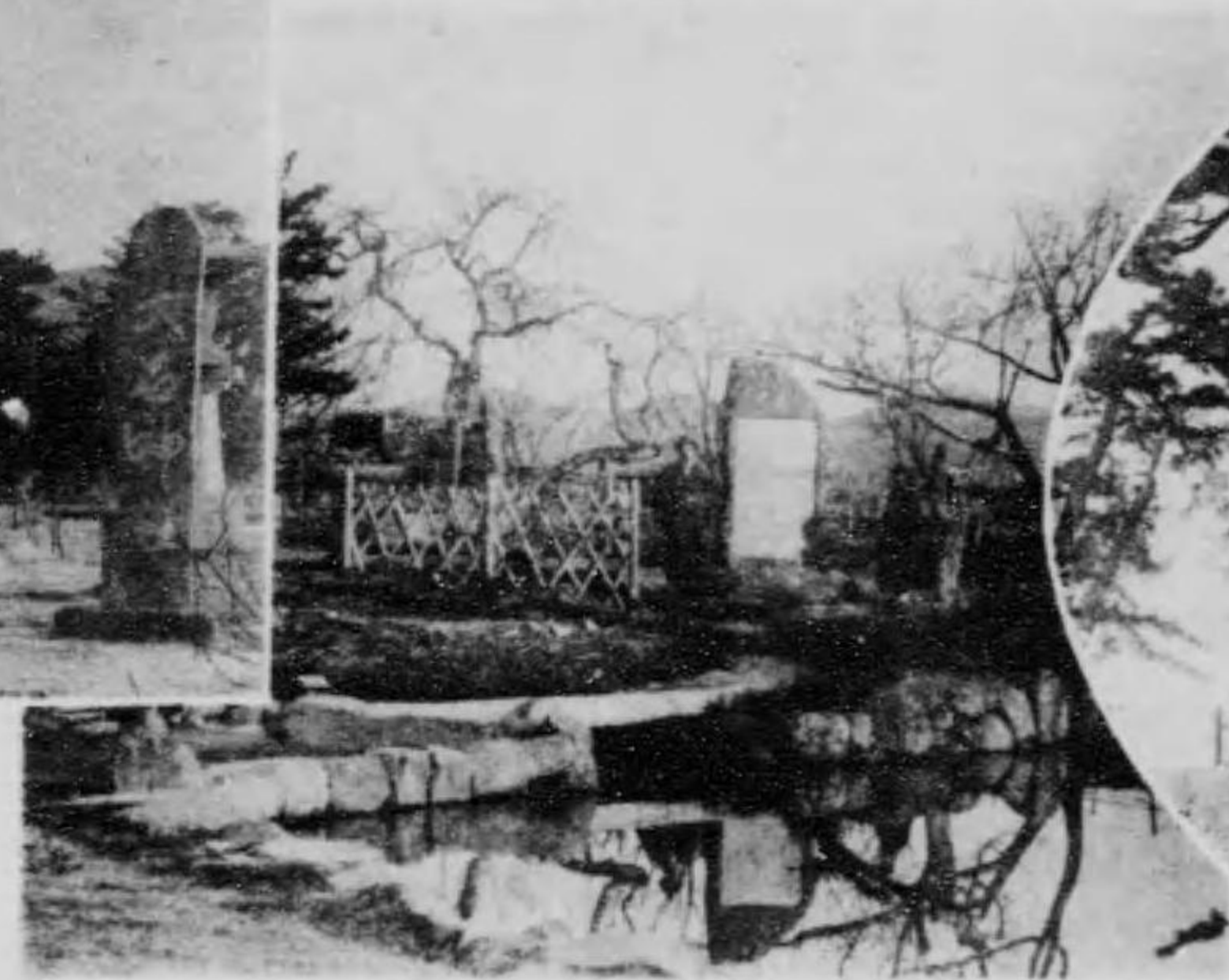
松子瀆

干嵐の松

大石遺愛の樓



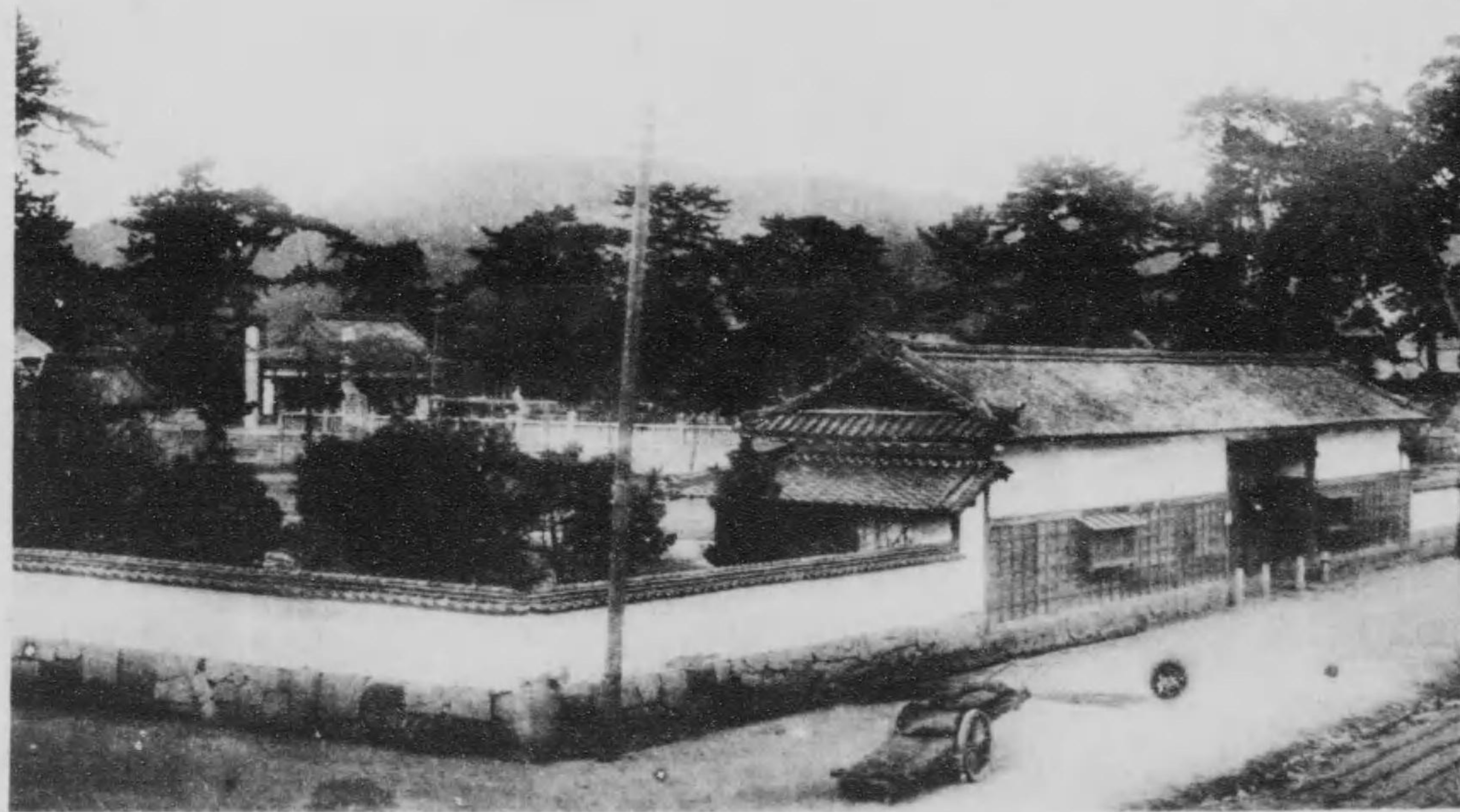
大石神社



赤穂田實景



義士名残の浦



大石良雄舊邸

●赤穂城址 (播磨)

赤穂町市街の南端、字上假屋に在り、該城は素と羽柴秀吉の播磨に封せらるるや、秀吉備前の宇喜多直家をして郡内の

蓋し其遺址を保存せんが爲めなるが如し因に上假屋町に華岳寺なる一刹あり曹洞宗にして山號を壽雲山と云ふ、淺野家累代の菩提所にして長短三代の墓あり、又四十七士の遺物を多く藏す、寛延年間

碁布するありて小豆島に遠近相連る、社殿の礎下海濱を距る三里の處に暗礁あり名けて鷗護島と云ふ、潮水減する時は岩頭水上に顯はれ白鷗來つて岩上に群遊す亦是れ一種の風趣たるを失はず。又東岸



社



●赤穂城址 (播磨)

赤穂町市街の南端、字上假屋に在り、該城は素と羽柴秀吉の播磨に封せらるるや、秀吉備前の宇喜多直家をして郡内の一部を領せしめたり、直家茲に於て一城を此に築く、赤穂城即ち是なり、慶長五年池田輝政姫路の城主たるに及んで郡代を以て此城を守らしめ、次いで淺野内匠頭長矩城主として茲に居れり。元祿年間に至り長矩江戸城中に於て端なく吉良上野介義央を傷けたる罪に座して死を賜ひ同時に城地を擧げて没收せられたり。長矩除封後永井伊賀守、森和泉守等相次いで代り以て明治維新に及びたり。維新後其の天主閣、城櫓等多くは廢毀に歸し、今は唯僅かに四方の壘壁と老松とを存するを見るのみ。

元祿十四年長矩の死を賜ふて城地を沒收せらるゝや、遺臣大石内藏助良雄は深く之れを憤慨し同志四十餘人を糾合し誓盟結束、隱忍する事年餘遂に翌年十二月を以て長矩の仇なる吉良義央を襲殺して復讐を遂げ同志悉く共に自首して刑に就きたり、天下其の行爲を賞し、武士道の精華として今尙其の忠義を嘖々しつゝあるは人の知る所の如し。

●大石良雄邸址 (赤穂)

赤穂城内に存す、是れ内藏助良雄の居住したる邸宅なりと傳ふ。その他良雄に關係を有せる遺址あり、遠國より態々來りて茲を訪ひ漫ろに元祿當年の故事を遐想して感慨を禁する能はざるもの少からず。

●大石神社 (赤穂)

是れ赤穂城内なる大石良雄の邸址に建設されたるものなり、即ち是れ良雄の靈を祀れるものにして、神社建設の意は

蓋し其遺址を保存せんが爲めなるが如し

因に上假屋町に華岳寺なる一刹あり曹洞宗にして山號を嘉雲山と云ふ、淺野家累代の菩提所にして長矩三代の墓あり、又四十七士の遺物を多く藏す、寛延年間郡人良雄等の遺烈を追慕し其の忠義碑を墓道に建設せり稱して忠義塚と云ふ。碑文は藤江忠廉の撰する所なり。

同寺西部の義士堂には四十七士の木像を置く、觀覽料を拂へば寺僧案内して堂に誘ひ且つ其木像遺物に就て説明す、宛かも高輪泉岳寺と同じ、此寺に詣づる者土産として同地より發する義士眞跡の石摺を購ひ行くもの多し。

●大石良雄遺愛の櫻 (赤穂)

赤穂城址内なる大石良雄邸址に一小園池存し、池邊に一株の老櫻栽えられたり傳へ云ふ、是れ良雄が遺愛の櫻樹なりと、星霜茲に二百餘年、尙且つ風雨の難に耐へて依然舊時の美觀を示す、所謂これ花は櫻木なるものが武士道の精華たる良雄に對して寔に好個の記念と謂ふべし。

●大石良雄名残の浦 (赤穂)

赤穂郡新濱村の一岬角を御崎と云ふ、此地元祿年間、淺野氏の遺臣大石良雄が赤穂引上に際して同志諸士と共に母國に別るゝ名残を惜めるの地なりと云ふ、此地は那波停車場を距る四里、風光甚だ佳絶にして四時の遊客絶ゆる事なく殊に夏季は海水浴場の設備ありて避暑には好個の適地たり。御崎に一神社あり、三崎明神と云ふ、式内にして伊和津比賣神を祀る、社殿は海に斗出せる岬阜の上に鎮座し磯道海岸に通じ境内一千六十坪あり、松樹茂りて翠滴らんとする間、本社、幣殿、拜殿及び末社等隱見し、西の方新濱より播備の海濱を望み、東は阪越、室津の諸港を眺め、東南三里の海上には家島群島の

碁布するありて小豆島に遠近相連る、社殿の磴下海濱を距る三里の處に暗礁あり名けて鷗護島と云ふ、潮水減する時は岩頭水上に顯はれ白鷗來つて岩上に群遊す亦是れ一種の風趣たるを失はず。又東岸阪越の港口に面して巨岩あり八町岩と號く此岩より海岸までの間、浪靜なる所を海水浴場に充てられたり、夏季浴客來つて簇集す、此邊概して風光明媚にして避暑の好適地たり。

梁田 蛻巖

雲々含雨合 夕氣煖如春 鳥下狂花塙 僧歸倚竹隣 客帆依島嶼 魚市枕江濱 吟杖過橋憩 無風掠角巾

●赤穂の塩田 (赤穂)

古來赤穂鹽の名を以て有名なる製鹽は赤穂郡の海濱に依て產出するもの多し。由來播州には赤穂、大鹽、八家等の入濱ありて鹽田實に八百町と稱せらる。一町一千石、一戸一町三反を大法とすと云ふ。就中赤穂は鹽業の祖と稱せられ、十州鹽田の俗諺に赤穂流、齊田流、三田尻流の三製法ありて、赤穂を最舊とせり、近來赤穂の釜屋は、鐵釜石釜の二法并び行はれ、其の鐵釜屋には全く苦汁を混入せず、眞鹽を採らしむるものありと云ふ。海岸新濱の西方は低濱にして、附近所在の小嶼の間を経て海に入る千種川の河口東側に製鹽場は設けられたり。一書に記す所に依れば、坂越灣より海岸は南西に向ひ一海里四分の三にして新濱崎に至る、此崎の西方は低濱にして、千種川あり、數小嶼の間を経て海に入る、該河口東側に製鹽場あり、其上流一里に赤穂城あり、海方より望むに最も顯著なり、千種川の前面に取上げ島あり、小嶼にして樹木あり、岩石四周すと云ふ。

播磨連海盡名區 港口新潮花落初 戸々筠籃紅潑潮 茜裙爭賣女郎魚

●書寫山 (播磨)

飾西郡曾左村大字書寫に在りて、國道の北方一里餘の所なり即ち姫路市を距る西北約二里、山麓書寫村より登ること貳十五丁にして寺刹あり圓教寺と云ふ。山號を書寫山と稱す、天台宗にして康保三年性空上人の開基に係り花山天皇の勅願所たり、當時天皇の當寺に行幸あること前後三回にして鎮護國家の道場と爲し給へり、承安二年には後白河法皇、元弘三年には後醍醐天皇の臨幸ありて三堂を建立せしめらる、境内の坪數六萬千七百七十四坪、阪路六ヶ所ありて、書寫村字東阪本より登るを表阪又は東阪と云ひ、西阪本より登るを西阪と云ふ、其他に置鹽阪、総尾阪、六角阪、刀出阪の四阪路あり、先づ表阪より躋れば元四辻に四辻圍垣あり是れ後醍醐天皇御車寄の舊址なり、是より北の方一町に王子社あり、其東北に如意輪寺あり、西國三十三所女人巡拜の札所にして一名女人堂と云ふ、更に定願寺、下馬下乘札、休堂、退凡碑石の趾(此邊を砥石阪と稱す)を過ぐれば砥石阪の盡頭に總門あり、左右二王の像を置けり、茲を過ぐれば道稍々平夷となり東岳社、大日如來石體、護法石を経て進めば、溪流一橋を架す、號けて浴室橋と云ふ、是より一の石階を登れば鬱然たる老杉天を蔽ひ巨堂崖に沿ふて細然たるを見る、是れ即ち圓教寺本堂なりとす、東西九間南北七間本尊は生木六臂の如意輪觀音なり、石階を下り、右折して奥院道に向へば七間に六間の講堂、四間に五間の食堂、五間に五間の常行堂あり、是れ即ち前述せる元弘年間後醍醐帝の建立せしめられたる三堂なり。而して此の講堂には釋迦文殊普賢の三像食堂には釋迦、文殊、常行堂には阿彌陀の像を安置す、常行堂に沿ふて中門及び車寄せあり、其傍に一泉あり

雲水の井と稱す、是れ俗に武藏坊辨慶年少當時當山に在りて勉學の際硯に注ぎたる水と傳へ、一名辨慶の井と云ふ。奥の院は東西六間南北五間にして本尊は性空上人悉地菩薩なり。此他に眞言堂、乙護法、若護法、不動堂、和泉式部石塔、法華堂、根本藥師堂、文殊堂等境内各所に散在せり、又天吼岩甲石六本杉、如意瀑布等名所尠からずあり、山中は老樹巨木鬱蒼として天を蔽ひ、夏季は避暑を兼て登山參詣するもの多く、賽人常に踵を接し播州隨一の巨刹なり。

●姫路城 (播磨)

姫路市の北方に位す、東西約十町、南北約八町、之を城地として外廓之れを圍み中央に本丸あり、又壕を回らす、中央に五層の天守閣樹然として半空に聳ゆ、即ち是れ古への姫路城なり。本丸以外の地は今陸軍の練兵場となり、舊城内は陸軍の兵營となれり。

姫路城は貞和年間赤松貞範の始めて築く所にして赤松氏累世之を守りたるが嘉吉年間に至つて赤松氏の亡ぶるや山名宗全來りて當城を領す、既にして赤松氏再び起りて山名を追ひ以て當國を復し、小寺孝隆をして之に居らしむ、天正年中羽柴秀吉播州三木の別所を亡ぼして後此城に移り、新に三層の天守閣を設けたり、世之れを太閤丸と云ふ、慶長五年池田輝政此地を領するに及び大に工を起し運河を開通し更に五層閣を新築す、現存するものは是なり。其後徳川氏天下を統一するに至り酒井氏の領に歸し以て明治に至りたるが維新後廢城となる、天守閣は塗るに白垩を以てしたれば遠望白鷺の如く名けて白鷺城と云ふ、若夫れ一とたび閣上に登臨せんか眼界些の遮るものなく下瞰すれば寸馬豆人眼爲めに眩するの思あり。

●班鳩寺 (播磨)

揖東郡班鳩村大字雲の西端、龍野街道の傍に在り、素と法相宗にして大和の法隆寺に屬したるが、弘治年間再興の後天台宗に改む、寺傳に依れば推古天皇の十四年聖德太子の開創に係り歴朝の天皇御尊敬淺からずと云ふ。天文十年兵火に罹りて殿堂悉く焼亡せしを樂々山圓勝寺の住僧昌仙僧都宮に請ふて諸堂を再建す、故に昌仙僧都を以て中興開山と爲す、境内二王門を入れば右に彌勒堂、三層塔、鐘樓あり、左に太子堂あり弘治二年の再建にして聖德太子自作植髮の像を安置す正面に講堂ありて鳥佛開作の釋迦、藥師觀音の三像を置く、其北に鎮守堂、幣殿拜所あり。講堂の背後には寶勝院、双樹院、禪林院、佛餉院等の末院あり。每歲二月廿二日法會を執行す。

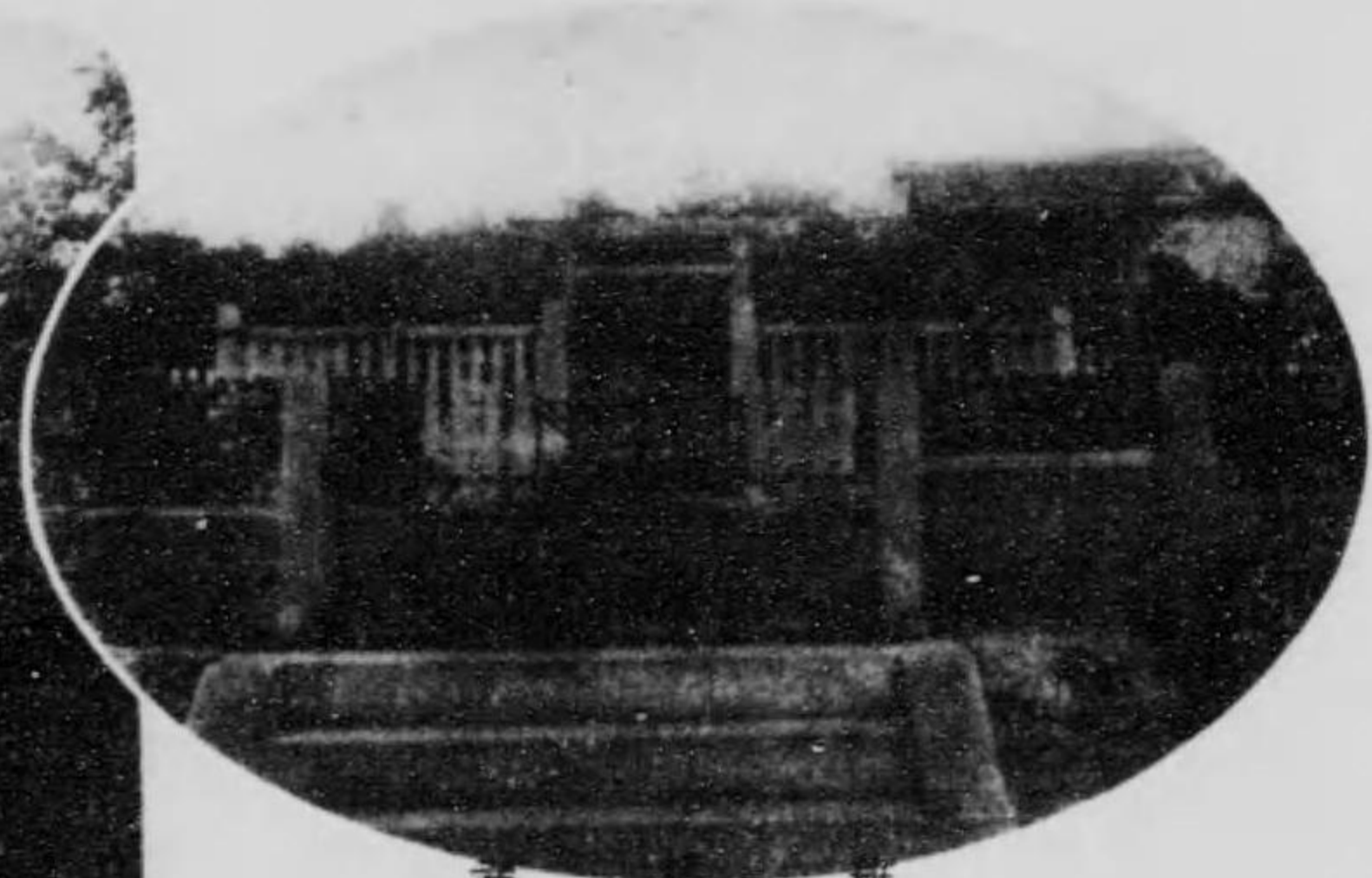
●觀濤處 (播磨)

石寶殿の南方小山に在り、天然の巨巖にして石面に觀濤處の三大字を刻す、姫路の儒臣永峰文峰曾て此に遊び眺望佳絶なるを賞し自ら此三大字を撰して彫刻せしめたるものなりと云ふ、丘上に登れば播磨灘を瞰望し遠く家島群島を觀、寔に觀濤處の名に背かず、亦播州の一勝地なり。

●大野山御陵 (播磨)

加古郡水丘村大字大野なる日岡神社の丘陵上に在り。是れ景行天皇皇后稻日太姫の御陵墓なりと云ふ。陵形は前圓後方の制にして天然の丘陵に就て築成さる。播磨風土記に左の如く記せり。
故號酒墓郡、昔大帶日子天皇妃、印南別嬢、薨於宮田、即作墓日岡、舉其尸於川中、求南不得、但得匣與稻、即以
此二物、葬於其墓故云。





班鳩寺



姫路城



觀瀆所

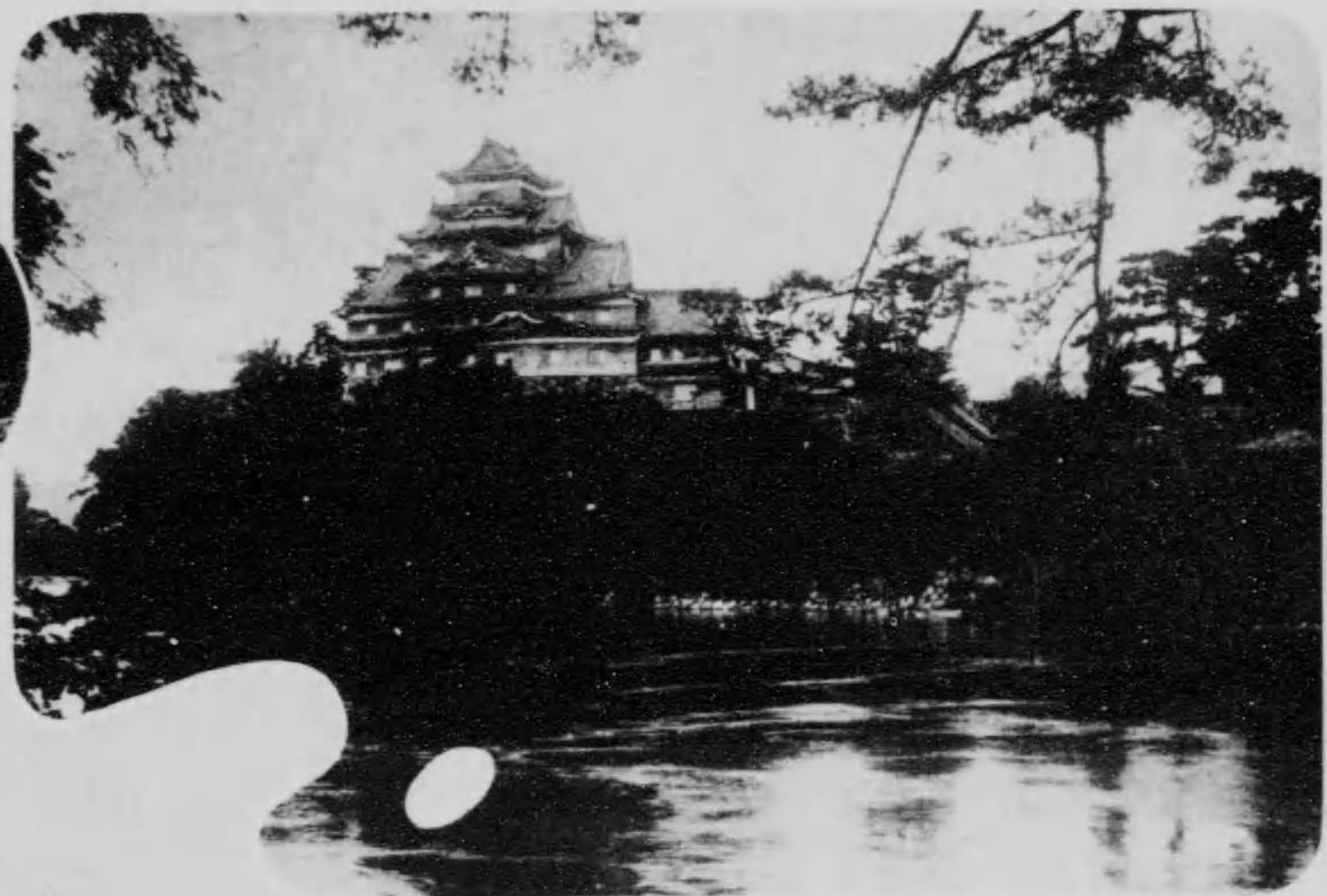


寄寫山(二)

に五間の常行堂あり、是れ即ち前述せる元弘年間後醍醐帝の建立せしめられたる三堂なり。而して此の講堂には釋迦文殊普賢の三像食堂には釋迦、文殊、常行堂には阿彌陀の像を安置す、常行堂に沿ふて中門及び車寄せあり、其傍に一泉あり

たるが維新後廢城となる、天守閣は塗るに白垩を以てしたれば遠望白鷺の如く名けて白鷺城と云ふ、若夫れ一とたび閣上に登臨せんか眼界些の遮るものなく下瞰すれば寸馬豆人眼爲めに眩するの思あり。

方の制にして天然の丘陵に就て築成さる。播磨風土記に左の如く記せり。故號酒墓都、昔大帶日子天皇妃、印南別嬢、薨於宮田、即作墓日岡、舉其戸於川中、求南不得、但得匣與酒、即以此二物、葬於其墓故云。



後樂園太鼓橋



後樂園唯心堂



後樂園中之島



●岡山城(備前)

岡山市の東部に位す。一名烏城と稱す

其天主閣并に城樓の外壁は總て之を焼板にて蔽ひたれば其色黒きよりの名なるか

酒折宮是也、續て西の方に石山聳へ、又

西北の尾崎の嶺を天満山と名づく。斯

く岡山石山天満山の三嶺東西に聳へ、山

間の一僻地なりしが、宇喜多直家に至り

始めて今日同山の基を成せり。

り其南方の一島に橋を架し島上一茶亭を

設く、之を島の茶屋と云ふ、亭中を二席

に分ち繞らすに稚松を以てし奇岩怪石散

布して風趣を補ふ、水中に石標を建て、

表面上道郡と記し、裏面境洋と刻す、隣



●岡山城 (備前)

岡山市の東部に位す。一名鳥城と稱す。其天主閣并に城樓の外壁は總て之を焼板にて蔽ひたれば其色黒きよりの名なるか將た姫路の白鷺城に對して鳥と命じたるか未だ其來由を知らず、本城は天文、永祿の交、金光備前守宗高茲に居城す、當時石山城と呼びたり。天正の初め宇喜多直家、金光を殺して此地を領し大に城郭を修造す、次で備前、備中美作の三國を領有したるが、豊臣秀吉の西征するに方りて直家迎へ降り、其子秀家を秀吉に托す、秀吉茲に於て秀家を養ひ備前美作四十七萬石を與ふ。斯て秀家は三位中納言に敘任し、更に城を修し旭川の水を引きて城下を疏通せしめ之に三大橋を架したり。慶長五年關ヶ原の役秀家石田に與みして戰敗の結果、薩摩に走り、後八丈島に流謫さるゝや、其封土は徳川氏の收むる所となり、小早川秀秋此地に封せられたるが、秀秋歿後嗣子なきを以て國除せられ、後慶長八年姫路の城主池田輝政備前三十一萬石を加封せらる、依て輝政は將吏を岡山に置きて備前を治む輝政歿後忠繼之を領し次で忠雄を經、其子光仲因州に移封せられ、寛永九年光政(輝政の孫)に至つて岡山に入城し、爾後相傳へて明治維新に及べり。

酒折宮是也、續て西の方に石山聳へ、又西北の尾端の嶺を天満山と名づく。斯く岡山石山天満山の三嶺東西に聳へ、山間の一僻地なりしが、宇喜多直家に至り始めて今日同山の基を成せり。

●後樂園 (岡山)

本園は金澤の兼六公園、水戸の常磐公園と共に日本三公園の一と稱せらる、岡山市の東隅、岡山城の北に位し旭川の清流に臨みて一區を爲す。面積三萬二千五百四十四坪、東西最も長き所百九十七間、南北最も濶き所百十七間。園内旭川の流れを引き、樹石の配置頗る風趣に富む。

其南方の一島に橋を架し島上一茶亭を設く、之を島の茶屋と云ふ、亭中を二席に分ち繞らすに稚松を以てし奇岩怪石散布して風趣を補ふ、水中に石標を建て、表面上道郡と記し、裏面境洋と刻す、隣島又石標を立て、表に御野郡、裏にみのしまの數字を刻す、蓋し此地素と御野、上道の境界點なりしならんか。太鼓橋は島の茶屋に架せる橋にして風趣又觀るべし、池面鏡の如く、白鶴悠々として水に啄む、宛然是れ蓬萊仙島の觀あり。

●唯心堂 (岡山)

本園は貞享三年、藩主池田綱政の創設する所にして、其臣津田永忠工事を監督し、同四年初めて工を起し、數年を経て竣成し、爾後池田歴世の別墅とし屢々修補を加ふる所あり、元祿年間其區域を擴大し樹木を増加し、園内南方に岡阜を設け、雜樹鬱蒼として宛然深山に入るの趣きあらしむるに至れり、本園は初め御茶屋敷と稱したりしが、後、單に後園と呼び明治四年今の名の後樂園に改め、四民遊覽の地となせり。蓋し是れ先憂後樂の意に採りしものならんか。本園は明治十七年四月縣有に歸し縣廳附屬地となりたり。

後樂園の中央、崛起せる一丘陵あり、之を唯心山と云ふ、樹木鬱然として茂生し、奇石其間に散點し、三條の小徑を通ず、山巔に上りて展望せんか園裡の勝景一眺の中に收め得べし。傍に一亭あり、即ち是れ唯心堂にして、堂上最も眺望に富む。

後樂園中の名勝二三にして止まらず、就中最も風景に富めるものは中の島なりとす、釣殿は即ち茲にあり。樹木の配置水石の按排、天然の趣を奪ひ、技巧の極を盡し、恍惚として其風趣の優麗に酔ふの感あらしむ。

其他鶴鳴館、觀騎亭、藤池軒、流店、利休堂、延養亭、花葉池、茂松庵、望湖閣、花交の瀧、新亭等園内の名勝枚舉に遑あらず、今左に後樂園誌の一節を抄す。

●中の島釣殿 (岡山)

我東備之爲州、二川洋々、而南流入海、風光明媚、大島小嶼、星羅棋布、而海鹽多產焉、魚鼈多生焉、山嶽對峙于東西、蜿蜒爲蛇勢、蟠踞如態度、有美竹有良材、巨巖怪石亦不乏、二川之水、分流瀆田、田沃而土饒、五穀登六畜蕃焉、春花之晨秋月之夕、夏陰冬雪、可

以娛可以詠、氣候溫暖而人稠物足、名曰天造之一大豐樂園、亦可矣、東備山川之秀、氣候之佳、風土之富、移之於一處、人工奪天巧、殆使人疑在于真山活水之間者、後樂之園是也、東備藩主池田曹源公所經始、公承芳烈公之後、國富民豊、優々趙遙于此園、傳及二百年之久、子孫不失其樂、往歲聖駕西巡、駐蹕於此三日、最怡天顏云。

●島の茶屋、太鼓橋 (岡山)

園内の唯心山を北に下れば、其前面に一池あり、東西五十間、南北三十五間、園内第一の大池にして、池中に小島嶼あり

其前面上に唯心山を北に下れば、其前面に一池あり、東西五十間、南北三十五間、園内第一の大池にして、池中に小島嶼あり

明治維新後、廢城となり、僅に天主閣を存す、城内に歩兵第十七師團司令部を始め第三十三旅團司令部、歩兵第五十四聯隊、騎、兵第二十一聯隊、野砲兵第二十三聯隊、山砲兵第二大隊、工兵第十七大隊、輜重第十七大隊を置きたり。

岡山城下書懷 頼山陽

牽裾叩馬姓名馨、肉食誰傳舊典刑、

奕葉東風胡蝶夢、山河如此附螟蛉、

因に曰ふ、吉備前觀に據れば今の岡山は急山にして南面の麓に小祠あり、今の

園内第一の大池にして、池中に小島嶼あり

●藤戸の渡 (備前)

昔時は兒島灣の西方水島灘に通じたる水道なりしも後世埋没して、今は田圃に化し藤戸村と稱す、然かも田圃の間一條の溝流ありて僅に當年の俣を偲ぶに足る此地源平交戦の昔、平行盛兒島に據り源範頼茲に來りて攻んとせしが海を隔て相對し渡舟なくして攻むるを得ず、此時佐々木盛綱潛かに土民を語らひ、其指示に依りて淺所を知り、先陣して茲を騎渡し平氏を撃破して屋島に走らしめ、後大に頼朝に賞せられ小島一郡を賜はりたり。平家物語に曰く、「佐々木盛綱壽永三年九月廿五日夜に入て、浦の男を一人匿ひ、直垂、小袖、大口、白鞘巻などを取せ賺しおほせて此海に馬にて渡りぬべき處やあると聞きければ此男の案内は能く存じ候譬へば月の瀬のやうなる處候が月の頭は東に候月の末は西に候件の瀬のあはひ海而十町も候はん是れ御馬などにて容易に渡らせ給ふべしと申しければ佐々木いざさらば彼の男と二人紛れ出で裸體になりて件の川の瀬のやうなる處を渡りて見るに實にいと深うは無りけり膝腰の立つ處もあり鬢の濡るゝ處もあり深き處を泳ぎて淺き所に泳ぎ着ぬ男申すは是より南は北より遙に淺く候ふ敵兵皆揃へて參らせ候ふ所へ裸體にては如何にもかなひ候まじ唯是より歸らせ給へと言ひければ佐々木實にもと歸りける、下郎はどこもなき者にて又人にも語はれて案内もや敷へすらん我ばかりにて知らめとて彼の男を殺し首かき切りて捨てにける云々

茶山

六百年前奮戦營 先登猶認艸菴名
春潮一脈通田圃 野菜花中海舶行
因に云ふ、藤戸渡に後世、先陣菴なるものありしと云ふ

●吉備津神社 (備中)

賀陽郡真金村の南敷町、大字宮内に在り。國幣中社にして吉備津彦命を祀る。三備中第一の古社なり素と吉備津彦神社と稱せしが後世約して吉備津宮と呼べり。謹で吉備津彦命の略傳を案するに垂仁帝の朝百濟の王子溫羅なる者性勇猛にして仁義を守らず侵略を事とし嘗て日本を窺はんと欲し我邦に渡航し備中賀屋郡新山に居を占め城壘を築き貢賦を奪ひ人民を惱す、時人之を稱して鬼城と云ふ。天皇征夷大將軍をして撃しめしも利あらずして歸る、天皇更に吉備津彦命を遣して之を征せしむ、命乃ち吉備の中山(今の宮所)に陣し片岡山に石橋を築きて戦ひ遂に溫羅を平ぐ、矢嘯の宮、血水川、鯉噬の宮等は皆その戦跡地と傳へらる。命は齡二百八十餘歳にて薨じ吉備の中山に葬る仁德帝の御宇勅して一宮大明神の神號を賜ひ、神殿及び末社七十二社を創建せしめらる、爾後屢々社殿を造營したるも其舊容を改めず、建築の壯麗なる備中全國に冠たり。真金村所在の大華表より通ずる一條の賽路には老樹鬱蒼とし林列す之を櫻の馬場と云ふ、馬場の盡くる所より石階を登れば正面に總拜殿と拜殿あり、之に接して本殿あり拜殿の西に長百八十間の長廊を架す回廊に沿ひて二三の末社あり、其の終點に有名なる細谷川の古址あり。又正殿に御釜の御殿あり。

●高松城址 (備中)

岡山市の西方三里賀陽郡高松村にあり城址の南方に所在する堤防は所謂高松城水攻めの遺址にして北方の小丘を八幡山と云ひ其丘上に腰掛松あり、是れ當年秀吉が倚りて三軍を令したる所なりと傳高松城は天正年間毛利氏の屬城として清水長左衛門宗治之を據守したるが同十

年織田信長中國征討の軍を起し。羽柴秀吉其將として大舉來て城を攻む、城將宗治殊死能く防ぎて容易に陥らず、茲に於て秀吉地勢を視察し且つ時季を按じ、五月五日陣を蛙ヶ鼻に移し、山麓に長堤を築き足守川の河流を堰き附近の村落を燒き意を長圍に決し梅雨の候を待て水攻に着手せり。面積百八十八町歩の地、渺茫たる大湖沼と化し刻々水量を増し六月二日に至りては城の浸水せざるもの僅に數尺に過ぎざるに至れり、一方毛利氏の援軍三萬餘至りしも長良川の巨流に支えられ秀吉の軍亦壹萬之に對して兩軍相持して戦はず、爲めに城兵大に失望す、此際毛利氏は信長が近く自ら攻上るを探知し六月三日遂に備中備後美作因幡伯耆の五國を割讓し高松城將清水宗治の一命保全とを條件として和を秀吉に求めしも秀吉は斷然之を拒絕せり、依て宗治は已むなく一死以て城中士卒の生命を助けんが爲に自及し和議始めて成れり。

●吉備眞備祖母の骨

藏器 (備中)

是れ元祿年間備中國小田郡三谷村の一小丘より掘出せるものにして火葬の白骨を盛れる銅製の骨藏器なり、當時其蓋の銘に依りて有名なる右大臣吉備眞備公の父下道國勝の母即ち吉備の祖母の遺骨たるを知り一廟を創建して之を祭り光助靈神と稱し國勝寺の管理に付しなり。國勝寺は蓋し吉備公の父名に因める也。

●彈琴石 (備中)

前記三谷村の下道屋敷の東南に音高山と稱する勝景あり、山上一石を存す、琴引石と稱す、松籟的に起りて石韻あるが如くなるより名くと云ふ。



吉備眞備祖母の藏骨器

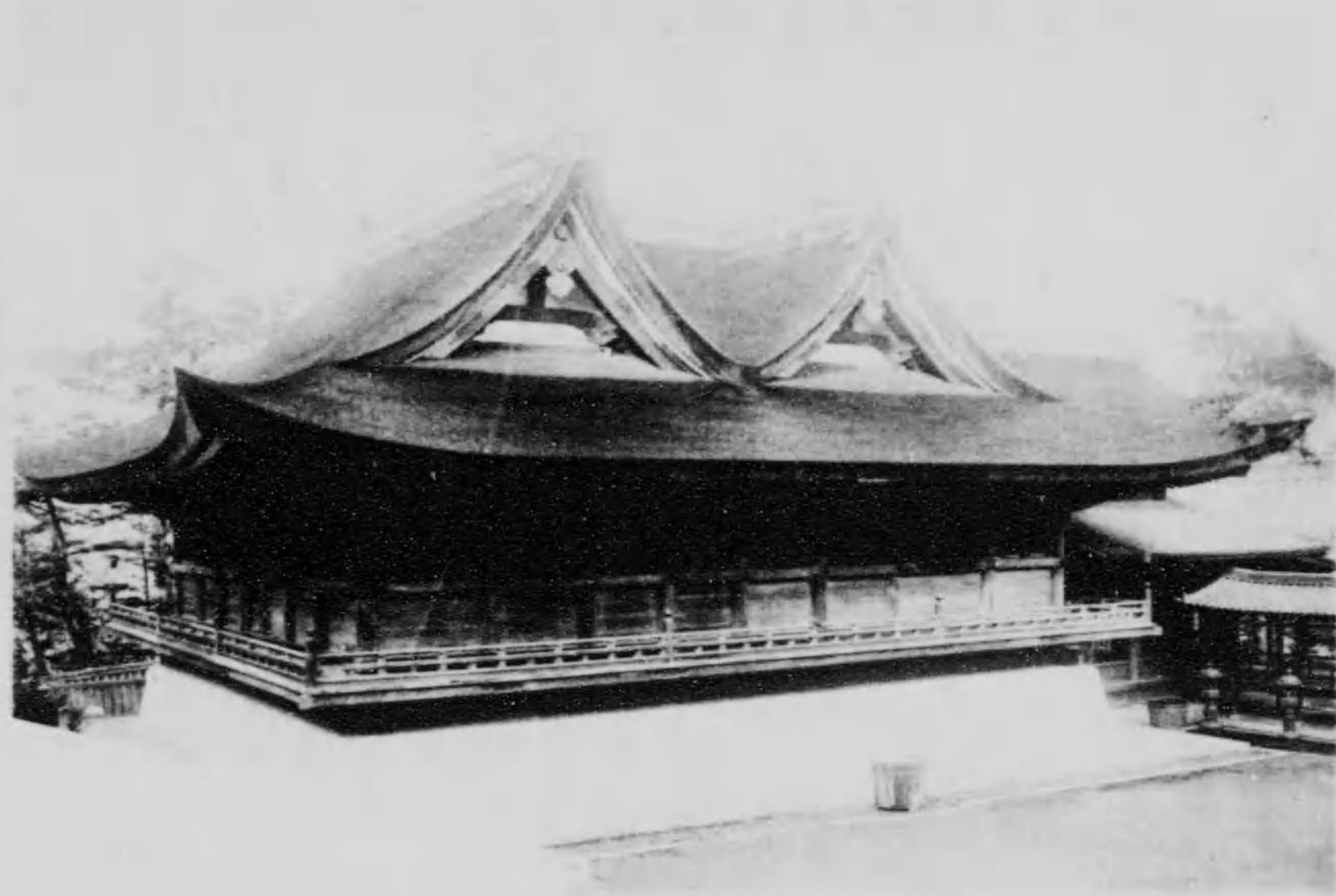
清水宗湊首塚



高松城跡



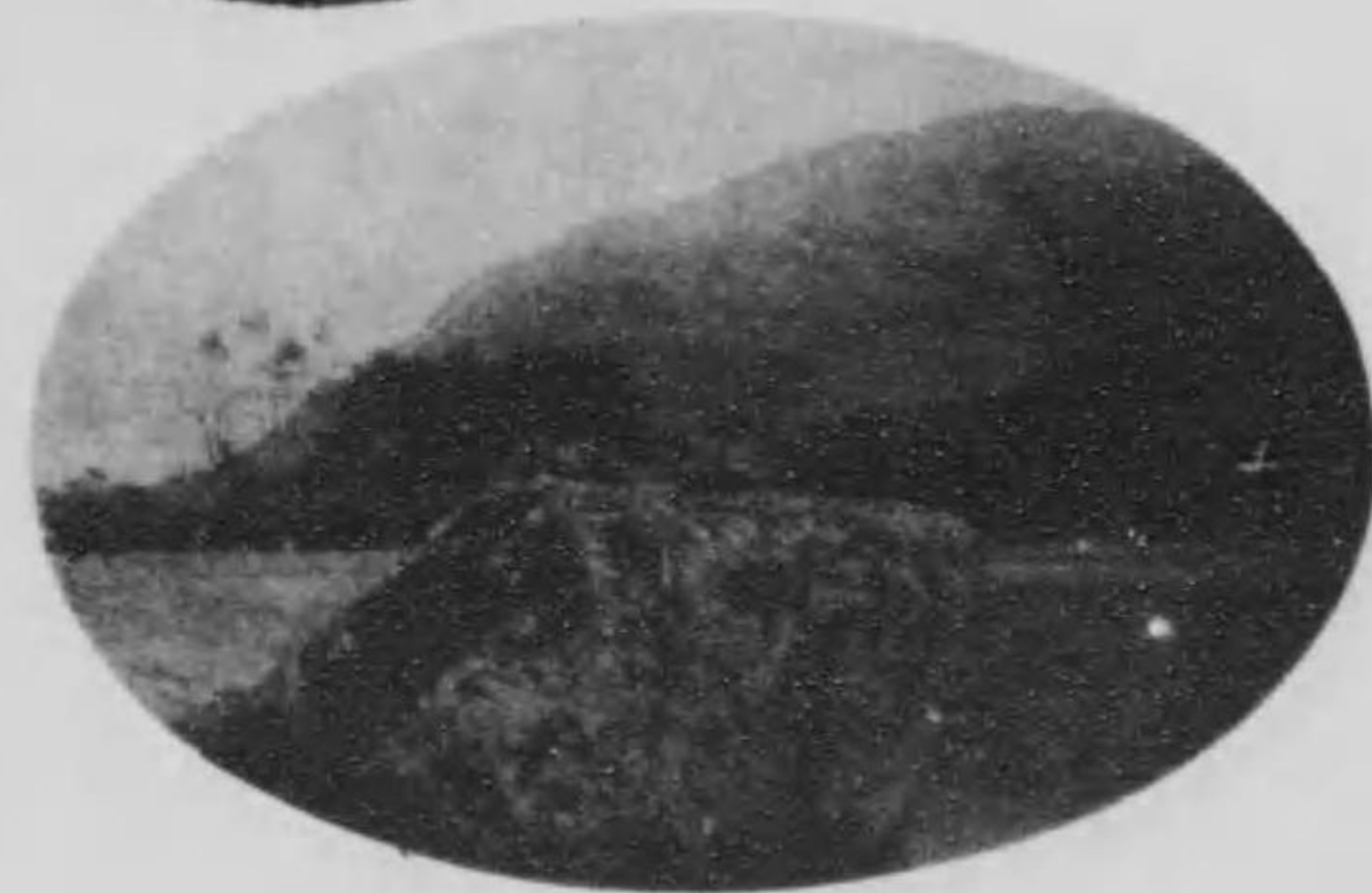
吉備津神社



藤戸の波古戦場



吉備公祖母の蔵骨罏

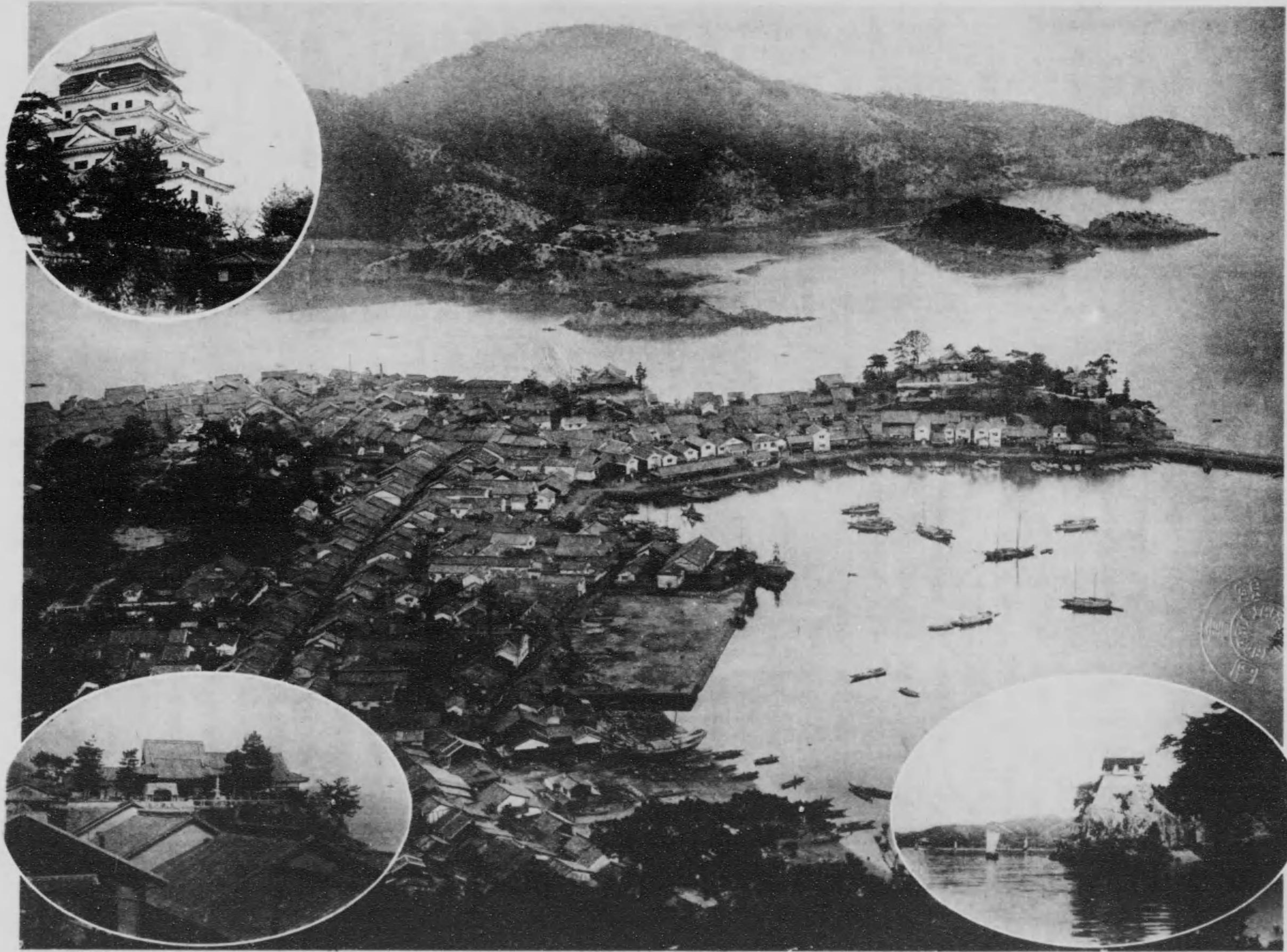


彈琴石

六百年前舊戦營 先登猶認艸菴名
春潮一脈通田漁 野菜花中海船行
因に云ふ、藤戸波に後世、先陣菴なるも
のありしと云ふ

と云ひ其丘上に腰掛松あり、是れ當年秀
吉が倚りて三軍を令したる所なりと傳
高松城は天正年間毛利氏の屬城として
清水長左衛門宗治之を據守したるが同十

と稱する勝景あり、山上一石を存す、琴
引石と稱す、松籟的に起りて石韻あるが
如くなるより名くと云ふ。



阿伏見觀音

福の津

福禪寺

●福山城址 (備後)

福山市街の西部に位置す、當城は元種五年水野日向守勝成の創築する所にして初め神邊より茲に移り傳へて四世に至りて除封され元祿十三年松平忠雅茲に居城

海山の眺望奇絶壯絶を叫ばしむ。

盤臺寺は禪宗にして臨濟派に屬し、曆應元年法燈國師の草創に係る、後ち毛利元就之を再興せり、納津福禪寺の對湖樓と共に國內一對の勝地として知らる。

にして市街常に殷賑を極む。里程は廣島市を距る二十七里、福山町を距る三里、尾の道を距る海路五里といふ。

一一一

廣瀬 旭莊

夜煙埋海浩無涯

柔櫓聲中路稍餘

玉 山

回望岸頭燈一點

知君目送未歸家



●福山城址 (備後)

福山市街の西部に位置す、當城は元祿五年水野日向守勝成の創築する所にして初め神邊より茲に移り傳へて四世に至りて除封され元祿十三年松平忠雅茲に居城し、寶永七年松平氏桑名に移封するや阿部備中守茲に封せられ、累代相繼ぎ十世正桓に至り明治維新の革新に遭遇し遂に廢城となり外廓は田圃と化し僅かに五層の天主閣と二三の城樓を存するのみ、近世城中の本丸を開きて公園と爲せり、本丸の中に阿部神社あり、是れ文化五年間藩主阿部正精の創始に係り、其祖大比古命を祀る、境内頗る幽趣に富む。

水野勝成始め和州郡山より備後神邊城を賜りたるが神邊は其城北面にして宜しからず。且つ屢々攻破られたる處なればとて福山に移りて築城せり、當初勝成は親しく管内を巡見し城地として品治郡の櫻山、沼隈郡の義島、深津郡の常興寺山の三所を選みたるが櫻山は通路難く義島は不許可となりて常興寺山に定め、寺を廢し佛器を胎藏寺に納め其跡に天守を建て寶山といへる地名あるに因みて福山とは改めたるなり。又城樓は伏見の城材を拜領したりとの説あるも其實然らず悉く勝成の創始に係ると云ふ。

●阿伏兔觀口 (備後)

沼隈郡千年村に在り。大字能登原より海中に斗出せる一角にして阿伏兔岬と稱す一に阿武に作る、又觀音岬とも云ふ、全岬岩石より成り、削るが如き斷崖絶壁の岩上に觀音堂あり、海面より高き事實に九十二尺、寺を海漸山盤臺寺と云ふ。水邊より磴道を開き廊を作る、半腹に鐘樓あり、絶頂に堂閣及燈樓あり、下瞰すれば怒濤脚下に咆哮して岩石を嘯み、展望すれば漂波炬渺として四國の遠山を呼ぶ

海山の眺望奇絶壯絶を叫ばしむ。盤臺寺は禪宗にして臨濟派に屬し、曆應元年法燈國師の草創に係る、後ち毛利元就之を再興せり、鞆津福禪寺の對潮樓と共に國內一對の勝地として知らる。

- 大慈高閣海之灣 磴道盤回易夕陰
- 經罷兔崖明月上 帆過牛渚碧流深
- 雲霞總染珊瑚色 爐氣偏燒蒼甸林
- 爲是時々龍女至 諸天仙梵雜潮音

松樓岩肩潮嘴脚 上看標紗之飛閣
定知呼騎有仙人 雲外驚回双白鶴
左に吉田金房が筑紫紀行の一節を抄す
「茲は山の尾崎の海岸の上に堂を建て南方の海上にむけて觀音の像を安置し奉る堂の下に海潮山盤臺禪寺といふ寺あり、其庭より廊下の磴道を登りて堂に詣づるなり。廊の中程に鐘樓あり、傍らに常夜の燈籠あり、此觀音堂より見おろせば數尋の下に青々たる海潮元元に湧かへり目も眩き足の骨も痒きばかり云々。

●鞆の津 (備後)

福山町の南三里半に在り。沼隈半島の東南角に位して其港灣は東に向ひ東西五町、南北六町、深さ二仍餘、瀬戸内海中の一要津たり。市街を鞆町又は鞆津と稱し舊名を渡守といふ。

神功皇后征韓の歸途、糸崎より此地に渡り、鞆を納め給ひしより爾後鞆津と稱するに至れり云ふ。後足利氏に至りて足利直冬西國探題として此地に在住し、戦國の際足利義昭、毛利輝元に倚らんとして此地に來りしを輝元之を公方に居らしむ。福島氏の時其臣大崎玄蕃をして此地に居らしめ城を古城山に築きしが中途にして之を廢せり。此地背後に丘陵を負ひ。前面は仙醉、玉津、皇后の諸島に對し埠頭長く海中に斗出し船舶の碇繫頗る便

にして市街常に殷賑を極む。里程は廣島市を距る二十七里、福山町を距る三里、尾の道を距る海路五里といふ。

- 夜煙埋海浩無涯 柔櫓聲中路稍餘
- 回望岸頭燈一點 知君目送未歸家
- 淡句聽雨宿禪關 背指浮圖亂樹間
- 日落江天霞彩在 一帆秋影過連山

「已刻頃鞆津に至る、備後の福山の殿の領地にて入口に船番所あり。此邊に勝れたる大湊にて人家無慮千軒餘あり、本町といふには商家多くいと賑はしく、鍛冶屋町といふは一丁目内鍛冶のみ居れり又魚の店といふ町もあり、總て此浦には鮮魚殊に多くして、西東の端には漁者のみ住めり、名物とするは世に備前焼といふ陶器、又は保命酒、墨表、七島籠、總等にて、所々に賣家多く見ゆ。云々

●福禪寺 (備後)

鞆津の海岸に在り。眞言宗にして應和元年空也上人の創建に係る、境内の坪數四百四十七坪、本堂(觀音堂)、庚申堂、神邊菩薩堂、地藏堂、大師堂等あり。本堂に安置する、千手觀音の像は海中より出現せるものなりと傳ふ。境内の眺望は夙に風光明輝を以て知らる、其の有名なる對潮樓に入りて一望せんか仙醉島の青螺は近く眼前に横はり、炬波標榜の間、島影散布し、伊豫、讃岐の群峰に連るを見る絶景思はず快哉を叫ばしむ。韓人南園匾額に題して日東第一形勝と云ふ。

- 小邱似鯨背 突然起海濱 古寺枕其上
- 標榜隱松筠 春雨霞外霽 夕陽海面均
- 暝色眇歸翼 沈光閃遊鱗 滅没人馬影
- 空濼道路塵 清澗出孤嶠 片舫入遠津
- 晚風吹鶴思 獨遊易傷神 明日向何所
- 搔頭嘆羸身

●帝釋堂(永明寺)(備後)

比婆郡帝釋村御神山の北麓に在りて、東城、西城兩山谷の間を占む、此地有名なる帝釋堂の所在地なるを以て帝釋村と名く舊名を未渡と云へり、即ち床原の東五里、西城町の南三里半、東城町の西三町許に位す。東西南城町を劃せる小山脈の間に流る、川を帝釋川と號く、寺あり石雲山永明寺と云ふ、眞言宗にして和銅二年の創建に係り行基僧正の作る閻浮檀金の帝釋天を以て本尊とす、天正十九年には寺領數十町歩の寄附あり、福島正則、毛利輝元、小早川隆景等よりも若干の寺領を寄附したりと云ふ。本堂、奥の院、釣鐘門、閻魔堂、六地藏堂、祈禱處別當殿等あり、境地は山巖の半腹に在りて、削るに似たる山壁斷崖屏風の如くに峙ち、堂下の石に磴路を作りて達す、堂前の河流は或は激して奔逸し或は淀みて深潭となり、其間に奇岩怪石は異趣百態人をして漫ろに妙絶快絶を叫ばしむ。當寺は天正年中火災に罹りしを以て舊記悉く焼失し僅に天文中の縁起文と造營奉加帳とを存するのみ。縁起文に依れば帝釋天の正體は杵築明神なりと言へば、其實は大己貴命にて惡神を斬伐し國土を草創し給ひて人民に大功ある神なれば上古より廟祭せしものならんと云ふ。

●鬼の洞門(備後)

帝釋堂と帝釋川に架せる神橋との中間なる路邊に在り。石門にして一に唐門と稱す、山峰の下に在り、洞門の高さは二丈四尺、幅二丈深き二丈四尺、巨石累上して門上更に門を架したる如く、山雲其間に隠見す。岩石の色は多く淡白にして巖下の路より仰ぎ見れば巍然として城壁の如し。此洞門を過ぎて宇山に通ずる山徑あり。

●養の河原(備後)

帝釋堂の近傍なる山足に一洞穴あり、俗に帝釋の岩穴と稱す、西向きの横竇にして洞口の洞さ一丈六尺、高さ七尺に達する一犬巖窟にして、洞内は石乳垂下すること繁く、淺水潺々として流出す、里人之を呼んで養の河原と云ふ。此の水流出して、洞外の川に入る、而して其の川水高き時は洞内に入る、未だ何人も此洞の深量を窮めたるものなしとぞ。

●神橋(備後)

永明寺帝釋堂の北方一里餘、帝釋川の上流に在り。橋は二個にして一を雄橋と云ひ水面より高さこと十三丈、一を雌橋と云ひ同高さ五丈餘なり。所謂これ帝釋の鬼橋と稱せらるゝもの、二橋の相距る約三十町、共に天然の石砥にして神鑿鬼斧の妙を極む。橋の兩岸は悉く山にて、山より、山に跨る天然の岩橋なり、其長二十三丈四尺、幅三丈二尺あり。土俗傳ふる所に依れば、上古鬼神ありて一夜に此二橋を架せんとし、彼は陰鬼、是は陽鬼の作れるに雌橋は其工未だ成らざるに夜既に明けぬと云へりと。素より是れ傳説に過ぎざるのみ。蓋し是れ河流の侵蝕力、山脚を洞開せるものなるべし。此神橋の背上に草木生茂したれば之を渡るものを尋常の山路として通過し毫も其橋たるを知らず。橋下に下りて橋腹を仰ぎ見れば一枚の石にて刀鑿削り成せるが如く高く架したるを以て初めて橋たるを知り其神工鬼作の絶妙に愕然として驚異の眼を睜るを禁せざるべし。

菅晋賢の鬼橋に曰く
鬼橋、僻在一方、其境過清、石路至悪
備人為導、既踰一嶺、嶺窮而坡、坡窮
而解、四面皆山、如投井底、漸下得一
憩亭、深聲轟脚下、即橋背也、雜樹茂生

如行山岡、身在橋上、而不知橋、已奇、
下溪仰瞻、始見全形、橋蓋一片石、架
空而起、高大不可名狀、石鼓鱗起、如
真龍卷騰、石液時滴、鏘然作響、山氣
陰森不可久居也、云々
又岡山の碩儒飯谷朗庵の鬼橋の詩あり
左に録す。

於巖奇哉鬼橋奇 鬼耶神耶將化兒
海内異觀歸一掃 天台石梁亦徒爲
吟客夜投帝釋廟 大獸壓夢々纒支
曉霧入攀急峽際 怪障危巒貫翠圍
石門重閣雲吞吐 波角牽掣倒垂枝
忽看大壑中否塞 飛長流何處之
寧知空際通山脈 百丈橫跨千尋谿
萬古不攙穹隆勢 雲根天矯逸躡躡
上生老樹爲欄楯 牛馬往來似坦夷
下如大月生溟渤 水蕩仙氣相爭馳
縱有霖潦漂山至 洞然流去屹不移
疑他老蚌奔駛觸山死 鱗甲化石不
絕離 又疑天半長虹飲谷夕 靈
激固結凝不彫 不然太古架橋梁始
眞宰救民運巧思 萍梗嘗搜東
方勝 金洞庚申屈指推 不知絕
奇在目睫 一條壓倒萬嶽巖 寄
贈天下烟霞客 公論不是我言私
不攀見岳勿談美 不渡鬼橋勿說奇

●城が島(備後)

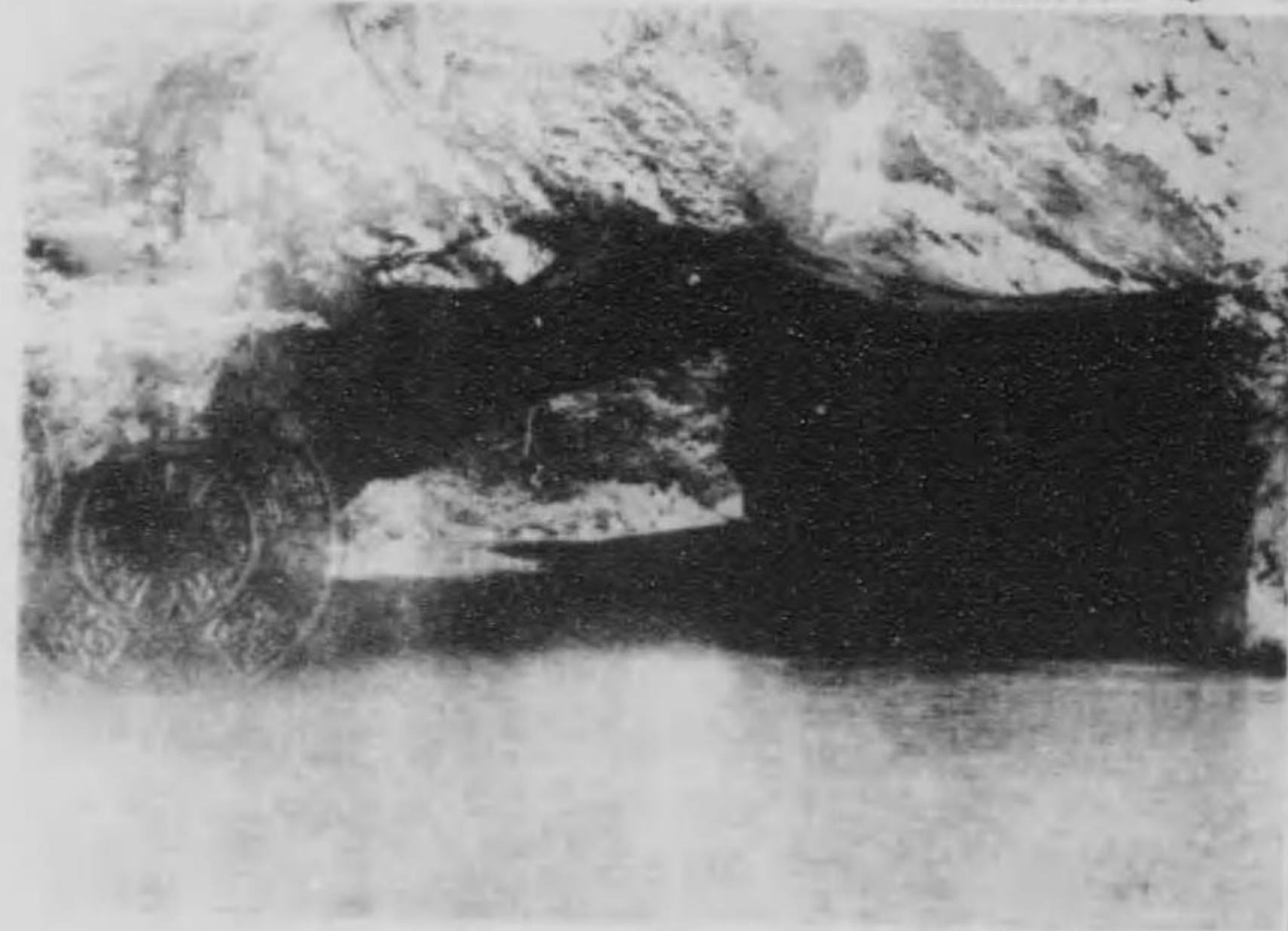
是れ亦帝釋天境内景勝の一にして、碧樹海水に映じ、風光瀟灑として爽快筆舌の盡し得べきにあらず、蓋し帝釋勝景中の尤なるものに屬す。
又、帝釋堂の附近、東城町の北方一里に德雲寺なる一刹あり、僧覺隱の開基に係る。寺後の峰上に「鬼臼」と稱する怪石あり、其の由来を詳にする能はざるも、或は帝釋堂鬼の洞門に關聯せるものなるやを知るべからず、因に、德雲寺は長祿年間、東城の領主宮下政盛の建立する所なり。

懸島ヶ城



窓の鬼門唐

賽の河原



神の橋



帝釋永明寺

城ヶ島懸崖



唐門の鬼窓

間に隠見す。岩石の色は多く淡白にして
巖下の路より仰ぎ見れば巍然として城壁
の如し。此洞門を過ぎて宇山に通ずる山
徑あり。

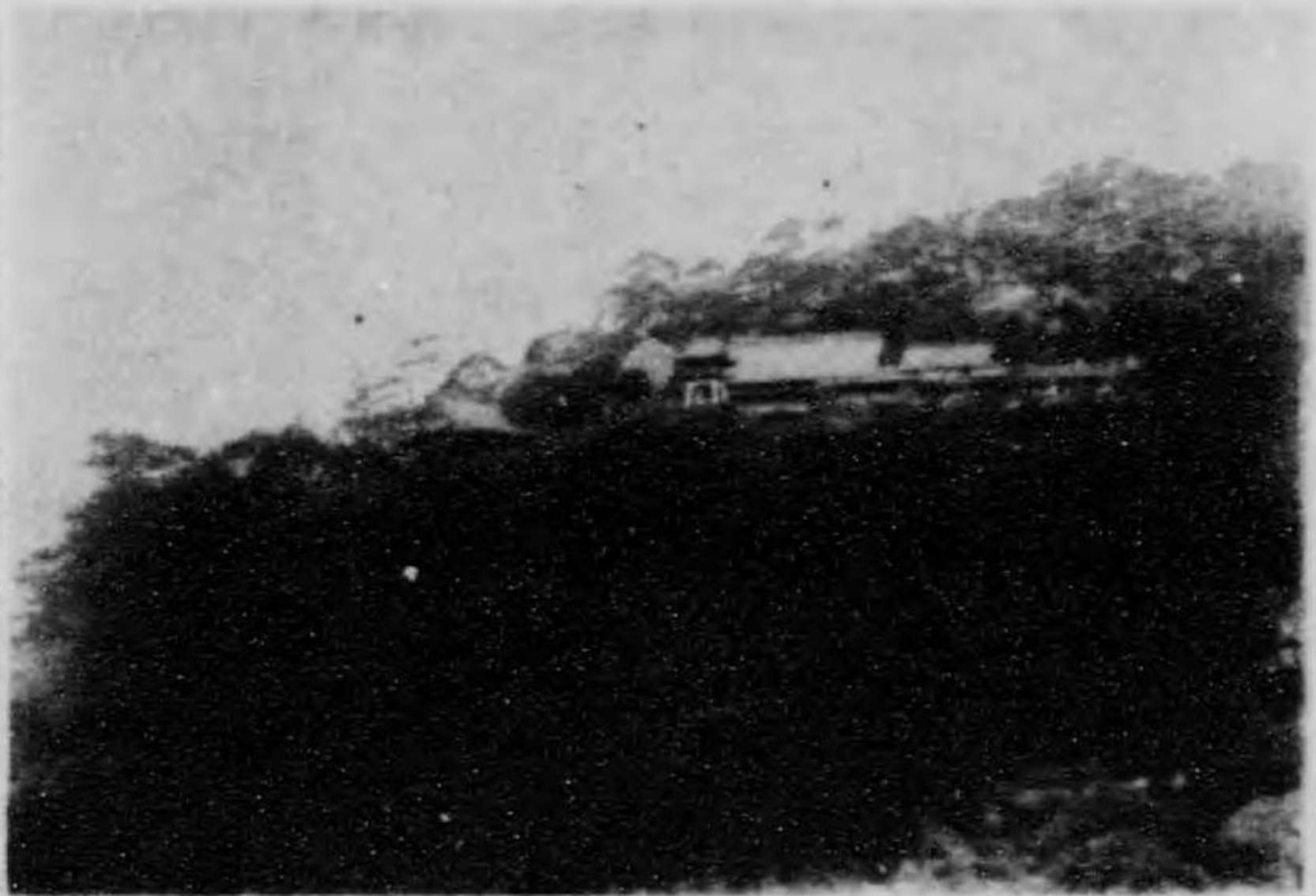
鬼橋、僻在一方、其境過清、石路至悪
備人為導、既踰一嶺、嶺窮而坡、坡窮
而解、四面皆山、如投井底、漸下得一
憩亭、溪聲轟脚下、即橋背也、雜樹茂生

あり、其の由来を詳にする能はざるも、
或は帝釋堂鬼の洞門に關聯せるものなる
やを知るべからず、因に、徳雲寺は長祿
年間、東城の領主宮下政盛の建立する所
なり。

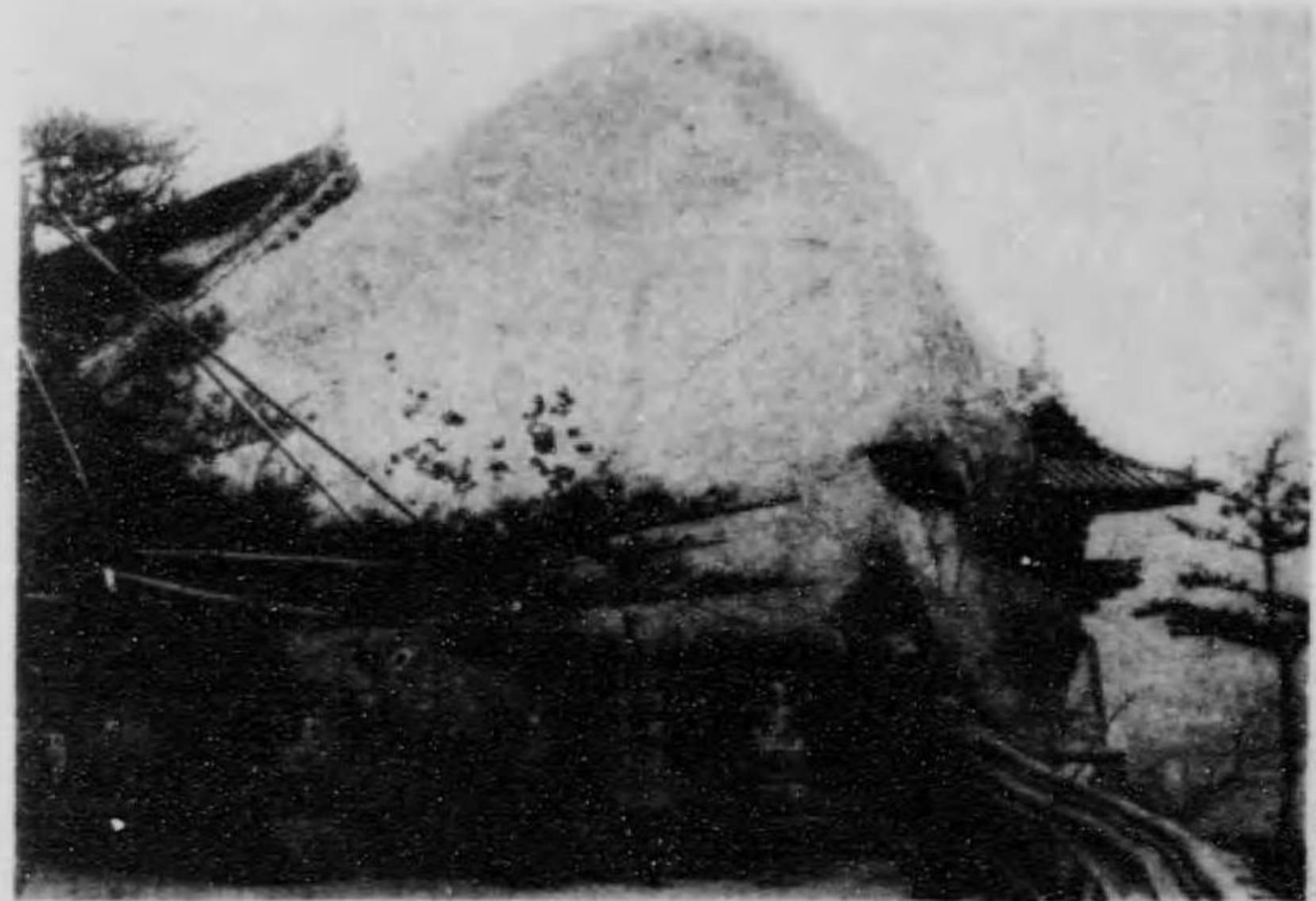
仙 醉 島



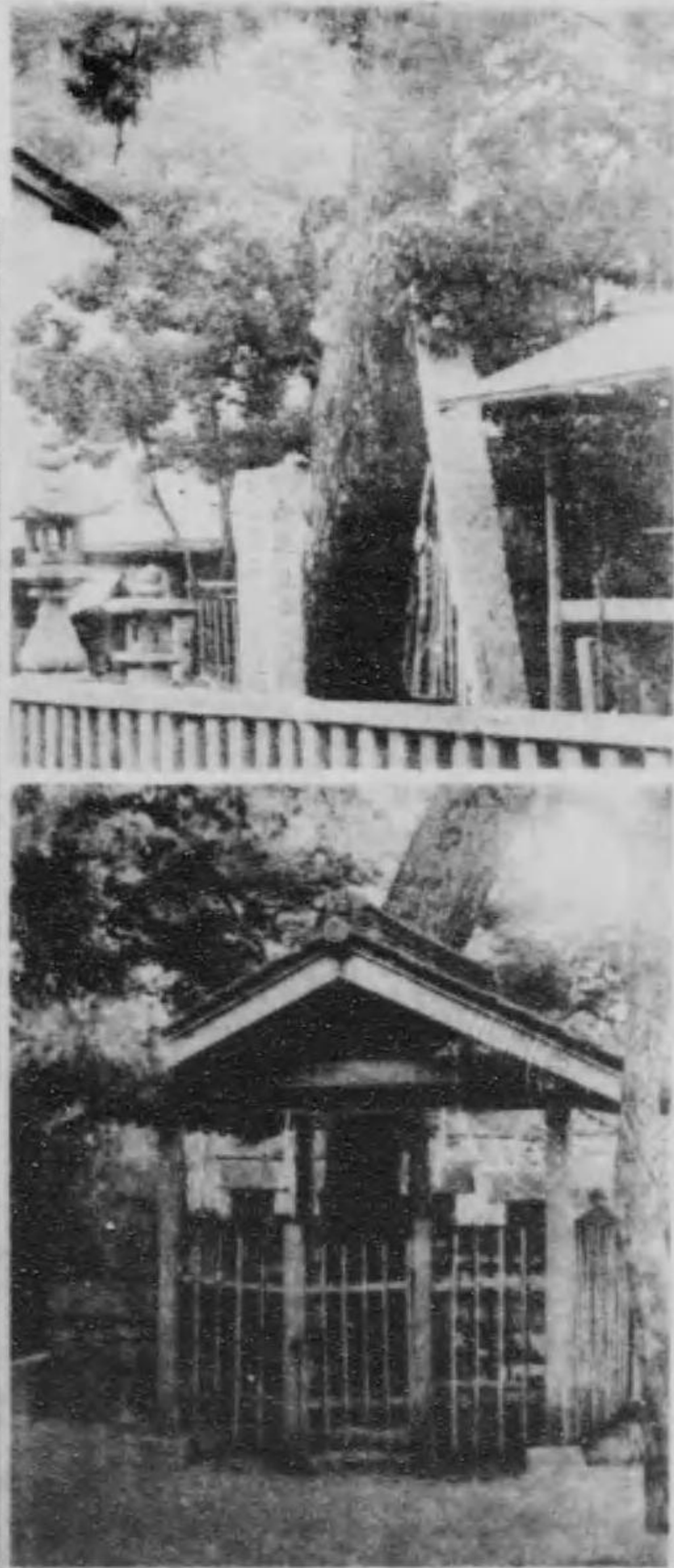
千 光 寺



玉 の 石



松 繫 船 后 皇 功 神



長 井 浦 水 調 の 井



尾 の 道 市 街

尾の道市 (備後)

岡山、廣島兩市の間に於ける繁盛の一市にして備後第一の要津たると同時に瀬

く栽植し以て庶民の散策地となせり。

頼山陽

崖腹笹僧寺 林頭露海門 波光分瓦色 梵唄壓人喧 鳥遊岸無影 舟過潮有痕

後の諸島あり。皇后島は昔時神功皇后三

韓よりの歸途船を寄せ給ひたる古蹟なり

と傳ふ。

徳川氏時代朝鮮聘使の往來毎に鞆津に

由る。故に吏館を建て、迎接せり。韓客



●尾の道市 (備後)

岡山、廣島兩市の間に於ける繁盛の一市にして備後第一の要津たると同時に瀬戸内海樞要の良港たり。市の背後には大寶、愛宕の兩山を帯び、前面は向島に對して尾道海峡を形成す。港内渾穩かにして船舶の碇繋に良く、中國航行の汽船は大抵茲に寄港するを常とす、而して交通最も便利の地點にあれば當港を基點として四國の各地に航海するもの極めて多し市街は東西に長くして十一町、南北に短くして五町あり、商業繁盛にして總ての商業機關又多く備はる。頼山陽當港を叙して曰く「藝備之海多灣曲、而尾路最狹、島嶼與陸相對者、喚之可膺、屋瓦如鱗、帆檣如林、與山光水色、相出沒云々。

- 夢中棹過幾汀洲 三老傳呼已埠頭
- 起揭蓬窓星欲曉 旗亭歌板未全收
- 菅茶山
- 愛聽鄰舟棹札嘲 買魚蓬底小傾危
- 篋中抽得劍南集 閱到松滋晚泊詩
- 篠崎 小竹

●千光寺 (尾の道)

尾の道市の背後なる大寶山の半腹に在り。古義真言宗にして、古く一千百餘年前の創建に係り、多田滿仲の再興する所なりと云ふ。境内は反別三反餘、磴道之に通じ、琴平祠、毘沙門堂、蟠龍の松、大慈閣等を通じて一坦地に出づれば懸崖に沿ひて本堂屹立す、堂内には千手觀音を安置す、是れ聖德太子の作にして多田滿仲の守本尊なりとぞ。

大寶山は一に千光寺山とも稱す、天正年中杉原元經の居城せし所にして、山上の平地には所々に斷礎の殘存せるもの少からず、又廣瀾なる山上の古城墟は俗に之れを千疊敷と呼ぶ。近年山腹の地を開拓して遊園地となし、櫻樹、楓樹等を多

く栽植して庶民の散策地となせり。

類山陽

- 崖腹飲僧寺 林頭露海門 波光分瓦色
- 梵唄壓人喧 鳥遊岸無影 舟過潮有痕
- 題名向怪石 幾日又東轅

●千光寺玉の石 (備後)

千光寺の本堂前、數間を距りたる所に一巨石あり、高さ四十二尺、幅三十尺、傳へ曰ふ、昔時此の岩上に玉ありて夜々光を放ち以て海上數里を照射せり、是の故に此の海濱を稱して玉の浦と呼べりと。岩の傍に護摩堂あり、之を過ぐれば崖裡方丈、撫松庵等あり、又其東端には奇岩數個あり曰く重岩、曰く屏風岩、曰く蛙石、孰れも其形狀に由りて名づけられたるものなり。萬葉集に

- ぬばたまの夜は明けぬらし多麻の浦に
- あさりする鶴鳴き渡るなり
- 多麻能宇良のあきつ白玉ひりへれど
- またぞおきつる見る人をなみ
- 筑紫紀行に曰く、北西の方を三丁程登れば仙光寺といふ寺あり、此庭に高さ三四間計なる玉の如く盤微なる石あり之に依りて玉の浦と云ふ、或人の萬葉集に、ぬば玉の夜は明けぬらし玉の浦にあさりする田鶴鳴き渡るなりとあるも此玉の浦の事なるべしと云へり、されば甚古き名所なり云々

- 宿千光寺 僧寂室
- 十有年間前故人 相看把手語如春
- 爭知此夜成陳迹 月射寒窓風撼筠

●仙醉島 (鞆の津)

仙醉島は福禪寺の堂下、海中に横はれる島にして鞆津と相對す、方十七町あり鞆津より海上僅に十町許にして達す、島内には辨財天の小祠あり、綠樹繁生して海波岸を洗ひ、風光頗る明媚にして鞆浦景勝中の白眉たり、附近に辨天、玉津、皇

后の諸島あり。皇后島は昔時神功皇后三韓よりの歸途船を寄せ給ひたる古蹟なりと傳ふ。

徳川氏時代朝鮮聘使の往來毎に鞆津に由る。故に使館を建て、迎接せり。韓客「日東第一形勝」の六字を題したる福禪寺は此島の附近に建てり。

- 郁文哉
- 神仙縹緲小蓬萊 鞆浦風煙與海開
- 今古清雅無廢弛 總維僧樂行舟隈
- 河野 鐵兜
- 百幅雲箋會勝流 行箱又寄去年樓
- 韻僧清梵負山寺 商婦怨歌綠崖舟
- 衣帶佛香非厚福 酒含灰氣奈牢愁
- 尊盟今日知誰是 慎莫放吟驚海鷗
- 同
- 蓬萊宮近隔層厓 一水盈々不惹埃
- 古洞有時瓊艸見 幽巖無際石花開
- 月明鶴駕按笙度 露冷女冠鳴珮來
- 自覺塵緣吹欲盡 飽傾沈瀝當浮杯

●長井浦水調の井 (備後)

糸崎停車場の東十町、八幡神社の境内に在り。長井の浦は今の糸崎港にして尾の道より三原に至る國道の間、買村大字東野の一埠港なり。傳ふる所に依れば神功皇后征韓の際、御船を玆に停め給ふ木梨真人出迎ひ奉り埼の邊の井の水を汲みて供したりと云ふ。此地の郡名を水調と云ひ、又糸崎とは井戸崎の義なりとぞ

●神功皇后船繫の松 (備後)

是れ亦此地の附近、神功皇后の遺蹟に至る途中にして、皇后征韓の際御船を暫く繫留せられたる古松なりとの傳説あり因に曰ふ、長井の浦の八幡神社は一名を糸崎神社とも稱す、應神天皇の御産髮を奉祀せりと傳ふ。此地前面に院島、生日島等横はり、風景太だ佳趣に富めり。

●廣島城 (廣島)

廣島市の中央稍々北に偏して位す、東西九町、南北十三町、中央に聳ゆるものを天守閣とす、高さ十七間五尺、基礎東西十二間、南北九間、今其の南方に第五師團司令部を置けり。本城は前郭、中城、後郭の三區に分たれ、中城は所謂本丸にして、俗に在間又は當摩の城と云ふ。高さ十二丈の五層樓今尙は巍然として存す。明治維新後陸軍省の手に收められ第五師團の營城となれり。明治二十七年征清の役起るや、同年八月天皇大勳を廣島に邁めさせられ、本城を以て大本營と爲し軍國の事を統べさせ給へり。而して我軍は連戦連捷して翌年三月を以て露獨帝都に凱旋せり。

史を按ずるに廣島城は天正十七年、國守毛利輝元地を茲に相し、自ら繩張を爲して創築する所にして、二年を要して壕壘成り、文祿二年に至つて工事竣成を告げたり。慶長五年毛利氏長門國に徙りたる後、福島正則安藝備前の二國を領するに及び、此城に居ること二十年、元和五年に至り、正則除封せられ、淺野長晟代りて紀州和歌山より茲に移封し、四十二萬六千石を領して世々その居城と爲したるが十二代淺野長動に至り、明治維新の改革に遭遇し、終に廢城となれり。

- 梁川 星巖
- 猫子橋邊重繁 炊烟繞樹市聲驚
- 一般樓櫓四十八 雲際依稀鶴尾高
- 齋藤 誠軒
- 豪門別墅古林邱 翠樹朱欄映水流
- 宴罷半宵人散盡 月高四十八城樓

●明治大帝玉座 (廣島城内)

素と是れ臨時廣島帝國議會の議事堂内に在りたる紀念御便殿にして、明治二十七八年日清戦役の際、大本營に當てられ

たる舊廣島城中に在りたるもの、今は移されて市の北端二葉山なる廣島公園に置かる。明治大帝の御眞影及び當時に於ける御物を奉置す、今にして之を拜観するもの漫ろに當年を追憶するの情を誘する能はざるものあり。

- 岡本 貢石
- 一天星斗夜闌干 列戟森々映月寒
- 營外營中肅寥聞 時聞警拆曉聲乾
- 城外梅香襲鐵衣 安南安北雪猶飛
- 如何千里在西海 春入舊年人未歸

●泉邸庭園 (縮景園) (廣島)

泉邸は一名縮景園と稱す、舊廣島藩主淺野侯の別墅にして平時は濫に人の觀るを許さざれども其風景趣致の佳絶なるは普く人口に膾炙する所なり。園は神田川の東岸、上流川岸に所在し、河を隔て、斜めに二葉山、向陽山と相對す、岸に閘門を設けて河水を泉池に導く、池を瀧縁池と號け、池中に小島を設く、池の沿岸には曲汀廻灣錯綜し斷崖あり絶壁あり、或は溪澗、或は瀟瀟、深山を模し、幽谷を寫す、而して瀟瀟、風韻に富める館亭丘岡等隨處に散在し、一見名匠の筆に成る風景畫に接するの想あり。蓋し本園の勝趣は其規模小なるも天下の名勝として岡山の後樂園と並稱せらる。

園の對岸に桃樹數十株ありて陽春の候妖艶妍を競ひて頗る美觀を呈す。是れ淺野家九世の祖重長屢々此地に遊び其景趣を添へんが爲めに大須賀村西堤南北數町の間及び白鳥三軒紺屋の堤に紅白三百株の桃樹を茲に移植せるものなり。

●興樂園 (廣島)

廣島市猫屋川の東岸、水主町に在り、別名を水主公園と稱す。明治維新前淺野家の別邸たりし所にして、今は縣立病院の附屬地たり。園内の池水は夕陽に映じ

且つ怪石奇岩その配置を得、林泉の美、樹石の按排、妙趣を極む、就中千石石と稱する奇石は園中最も有名なるものなり。

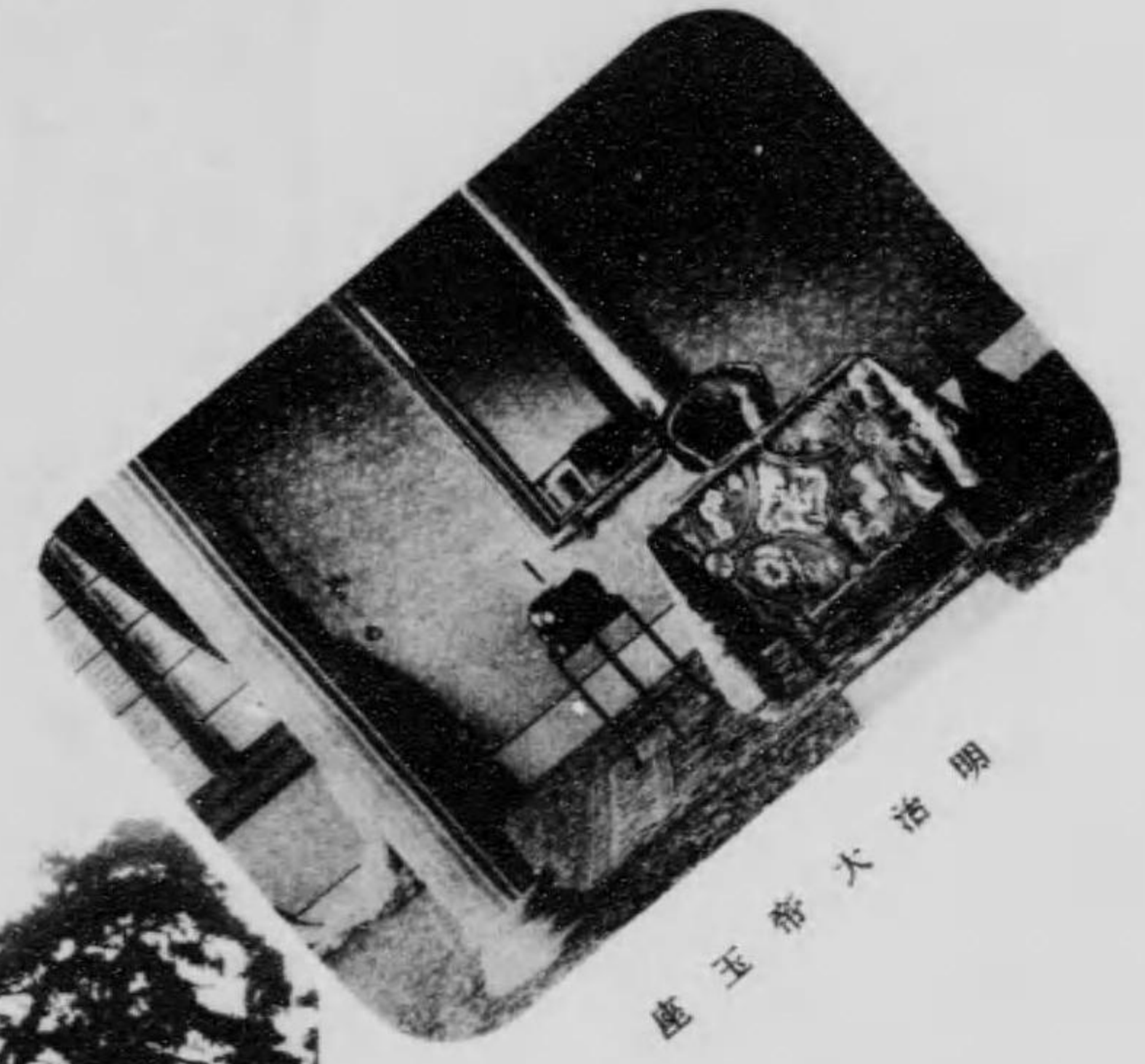
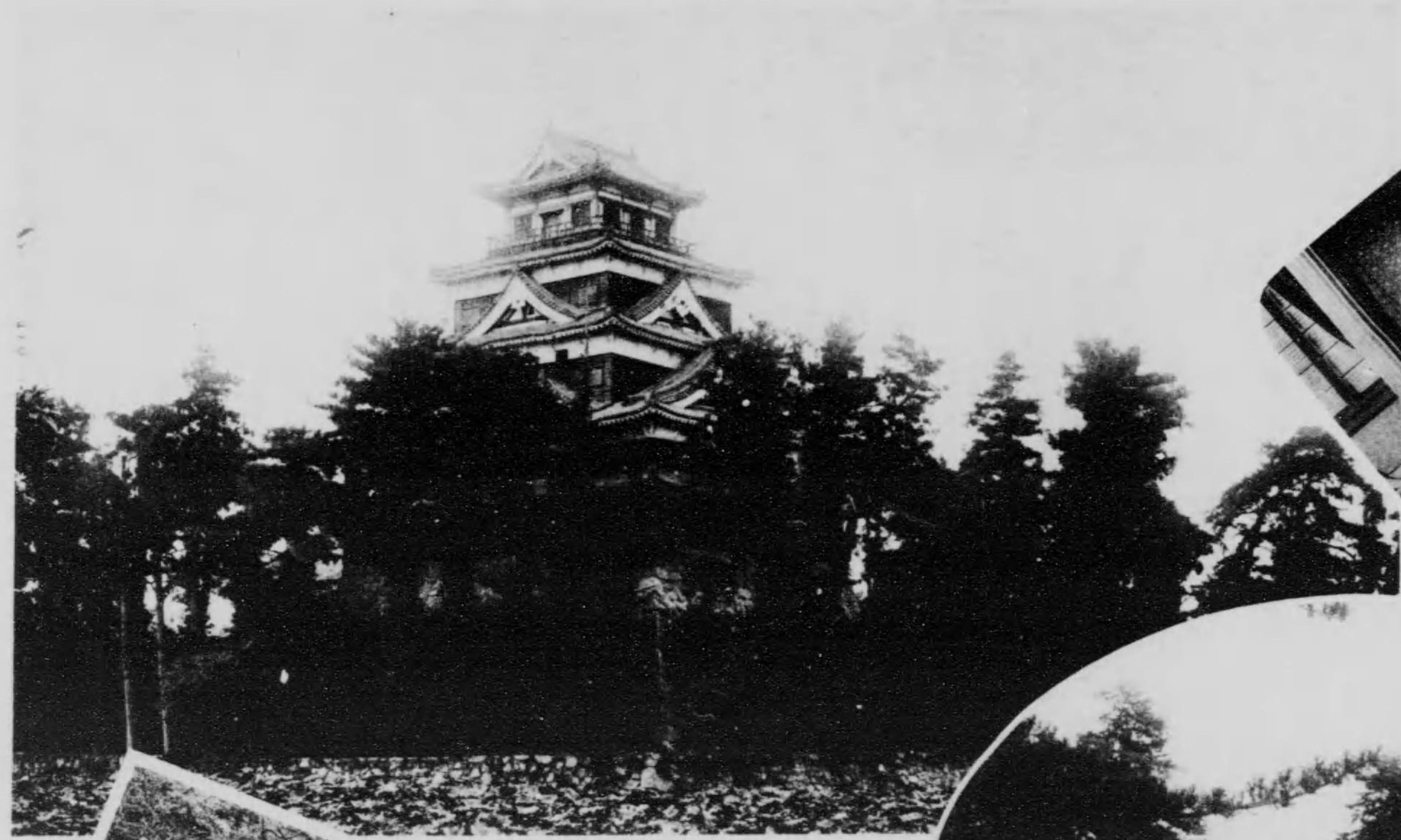
●饒津神社 (廣島)

是れ廣島藩祖淺野正長政の靈を祀れる神社にして二葉山なる廣島公園に在り同園は明治七年開設せられたるものにして後に二葉山の翠を負ひ、前に神田川の碧流に臨む老榕古松參差として天を摩し蒼樹綠苔趣致を極む、神社は此裡に存するなり、素と淺野家の廟所たる明星院に在りたるが文化七年其の二百年祭を舉行せる際、社殿を創建し、天保六年九月更に改祀し饒津神社と號して今の地に遷座せり。

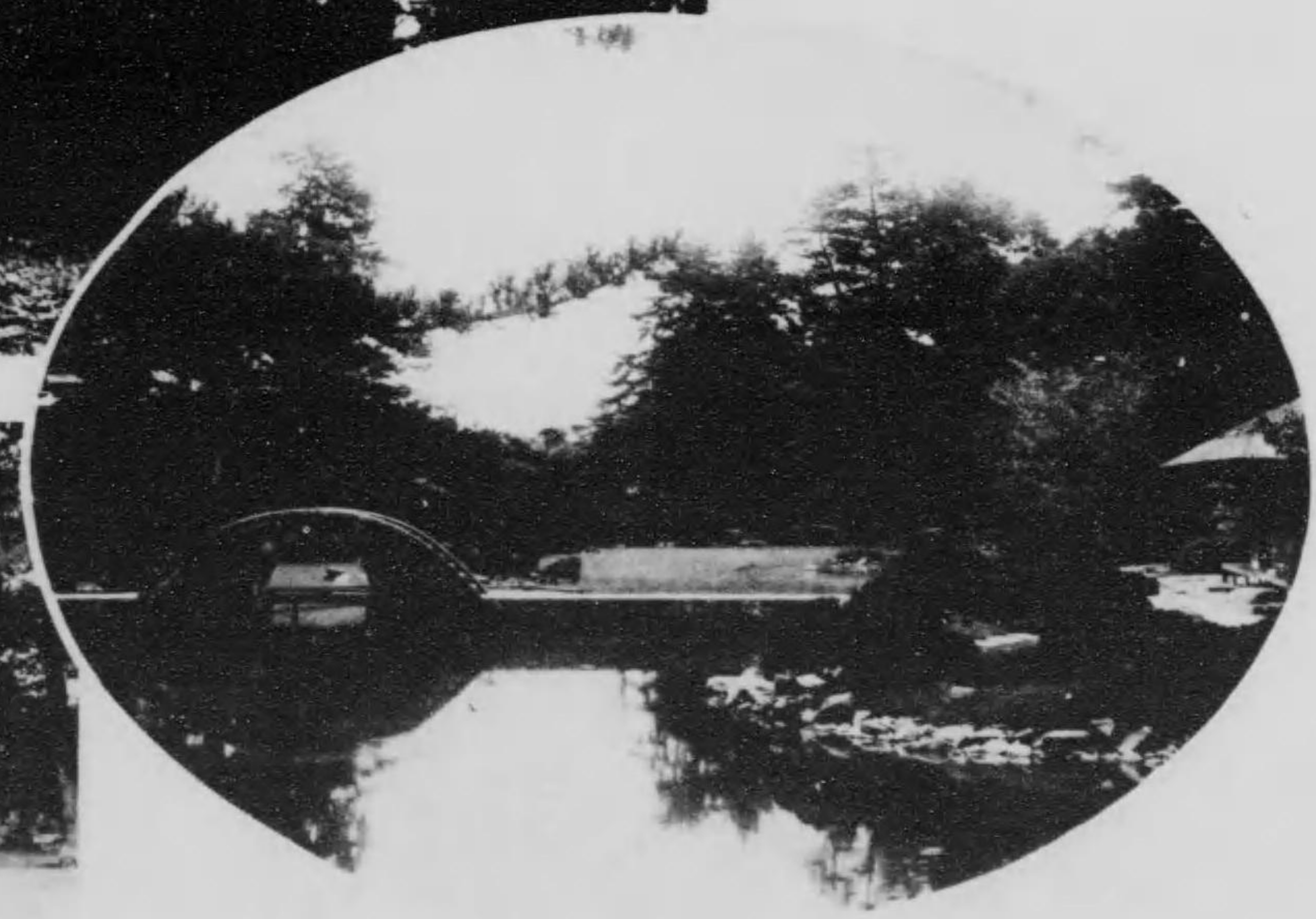
本神社中門の左右には瑞籬を築き、正面には本殿、幣殿、拜殿あり、構造頗る善美を極む、右方に神輿庫、左方に神饌所社務所等あり、又神社の傍に戊辰戦死者を祀れる招魂社あり。饒津神社は縣社にして、毎年九月十五日を以て大祭を執行す、又碩備阪井虎山、木原桑宅の碑は神社の附近公園内に建てり、鶴羽根神社、東照宮も亦園内に在り、東照宮の東傍に旌忠碑なるものあり、是れ明治十一年廣島鎮臺將校の建設に係り三浦梧樓將軍文を遺す即ち西南戦役に於ける廣島鎮臺兵の戦死せる偉功を賞するものなり。

因に曰ふ、鶴羽根神社は、源三位頼政の室、高蒲の前の遺言に由りて創建せしものなりと傳へらる、神社の境内櫻樹多く花期節を茲に曳く遊客甚だ多し、又境内の池沼には多く高蒲を栽ゆ紫白妍を競ひて頗る風情に富む、彼の頼政の詠なる「いづれ高蒲と引きぞわづらふ」の歌など總想されて一段の趣致あるを覺ゆ。





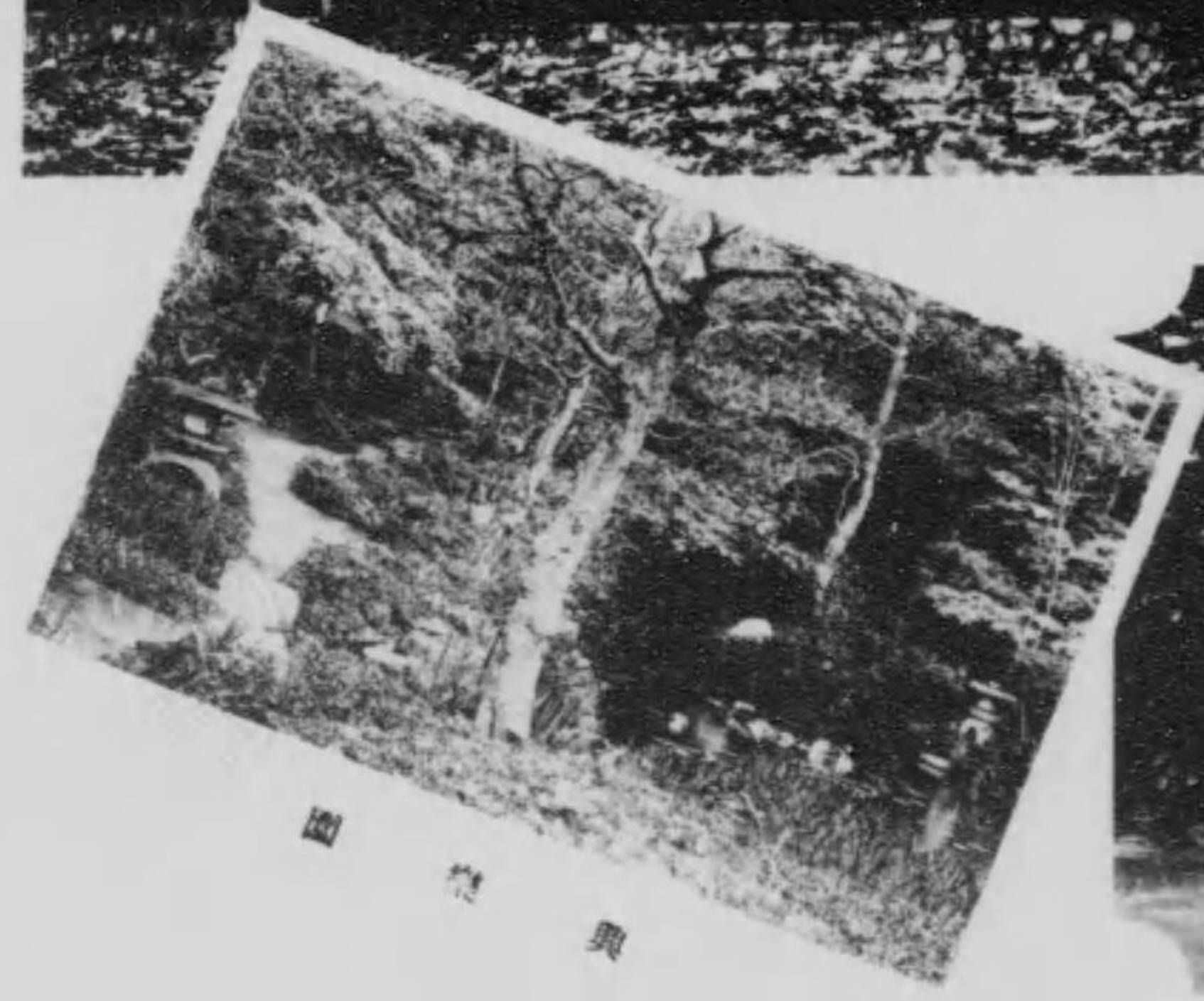
明 治 大 帝 玉 座



綜 景 園



鏡 津 神 社



興 園

●明治大帝玉座 (廣島城内)

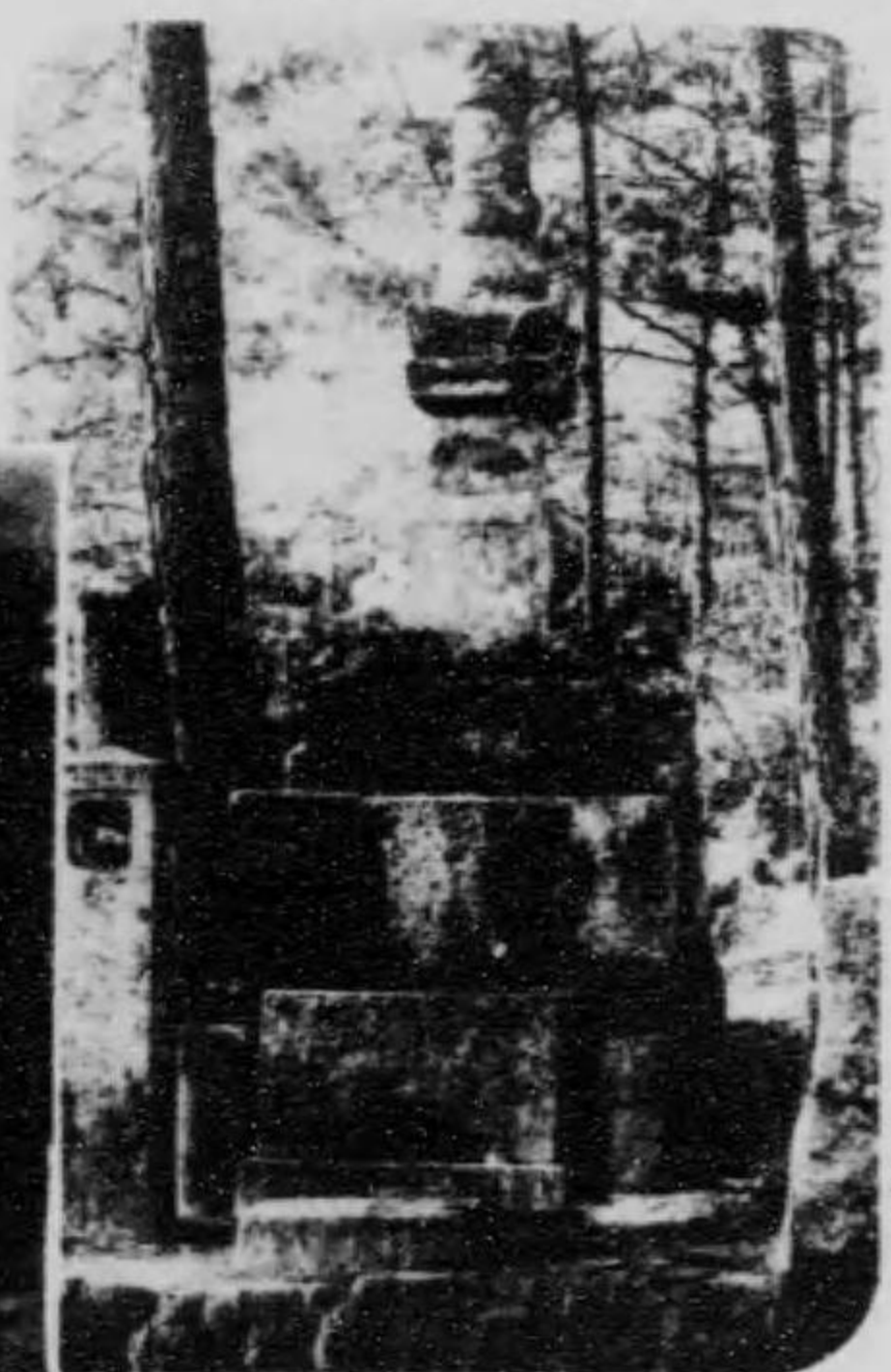
素と是れ臨時廣島帝國議會の議事堂内に在りたる紀念御便殿にして、明治二十七八年日清戦役の際、大本營に當てられの附屬地たり。園内の池水は夕陽に映じ

ひて頗る風情に富む、彼の賴政の詠なる「いづれ菖蒲と引きぞわづらふ」の歌など總想されて一段の趣致あるを覺ゆ。

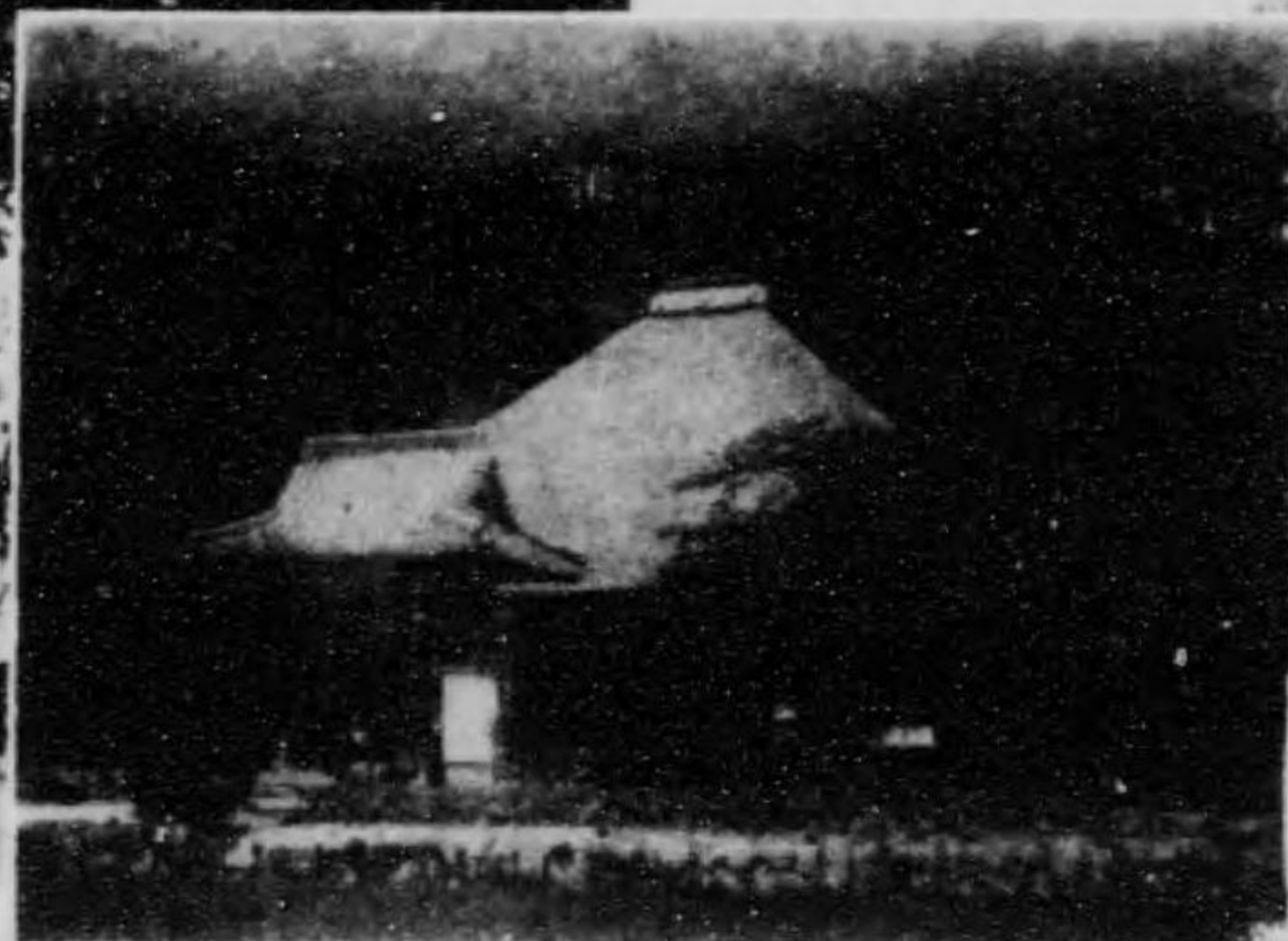
國泰寺



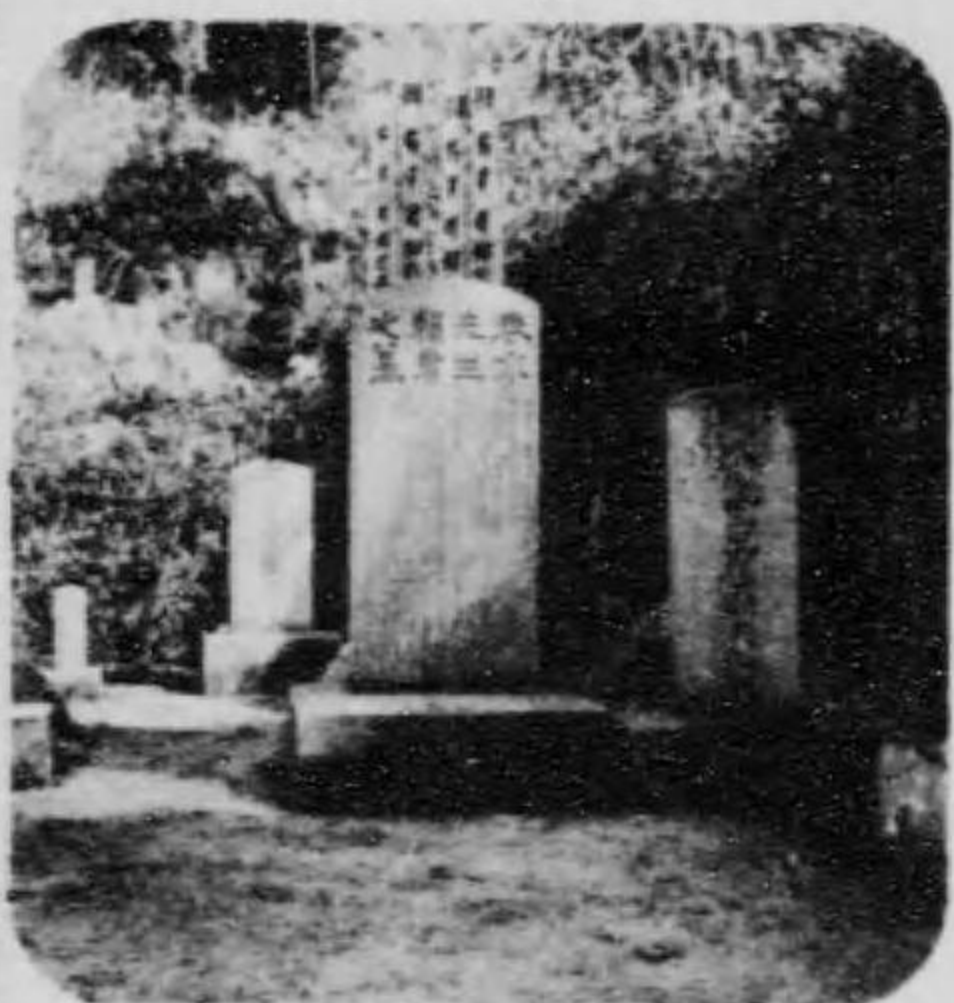
陶全姜首塚



洞雲寺



頼春水墓



廣島市街



宇品港

● 廣島市街 (安藝)

素と藝州藩主淺野氏の城下にして今は廣島縣廳の所在地なり。東西一里十八町

正則安藝に封せられて入國するや豊太閤の諡號に因み安國寺を改めて國泰寺と稱す。惠瓊が當寺に住職せる當時寺内に秀吉の靈屋を營み勅諡國泰寺殿前太閤相國のあり。是れ即ち比治山にして、山上一刹あり安養院と云ふ。春水、杏坪、幸庵等頼氏一族の墳墓は當寺の域内に在り。春水は名は惟完、字は千秋、通稱彌太郎、春水と號す、山陽の父なり。備を以

●廣島市街 (安藝)

素と藝州藩主淺野氏の城下にして今は廣島縣廳の所在地なり。東西一里十八町南北一里、市の北部には太田川流れて二派となり、京橋川は東より南に流れて更に支派を爲し、横川となり元安川となる斯くの如く諸川分流し従つて之に架する橋梁の數多く宛然水の都會たるの觀あり人家稠密にして屋臺櫛比し市街常に繁盛を示し、中國第一の都會と稱せらる。市の數は百二十を算し、就中最も繁華の街を大手町筋と元安橋筋なりとす。諸官衙銀行諸會社を始め金融機關備はらざるなく大買老舖軒を並べて堂々たる一都市を形成せり。

廣島は往時五箇庄と云ひ、海濱の一畝原たりしを毛利氏茲に吉田城廓を移築し其後福島淺野の兩氏居城して漸次繁盛の地となりたり。是れと共に舊稱たる五箇庄を改めて廣島と稱せり。蓋し其地弘くして四方水を以て繞れるに由るものなるべし。然れども亦一説には毛利氏の家祖廣元の一宇と福島の一字とを取り合せて廣島と名づくるに至りしなりと云ふ。

●國泰寺 (廣島)

廣島市内、小町に在り風林山と號し、曹洞宗なり、始め安國寺と稱せり、文祿三年毛利氏京都東福寺の西堂惠瓊をして當寺を創建せしめたり。惠瓊は毛利氏の信任を得、且つ豊臣秀吉にも愛せられしが、曩に朝鮮征伐の際、惠瓊亦、鮮地に渡り、多くの良材を齎らして歸朝したり安國寺の建築は蓋し此の朝鮮良材を多く用ひたるなり。西堂橋も惠瓊の架設せるもの、又門前の古松も惠瓊の手植に係ると傳ふ。然るに關ヶ原の役起るや惠瓊は石田三成に與して戦敗れ捕へられて京都に送られ慶長五年誅せられたり同年福島

正則安藝に封せられて入國するや豊太閤の諡號に因み安國寺を改めて國泰寺と稱す。惠瓊が當寺に住職せる當時寺内に秀吉の靈屋を營み勅諭國泰寺殿前太閤相國雲山俊籠大居士の位牌を安置せり。寺號は蓋し之に基くなり。正則の弟は僧となりて普照和尚と云ひしが惠瓊の後を承けて當寺に住職たりき、明治九年火災に遭ひて惠瓊遺蹟の大伽藍も終に烏有に歸したり現今の堂宇は其以後に於て再築せるものなり。

因に曰ふ。惠瓊は素と藝州沼田郡銀山の城主武田刑部少輔信重の末子にて幼名を竹若丸と云ひ、出家して頓藏主と號し東福寺紫衣の僧なりき。

●洞雲寺 (安藝)

佐伯郡觀音寺村佐方村佐方に在り。境内には本堂、方丈、衆寮、開山堂、坐禪堂、鐘樓等、駢び建ち、又境内に金剛水なるもの有り。當寺は長享元年櫻尾の城主教親、馬防國文寺の僧金剛を招きて創建せしめ寺領として郡内千月村の田五段を寄附したり。當寺には寄附狀三十七通、大内氏札四枚、其他古畫古器等を藏す。

●陶全姜の首塚 (安藝)

洞雲寺境内に在り。是れ陶晴賢入道全姜の首級を葬むるものなり。晴賢は大内義隆の臣にして天文二十年叛逆を謀り義隆を大軍寺に攻めて之を弑し、其國を奪ひたるが同二十三年毛利元就は義隆の爲めに義軍を起して大に晴賢を嚴島に敗る晴賢敗走し遂に青苔濱に於て自殺す、茲に於て元就は其首を洞雲寺に送りて點檢し之を同寺に葬り、爲に佛寺を修したり。

●頼春水一族墓

(廣島市外)
廣島市の東部に一帶の丘陵蜿蜒たるも

のあり。是れ即ち比治山にして、山上一刹あり安養院と云ふ。春水、杏坪、幸庵等頼氏一族の墳墓は當寺の域内に在り。春水は名は惟完、字は千秋、通稱彌太郎、春水と號す、山陽の父なり。儒を以て淺野氏に代へ廣島に住す、又書を善くし當時書法の正格なる春水第一と稱せられたり。

杏坪は名は惟柔、字は千祺、通稱萬四郎、杏坪と號す、春水の弟にして兄と共に廣島藩の儒官たり、詩文及書を善くせり、山陽の伯父なり。

幸庵は、山陽の第二子にして、名は元協、字は承緒、通稱を與一と云ひ、幸庵と號す、即ち春水の孫にして、賦軒の父なり。

●宇品港 (安藝)

廣島市の南端に在り。明治十七年、當時廣島縣知事たりし千田貞曉萬難を排して觀音築港の工事を起し六ヶ年餘の日子を費し明治二十二年十一月完成を告げたるなり。其間人夫を要したること百餘萬人、工事費實に三十四萬圓に上れり、同港沿岸の延長は二千九百三十五間にして地面は畑地、宅地、堤塘を合せて合計六十二萬坪に達せり。港内は水深くして干潮の時と雖も尙ほ十間を測るべく、波止場は石を疊みて最も堅牢を極む。市街は商店軒を並べ、街路平坦にして廣島市に通ず之を御幸通りと稱す。明治二十七年清國と國交破れて于戎相見るに至るや、當港は兵士、兵器、糧食の主要輸送港として活氣瀟瀟たる壯觀を示したり、爾後北清事變、日露戦争に際しても亦兵站基點として重大なる價値を發揮したり。此地海路三津濱へは四十海里、神戸港へは百六十海里、馬關へは百十海里なり。宇品港の附近に似島あり。廣島海上の好目標となる安藝富士野の在る所なり。

● 嚴島大鳥居 (安藝)

日本三景の一なる嚴島と共に、著るしく知られたるものは嚴島神社の大鳥居なり。大鳥居は嚴島神社々前の火燈前を距る八十八間、海中の平沙に建てり。平沙は社前に連れるも、満潮時は參詣の船白帆を擧げて鳥居を潜る。鳥居の柱は高さ七間二尺五寸、圍り五間三尺三寸、副柱の高四間四尺三寸、圍三間三寸、棟の長さ十二間一尺七寸、上棟より軒先まで一間六寸、額庇二間、左右距離五間五尺八寸、總高八間三尺七寸と註せらる。古來屢々改造を重ねたるが、現今の鳥居は明治七年十二月斧始めを行ひ翌八年七月上棟式を爲したるものなり。

● 嚴島神社々殿 (安藝)

嚴島神社は嚴島町の中央に在り。官幣中社にして市杵島姫命、田心姫命、湍津姫命を祀り。相殿に國常立尊、天照皇大神素盞鳴尊と合祀す。社傳に據れば推古天皇の御宇癸丑の年の創建に係ると云ふ。左に神社建築の大要を記す。

大宮寶殿中央に當る桁十二間梁五間五尺、幣殿は寶殿の前に在り桁三間二尺梁二間五尺、三棟拜殿は幣殿の前に在り桁十五間梁六間半、祓殿は拜殿の前に在り俗に粗入と云ら、桁八間梁五間半、高舞臺は祓殿の前に在り。高舞臺は高舞臺の左右に在り、樂屋は高舞臺に續き左右に分る、各二字宛なり、門客神社二字樂屋と並び立てり、廊下は舌先は門客神社より前方西北面へ閣道を作れるなり其端に銅燈籠一基を置く、殿前より燈籠まで約三十六間あり、廻廊は即ち閣道なり寶殿左右に開きて江岸に達す延長百八間間毎に燈籠を吊し、潮寄せ來れば波を生じ百燈長く水に映じて、光彩陸離美觀名狀すべからず。

而して楣上には名流大家の傑作に係る諸額を掲ぐ、今其重なるものを擧ぐれば、

狩野元信の牛若、常信の三福神、光信の三十六歌仙、素徇の俵藤太秀郷、兆殿司の蝦蟇仙人、尙信の羅生門、探幽の鯉、古秀の張飛、宋紫石の孔雀、藍江の鐘馗、觀山の韓信、應舉の雞、俊峯の朝比奈、彦宥の直實敦盛、左近の神馬、伊川院の龍、芦雪の山姫等にして之を數ふれば無慮數千に及ぶべし。

反橋は一名圓橋と稱し大宮の左方なる泉池に架す、長さ十一間三尺幅二間二尺泉池は鏡池と稱し、干潮の時と雖泉水自然に涌出して潤る、事なし。大宮の右方三十間にして客神社寶殿あり桁七間梁四間、幣殿、拜殿、祓社等之れに屬す、又連歌堂、大國堂、御供所、湯立所、能舞臺、鐘樓、寶藏、文庫等あり。

正壇 適所
海面煙收月吐稜 青銅一碧暮潮増
東西賽去人初靜 波感長廊百八燈
似 雲
ところから龍の宮居もうかぶかと
見えてつらなる浪の灯火
滿潮はたゞ大海の泉かな 宗 祇
みつ潮に月より上の宮居哉 宗 長
宮島や燈籠の火に明やすし 其 角
燈籠や嚴島山なみの花 支 考

● 紅葉谷公園 (安藝)

嚴島南町に在り、宮島八景の一にして楓樹多く、御手洗川は源を茲に發す。溪流潺々として奇岩怪石の上を奔る、兩岸楓樹に伍して櫻樹亦尠からず、溪流に架せる雅橋、樹下に倚伴せる麋鹿は更に一段の風趣を加へて景致頗る掬すべく筈を置く遊客四時絶ゆる事なし近年嚴島公園となれり。

寺田 臨川
雨餘豊草滿原春 水暗沙明境自眞

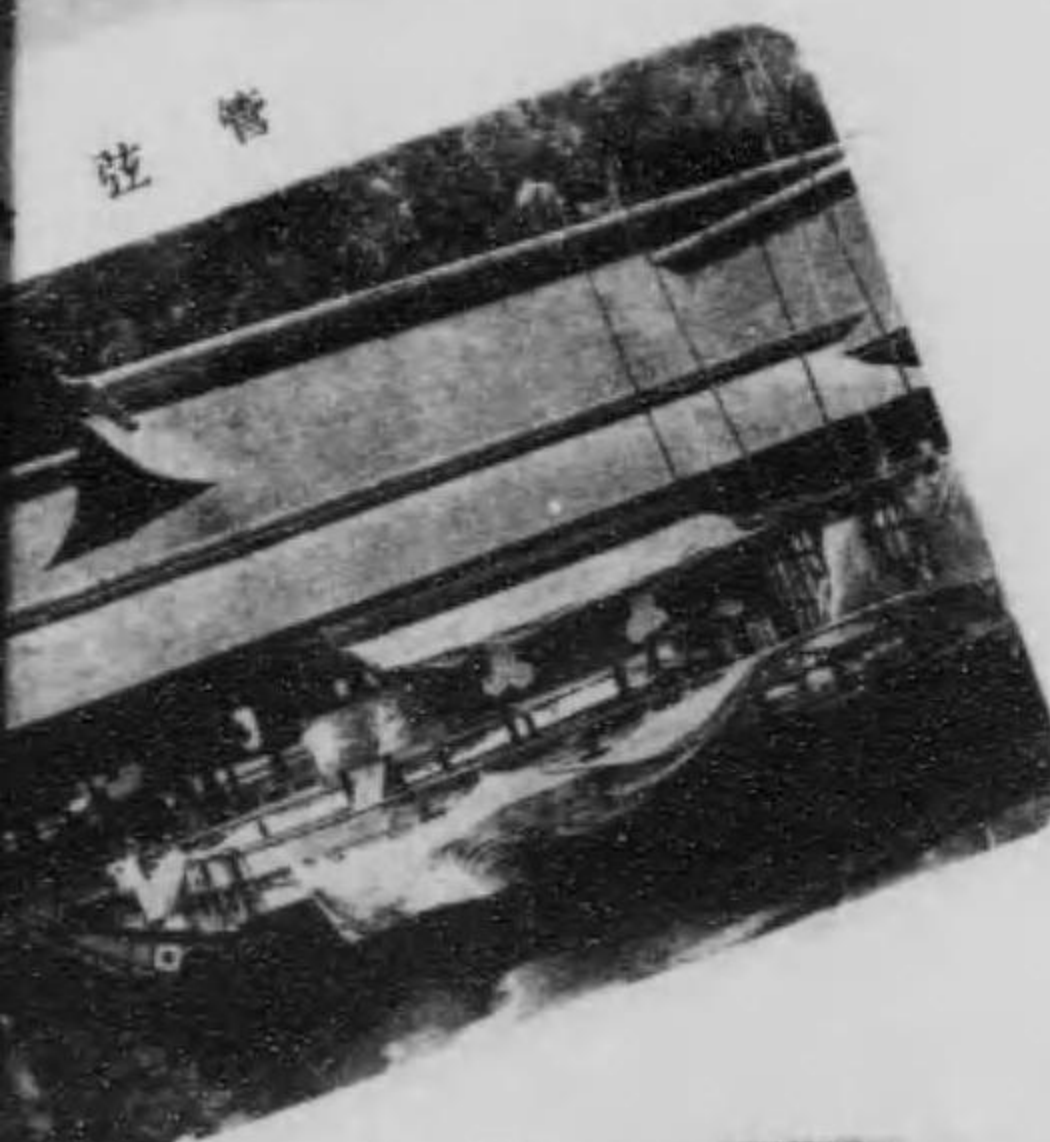
龜鹿知無羅網患 幼々不敢避遊人

● 管絃船 (安藝)

嚴島神社の大祭は毎年一月十七日なるが、陰曆六月十七日を以て舉行せらる、祭典の際には、船三艘を組み立て、之に神輿を乗せ、神官左右に列し、水主は鳥帽子を冠り、素袍袴を着して各々棹を操る、之を管絃船と稱す。又是より先き引舟三艘に楳を押し並べて大鳥居の前より直ちに地御前神社の社前に渡り神事を行ひ、樂を奏す。斯くて本島に還り、長濱神社、大元大社の前に至りて樂を奏し。御船を大鳥居より本社火燒先に入れ、最も嚴肅なる祭典を行ひ、次で客神社の前にて樂を奏すること前の如く、夫より御船を玉の御池の内に入れ漕ぎ廻ること三回にして本殿に還御するを例とせり。

此祭典に際して、神船の供奉として廣島市各町より御供船と稱し猩々緋に種々の繪を縫ひたる幕を張り、幟、吹貫等を押立て音曲を奏しつゝ、祭典の前夜廣島の川口を出で祭典に参加し翌日廣島市に歸る當日は此盛觀を觀んとて諸所より集り來れる船は舷々相接して海上に充ち敷かれ又戸々の屋上には獻神燈輝きて其數幾萬なるを知らず遠近來觀者頗る難沓を極む

菅 茶 山
彩舟銜尾倚江沙 隱映仙山五色靄
霽内潮回廊九曲 街頭鹿狎市千家
諸平威煽悲黃土 二帝宸遊想翠華
懷古何人同此意 四隣歌吹徹青諱
僧 愚 庵
神燈照海暮煙消 廊閣影浮千里潮
夜半月明人不見 龍王宮裡聽仙簫
篠崎 小竹
海連嚴島勝區多 蜃氣浮來映曉霞
樓閣遙傳仙樂響 方知天女弄琵琶
細川 幽齋
遠島の下津岩根の宮柱
波の上より立つかとぞ見え

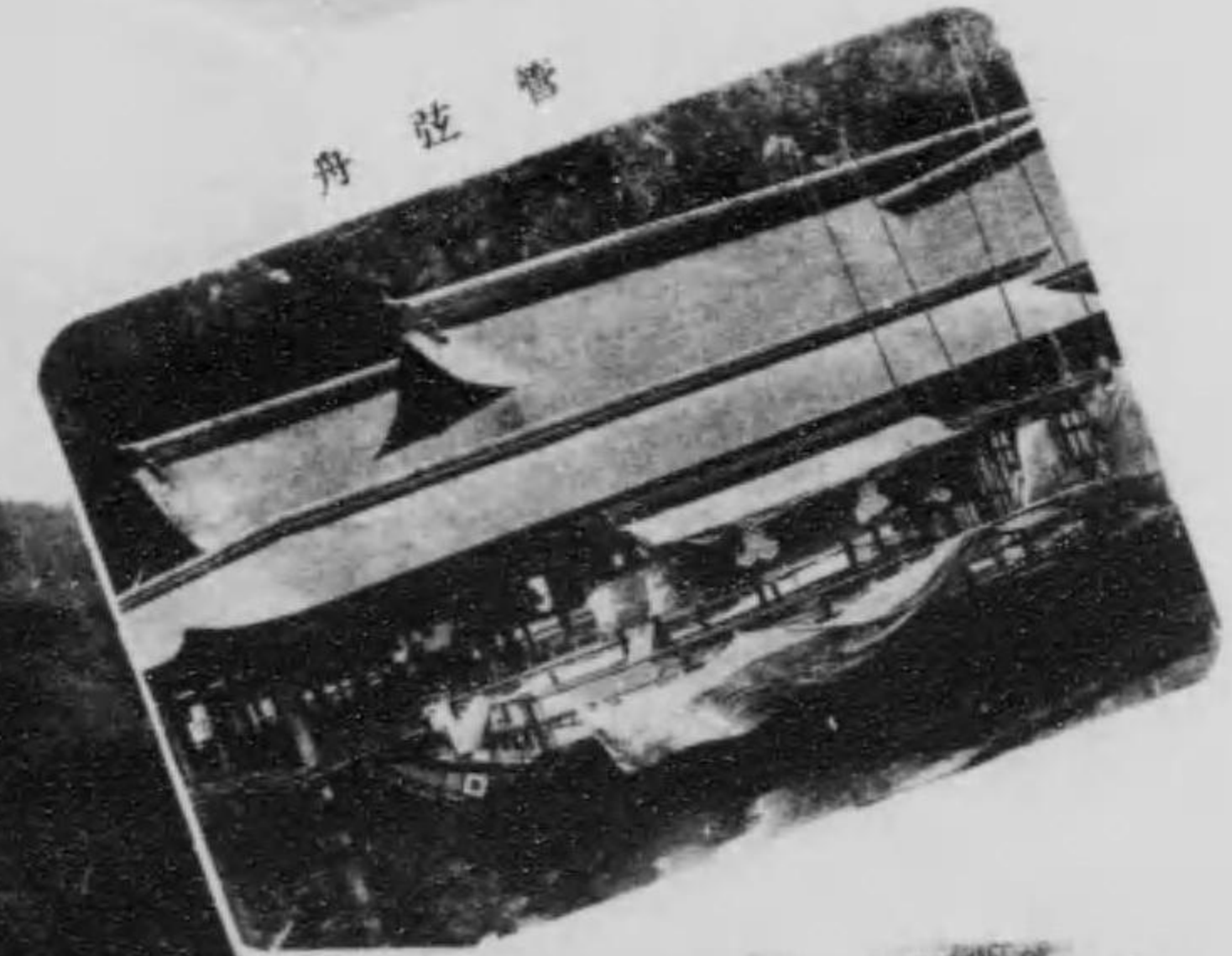


宮島紅葉谷

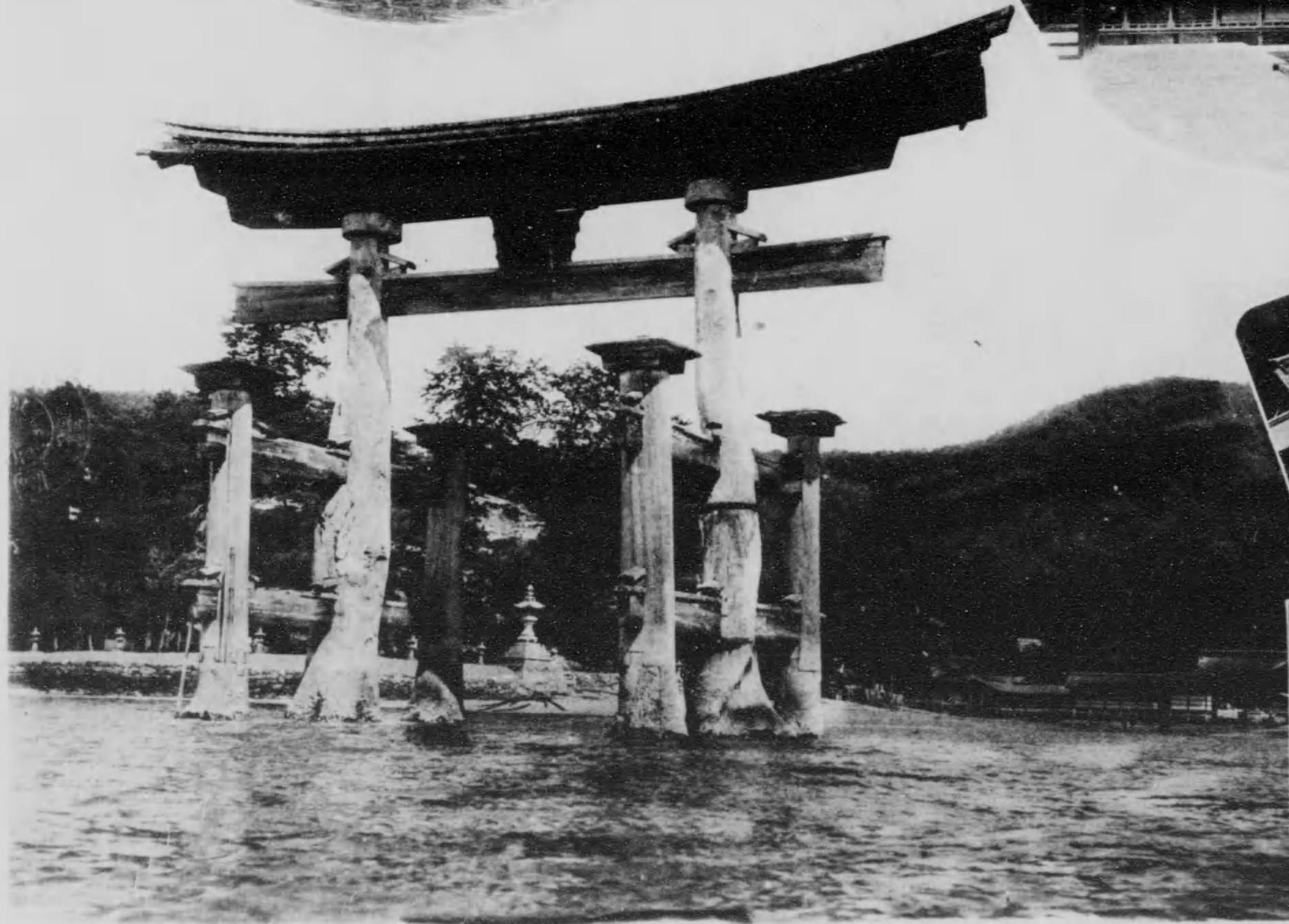
社 神 島 嚴



橋 反



舟 逆 尊



居 島 大 社 神 島 嚴



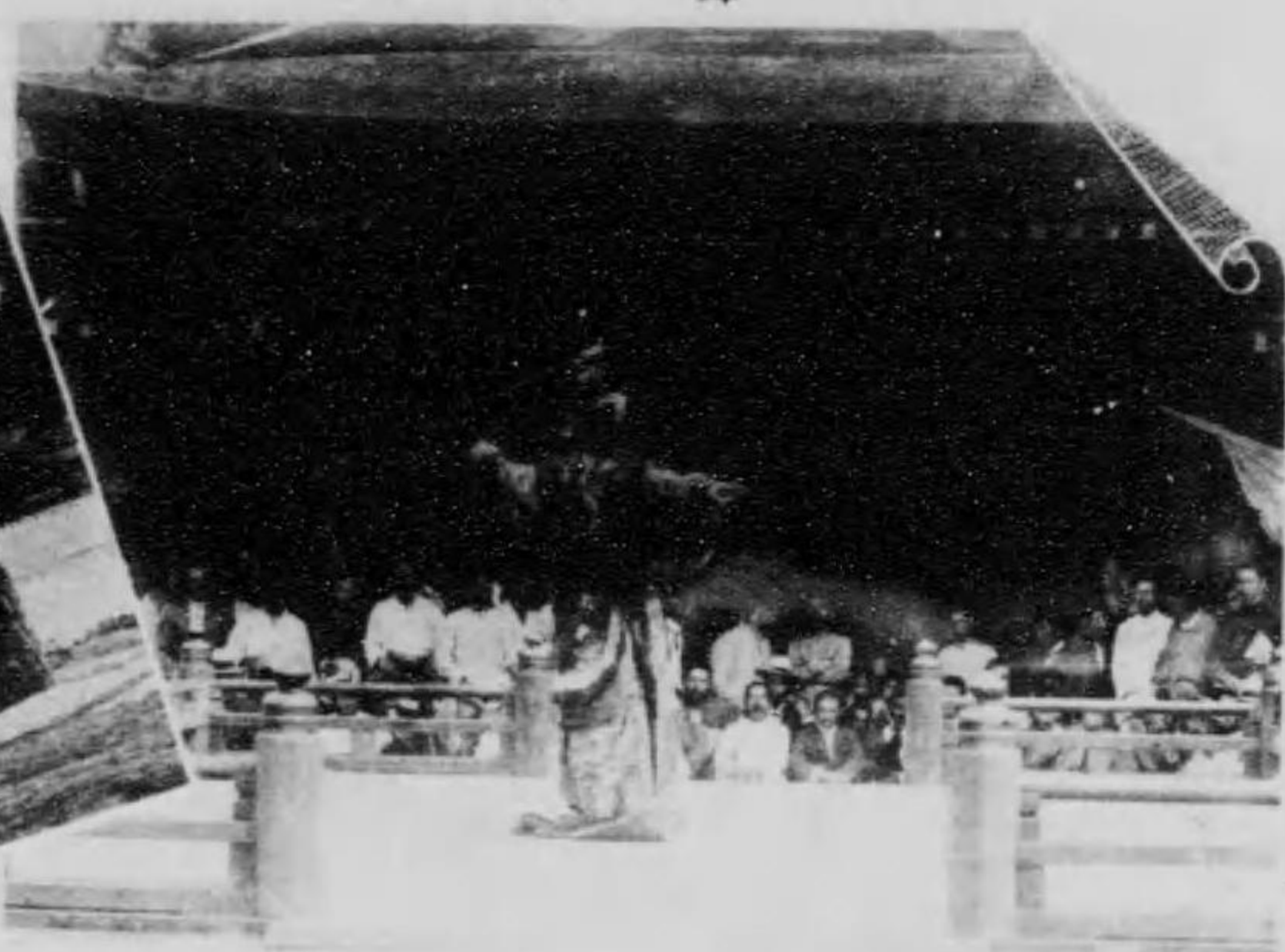
谷 葉 紅 島 宮

で約三十六間あり、廻廊は即ち閣道なり
寶殿左右に開きて江岸に達す延長百八間
間毎に燈籠を吊し、潮寄せ来れば波を生
じ百燈長く水に映じて、光彩陸離美觀名
状すべからず。

段の風趣を加へて景致頗る掬すべく竝を
置く遊客四時絶ゆる事なし近年嚴島公園
となれり。
寺田 臨川
雨餘豊草滿原春 水暗沙明境自真

海連嚴島勝區多 屢氣浮來快曉霞
樓閣遙傳仙樂響 方知天女弄琵琶
遠島の下津岩根の宮柱
波の上より立つかとぞ見え
細川 幽齋

舞樂殿



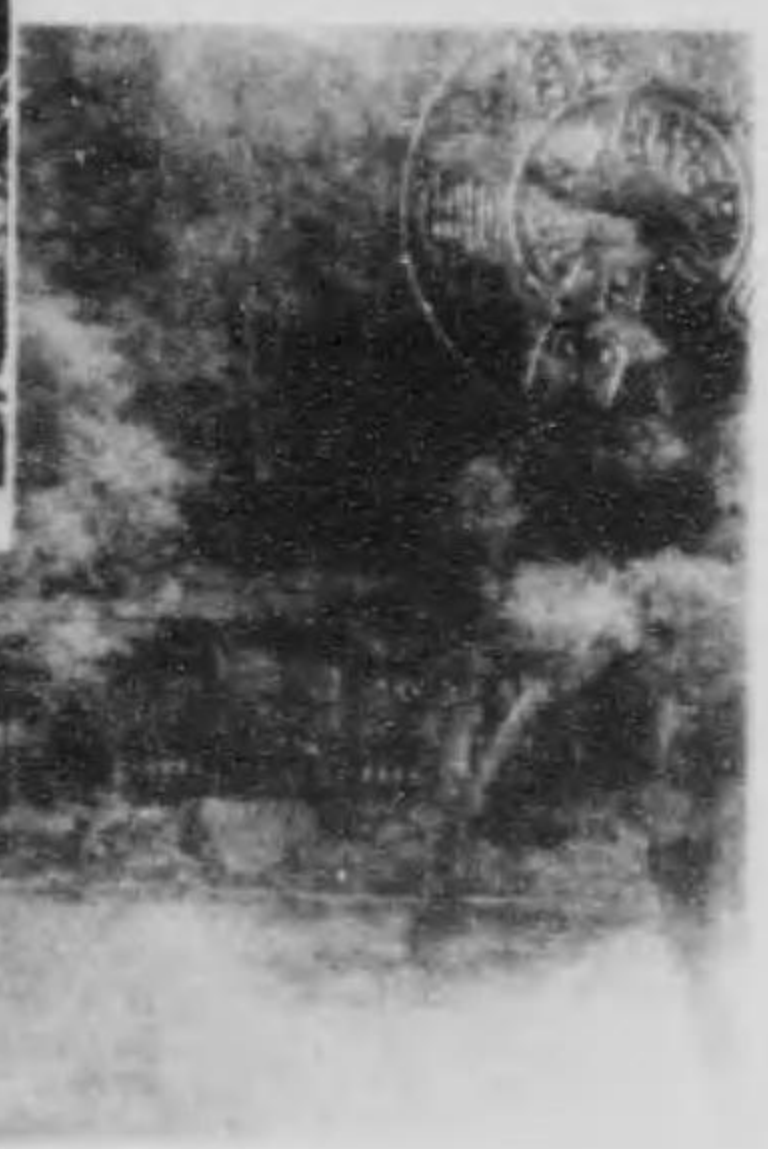
三笠濱



宮島濱



長濱



毛利元就墓



小早川隆景墓



嚴島神社千疊閣

● 嚴島千疊閣 (宮島)

嚴島神社、本社殿の右方なる岡上龜居山に在り、俗に宮島の千疊敷と稱す。梁二十五間、桁十八間、椽幅八尺、四方に欄

● 嚴島三笠濱 (宮島)

嚴島神社の本社鎮座する所の地を三笠濱と云ふ。即ち本社殿の邊より廻廊の北龜居山の麓一帶の海邊は總て之を三笠濱と稱す。此地左方は本社殿に連接し

を存す。山陰山陽十餘ヶ國を領して勢威隆々たりし毛利元就の廟墓は今尙は儼然として當年英雄の跡を追想せしむ。元就は其先大江廣元より出づ、幼名を松壽と云ふ、幼より穎悟長じて大度あり永正十四年、武田元繁を敗り、大永元年

● 嚴島千疊閣 (宮島)

嚴島神社、本社殿の右方なる岡上龜居山に在り、俗に宮島の千疊敷と稱す。梁二十五間、桁十八間、椽幅八尺、四方に欄干を周らせり。閣内に豊國神社を設け豊太閤を祀る、千疊閣は文祿元年豊臣秀臣朝鮮征伐の際、九州に出陣せる途次、嚴島神社に詣り、神の冥助を祈願し、文祿二年凱旋の當時、建設せるものなりと云ふ。閣に登りて眼を放てば眼界頓に展開して眺望太だ佳なり。

● 嚴島神社舞樂殿 (宮島)

本社本殿の前方に在り方三間にして、左右に青銅の獅子及び石燈籠を置き、高舞臺を挟みて左右に平舞臺あり、廣さ百八十六坪、淺洲の上に出出し、滿潮の際には海水其床下を浸す、其端末に二個の樂房左右に分設されたり。

嚴島神社は天文十五年佐伯郡櫻尾の城主源廣就之れが神主として神社を經營したりしが大内義隆の爲に滅され其際神社の舊記多く兵燹に罹りて焼失したるが、延喜式には安藝國佐伯郡伊都伎島神社と記し、三代實錄には貞觀元己卯春正月二十七日及び同年九年丁亥冬十月十三日の兩度神階増進の勅を賜り、其後正一位に進む、其後年を経て社殿大に荒廢せしを以て平相國清盛安藝國に守たりし時、崇敬の念深く神領を増し、社殿を營み、廻廊、鳥居、神社末社に至る迄悉く修繕を加へ大に壯觀を示せり。承安四年後白河法皇行幸あり、治承四年、高倉上皇臨幸の際に金銀の幣帛を捧げられ、足利、大内、毛利の諸氏又神領を寄附し、修理を加ふる所ありたり。明治維新後、勅願所と定められ、同四年神社寺混淆を禁せられしを以て、爾來別當僧を廢し、國幣中社に列せられ、後更に官幣中社となれり。

● 嚴島三笠濱 (宮島)

嚴島神社の本社鎮座する所の地を三笠濱と云ふ。即ち本社殿の邊より廻廊の北龜居山の麓一帶の海邊は總て之を三笠濱と稱す。此地左方は本社殿に連接し右方は海濱に面し遠く諸峰を望み、冬季に於ける雪景殊に佳絶にして三笠濱暮雪は、宮島八景の一と稱せらる。

福羽 美靜

たれもみな家路忘れて來てぞ見る

三笠の濱の雪のゆふ暮

● 嚴島長濱 (宮島)

長濱は千疊閣附近、東北の海濱一帯の稱にして一名を八重濱とも云ふ。此地に長濱神社あり、興津彦神、興津姫の神の二體を祀る。此邊一帶櫻樹に富み艶陽四月の候は眺望最も佳なり。濱の北端に海水浴場の設備あり、夏時遊客甚だ多し。此地より有の浦に出る途中に要害の鼻と稱する一岬あり、是れ毛利氏が陶氏を攻めたる際城壘を築きたる地なりと云ふ。

史を按ずるに、當時大内義隆、周防の山口に居城し、勢ひ甚だ昌なりしが、其臣陶晴賢は義隆を弑して其領地を奪ひたり、義隆死に臨み、一書を毛利元就に遺して讎を復せん事を託せり、茲に於て元就は討賊の勅許を請ひ得て城壘を要害の鼻に築き策戰以て敵を誘ふ。晴賢又軍船千艘、歩騎三萬を以て之に備へたるが、元就は風雨の夜を利し奇策を講じて大に敵の陣營を破りしかば、晴賢は力屈し遂に自及して滅ぶ、是れ實に天文二十年にして、本朝史戰國三義戰の一として傳へらる。

● 毛利元就墓 (安藝)

毛利氏の舊城地たりし高田郡吉田町に在り。町の北方には其居住せし郡山城址

を存す。山陰山陽十餘ヶ國を領して勢威隆々たりし毛利元就の廟墓は今尚ほ儼然として當年英雄の跡を理想せしむ。

元就は其先大江廣元より出づ、幼名を松壽と云ふ、幼より穎悟長じて大度あり永正十四年、武田元繁を敗り、大永元年尼子氏と戦ひ以來連年兵を構へしが漸次勢威を振張し、天文十年尼子氏を破り、十七年隆元、元春、隆景の三子を提げて山口に赴き、大内義隆の女を隆元に娶す二十年陶晴賢の義隆を弑するに及で元就義隆の爲めに義戰の師を起して晴賢を嚴島に討つや勢威益々揚り、山陰山陽の諸國風を望んで敵を送るに至れり。永祿九年尼子氏を亡ぼし、陰陽十三州を領し郡山城に居る。元龜二年病を患ひ、同年六月七十五歳を以て郡山城中に卒す。

● 小早川隆景墓 (安藝)

豊田郡沼田村大字納所の米山寺に在り當寺は仁平年間僧賢願の開基に係り。始め巨真山寺と稱したりしが小早川隆景之を米山寺と改めたり、當寺には土肥實平以下小早川隆景に至る十七世の墳墓存し又三河守範賴、土肥實平、小早川隆景の木像をも安置す。

隆景は毛利元就の三男にして、出で、小早川を繼ぐ、隆景幼字徳壽丸、後ち又四郎と稱す、天文十五年沼田高山城に入り竹原を保有し、大内義隆に寵せられ、其諱字を享けて隆景と改む、智謀に富み軍略に長じ戦ふて毎に捷たざるなく、文祿四年八月從三位に叙し權中納言に任ず壽で老を告げ高山城を去つて備後の三原城に隱退し、悠々閑日月を消したるが慶長二年六月薨す、太閤秀吉、隆景の訃に接し、噫々日本國の智者を失ひたりと嘆息良久久しうしたりと云ふ。以て如何に隆景が秀吉の帷幕に重きを措かれしかを知る可し。

●錦帯橋(周防)

周防岩國町より横山村大字横山に亘りて錦川の流れに架す、一名を算盤橋と云ふ、其形状の似たるを以てなり。橋は河中に石を疊みて四個の橋脚を築き、是に半月形の五小橋を架す、敷石は三重にして、下段は六十間内外、中段は三十間、上段は十五間乃至二十間とす、而して橋は一柱をも用ぬず樞を組み積み上げ層層相憑らしめ以て全橋の重量を支ふ、其構造期せずして泰西の迫持法に合致すと稱せらる。橋の延長二十五間、最も高き所は水面より十三間あり、斯くの如くにして奔流の間に建てるも未だ曾て崩壊せし事なく其の構造の堅牢と奇巧は本邦架橋中の好模範とするに足るべし、宜なり甲州の猿橋、阿波の葛橋と共に日本三奇橋として其名高し。

該橋は今を距る二百四十七年前即ち延寶元年の秋、岩國藩主吉川元信の命じて造らしめたるものにして、岩國川洪水の災害を防がんと爲めに架したるものなり、爾後數回の修繕を加へたるも、其形骸は毫も變更する事なし、錦川一帯の風光は明媚たるが上、錦帯橋の奇勝を添へて更に一段の景趣を加へつゝあり。橋畔に錦帯橋の碑あり、明治九年の建設に係る。左に「西遊雜記」の一節を抄す

岩國山、楓樹ばかり生ひ、紅葉黄にして錦の如し、此故を以て岩國川を錦川とも稱し、錦見の里、錦帯橋、皆紅葉より名付しものなり、然るに今は名のみにて山を開きて畑となし楓葉一樹もなし、惜むべき事なり、花より團子なるべし、抑も錦帯橋は世に名高き橋にて能くたくみし掛様なり、相傳ふ吉川監物殿と云ひし人の工夫にて掛け初め給ふと云ふ、川の流れ強き故に、橋杭はれてもたす、此故に水底を切石を以て三重にたゝみ、橋臺

も切石にて劔先に積みあげ、敷石も橋臺も石の枝杵にて悉くどちて一石の如くにつぎ合せて、橋臺に深き穴を掘りて、其穴へ鐵の柱を入れ、左右より其鐵の端と端とへ木を渡して、取り立し物なり。

岩國錦川、毎霖雨、洪水氾濫、流橋覆舟、害人畜不少、延寶中、領主吉川廣嘉、深憂之、構思多年、一旦有所發明、自指揮工人、連架五橋、結構奇絶、堅牢無比、名曰錦帯橋、士民永賴其慶、此橋從裏而望之、似算盤露珠、故又名十露盤橋。

(防長史談) 宰相 實秋

川橋の鏡を帯の名にめで、

春の霞の袖かくらん

頼春 水

五條連作一長條

錦帯高懸到紫霄

不見相如題去柱

惟知織女度來橋

雌雄截雨虹霓接

斷續受風鳥鶴飄

儂怪人行搖來墜

青山相對水迢々

萬馬奔騰走波浪

五龍踴躍度雲霄

要知東海神機妙

請看防州錦帯橋

●金鷄瀧(周防)

由來、吉敷郡は防州中最も瀑布多し、就中、其の尤なるものを金鷄瀧となす。金鷄瀧は同郡上宇野村に屬す、一戸阪の上流に在り。瀧の高さ直下百六十尺、幅十八尺、壯觀言ふべからず。進水流出して木町川に注ぎ入る。此他、梅峰瀧は高六丈幅二間亦同村に在り、一の瀧は高八丈四尺幅一間一尺、二の瀧は高一丈一尺幅五尺、三の瀧は高五丈五尺幅一間二尺共に吉敷村に在りて流末中尾川に注ぐ、鳴瀧は高六丈五尺、幅十二間四尺小鯖村大字下小鯖に在りて其の流末は小鯖川に注ぐ。

因に云ふ、瀧の上流なる一之坂は山口萩間の要路にして、一名板堂峠とも稱す、

山口を距る一里半なり、往時此山より盛に銀を産出せる事ありたりとぞ。

●龜山公園毛利氏銅像

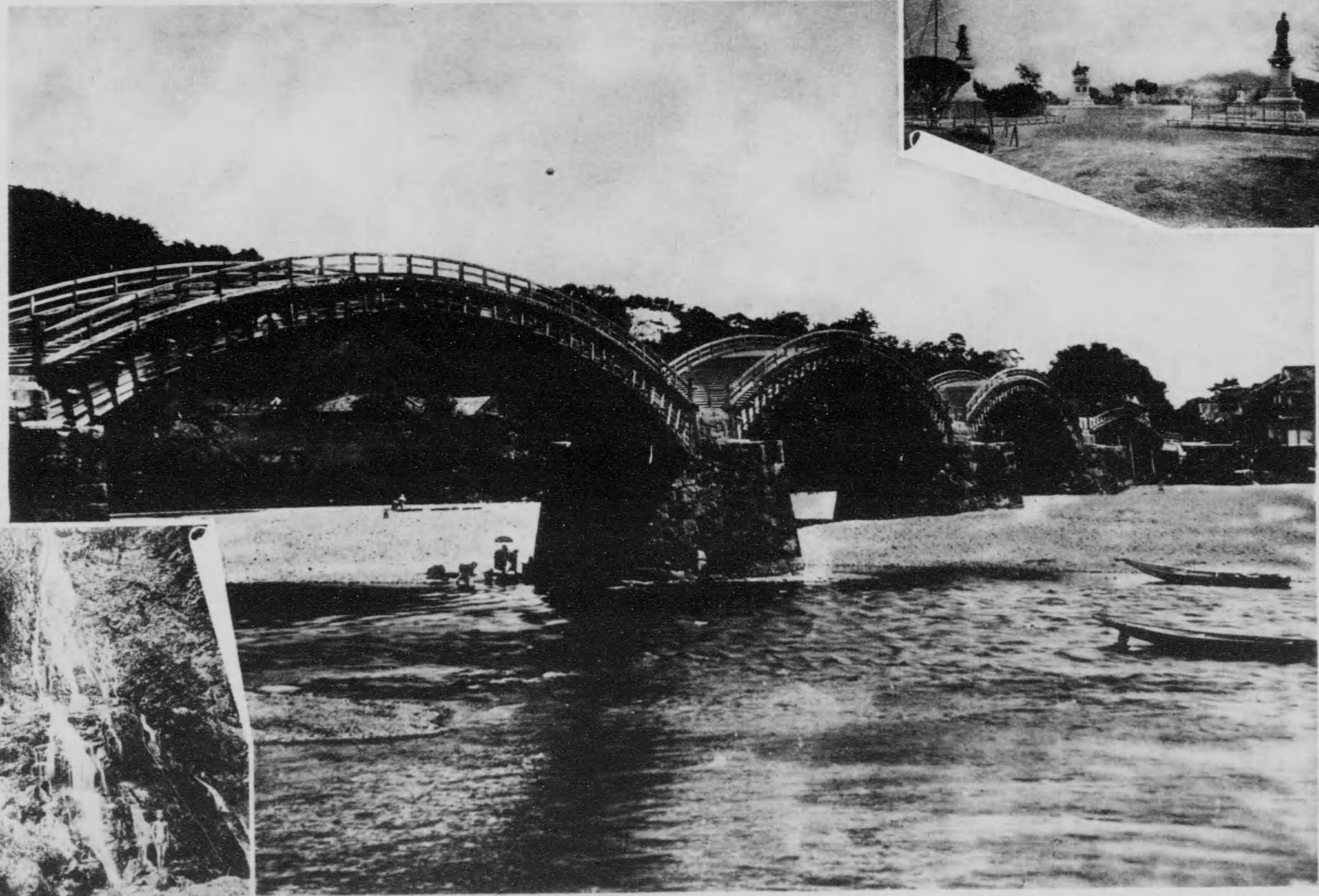
(周防)

山口市街の西方に位置せる小丘にして高さ百尺餘、廣さ約三萬坪、此地素と毛利家支藩の城址にして今毛利家の所有に歸す、園内は瀟洒として雅趣に富む園上より下瞰すれば山口市街の萬景一眸の裡に集り、高等學校、師範、中學校等脚下に隣し、東北田圃を隔て、縣廳と相對す。銅像は園内最も廣潤なる所に設置せり。銅像は六基にして中央馬上の像舊宗藩主贈正一位毛利敬親、即ち公爵毛利元昭氏の祖なり、其左方に駢列せる馬上銅像は毛利現公爵父たる元徳にして中央の右方は舊長門國清末藩主毛利元純、及び舊同國長府藩主毛利元周、元徳の左方は舊周防岩國藩主吉川經幹及び舊徳山藩主毛利元蕃なり。而して敬親の銅像臺石に嵌入せる隆起半身像は益田右衛門介、福原越後、國司信濃、清水清太郎の四士にして皆是れ幕末の際國難に殉じたるものなり。

該銅像は曩に明治二十三年三月、長防兩國の士民同志十餘萬人資を寄せ、建設せるものにして當時伊藤博文、林友幸の兩氏之れが總裁となりて事業を督し同三十三年四月に至つて工事完く竣成を告げたるものなり。又元徳公の銅像は曩に公爵桂太郎(當時伯爵)總裁、男爵有地品之允副總裁となりて事業を經營し明治三十九年完く竣功を告げたりき。

毛利敬親は毛利齊元の長男にして文政二年江戸藩邸に生れ、年十九にして襲封し熱誠藩治に傾注し文武を振興して君國に盡さん事を期し幕府騷擾の際挺然勤王の大義を唱へ以て明治維新の大業を翬贊せり、明治四年五十三歳を以て薨す。

像銅公利毛園公山龜



澗の溪第

橋 帶 節

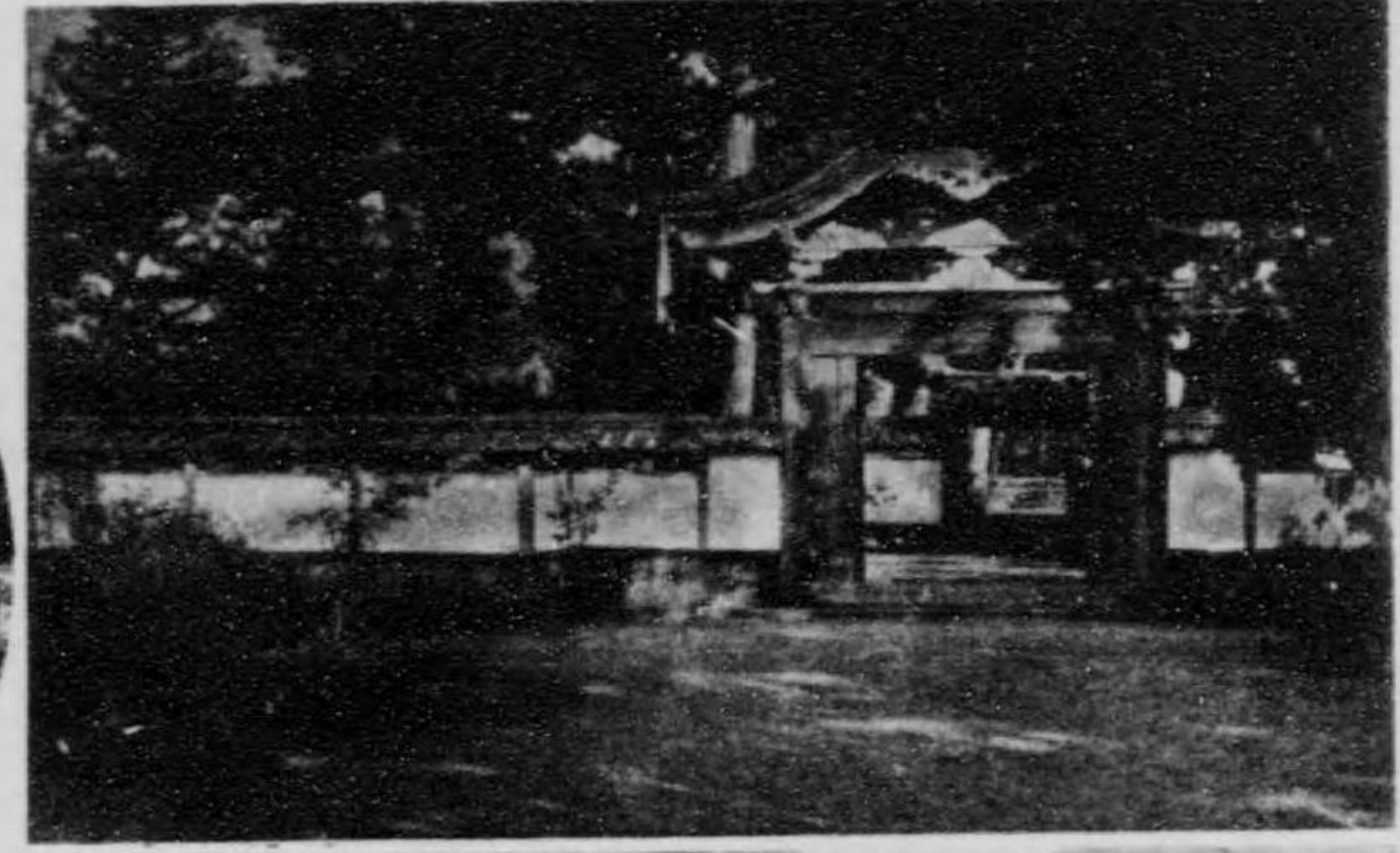
人の工夫にて掛け初め給ふと云ふ、川の
流れ強き故に、橋杭はれてもたず、此故
に水底を切石を以て三重にたゝみ、橋臺

川に注ぐ。

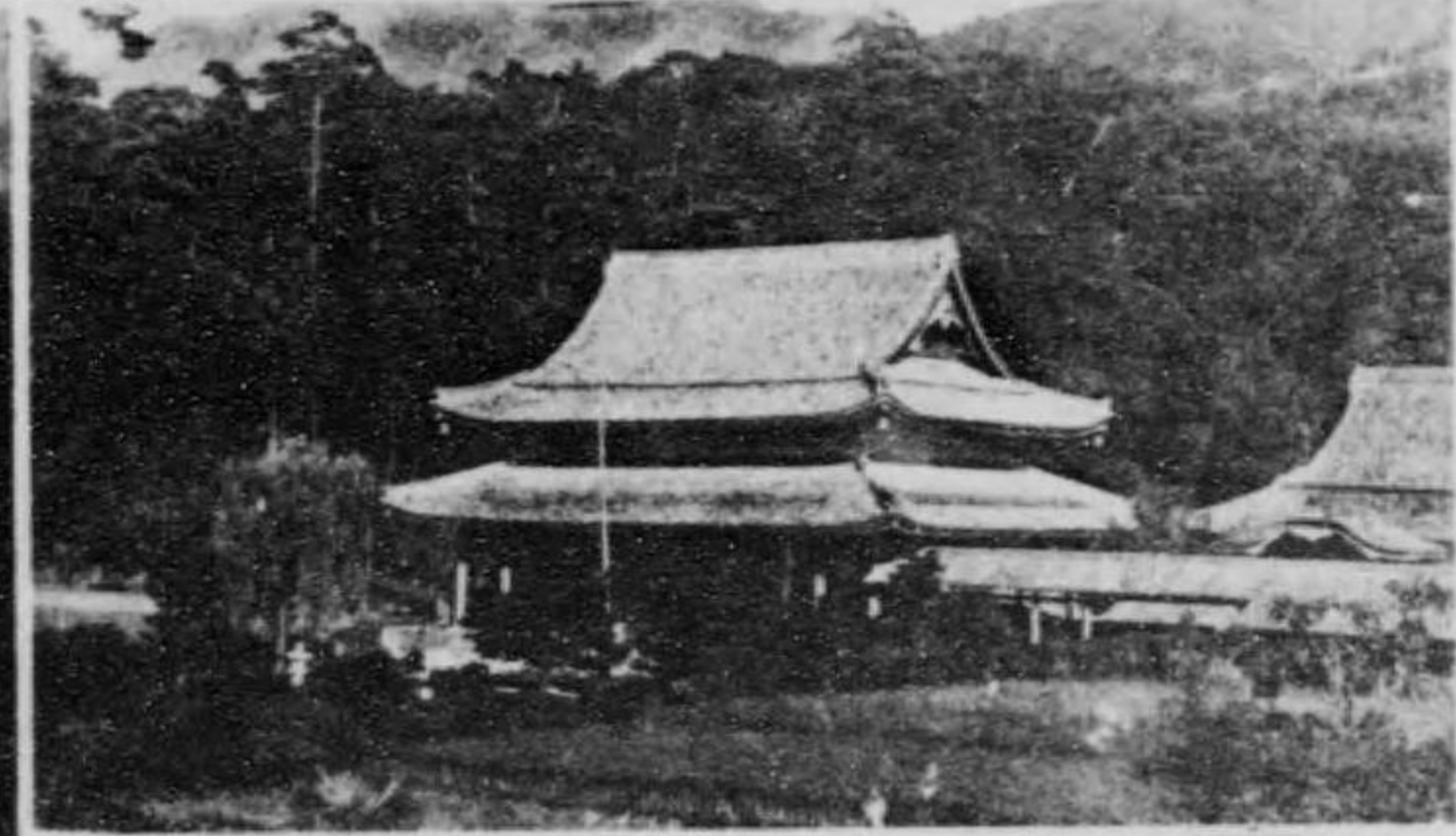
因に云ふ、瀧の上流なる一之坂は山口
萩間の要路にして、一名板堂峠とも稱す、

し熱誠藩治に傾注し文武を振興して君國
に盡さん事を期し幕府騷擾の際挺然勤王
の大義を唱へ以て明治維新の大業を翹賛
せり、明治四年五十三歳を以て薨す。

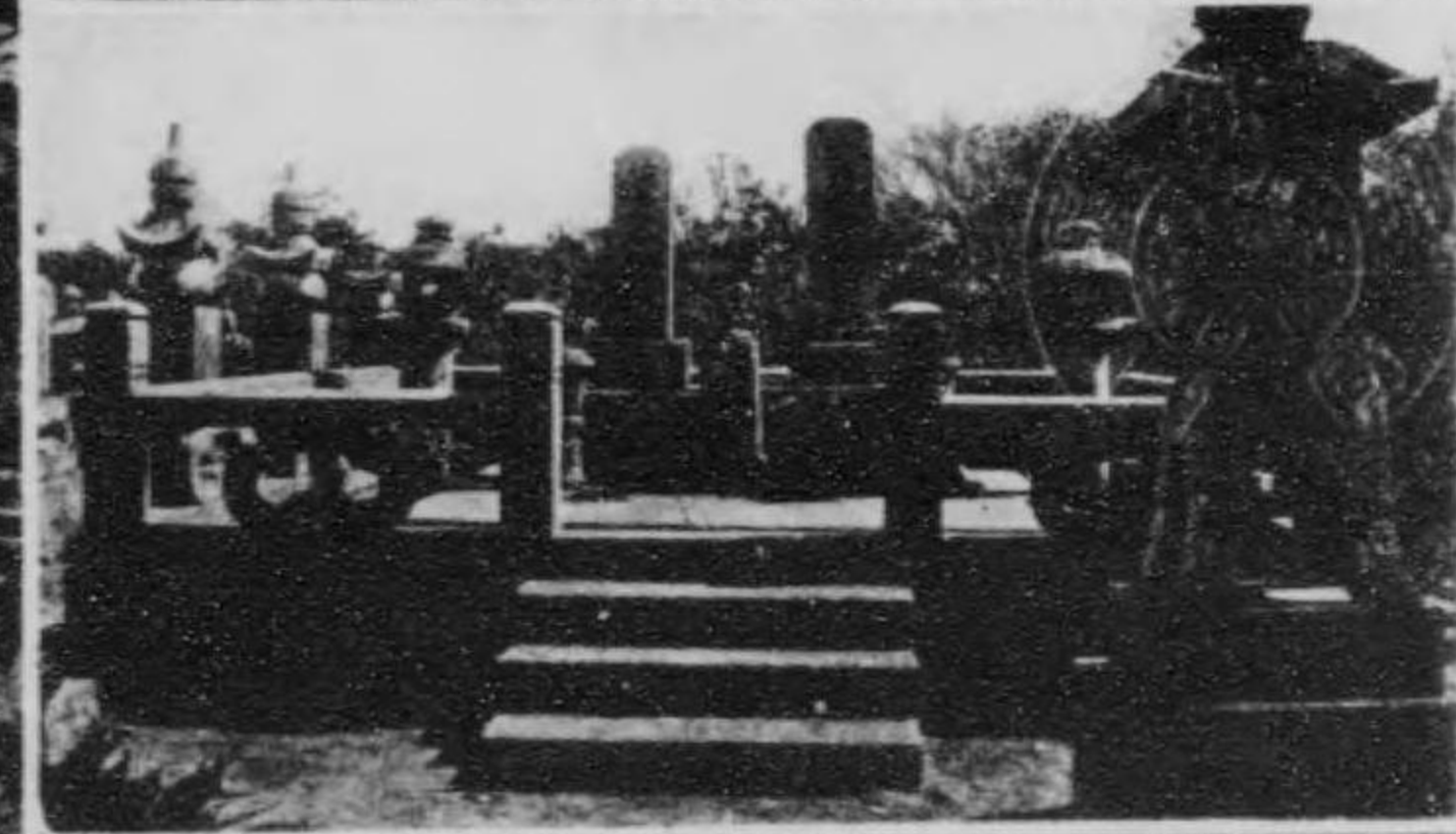
毛利輝元廟



東光寺

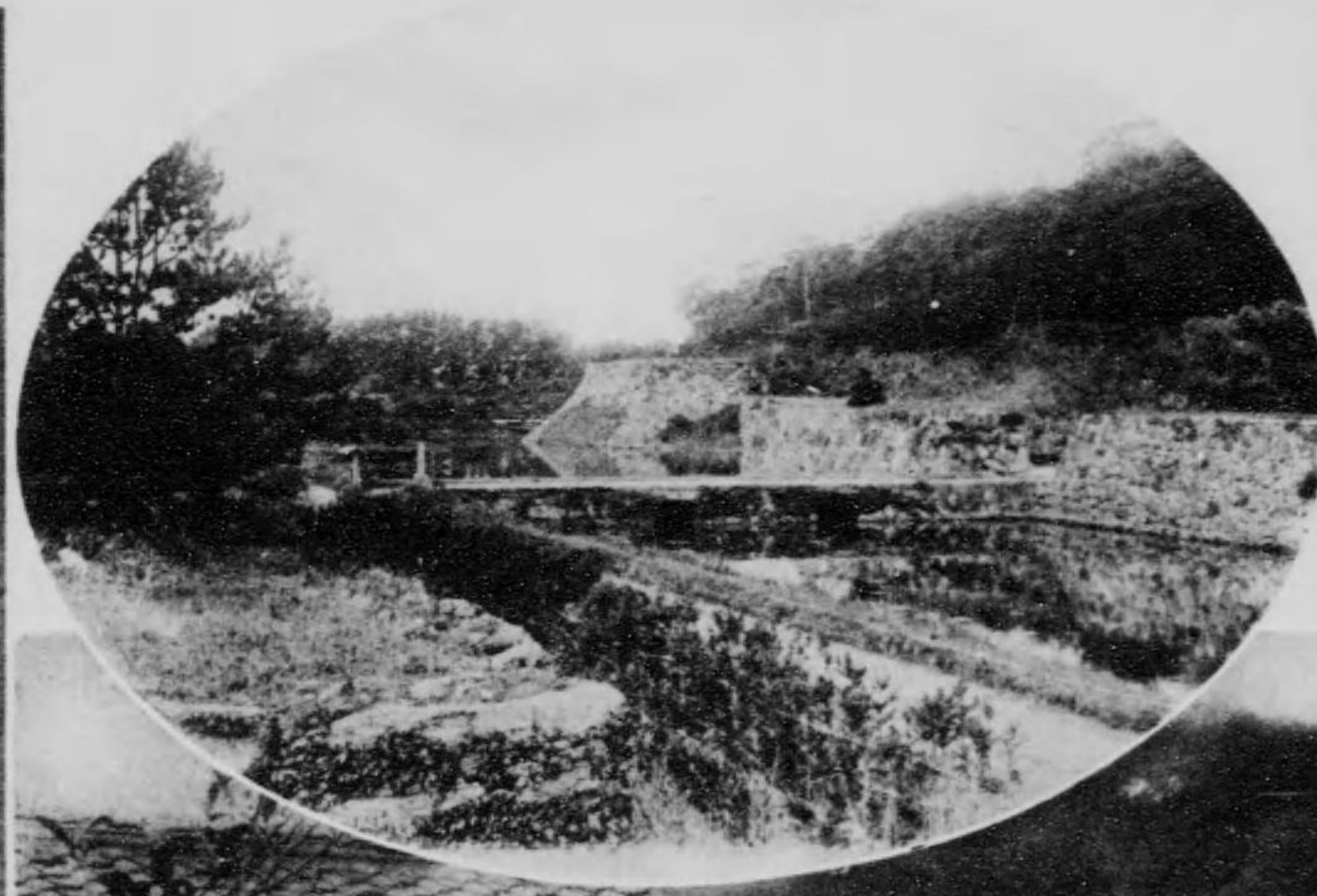


前原一誠墓



村田清風碑及聖賢堂

萩城址



吉田松蔭書



松蔭村塾

●松蔭村塾 (長門)

萩市街の東、阿武郡東分村なる松本に在り。是れ我が開國の先覺者吉田松蔭が嘗て後進子弟を訓育誘發せる學舎、松下

今日のおとづれ何と聞くらん身はたとひ武藏の野邊に朽るども留めおかまじ日本魂

妓に掲ぐる筆蹟は岡部精一氏所藏也

●毛利輝元廟 (萩)

中野梧一の囑を受け書を縣下の士族に下

して諭す所あり、其書一たび世上に傳播

するや一誠の名聲遠近に喧傳するに至れ

り、八年朝廷に召されたるも病を之て之

を辭せり、一誠常に時政に慷慨として不平を抱きつゝありたるが、九年十月同志



●松下村塾 (長門)

萩市街の東、阿武郡東分村なる松本に在り。是れ我が開國の先覺者吉田松陰が嘗て後進子弟を訓育誘發せる學舎、松下村塾なり。當時長藩の志士にして教を松下村塾に享けざるもの殆んど是れ無かりき、其重なる人々には久阪義助、高杉晋作、前原一誠、伊藤俊輔(博文)、井上聞多(馨)、品川彌二郎、山縣狂介(有朋)等あり。

吉田松陰、名は矩方、字は義卿、通稱大次郎後、寅次郎と改む、松陰と號し、又二十一回猛士と號せり、幼より敏慧、沈毅にして大度あり、十一歳にして藩侯に仕へ武教全書を講じて四筵を驚服せしむ、長するに及んで古今の史書に通曉し、殊に兵書に精し、其師山田頼毅、松陰を器とし訓ゆるに世上多事の際須く宇内の大勢を察すべきを以てす松陰大に悟る所あり、是より心を海外の情勢に傾け、嘉永二年九州に遊び弘く諸國の志士と交り三年藩侯に隨て江戸に出で、更に東北を歴遊して沿岸防備に注意し、六年米艦江戸灣に入り天下騷然たるに際し「急務條議」「攘夷和議」等の書を著はし、後佐久間象山を訪ふて其教を受け意を決して將に海外に赴かんとし果さず幕府の爲めに捕へられ、萩に送られて其家に禁錮せらる藩士等松陰の才學を慕ふて來り教を受くる者門に充つ、既にして赦に遇ふや慨然として時勢論一篇を草して討幕の議を論ず、偶々安政の大獄起る、松陰又捕へられて獄に下る而して糾問の結果、所謂大獄の志士等と共にせずと雖も、又別に間部老中の暗殺計畫の故を以て遂に死刑に處せらる、時は安政六年十月二十七日享年廿九、松陰刑に臨んで左の辭世を詠す

親を思ふ心に勝る親こゝろ

今日のおとづれ何と聞くらん
身はたとひ武藏の野邊に朽るども
留めおかまじ日本魂

茲に掲ぐる筆蹟は岡部精一氏所藏也

●毛利輝元廟 (萩)

萩町大下馬の天樹院に在り。同寺は初め櫻江に在りしを寶曆五年現今の地に移したりと。天樹公は輝元の諡號なり。

輝元は幼字幸鶴丸と云ふ長じて少輔太郎と稱す、隆元の子にして元就の孫なり、元龜二年六月、元就の後を繼ぎて山陰山陽十ヶ國を領したり、天正十年豊臣秀吉の中國の征途に上り、高松を攻むるや、時恰かも本能寺の變に會し、秀吉輝元と和を講じ直ちに軍を還へして光秀を討ち後ち關白たるに及び、輝元從四位下に進み十六年參議となり文祿四年從三位中納言に叙任す、次で島津征討及び朝鮮征伐に從軍して功あり、後關ヶ原の役、三成の爲めに迎へられて大阪城に在りたるが、吉川廣家、輝元の前途を憂慮して家康に款を通じ西軍大敗し輝元大阪城を遁れて俄に雅髮して宗瑞と號し家康に降る。家康茲に於て其領地七州を削り防長二國を與ふ、寛永二年四月廿七日七十三歳を以て薨す。法名を天樹院靈巖宗瑞と云ふ。

●前原一誠墓 (萩)

萩町今町の北、鶴江臺の南に在り。其弟なる佐世一清の墓と共に並び建てり。一誠、字は子明、通稱は彦太郎、後、八十郎と云ふ、長州の藩士なり、性剛強にして學を好み又劍道に達す、嘗て松下村塾に學び、慶應二年長崎に赴き英學を修む、戊辰の役奥羽に轉戦して功あり明治二年七月擧げられて參議に任じ、同十二月兵部大輔に轉ず、三年職を辭して故山に歸る、七年佐賀の亂起るや、山口縣令

中野梧一の囑を受け書を縣下の士族に下して諭す所あり、其書一たび世上に傳播するや一誠の名聲遠近に喧傳するに至れり、八年朝廷に召されたるも病を之て之を辭せり、一誠常に時政に懽焉として不平を抱きつゝありたるが、九年十月同志奥平謙輔、横山俊彦等と共に上京して閣下に奏し、君側の奸を掃はんとして兵を起したるも、戦ひ敗れて捕へられ、同年十二月斬に處せらる、享年四十二。

●聖賢堂、村田清風碑 (萩)

村田清風は長藩士にして四郎左衛門と稱し後ち織部と改む、清風は其號なり、嘗て火器陣法を編製す、文政六年藩政に參與して大に功績を擧ぐ常に藩の爲に盡瘁し長藩が明治維新の基礎を翼賛したるもの蓋し清風の功に基くもの多し安政二年七十二歳を以て歿す、聖賢堂は其遺屋にして歴史的に其功績を語る記念物と謂ふ可し。

●萩城址 (萩)

萩町の西北端なる海岸、指月山に在り前に阿武川の流を控へ、後は指月の山體に倚り、其結構莊麗ならざるも壘壁壘濠優に據守するに足る。本城は往古北條上野前司直元の居城たり、後天正年間吉見正頼之に據り、慶長年間毛利輝元、周防長門の二州を領するに及んで大に本城を修築し、爾後累代の居城となせり、而して其十三世敬親に至り文久二年、本城を撤して山口町に移りたり、今其城址として存する本丸は濠渠を繞らし、東門、南門、本丸橋等の入口あり、天主閣繩々として聳へ、城櫓尙依然たり。又本丸橋の入口に一株の巨松あり百倉松と云ふ、周圍六廻に餘り其枝葉方四五十歩の廣きに亘る、傳る所に依れば往時倉某なるもの、一株の稚松を栽へしに星霜久しきを経て此巨松たるに至りしといふ。

●古壇の浦 (長門)

平家滅亡の地として歴史上著名なる壇の浦の舊址は下関市の東端字壇の浦に在り。俗に古壇の浦と稱す。此地長府二の宮の沖干潮際に方りて同宮の第三の鳥居建てり。同地より早瀬の明神に至るまで古へ五百壇の石階ありしを以て壇の浦と呼ぶ、昔時は繁榮なる一漁市なりしが徳川幕府の末年、瀬海防禦の爲め、此地に砲臺を築設するの必要上文久三年漁家を取拂ひて現今の壇の浦に移轉せしめられた、平氏滅亡當時の壇の浦は其名のみ存して僅に歴史の傳を偲ぶのみ。此地背後に火の山を負ひ、西は御裳川を控へ、前は早瀬の海峡を隔て、豊前の神前に對す嘉永四年、平氏安徳天皇を奉じて讃岐の屋島より此浦に連れ來り、茲に根據を構へて、優勢なる源氏を邀へて華々しく最後の決戦を行ひしも武運拙くして終に悲壯なる塵滅を遂げたり。足一とたび此地を踏むまでもなく舊趾の寫真に對するもの誰か無限の感に打たれざるものあらんや。

柴野 栗山

黒鼠餐牛丹水乾 六龍西幸海漫々
簪纓滿地當時恨 獨有陶真曲裡彈

安積 良齋

黒風吹海浪掀天 往事悠悠轉可憐
萬里東來犯城闕 六龍西幸御樓船
冤旒空葬淵中月 粉黛俱消浦上煙
千古崖山同峻節 君臣至死不能捐

梁川 星巖

鼓聲鞞轄白波寒 海勢弓彎五百壇
誰把君臣同極恨 鯤絃鐵撥月中彈

●安徳天皇御陵 (下の關)

阿彌陀寺御陵と稱す。下の關市阿彌陀寺町なる赤間宮境内と相接して、其左方に在り。御陵地域内には一株の老松生ひ

茂りて翠色洒らんとす、號けて薄墨の松と云ふ。是れ足利尊氏西海より東上の際、望み見て一首の和歌を詠じたる松なりと傳ふ。

安徳天皇は高倉天皇の第一皇子にして御母は平清盛の女、建禮門院平徳子なり、治承二年十二月を以て六波羅の第に御降誕あり、同四年正月禰りを受けて第八十一代の帝位に即き給ふ。養和元年清盛薨じて後は平氏の勢力頓に衰へ、到る所に源氏の爲に敗られ、壽永二年義仲攻め上りて京洛を犯すや、宗盛は天皇を奉じて讃岐國屋島に逃れ、平氏の一族一門跡を追ふて都を落ちたりしが、又も源氏の爲めに大敗を取り、更に長門の壇の浦に赴きたるも、又々義經の爲めに撃ち破られ、遂に文治元年四月平氏の全滅するに及び、天皇は之れと運命を共に爲したまひ、御母二位の尼の手に抱かせられたる懐壇の浦の海に投じて崩御あらせられたり。

●平家の七墓 (下の關)

赤間の宮の背後なる丘陵の半腹に在り、星霜風雨七百年、石面苔蒸し朽ちて刻字殆んど讀む可からざるも、辛ふじて之を檢すれば經盛、資盛、敦盛、知盛、教經、清經外一墓にして、所謂これ平家の七盛墳なるもの、此の墳を前列として其後に亦宗長、忠光、景經、景俊、盛繼外二墓の七墓建てり。宗祇法師の「筑紫道記」に左の文あり。

「次に平家の人々の影あり、新中納言

知盛、修理大夫經盛、内藏頭信基、宰相敦盛、中將資盛、能登守教經等なり、女房には大納言のすけの局を始め四五人あり中にも教經武勇の道すぐれたりけんもふしぎに覺へて。

梓弓八重の汐合に消ぬ名も

あはれはかなき跡のしら波

●御裳川 (長門)

壇の浦に注げる川にして其流末は平氏潰滅の凄慘を演じたる所なり、即ち安徳天皇の崩せられしは此の流末なりとす。當時の辭世なる

今ぞ知る御裳川の流れには

波の底にも都ありとは

の詠と共に有名なる歴史の地として知らる。左に「平家物語」の一節を抄す。

「二位殿は日比より思ひ設け給へる事なれば鈍色の二ぎぬ打被さねり袴のそば高く取り神靈を脇に挟み寶劍を腰にさし主上を抱き參らせて、我は女なりとも敵の手にはかかるまじ主上の御供に參るなり御志思ひたまはん人々は急ぎつゞき給へやとてしづ／＼と船へぞ歩み出られける主上今年は八歳にぞならせ在はします、御年の程より遙にねびさせ給ひて御容いつくしく傍も照輝く計りなり御髪黒くゆら／＼と御脊中過ぎさせ給ひける主上あきたる御有様にてそも／＼あませ、我れば何地へ具して行んとはするぞと仰せければ二位殿涙をばら／＼と流して君は未だ知し召され候はずや今萬葉の主とは生れさせ給へども御運既に盡きさせ給ひ候ぬ此國は物憂き境にて候あの波の上にこそ極樂浄土とてめでたき都の候ふと抱き參らせて千尋の底にぞ沈み給ふ云々

昭憲皇太后

今もなほ袖こそぬるれわたつみの

龍の都のみゆきおもへば

●平家蟹 (長門)

御裳川の海に注ぐ邊に多く産す、俗に之れを平家蟹と云ふ。其甲に特殊の皺ありて宛も憤怒せる人面の如し。傳説に依れば是れ平家滅亡したる後其怨靈の蟹に化したるものなりと云ふ、妄誕素より信するに足らざるも、亦一種の天然記念物として保存の價値なきにあらざるべし。



安徳天皇御陵



阿彌陀寺御陵と稱す。下の關市阿彌陀寺町なる赤岡宮境内と相接して、其左方に在り。御陵地域内には一株の老松生ひ

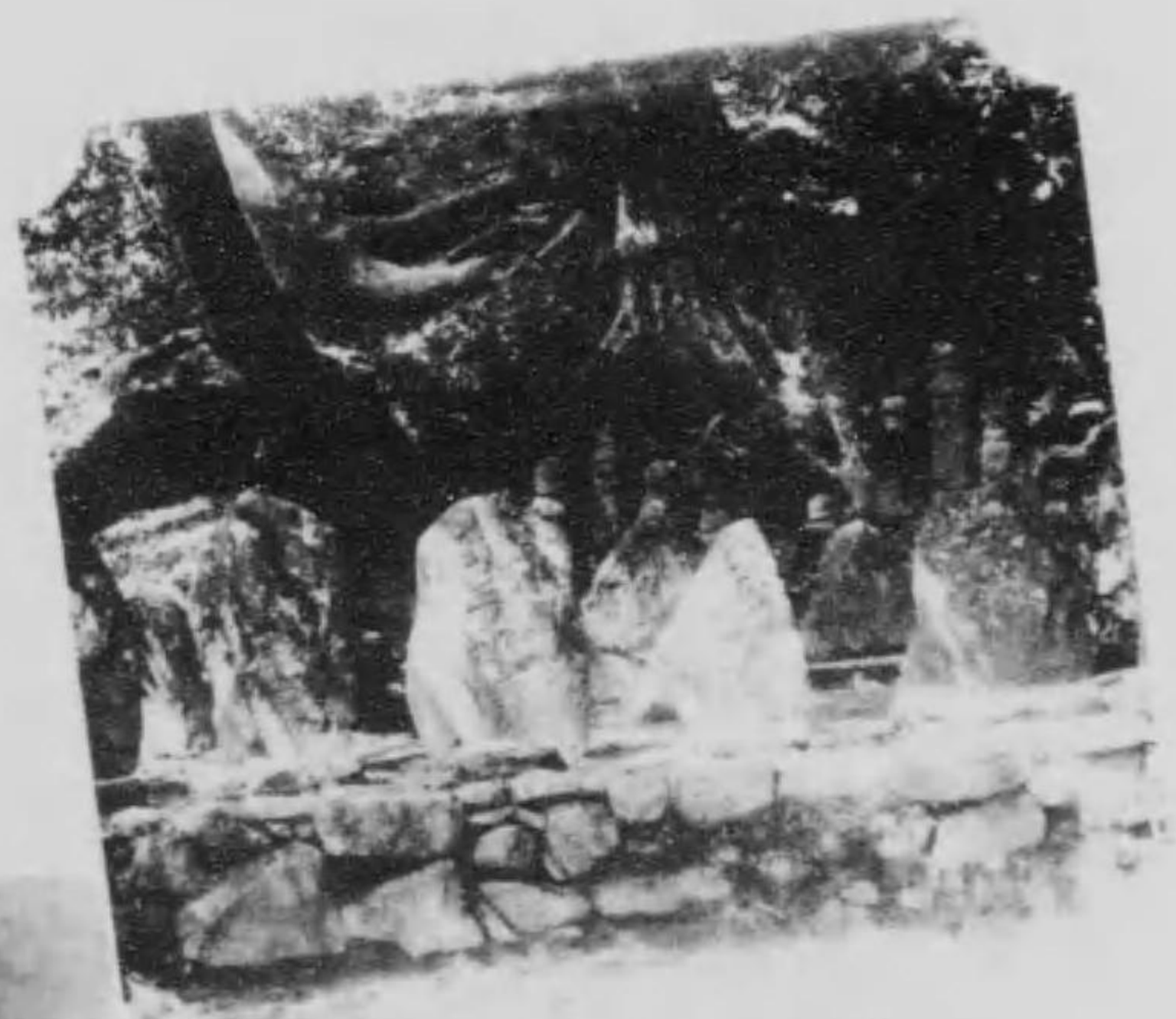
平家蟹



御裳川



人あり中にも教経武勇の道すぐれたりけんもふしぎに覺へて。梓弓八重の汐合に消ぬ名もあはれはかなき跡のしら波



平家七墓

て宛せしむる人面の如し。傳説に依れば是れ平家滅亡したる後其怨靈の輩に化したるものなりと云ふ、安徳素より信するに足らざるも、亦一種の天然記念物として保存の價値なきにあらざるべし。



古櫓の浦古戦場



春帆樓



龜山神社



赤間の宮



關門海峽

上ノ二二二



下關市街

●下關市街（長門）

舊稱赤間ヶ關と云ひしが、今下の關と稱す、下の關の稱は蓋し周防の上の關及び中の關に對して云へるものなり、一名

く天皇の冥福を祈らしめ給ふ。斯くて後阿彌陀寺は寺領七十石を領し淨土宗の念佛道場となりしが、明治維新後寺を廢し御影堂を改めて天皇社と爲し、同八年官幣中社に列したり即ち是れ赤間の宮な

等あり、拜殿左傍の朝鮮蘇鐵の名木は、豊太閤が朝鮮征伐凱旋の際同地より持歸りて當社へ寄附したるものなりと云ふ。

●春帆樓（下の圖）

阿彌陀町の北方、紫石山の麓に一旅館あり

●下關市街 (長門)

舊稱赤間ヶ關と云ひしが、今下の關と稱す、下の關の稱は蓋し周防の上の關及び中の關に對して云へるものなり、一名馬關と稱するは頼山陽曾て茲に遊び赤間ヶ關の名稱雅ならずとして馬關と命名したるに基く。豊浦郡の南端に在りて豊前の門司と相對す東は壇浦に連り、西は彦島を控へ北は丘陵を負ひ、南は一大港灣を擁し港内水深くして船舶の碇泊に適し大阪以西に於ける第一の良港にして廣島に亞げる商業の殷盛地たり、且つ山陽鐵道の終點地にして僅に七町の海峽を隔て九州線の門司驛に對し此間連絡汽船頻繁に往復し九州に赴かんとする旅客は下關停車場を出でずして直ちに棧橋より汽船に投じて門司棧橋に達し以て門司停車場に着するを得べし。

市街は東西に長く壇の浦より下關停車場に至る延長二里に及ぶ、人家櫛比し官衙公館多く備り陸海交通の便最も良し。

頼山陽

長街如帶巖波光 面々青山護萬橋

莫性潮頭駛於箭 厓門一出是玄洋

同

煙籠兩岸暗帆檣 仄見津樓燈火光

夜半鐘聲不知處 阿彌陀寺雨蒼茫

●赤間の宮 (下の關)

下關市阿彌陀寺町に在り官幣中社にして安徳天皇を祀る。素と此地に阿彌陀寺と稱する一刹あり、貞觀年中、行教和尚の開基に係り、寺中に宇佐八幡を祀りて鎮守神となせり。壽永四年源平壇の浦に戦ひ、平氏敗れて全滅し、安徳帝海中に崩じ給ふや、土人は御遺體を海底より獲て之を當寺に葬り奉りたり、其翌年勅を下し賜いて寺内の御陵地に御影堂を建設し同時に阿彌陀寺を以て勅願寺と爲し永

く天皇の冥福を祈らしめ給ふ。斯くて後阿彌陀寺は寺領七十石を領し淨土宗の念佛道場となりしが、明治維新後寺を廢し御影堂を改めて天皇社と爲し、同八年官幣中社に列したり即ち是れ赤間の宮なり、翌九年、社殿の改造に着手し工事七ヶ年を要し明治十五年三月を以て全く竣成を告げ茲に祠官を置きて奉仕せしめらるゝ事となりたり。宮の前面は硯の海に臨み、左は壇の浦に接し右は門裏を望み新羅崎、百濟野、岩流島等の古蹟悉く眸裡に集る、社殿は拜殿、神殿、神饌所、社務所等孰れも結構壯麗なり、毎年舊三月二十三日より三日間臨時祭を執行し例祭は毎年十月七日に行ふ。臨時祭當日は稻荷花街の娼妓盛粧して參詣するの慣例あり、是れ先帝會と稱するものにして、平氏滅亡の際宮仕せる女房達は長門の各海濱に漂泊し遊女となりしも、先帝の忌に會して其祠に詣づるとの意に基づける遺風なりと云ふ。當宮の寶物には安徳帝御劔、後土御門天皇繪旨、後奈良天皇繪旨、六波羅廳宣、毛利元就證書、小早川隆景書狀、毛利秀元證書、豊太閤の盃、同假面、土佐光信筆平家一族の畫像、源平合戦圖等あり。

●龜山神社 (下の關)

下關市、外濱町と神宮司町との間に在り、龜山八幡宮と稱す、郷社にして仲哀天皇、應神天皇、神功皇后を合祀し、市内第一の古祠なり、當社は清和天皇の貞觀元年初めて此地に勸請し、後ち足利氏の末葉に至つて社殿頽廢に傾きしを大内義隆の長門を領するに及んで、之を重修し以て舊觀に復したり境内一千八百六十七坪、前面より海峽を隔て、門司港を望み、風景頗る佳絶なり、鳥居の南方は海岸に接し北は石階を上れば樓門あり、左右に回廊を廻らし、本殿、拜殿、能舞臺

頼山陽

紫翠層々館鬢鬢 山開一水忽廻環

高鼻有句真相副 硯海潮通文字關

顯輔

懸すてふもじの關守幾度か

我がきつらん心つくしに

等あり、拜殿左傍の朝鮮蘇鐵の名木は、豊太閤が朝鮮征伐凱旋の際同地より持歸りて當社へ寄附したるものなりと云ふ。

●春帆樓 (下の關)

阿彌陀町の北方、紫石山の麓に一旅館あり、春帆樓と號く、是れ明治二十八年日清戦役の際、清國講和大使李鴻章渡來して、我が全權大使伊藤博文、陸奥宗光と會し、講和條約を締結したる所として其名歴史的に著はる。

●關門海峽 (下の關)

下關海峽の稱にて、瀬戸内海の西門なり。又馬關海峽、長豊海峽とも稱す、關門とは下の關と門司との各字を綜合せるものなり、其位置長豊兩國の間に在りて、茲に要塞を設けたり。海峽の長さ約七哩、潮流劇甚を極む東口を早瀬瀬戸と稱す即ち壇の浦と門司との間にして其間三百二十間、西口には彦島ありて二國に分ち、其南岸は豊前の大里にて此間を大瀬戸と云ふ其距離五百三十間あり。彦島と北岸下關伊崎町との間を小瀬戸と稱し其距離僅に五十間に過ぎず、東西の兩口には其に多くの淺堆、岩礁あり。又西口の航路には與治兵衛岩、鳴瀬等の險あり。水深は下關附近は僅に七呎に過ぎずと云ふ。因に曰ふ、與治兵衛岩は、其附近を俗に與治兵衛の瀬と稱す、豊公征韓の役の際公の乗船此地を過る時、船頭明石與治兵衛なる者態と乗船を此瀬に乗り上げ豊公に危害を加へんと圖りたるが顯はれて終に誅せられたり、是より後ち此名を命ずるに至れり。

頼山陽

紫翠層々館鬢鬢 山開一水忽廻環

高鼻有句真相副 硯海潮通文字關

顯輔

懸すてふもじの關守幾度か

我がきつらん心つくしに

●香椎宮（筑前）

官幣大社香椎宮は博多灣の東岸に臨める香椎村に鎮座す、即ち九州鐵道香椎驛より五町餘の所なり、祭神三座、中殿に神功皇后、左殿に應神天皇、右殿に底筒男命、中筒男命、表筒男命を祭る、當社は四所宗廟の一なりしを以て歴代天皇の崇敬淺からず。

今の社域は仲哀天皇神功皇后行宮の地にして、天皇崩御の後皇后茲に留まりて逆賊を討ち平げ、次で三韓遠征の兵を出し凱旋の轡を駐め給ひぬ、斯く武威を海外にまで輝かし給へる守護神なれば、朝廷屢々勅使を遣はして官幣を捧げ給ふ、現在の社殿は本殿、渡殿、拜殿、神庫、神輿庫、神饌所、社務所繪馬殿等あり、攝社には仲哀天皇奉祀の社殿たる古宮及武内神社、卷尾神社の三社あり、境内五千三百七十餘坪老樹四圍に鬱茂して風景自ら幽邃、又有名なる綾杉は瑞籬の前に參々として矗立す。

此綾杉は神功皇后征韓後兵器を此所に埋め其標として手づから杉苗植へ給ひし所なりと傳ふ、本社の際らに紫白二種の藤あり老幹繁枝花季には色を競ふて頗る美觀なり、當社の社殿樓門總て古代建造に則れるものなれば、斯界拜觀者に取っては最も得易からざる好典型なりと稱さる。

當社前に在る綾杉の外若杉山若杉神社内にも『綾杉溪』あり、若杉栗野の南に當り、立花山と相對し山勢雄渾の山なり、山上鎮座の若杉神社は元大祖權現と稱し伊弉諾尊を祭神とす、神功皇后三韓征伐前此神に祈る所あり、新羅より凱旋後香椎の杉を此に栽させ給ふ、今や八尋に及ぶ老杉を見るに至れりと、新編古今集に香椎を詠める歌あり。

さは姫のころもを誰に檀日瀾
うらなみ遠く立つ霞かな

香椎は昔、加思布江の浦、香椎瀨、檀日浦として呼ばれ詩歌の材料となりしもの多し。

●芥屋の大門（筑前）

筑前志摩半島の西に一岬角あり、之を大門岬と言ひ芥屋村大字芥屋に屬す、岬は海に斗出すること約五町餘、其岸は海上に峙ち、岩は六角なるあり八角なるありて、恰も數萬本の柱を削り成して之を束ねたるが如く、巖下水深く其色藍を流せるに似たり、巖壁の下に一の洞窟あり口は北に向ひ濶さ五間餘風荒き日は怒濤を吞吐して其響き雷の如し、實に筑北第一の偉觀たり。

●名島の檣石（筑前）

名島は箱崎停車場より北二十五町多々良河口の一村落なり、其海岸に奇石の横はるものありて『檣石』と名く、石は直径二尺より三尺餘、長さ六七尺のもの七八箇あり中には鐵輪を嵌めたる跡とも覺しく幅二寸餘り凹みたる處も見ゆ、香椎宮舊記に神功皇后凱旋の時御船の帆柱を此所に捨つ終に化石すとあり。

●都府樓址（筑前）

一從貶謫就柴荆 萬死競々踟躕情
都府樓樓看瓦色 觀音寺只聽鐘聲
中懷好逐孤雲去 外物相逢滿月迎
此地雖身無檢繫 何爲寸步出門行
觀音寺の西、字築山の小丘は往昔御笠の里と呼べる所にして、是れ即ち太宰府官廳の在りし舊址なり。

其南方大門の址より北に當りて都府樓址在り、太宰府官廳と此都府樓との間に大建造物ありしと思しく、諸處に礎石を存せり、礎は皆な方六尺餘にして中央に圓形の座を付けて柱を受くる所とす、按ずるに神功皇后三韓征伐を了へ次で筑紫の内亂を鎮め給ふ、民皆な塔に安んじ西海の政事漸く盛んならんとす、因て應神天皇の十三年武内宿禰をして九國を統治

せしめ、兼て海北の政務を乗らしめ給ふ是れ太宰の帥の始めなり、次で宣化天皇の御宇那津のほとりに官衙を設けて諸國の米穀を集め大伴盤連をして國政を取らしめ給ふ、則ち太宰府官廳の始めなるべし、當時は九國二島を統轄して政務を行ひ、西國の藩鎮として異賊の防禦に備へたり、故に其任最も重く其長官を帥とし勤任にして多くは有品の親王を以て之に任せり。

都府樓は則ち都督府の樓なれば其名稱ありもしのならん、天智天皇の御宇に創建せる正廳にして藩客に饗を給ふ故にや高層なる樓を構へたりとぞ樓址北方の地中二尺餘低き處にも數箇の礎あり、之に土中に埋没せるものを加ふれば總數六十箇以上あるべし、其形府廳址のものと同じく、方六尺餘にして柱を受くる所は圓形を爲して四五寸隆起す、此近傍土中に古瓦の殘片多し、樓屋に用ひたる瓦は外國品にして其色淡黒硬きこと鐵の如し、文雅の士之を硯に製して愛玩す、今太宰府址に一碑を立て、當時の事を勅せり。

●海の中道（筑前）

海の中道の所在に就て貝原益軒は宗像郡勝浦より梅津との間の海中を海の中道と言ふ其長さ十間許りあり、昔は勝浦と津屋の崎との間は皆な入海なりし故此處は兩方に海ありしなり、海中にある道なれば中道と言へるなるべし」と記せり。
然れども今人の呼んで『海の中道』とする所は、同郡和白村奈多より志和島に至る長洲を指すものにして、洲は海中に斗出して福岡灣の右壁を爲し其海汀恰も一條の帯を展べたるが如く、幅は大抵二三町より廣き所も十町に過ぎず、洲北は玄海灘、南は灣に面し白沙青松三里の長きに亘り風景明媚、其趣き稍や丹後の天の橋立に似たり、汀上の沙は純白、青松梢を均ふし翠色滴るが如し。

香椎の綾杉



都督府樓址



香推宮樓門



芥屋の大門



香推を詠める歌あり。
さは姫のころもを誰に檀日濕
うらなみ遠く立つ霞かな

の内亂を鎮め給ふ、民皆な塔に安んじ西
海の政事漸く盛んならんとす、因て應神
天皇の十三年武内宿禰をして九國を統治

香推の綾杉

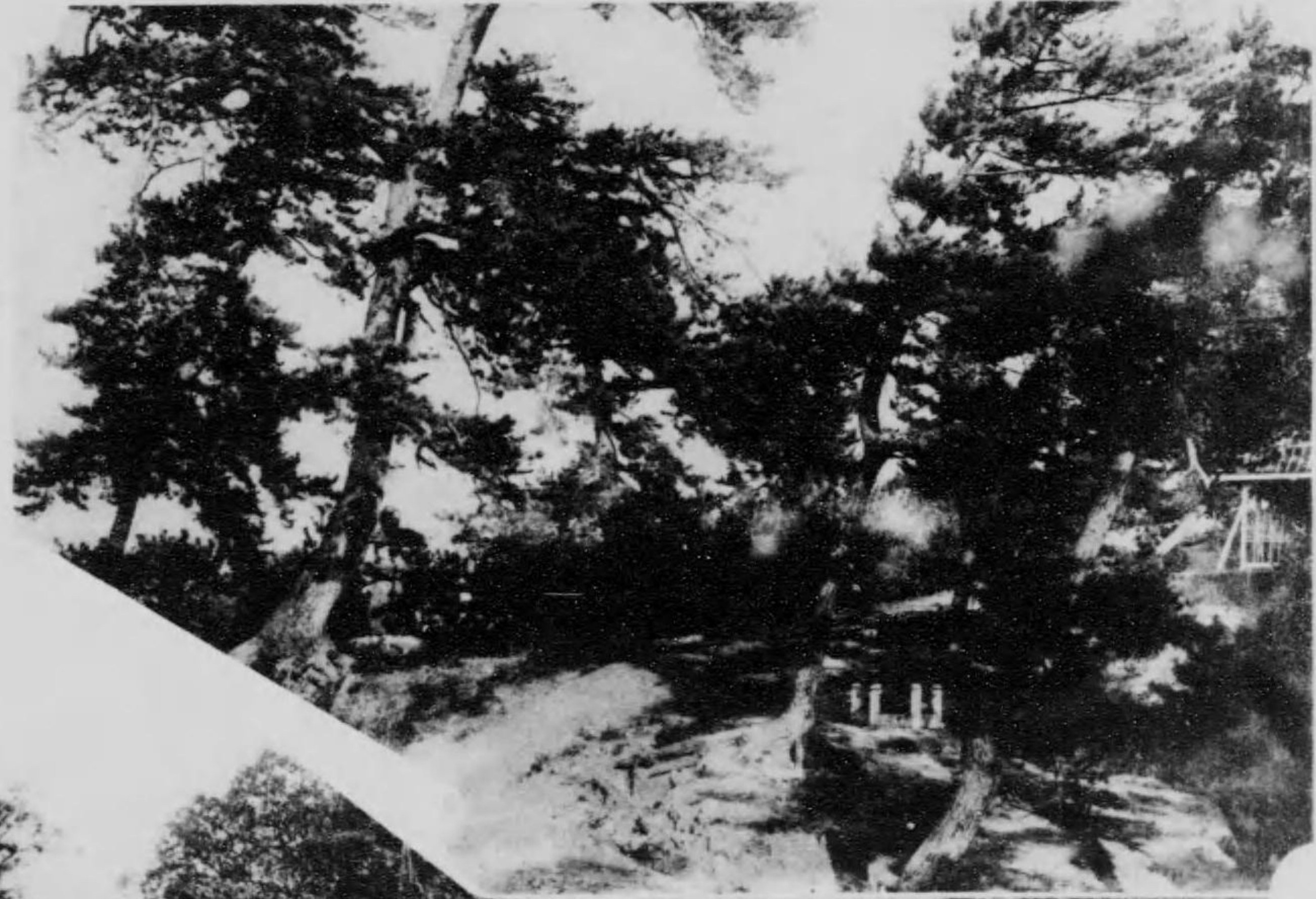


洞中の道



名島の石橋

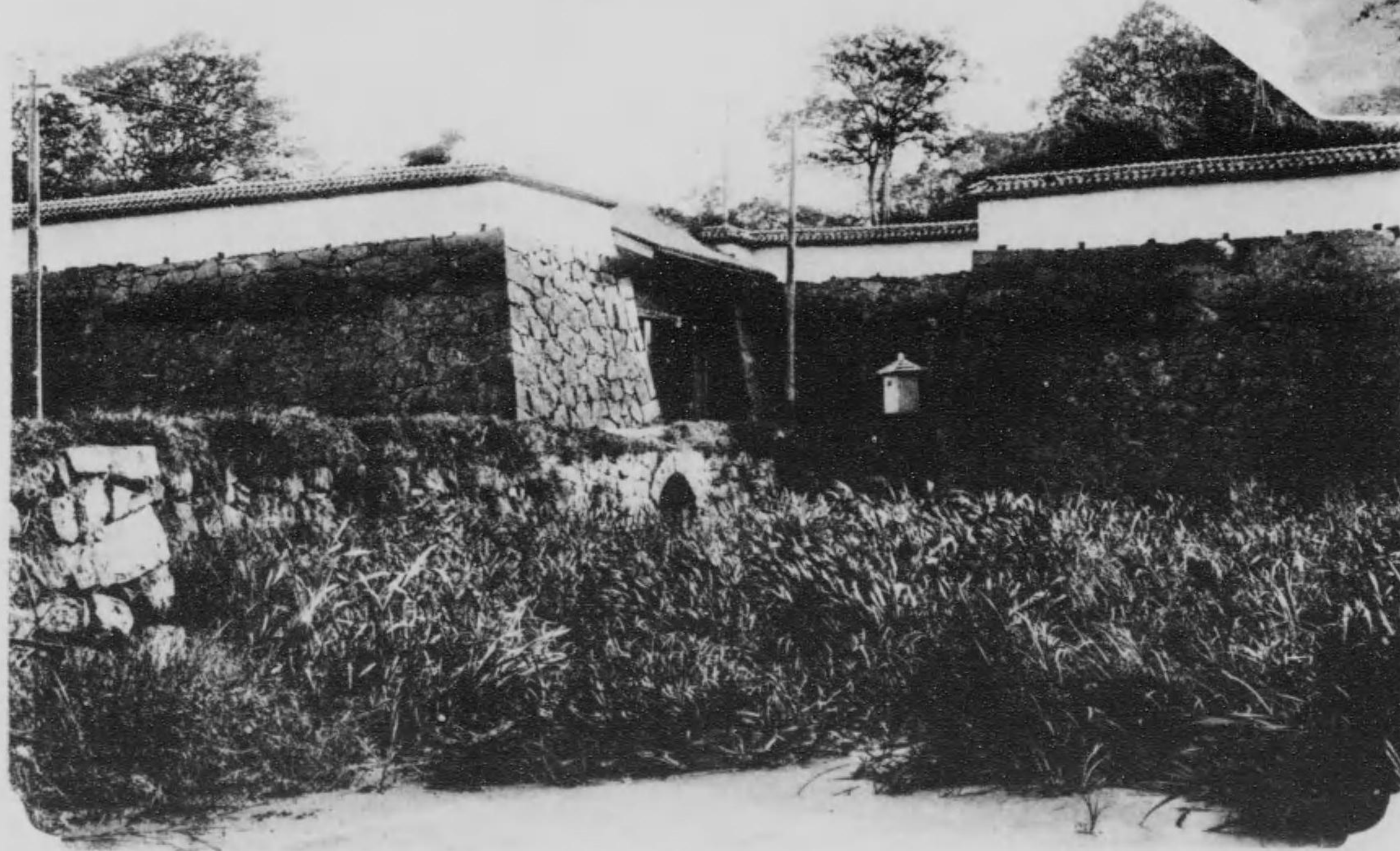
海瀨、南は海に面し白沙青松三里の長き
に亘り風景明媚、其趣き稍や丹後の天の
橋立に似たり、汀上の沙は純白、青松梢を
均ふし翠色滴るが如し。



黒田如水筆蹟



上ノ二二四



福 岡 西 公 園

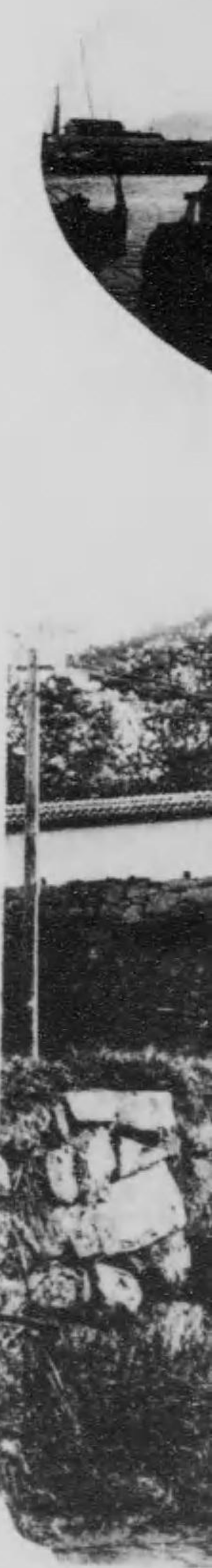
● 福岡城址 (筑前福岡)

福岡城址は市の西南に在りて四方繞すに漚を以てし、東西凡そ九町南北凡そ六町、北に向びて二城門を設く、慶長五年黒田長政筑前全州五十貳萬石を領して入

華は漸次舊に復し、徳川氏に至りても黒田氏歴世の治所として益々繁華を増し以て今日に至れり『海はらは博多の沖にかゝりけるもろこし舟の時つくるなり』の古歌は當年の袖の涙を語るものなり。

廣瀬 淡窓

年河内國櫛田の神を遷して當地に鎮祭し後、天慶四年素盞鳴尊を山城國より遷して合祀すと言ふ、境内廣袤二千四百六十餘坪ありて、本殿、拜殿、神輿庫、文庫、繪馬殿、能樂殿、神門等あり、元弘三年菊池寂阿官軍に屬し、少貳英時と戦ひて



●福岡城址 (筑前福岡)

福岡城址は市の西南に在りて四方繞すに濠を以てし、東西凡そ九町南北凡そ六町、北に向びて二城門を設く、慶長五年黒田長政筑前全州五十貳萬石を領して入城の始め此地に繩張して當城を築けり。

當時の外郭は東は今の西中島橋、西は通町黒門に至り、上下名島町、吳服町、本町、大工町、實子町の六町は郭内に屬せりと言ふ、城の外壁は往昔寇防禦の爲め博多灣に築きありし石壘を毀ちて築造せしものにして、其西側に當れる濠幅六町の廣きに亘り、俗に之を大堀と稱す城を福岡と名けしは黒田氏の祖先高政は備前國邑久郡福岡に居住せしを以て、其業を重んじて同地名を襲へるものなり、此地元は福岡と稱し博多警固所を置ける故城なりき、今警護村の名、城南の村家に殘る、明治維新後城址は陸軍省に屬し現に第十二旅團第二十四聯隊の兵營たり。

舊城下たりし福岡市は縣の北方海岸の中央に位し、北は一帶博多灣に面し、東は御笠川、西は樋井川を以て限られ、那珂川其中央を流る、東西二里南北二十町、市坊の數六十二、實に九州第一の都會なり。
往古太宰府の置かれざる前に於て既に人烟稠密なる市邑を成し市の一部なる博多は濠縣として夙に海港を以て知られ海外船舶來航の地たりき、殊に太宰府に近く最も要衝に當れるを以て守護職を置き武器を備へ外敵防禦の要地とせらる、文永弘安の役に於ても此地が重要な防禦點なりしを見るべし、其後袖の湊に唐船の碇泊せし事史に見ゆ、戰國時代大友龍造寺の二氏此地を争ひ、民家の過半は兵燹に罹り全く衰頽せしを、天正十五年豊臣氏黒田孝高を此處に封せしより町の繁

華は漸次舊に復し、徳川氏に至りても黒田氏歴世の治所として益々繁華を増し以て今日に至れり『海はらは博多の沖にかゝりけるもろこし舟の時つくるなり』の古歌は當年の袖の湊を語るものなり。

伏敵門頭浪拍天 當時築石尙依然
元兵沒海蹤安在 神后征韓事久傳
城郭影浮春浦月 絃歌聲穩暮洲烟
昇平有象君看取 處々垂楊繫買船
宋人鄭所南『攻倭敗北歌』として曰く
東方九種倭一爾 海水截界自區宇
徐福廟前秦月寒 猶怨當時羸政苦
厥今大羊貪猶熾 睡目東望心如虎
驅兵觀海氣吞空 勢力雖強天不與
鬼吹黑潮播海飄 電大於拳密如雨
七千巨艦百萬兵 老龍怒取歸水府
犬羊發怒與天敵 志士悶悶病如蟲
翻身鼓堂一笑時 萬古萬古萬萬古

●福岡西公園 (筑前福岡)

福岡西公園は市の西北荒戸の海に臨める荒津山上に在り、一に荒津山公園と言ふ、山上荒津神社の周圍は群松鬱々として茂生す、古來荒津の名は博多より荒津山に至る一帶の總稱なりしが、今は此一角に其名を存するのみ、此園は明治十四年十一月を以て開き、一萬零八百二十七坪の地域を占む。

北岸は斷崖峭立、斜めに殘島と相對し北には海の中道の翠松を煙霞模糊の間に望み、福岡全市の碧瓦粉壁亦一眸の中に在り、頭を回らせば雷山、筑紫富士は西南に屹立し、近郊の田圃は某局の如く其間に横はりて、屬目快澗なり。

●榊田神社 (博多)

榊田神社は博多祇園町に鎮座す、中殿は榊田大明神左殿は天照大神右殿は祇園大明神なり、孝謙天皇の天平寶字元

年河内國榊田の神を遷して當地に鎮祭し後、天慶四年素盞鳴尊を山城國より遷して合祀すと言ふ、境内廣袤二千四百六十餘坪ありて、本殿、拜殿、神輿庫、文庫、繪馬殿、能樂殿、神門等あり、元弘三年菊池寂阿官軍に屬し、少貳英時と戰ひて祠前を過ぐ、時に寂阿の馬進まず、寂阿怒つて曰く何物の牛鬼ぞ敢て義兵を遏むと顧みて其龜を射る、馬輒ち前むと舊記に見ゆ、祭日は陰曆六月十五日にして、當日氏子等は優美なる山笠六本を擔ぎ廻り最も難沓を極む、之れ永享四年同月同日に始まれる古例の祭事なりと。

當社の方面に住時『博多探題館』を置けるもの、如し、大日本地名辭書に『博多探題館』址は榊田社邊にて、一圖に榊田社の東南に大友館跡と言ふは、元鎌倉探題の跡なりしを、足利幕府の世に大友の居邸にも費用せられしか、鎌倉の時は北條氏の一族時定、兼時、定宗、實政、隨時、英時等之に任せらるるとして、太平記の鎮西に一人探題を下され云々を取りり。

●博多灣 (博多)

博多灣は古へ博多沖又は荒津の海と稱され、今は福岡市の前面に在る故を以て福岡灣と稱す、玄界島、志賀島、奈多白濱即ち海の中道其北を屏障し、殘島中央に屹立し、香椎、名島、箱崎は東岸にして、博多、荒戸山、姪濱、妙見崎等南岸に列なり、今津宮浦は西岸の泊所たり、東西凡そ十二海里南北四海里乃至七海里の間、均一ならず、船舶の多く繫泊する所は博多燈臺附近なり。

灣は志賀島玄界島の間より深く入り、外口玄界島及其近傍諸嶼に由て偏西風を保障す、灣口は幅約二海里にして、偏北風ある時は大浪滾入す、灣内に和船碇地多し、灣の内部、即ち東部は充分に各方の海浪を障屏す云々と水路志に見ゆ。

●箱崎八幡宮 (筑前)

宮は筑前國糟屋郡箱崎町に鎮座す。地は郡部なりと雖も千代の松原の中にして福岡市東公園に接續せる勝區なり、天平寶字三年淳仁天皇の御宇に穗波郡即ち今の嘉穂郡大分村に叛建せられしが、中世現在の地に遷し祀れり、官幣中社にして應神天皇、神功皇后及玉依媛命を祀る、今の社殿は天文年間大内義隆の建立に係る。

●千代の松原 (筑前)

箱崎の西に連り、今福岡市東公園と稱する處なり、香椎灣に隣り、博多灣に接し、荒津の浦山近く、能古の浦唐泊まで双眸に入り、頗る眺望に富めるのみならず、満目の老松影濃かにして、琴聲空に響き松鉞地に敷く、景趣の佳なること夙に九州の一名勝たり。基修脚詠あり。

●龜山天皇の銅像 (筑前)

公園に衣冠端然たる龜山天皇の銅像を奉安す、其臺座と合せて高さ七丈二尺七寸五分、公園の偉觀を添ふ。

●日蓮上人の銅像 (筑前)

偉人日蓮上人の銅像亦公園内に屹立す、座臺を合せて高さ七丈、龜山天皇の銅像と共に公園の偉觀たり。

●樓門、敵國降伏の額

樓門は小早川隆景の建立せしものにして、建築の巧妙、夙に天下に聞ゆ。神功皇后征韓後、歴代三韓との交渉絶えず、宇多天皇の朝には新羅の來り寇するあり、直ちに之を擊退せしも、一時隱岐の烽燧を復して戒嚴せられしが、爾後事なきのみならず、醍醐天皇の朝に至りては、新羅の酋長使を遣はして歸化を請ふ、天皇之を嘉納し、宸筆を下し給ひしもの即ち『敵國降伏』の額にして、人、皆な襟を正して仰ぎ見ざるはなし、天皇聰明仁恕前古に超え、後世特に延喜の治を擧げて中興の稱首と爲す。

跡たれて幾世経ぬらん箱崎の標の松も神さびにけり

年波のしづ枝にかけて見渡せば
未はるかなる千代の松原

せられ僅に三人を縦つて國に還らしめ、元主に報告せしむ。因て後來を懲恐し觀鏡の念を絶たしむるに至れり。天皇の銅像を建設したるもの良に以ありと謂ふべし。

筑海颶風連天黒 蔽海而來者何賊
蒙古來來自北 東西次第期吞食
嚇得趙家老寡婦 持此來擬男兒國
相模太郎膽如甕 防海將士人各力
蒙古來吾不怖 吾怖關東令如山
直前斫賊不許顧 倒吾橋登虜艦
擒虜將吾軍喊 可恨東風一驅附大濤
不使殫血盡日本刀

憶昔胡元寇九州 樓船百萬欲加憂
神風一夜東南起 蒙古山高是獨體
應神天皇降誕の靈蹟は糟屋郡宇美村なりと傳ふ、此に宇美八幡宮あり。

日蓮は我國佛教界に於ける四大宗門の一たる妙宗開立の教祖なり。黒染の麻衣一聯の念珠、權勢を憚らず、死生を顧みず、立正安國の論を唱へ、破邪顯正の法を説き、十宗興隆の後に起りて、能く教義を萬世に宣傳す。其天資の雄大剛毅教界唯一の偉人なり。

元寇襲來の警あるや、人心恟々、蜚語流行し甚しきは敵既に長門に逼り、長驅京都を衝かんとすると云ふに至る。日蓮豫め此事あらんことを慮かり、弘安四年六月十四日汎く門弟及檀徒等に諭告を發し、物情の鎮靜を計りたるの功妙からず、今日此銅像を此地に見る所以なり。

●龜山天皇御銅像

龜山天皇御銅像
廟門崑崙面長瀾 仰視雕題照碧灣
長倚神威伏戎狄 新羅高麗指揮間
(新拾遺)

當年閏七月一日颶風大に起り、敵艦覆沒、全軍殆ど溺れ、生存者亦我將士に掩殺



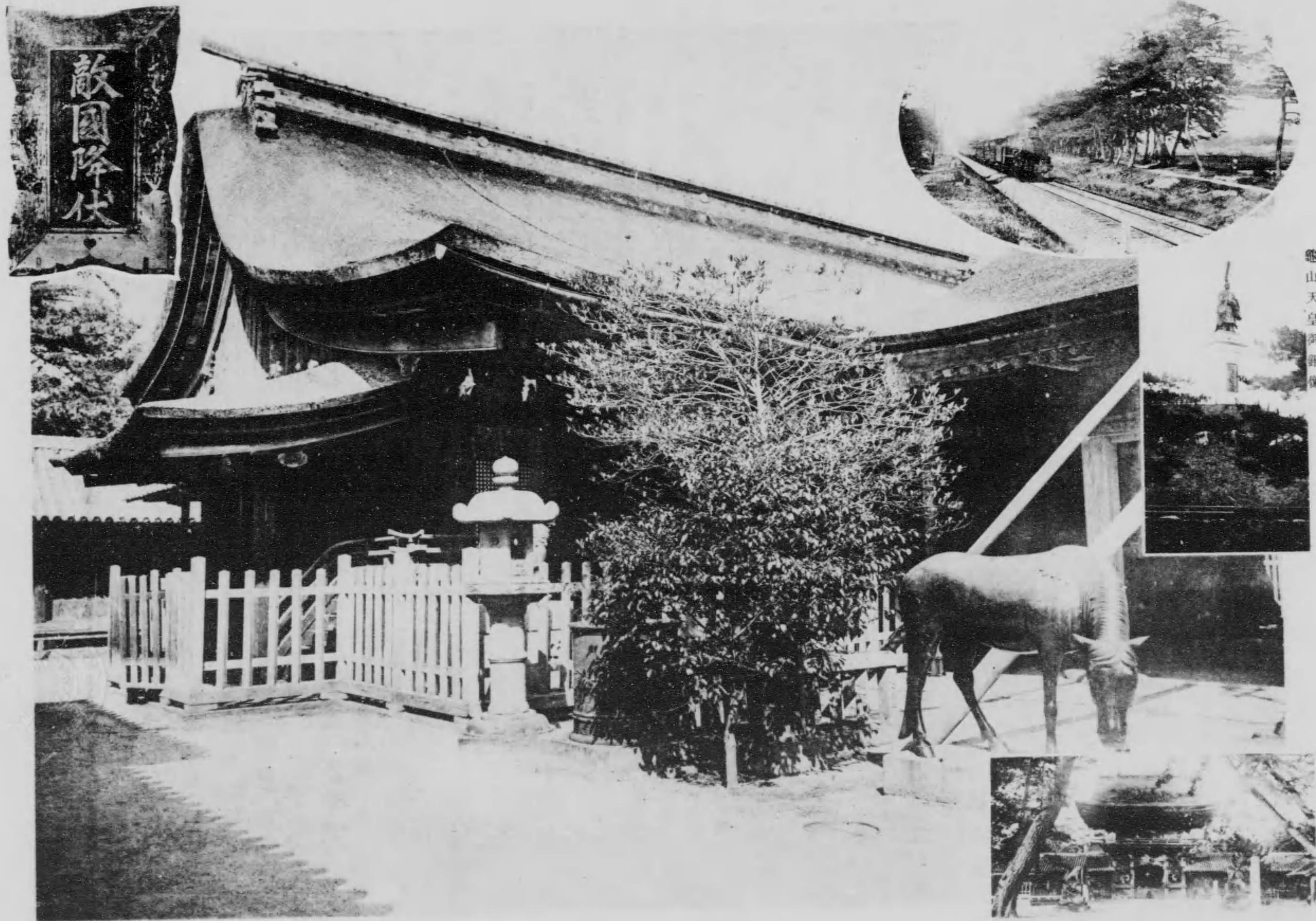
龜山天皇御銅像



八幡宮樓門

千代松の原

勅額



頼山陽
廟門及華面長瀾
仰視雕題照碧灣
新羅高麗指揮間
(新拾遺)

を惱ませられ、願文を伊勢大廟に捧げ、
身を以て國難に代らんことを祈らせ給ふ
同年閏七月一日颶風大に起り、敵艦覆
没、全軍殆ど溺れ、生存者亦我將士に掩殺

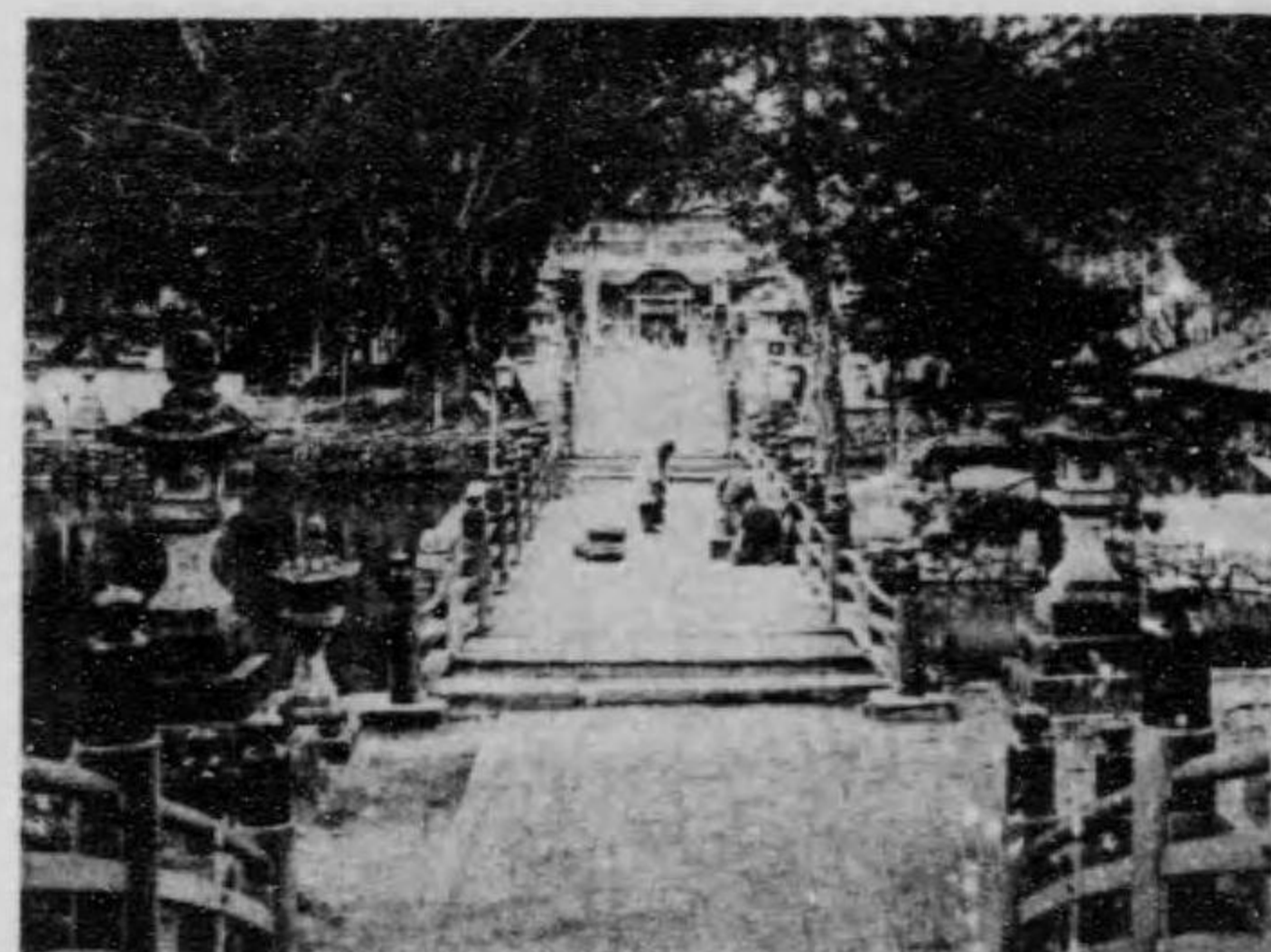
り。
六月十四日汎く門弟及檀徒等に諭告を發
し、物情の鎮靜を計りたるの功妙から
す、今日此銅像を此地に見る所以な

龜山天皇御銅像

八幡宮樓門

箱崎八幡宮

前社宮満天



梅 飛



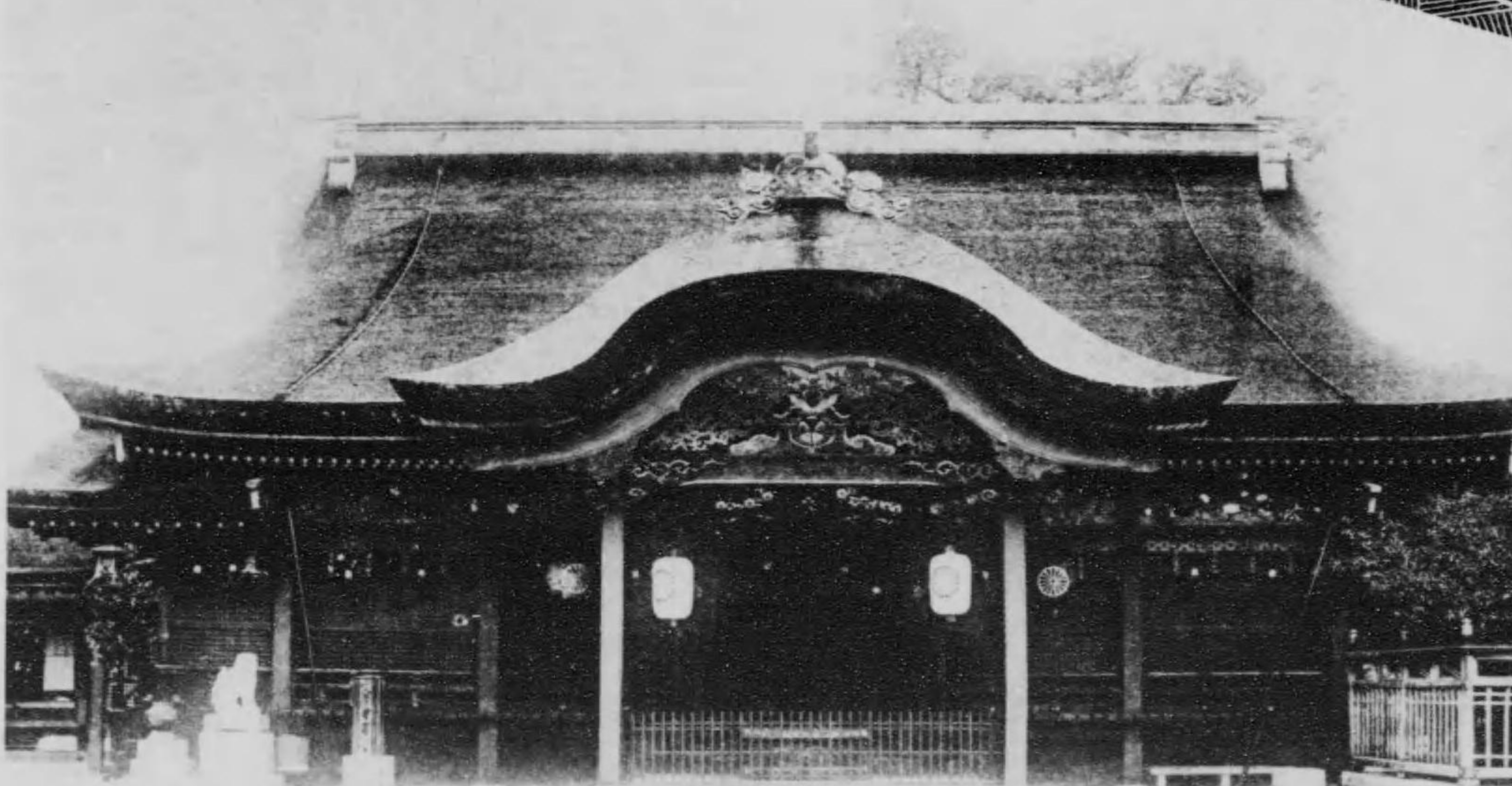
山 拜 天



玉依姫尊御陵



岩門竈山満寶(中)
寺音世観(下)



宮 満 天 府 宰 太

● 太宰府神社 (筑前)

國幣小社太宰府神社は太宰府町の南端

寺廟所に葬る、是れ當社の前身地たり、

『海ならで漂へる水の底までも清き心は

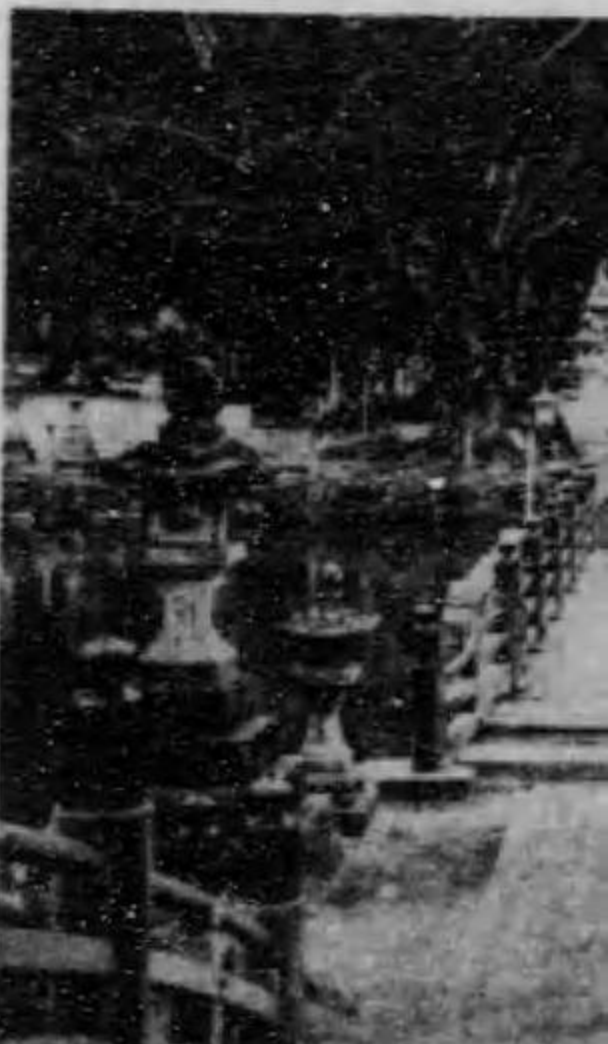
月ぞ照さん』の詠も、月之を照せるも時

至らざりしは千歳の恨事也。

● 観世音寺 (筑前)

往昔九州第一の名刹と稱されたる観世

音寺は、太宰府址の東二町に在り、天台



●太宰府神社 (筑前)

國幣小社太宰府神社は太宰府町の南端に在り、九州鐵道二日市驛より三十三町を隔つ、延寶五年乙丑八月の創建にして菅公即ち菅原道真を祭神とす。

市街の盡くる所に唐銅の大華表あり、之を入りて瓷石の賽路を行くこと數十歩左折して二の華表を入れれば心字形を爲したる一大泉池ありて架するに二反橋を以てす、池南に大樟樹あり、蟠轡水一臨む橋を渡れば正面に樓門あり左右に長廊を廻らし門内に巍然として鎮ずるもの則ち本社なり、社殿は金銀を鏤めず丹碧を施さず素朴にして高潔、所謂神寂びたる趣きを存し自ら神威の高きを表す、社前に有名なる飛梅あり又内には攝社末社頗る多く、額殿には其數幾百なるを知らざる匾額を掲げ、社域廣潤社背に一の瀑布あり其側に數百株の梅樹を栽へて遊園を開き一段の雅致を添ふ。

願れば一千有餘載の昔となれり、史上明かに祭神の偉勳を叙し、世人多くは菅公の出處進退を審かにす、茲に吾人の云爲を要せずと雖も、天拜の山筑紫の海濱を釋ね當社を詣拜するに及んで、記憶を新たに以て公の誠忠を思はずんばあらず、山河は昔ながらの山河にして、清月亦當年の清月たり、讒者勝を制し強いて争はざりし公の身は、罪なくして邊陲配所の月に泣き、衷情訴ふるに由なく、僅かに詩歌に託して獨り自ら慰め、空しく窮愁の裡に其身を終る、悲痛何の辭か之に加へん、公が病中の詩九月盡に曰く
今日二年九月盡 此身五十八廻秋
思量何事中庭立 黃菊殘白花髮頭
嗚呼此地の謫居に謹慎すること數年、常に誠忠を忘れざりし公は、遂に冤を雪ぐの機會に遇はず 延喜三年二月二十五日溘焉として薨せり年五十九、之を安樂

寺廟所に葬る、是れ當社の前身地たり、『海ならで漂へる水の底までも清き心は月ぞ照さん』の詠も、月之を照せるも時至らざりしは千載の恨事也。

都府樓唯看瓦色 觀音寺獨聽鐘聲
今日始向此際行 想見傑構堆畫甍
華鯨雄吼法王城 宰帥虛名實閑廢
思罪郭掃掩柴荆 儒生衰蔽眞罕事
久矣銓衡論門地 洞知沈痼須良藥
銳意蟠根試利器 酬知何暇恤人言
奮搏自折凌雲翅 爲鬼爲域矣足尤
群鷄一鶴宜相忌 國瘁天數豈與公
絮鑑己矣又形弓 世能幾回浮雲變
獨有威德傳無窮 巖廟棟宇彌岐疑
祝典于今群兆億 願望府樓空斷礎
寺餘數椽亦傾仄 行人田間拾缺瓦
猶存相公看時色 行人田間拾缺瓦

●竈門山の竈巖 (筑前)

金剛寶滿山と稱する竈門山は太宰府町の東北に當る、御笠村に在りて北は糟屋郡に跨る太宰府神社一の華表より其山嶺まで五十六町餘、昔、役の小角修法せる所なりと傳ふ。

山上巖石多くして懸崖諸處に峙ち、頂上に躋り盡せば四方眼界遮るものなく、展望百里の遠きに達し、九州の峻嶺高峰皆な雙眺の中に在り、山頂大盤石の上に竈門神社を祀る、祭神は玉依姬尊にして相殿に神功皇后、應神天皇を合祀し毎歲陰曆四月十六日を以て例祭を行ふ、峯の東方に巖窟ありて常に清水を湛へ之を益影の井と名く、其上に三巖鼎立して其形一大竈の如し、他に獅子巖、馬蹄巖等の奇巖點在す、玉依姬尊御陵と稱する所もあり、又天正年中高橋紹運の居城たりし寶滿山城址を存す、頼山陽詩あり
誰嬰宋壁控荆兵 不怪晋軍徐出旌
非餌孤場漁九國 老猴何得掣長鯨

●觀世音寺 (筑前)

往昔九州第一の名刹と稱されたる觀世音寺は、太宰府址の東二町に在り、天台宗にして天智天皇の御祈願淺からざりし『聖觀世音菩薩』を本尊とす、寺傳に依れば天智天皇の御勅願所にして、天智天皇の養老年間に至り諸堂の造營完成し、僧滿智に勅して當寺を監せしめ給ふとあり太宰府繁榮の頃は堂塔輪兵の美を盡し、支院四十九院を有せるもの星霜を経るに隨ひ堂宇漸く頽廢して今ま存するものは講堂、金堂、書院、庫裡、鐘樓等の數字に過ぎず、其寺域も亦僅かに壹千餘坪に減せりと、然れ共俗に觀音寺と呼ばれ古蹟として名あり、什寶中小野篁筆『觀世音寺』四大寺の匾額、羅陵主假面、同納利假面其他佛像數體を藏す。

柴秋村

都府樓空瓦亦推 平田無處見遺基
疎松落日觀音寺 只頼鐘聲似昔時

●天拜山 (筑前)

天拜山は武藏温泉の西南に峙つ、一に天判山とも稱さる、此山に登る道は二日市村大字武藏よりすれば二十町、山口村大字古賀よりは十六町餘にして山頂に達す。

山甚だ高からずと雖も北方は御笠川の山野なれば眼界最も廣し、山頂大巖の相倚れる間に小祠を置く、菅公を祀れるなり、此天拜山を以て菅公が冤を天に訴へたる所とするは取るに足らざる妄説なり山の中腹に小瀑布ありて其傍らに衣懸石なるものあり菅公曾て此瀑に打たれ衣を懸けし所なりとし、瀑布の下流なる石塔に『天拜峯頭仰彼蒼。願心成滿放威光。御衣薰石變成塔。五百年來流水香』の詩を刻す、之れ大僧都信聰の賦せるものなりと。

●宗像神社 (筑前)

天孫降臨に最も重大の關係ありと傳へらる、宗像神社は、筑前宗像郡田島村、即ち九州鐵道線赤間驛より西北岸の神湊に至る間に鎮座す、其祭神は天照大神の三女神にして、古來海内屈指の名祠として崇敬せらる。

神代紀に『日神以三女神、令降於筑紫洲因敷之曰、汝三神宜降居道中、奉助天孫而爲天孫所祭也、又云『日神方知素戔嗚尊元有赤心、便取其男、以爲日神之子、便治天原、即以三女神者、使降居于葦原中國之宇佐島矢、今在北海道中、號曰道中貴、此筑紫水沼君等祭神是也、と當社は往古神湊の東なる海邊に鎮座せるを建長年間此に遷座せるものなりと、境内森々として社殿亦 楚たり、就中拜殿の構造は他の神社に其比を見ざる最古式に則れる、最壯最麗のもの稱さる、而して宗像の神宮寺として聞なる鎮國寺は同村字吉田に在り、筑前舊志略に『鎮國寺の石佛石碑は昔山下の阿彌陀屋敷に在りしを、後、田島宗像神社に移したりしが、維新の際又鎮國寺に移す、石碑の長さ四尺八寸横二尺九寸厚九寸あり、彌陀の像を石面に彫刻せり、佛像の上に四十八願の要文を刻し、皆面には彌陀經全文を彫めり』云々。

●筑後川 (筑後)

筑後川は九州第一の長流にして、源を豊後の溪湖に發し紆紆曲折西流して筑前朝倉郡に出で、浮羽郡との間を過ぎ又方向を西に轉じ三井郡に入り、此所に於て巨瀬川を容れ、更に西南流となり肥前界を經、三瀬郡大善寺村に至りて甘木川を合せ、城島村に達し又正原川を容れ、之より大野島の東西を繞り急に二流となり而る後海に入る。

其流域十八里餘に亘り、河幅の最も濶き處五町五十間を超ゆ肥後の球磨川薩摩の川内川と共に筑紫の三大河と稱され、一に千歳川とも呼ばる、河上は浮羽郡の名邑たる吉井町にして、此町は豊後街道の衝に當り、福岡市を距ること十二里餘の地なり、久留米市とは僅かに六里餘を隔つ。

宮崎 來城

幾尺溪山幾尺臺 輕風卷箔夜雲開

波搖微白象葭響 二十三灘月欲來

偏舟也傍蘋花居 江上無家不釣漁

好是青松沙白處 行人繫纜買鱸魚

●高良山 (筑後)

高良山は一に不瀟山と稱され、直立僅かに五百尺に過ぎざる一丘陵なりと雖も史蹟の上に於ける著名の丘陵なり。

地は三井郡御井町の東南に位し、東は箕尾の諸峰に連り、西北南の三面は筑肥の山川原野に臨み、古來英雄豪傑多く此に據る、景行天皇の十八年此地に行幸あらせられたる行宮駐驛の址を存する外、南北騷擾の際征西將軍懷良親王菊池氏を從へさせられて屢々此に陣し給へり、文中三年足利義滿の九州に下るや菊池武政父子當山に據り大に武威を張り六月二十二日に至り武政此に病歿せり、細川頼之使を遣して和を謀る、武朝之を容れて歸國す文明年に及んで菊池の支族高瀬泰明此に築きて居し、大永の初年には高瀬政元等又此に居る、同五年以後座主良胤及其孫良寛麟圭等之に居り、良寛は大友氏麟圭は龍造寺氏に通じ兄弟互に座主職を争ふ、天正十二年高橋紹運大友氏の爲めに兵を出して當山に陣し、後藤家信、筑紫廣門等と戦つて之を十三部、祇園原等に破る、同十四年六月島津氏八州を併吞せんと欲し兵を肥筑に出す、其部將伊集院忠棟等をして當山に陣せしむ、同十五

年四月豊臣秀吉の薩州を征するに當り亦當山の支峰吉見嶽に陣を構へたりと相傳ふ。

青山 清幽

衆木深深長碧苔 賽神歸去出崔嵬

孤村一半人煙濕 嵐氣空濛雨欲來

權藤 松門

微吟僚倒自高還 雲影模糊杉樹間

相顧商量夜深淺 月輪十丈已離山

●高良神社 (筑後)

高良山の巔に高良神社鎮座す、國幣中社にして高良玉垂命を祭る。

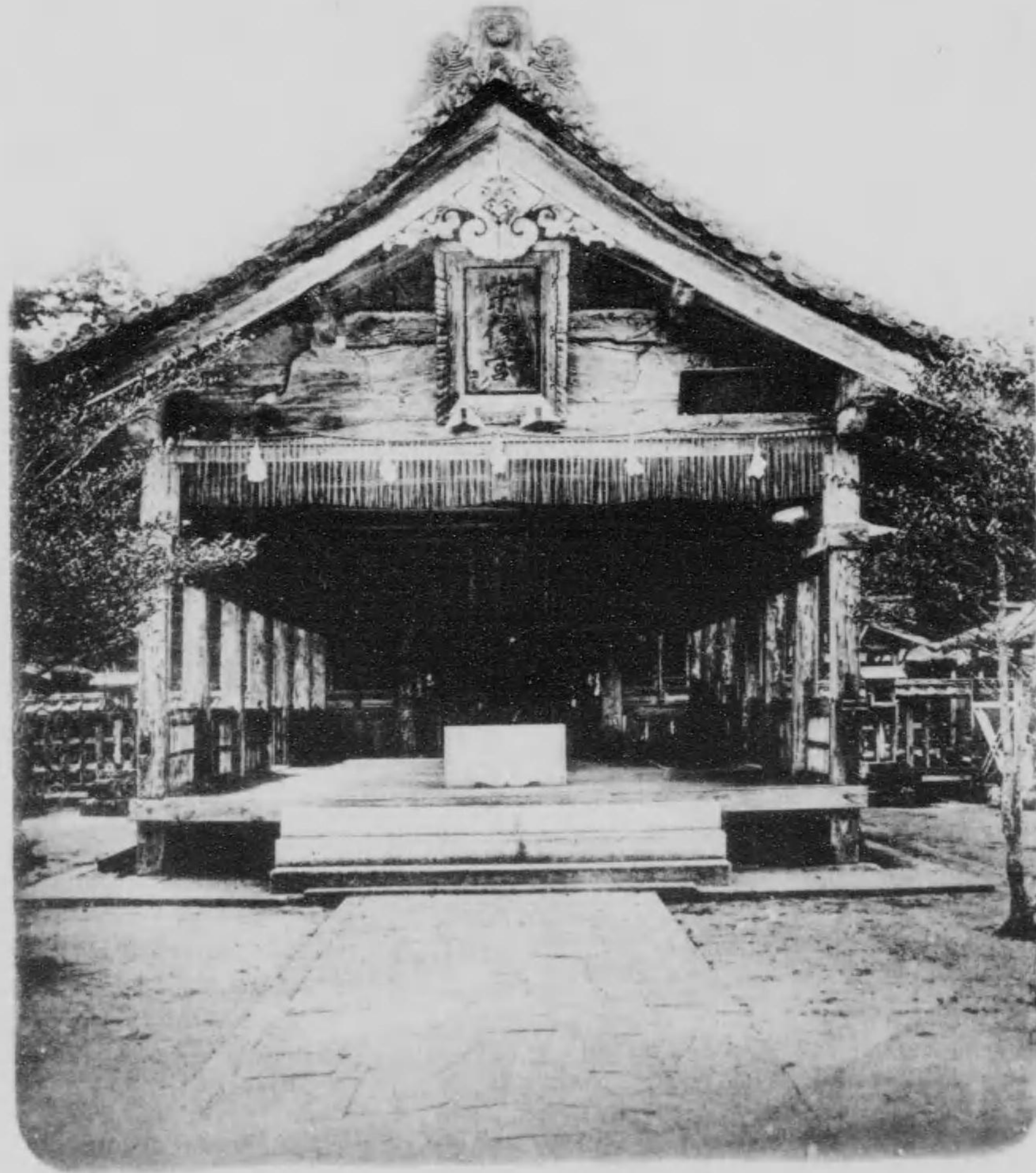
其創建年月は未だ詳からざるも履仲天皇の御宇より此山に鎮座し延喜式載する所の『筑後四大社』の一に位し桓武天皇の延暦十五年初めて位階を受けられ、貞觀十一年從一位に敍し寛平九年正一位に敍せらる、中世は僧侶之を守り藩主よりも若干の寺領を寄進せられ、明治四年神佛混淆を禁すると共に國幣中社に列せられた。貳萬四千八百四十餘坪の廣潤なる地域は、蒼鬱たる森林を以て圍繞せられ、山腹には櫻樹枝を交へ各種の杜鵑花は山巔に相茂し、社背に『神龍石』なるものあり、周圍十餘町繞すに石臺を以てす、其構造の嚴然たること神代の山陵に以たり。

現在の社殿は正殿、渡殿、拜殿、神門、樂殿、社務所等にして、正殿は萬治三年の改築に係り、境内に御子神社、境外に愛宕神社、稻荷神社、伊勢御祖神社、琴平神社、嚴島神社、鏡島神社、味水御井神社、水布神社、等の攝社在り、山巔は開豁にして肥筑の峻嶺群峰峻を西北に望み西南は柳河の人家を隔て、縹渺たる筑紫瀉を眺め得べし、又此山腹に縣社豊姫神社の鎮座するあり、祭神は豊玉媛命なり、延喜式神名帳の『筑後國三井郡豊比咩神社名神大』とあるは乃ち當社なりと、文徳天皇の天安元年從五位下豊姫神に封戸並に位田を充つと見え、貞觀二年正月從四位上を授け七月官社に列すと古書に記す



高良山石階

社 神 像 宗



殿 拜 社 神 像 宗



崎 石 山 良 高

社 神 良 高 (中)
照 夕 の 川 後 筑 (下)

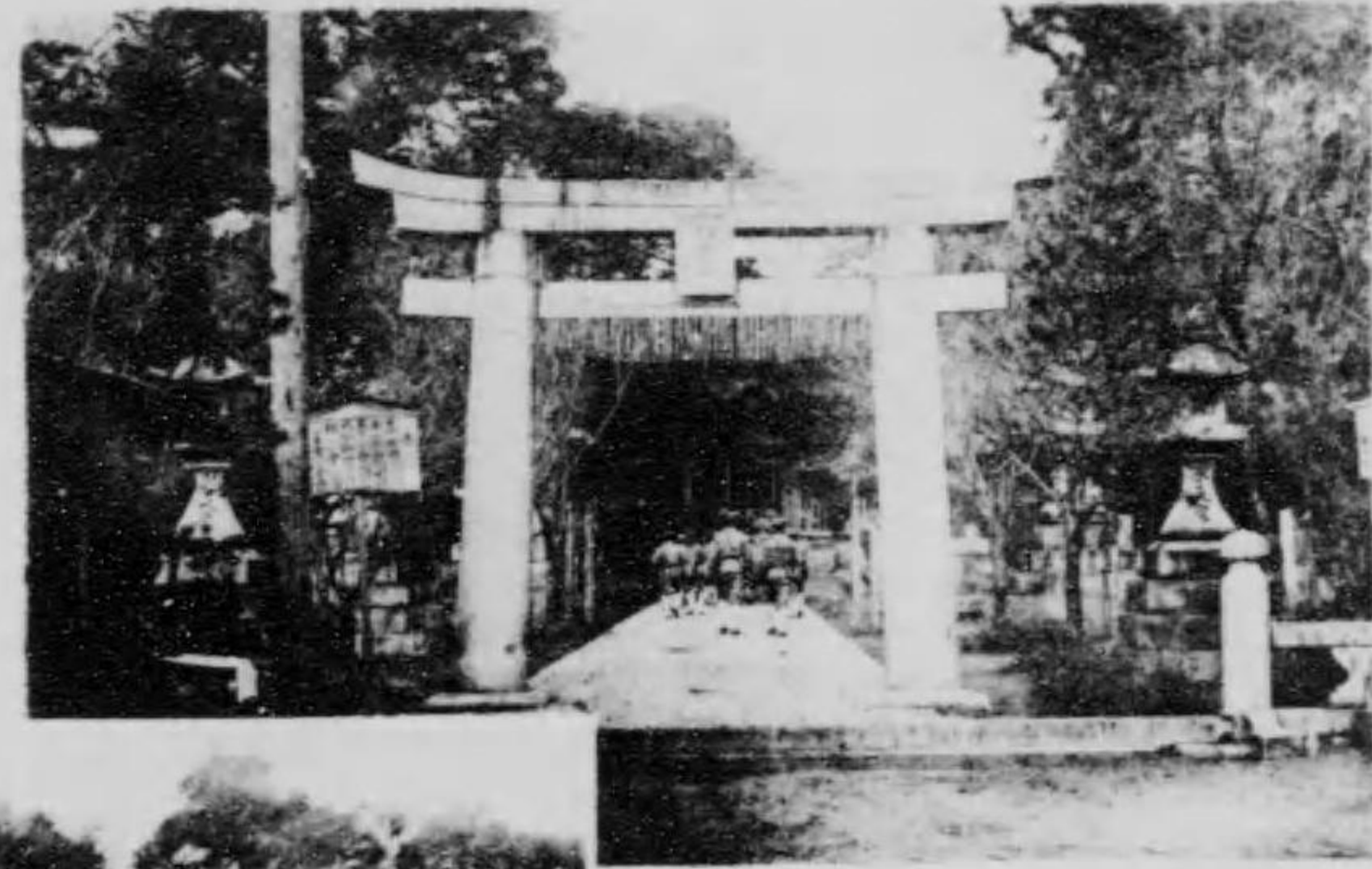
上ノ二七

を經、三瀨郡大善寺村に至りて甘木川を合せ、城島村に達し又正原川を容れ、之より大野島の東西を繞り急に二流となり而る後海に入る。

紫廣門等と戦つて之を十三部、祇園原等に破る、同十四年六月島津氏八州を併吞せんと欲し兵を肥筑に出す、其部將伊集院忠棟等をして當山に陣せしむ、同十五

社名神大」とあるは乃ち當社なりと、文德天皇の天安元年從五位下豐樂神に封戸並に位田を充つと見え、貞觀二年正月從四位上を授け七月官社に列すと古書に記す

水天宮



井上傳女墓



上ノ二二八

久留米城址



●久留米城址 (筑後)

久留米市の北偏筑後河畔に在り。西北に川を負ひ、東南は沼澤平原に臨み頗る要害に富む、此地篠山の小丘上に在るを

行到長門將解纜

回頭却拜水天宮

寒空落日筑川東
數點瓊樓翠嶺上

雲霧平郊渺茫中
水天宮映玉座宮

阪谷 朗庵

久留米城址
實政之
宣七
上村新助
宣七
宣七

高正山之墓



高正山之墓

將軍梅



篠山神社

の遍照寺に至り彦九郎の墓前に於て自及せり。蓋し常陸介は生前彦九郎と相許し刎頸の深交ありたり。明治四年高良山麓なる山川村に御楯神を創建して一碑を樹て川田經江之れが祠堂の記を遺みて石に

久留米城址 (筑後)

久留米市の北偏筑後河畔に在り。西北に川を負ひ、東南は沼澤平原に臨み頗る要害に富む、此地篠山の小丘上に在るを以て篠山城と呼びたり、蓋し當時此邊篠原なりしに因る、永正年間土地の豪族某の築く所にして、大永年間に至り、豊後大友氏の部將茲に據りたり、後天正十五年毛利秀包二十一萬石を以て此地を領し更に修築を加へて居城せり。關ヶ原の役起るや秀包西軍に黨したるを以て敗戦後除封せられ田中吉政代りて茲を治し三十二萬石を領し其子筑後守忠政に至り元和六年卒して其嗣子なきを以て斷絶し。有馬玄蕃頭豊氏之に代りて二十一萬石を領し子孫世襲して以て明治維新に及べり。而して其城廓は維新後廢毀せられ、其城址に篠山神社を創建せり。明治維新後、毀城以前、一時城中に三瀨縣廳を置き以て筑後一州を統治したる事あり、明治九年四月佐賀縣に併治せられ、八月更に福岡縣に屬せり。

水天宮 (久留米)

市の西端、即ち瀬之下町に在り。素と久留米藩の筑後川治水守護神にして今縣社として崇めらる。水天宮の名は普く人の知る所なるも、其由来に就ては二三の異説あり。一説に據れば安徳帝を奉すと云ふ。又尼御前を祀るとも云へり。祭典は毎年四月五日を以て舉行し神輿を舟に移し豆津渡まで渡御あり。本社及び東京彌殿町支社に於て守札を發行す、之を川守と稱す。所謂これ水難の守札なるものなり。

遊人下馬吊孤忠
官道晝密清越露
江於桑城稱三大

廣瀬 淡窓
五穀祠開市陌東
旅衣秋冷亂荷風
那與榮藩抗兩雄

行到長堤將解纜 回頭却拜水天宮

寒空落日筑川東 雪霽平郊渺茫中
數點瓊樓銀嶺上 水天宮映玉塵宮

井上傳女墓 (久留米)

墓は久留米市寺町なる菩提院に在り。井上傳女は久留米の生れにして十三歳の時、斷條の糸を以て白絲を括り染めて飛白を現出せしめ一布を織出す事を創案せり、時人之れを稱して雪降り又は絨織と云ひ頗る時好に適し多大の喝采を博したり、同人の四十歳頃には傳の教示を受けて開業するもの四百人の多きに及び、因に、天保中、大塚太藏と云へる織匠三瀨郡津福に住し其技大に著る、久留米緋は實に此の大塚太藏を以て始祖とすとの説あり。井上傳女は太藏の織出せる緋に、更に一段の技巧を施したるものなり。

高山彦九郎墓 (久留米)

久留米市寺町遍照寺に一碑あり、石面に松陰以白居士と刻す、是れ寛政年間の奇傑として慷慨家を以て知られたる高山彦九郎正之の墓なり。

彦九郎諱は正之、字仲繩上野國新田郡細谷村の人、夙く父母を喪ひ、祖母の爲めに鞠育せらる、少壯より英雄の行迹を慕ひ、太平記を讀みて忠臣義傑の事蹟に奮起し慨然として郷里を發し四方に歴遊して弘く勤王の志士と交り大に王室の衰退を慨し、又邊海の防備に注目する所あり、屢々京師に出で、宮闈を拜し京に留ること數年而も意を當世に得ず、居常快々として樂ます寛政五年去つて九州に赴き、以後久留米に至つて森嘉勝の家に滯泊し同家に於て自殺す其何の故なるを知らず、是れ實に寛政五年六月二十五日なりき後、藝州竹原の人唐崎常陸介なるものなりとぞ。

の遍照寺に至り彦九郎の墓前に於て自及せり。蓋し常陸介は生前彦九郎と相許し刎頸の深交ありたり。明治四年高良山麓なる山川村に御楯神を創建して一碑を樹て川田斐江之れが祠堂の記を遺みて石に勒す。尙明治維新の際王事に死したる諸忠士の靈をも合祀せり。

高山儀助來展其考墳墓、留余家一旬、臨歸潸然賦贈

樺島 石梁

悲哉豪傑士 化作他鄉塵 山海三千里
星霜十一春 憐君來拜墓 令我重沾巾
孝道期終姑 慇懃憂此身

本書掲載の筆蹟は大村彦太郎氏所藏也

篠山神社 (久留米)

舊城内本丸の址に在り。土地の民、有馬家累代の恩澤を仰ぎ、追慕の情を表する爲め、明治十一年相謀つて茲に社殿を造營し有馬家歴世の靈を祀れり。社域頗る廣濶にして眺望佳く、西北は筑後川の流れを繞らし東方には高良山巍然として聳へ、更に遠く肥筑の丘陵田圃を一眸の裡に收め眼界展開して風光太だ佳なり。境内に左の八景あり。

古城老松 柳原曉遠 楓岡紅葉
東野春靄 江南曉鐘 箕山秋月
紫川烟雨 西山暮雪

今、縣社に列し毎年舊三月三、四、五、の三日及び九月二十四日例祭を執行す、

將軍梅 (久留米)

久留米驛を距る約一里、三井郡宮の陣村なる宮津神社境内に在り。一幹の老紅梅枝脈繁り榮へて花時杖を曳くもの多し傳へ曰ふ。南北朝の昔征西將軍懷良親王少貳頼尙と大原野に戦ひ、茲に陣營を設けられし際、自ら紅梅の一樹を御手植ありしを後世將軍梅と稱して今日に至れるものなりとぞ。

●宇佐神宮 (豊前)

官幣大社宇佐神宮は即ち歴史上の宇佐八幡にして、宇佐町の東部菱形山に鎮坐す、一に小倉山と稱さる。

祭神は三座にして社殿三字在り、第一殿に應神天皇を奉祭す、和銅元年此地に神異あり同五年を以て神殿を創祀し、後、所々に遷座ありて後神龜元年に至り再び當所に奉遷せるなり、第二殿は天平五年の創祀に係り比賣大神を祭る、第三殿の祭神は神功皇后にして弘治十四年の創祀に係る、古來歴代皇室の尊信厚く、神護景雲年間勅使從五位下右近將監和氣清麿神託を受けたる事を始めとし、日本記、大日本史、平家物語、源平盛衰記等史上當社に關する記事枚擧に遑あらず、其創祀以來社殿數次回祿の災に罹れりと雖も每次改修したるを以て漸次宏壯となり、今日に至りては莊嚴なること人目を眩せしむ、社頭には銅製の大華表高く聳へ境内亦幾多の建物相列なり層々たる石燈は社道を裝ひ樹林庭苑の風致佳絶なり境内外に攝社末社幾座となく相並び、又附近には名所舊蹟散在す、社殿外の建物は先づ勅使門を始めとし、申殿、渡殿、廻廊、御湯殿、南中樓門、西中門、西大門、北中門、東中門、神馬舎、能樂堂、休息所、繪馬堂、吳橋、寶藏、社務所、神輿庫、御守所、高倉、頓宮、解除舎、御木室等を最なるものとす、大小の華表十數基、水盤十二箇燈籠百六十餘箇孰れも鐵製若くは石製なり、境内總坪數三萬八千四百十餘坪、攝社數十八末社十九に及ぶ。

祭日は例年三月十八日外に祈年祭、新嘗祭を始め一年八十餘回の祭禮あり、就中儀式の盛大にして參拜者殊に多きは陰曆正月三日の鎮疫祭とす、其他春祭、冬祭御田植祭、御祓祭、蟲振祭、仲秋祭等なり。

●佐賀の關 (豊前)

佐賀の關は豊後國海部郡に屬し、大分より東七里の地なり、民家は半島の頸部に在りて其南北兩端は小港灣を成し、上下の關浦に分れ、半島の高峰を牧山と言ひ。之が東端は關の岬と稱さる。

往時は肥後領にして細川氏上の關浦に望樓を置き、海峽の警備に充て、且つ又毎夜炬火臺に火を揚げしめて船舶の標示とせり、承平天慶年間海賊伊豫に起り豊後水道の兩岸其窟窟となるや、官軍屢々之を討伐せることは本朝世紀に見ゆ。

今や人口増加して下之關浦よりは伊豫に通ずる海底電線の布設もあり、上下兩關浦とも西海の要津として重視され、速吸瀬戸を航行する船舶は悉く此地に寄港し、帆船常に林立し市街般賑を極む、又關の南西に臼杵灣あり、臼杵町には大友宗麟の築ける『丹生村城址』存在す。

●佐賀の關海峽 (豊前)

古への『速吸名門』たる佐賀の關海峽は豊後水道の隘門にして、關の岬を西南角とし、東北八海里を隔て、伊豫の佐田岬と相對す。

此海峽は瀬戸内海より南方に通ずる水道の要害に當り、馬關海峽、友島海峽、と相比し其中路に位す、海峽の中間には高島始め幾多の島嶼點在し風光亦佳絶なり。

●白濱と黒濱 (豊前)

杜陽編なるものに日本王子來朝云々を記し、王子善く碁を圍む、上待詔顔師古に敎して對手せしむ、王子楸玉碁局を出して曰く『本國の東三萬里集真島あり、島上靈霞臺在り臺上手段池より王子を出す制度に由らずして自然黑白分明なり』云々是れ探るに足ざる記事なりと雖も、佐賀の關舊望樓下に白濱黒濱の二濱あり、

海面水色澄清、其白濱に散布する白石は瑩白玲瓏製造を用ゐずして碁石とするを得、黒濱の石亦相同じ。

●和布刈神社 (門司)

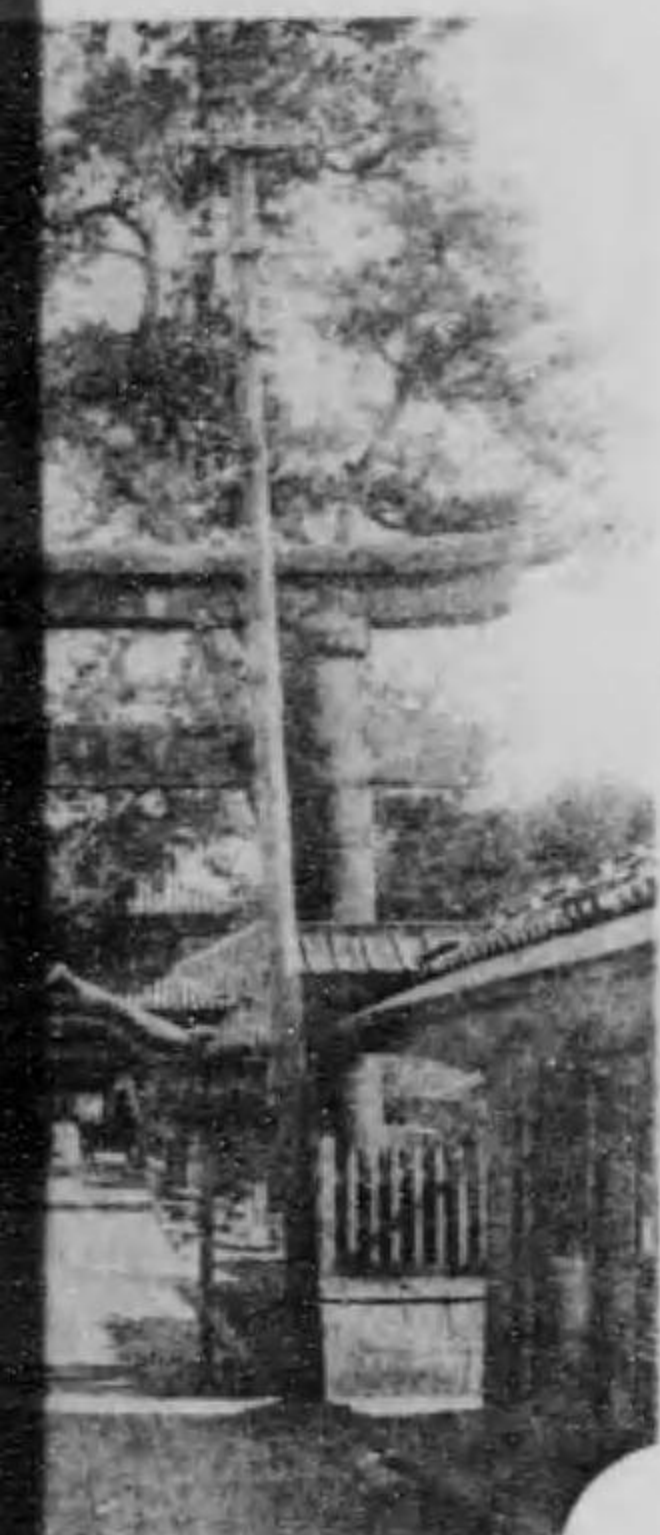
神功皇后三韓より凱旋せられし時、特に齋祀られし古社「和布刈神社」は門司市速戸に鎮座す。祭神は比賣大神、日子穗手見尊、鵜盧葺不合尊、豐玉毘賣神、阿曇磯良神の五座にして縣社なり。

神社の古記に依れば、皇后神誨を蒙りて三韓を討たんと角鹿より豊浦に至り給ふ時、海中にて如意珠を得て太く悅ばせらる茲に鹽潤瓊、鹽清瓊の法を得たる神人あり阿曇磯良と言ふ、常に海の業を事とす、故に琴鼓笛の音を起して海邊に船を浮べ給ふ、磯良浮び出で、上記の沙の干潮の瓊の法を奉る。皇后乃ち大に軍船を整へ三韓を討ち給ふと言ふ、今猶此社に其珠を傳へありと言ふも固く秘封して濫りに見るを許さず。

毎歲十二月晦日の夜、海中にて和布を刈り、元朝の神供として奉る是れ阿曇磯良が海中に入りて珠の法を皇后に奉りし遺風なりと、例祭は三月十四日十五日、位置は門司停車場を距る北十六町、早稲の海峽突出し潮水崖に激する所は、西は赤馬關境の浦と呼應すべく、瀬戸往來の大艦巨船は直ちに社の艇下を通行す、寶物には寶珠、和布刈鎌百文書等ありと。

●甲宗八幡宮 (門司)

神功皇后征韓後彼國の朝貢を門司關に收めしが故に豊石間戸命及櫛石門戸命を衛護の神として祭りしが、貞觀年中祠殿を創建し、神功皇后の甲を神靈と爲せり。文治元年には源範頼及義經、建武三年には足尊氏、永祿十二年には大江廣元慶安二年には小笠原氏、明治元年には毛利氏等孰れも社殿を改造せり。



甲宗八幡宮



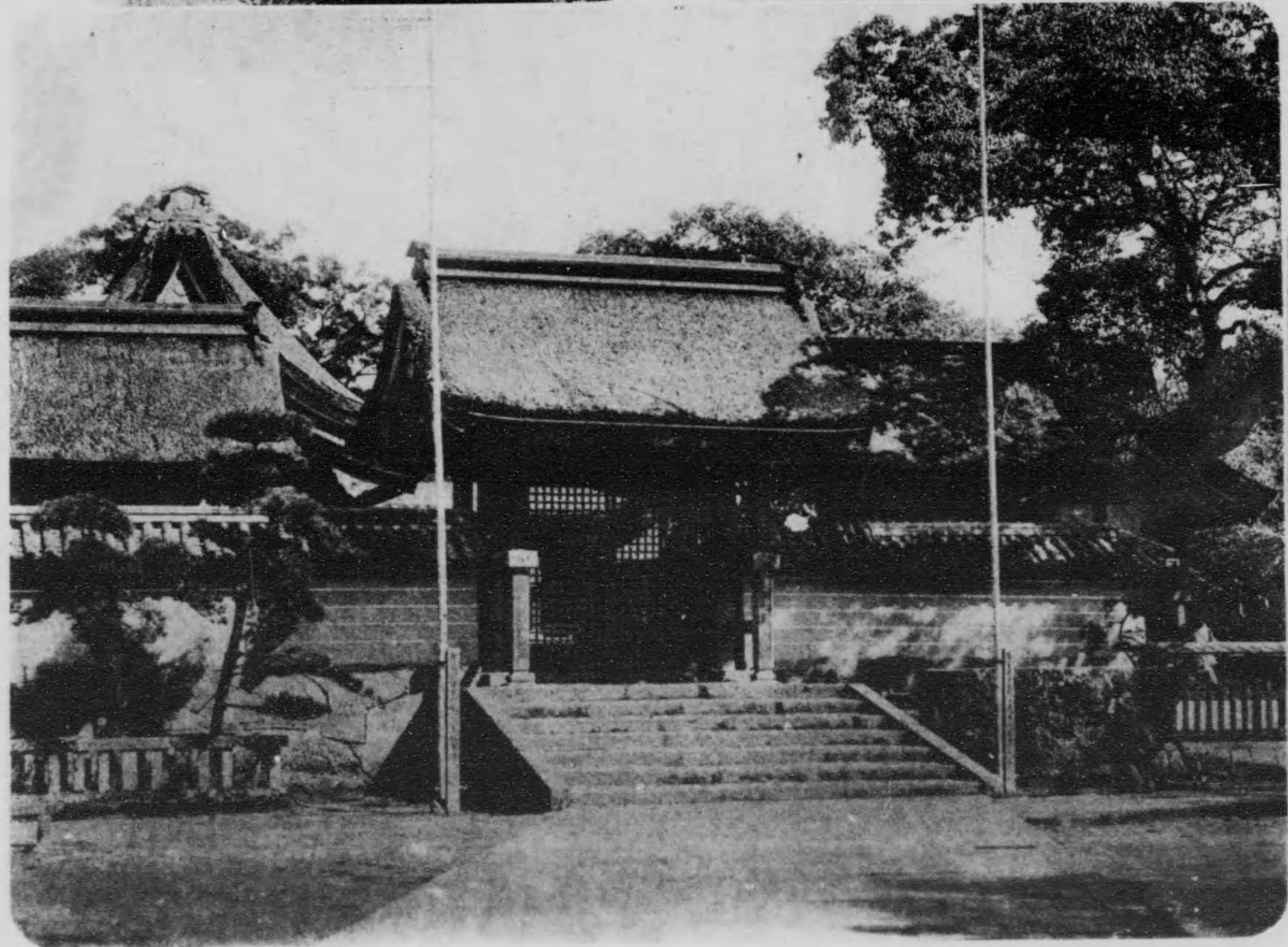
濱ヶ黒同



濱ヶ白關の賀佐



居島大宮神佐宇



門使勅宮神佐宇



甲宗八幡宮

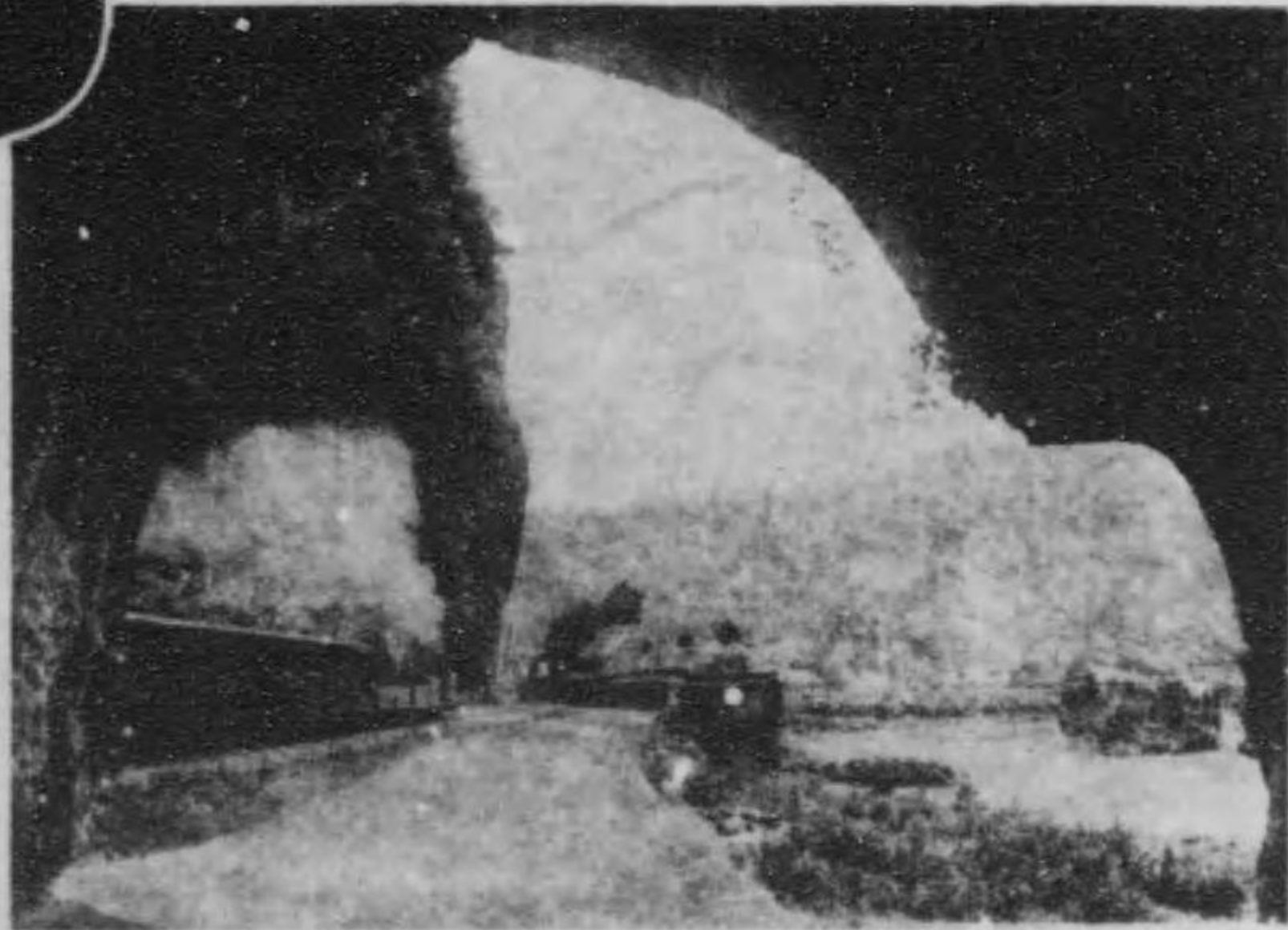
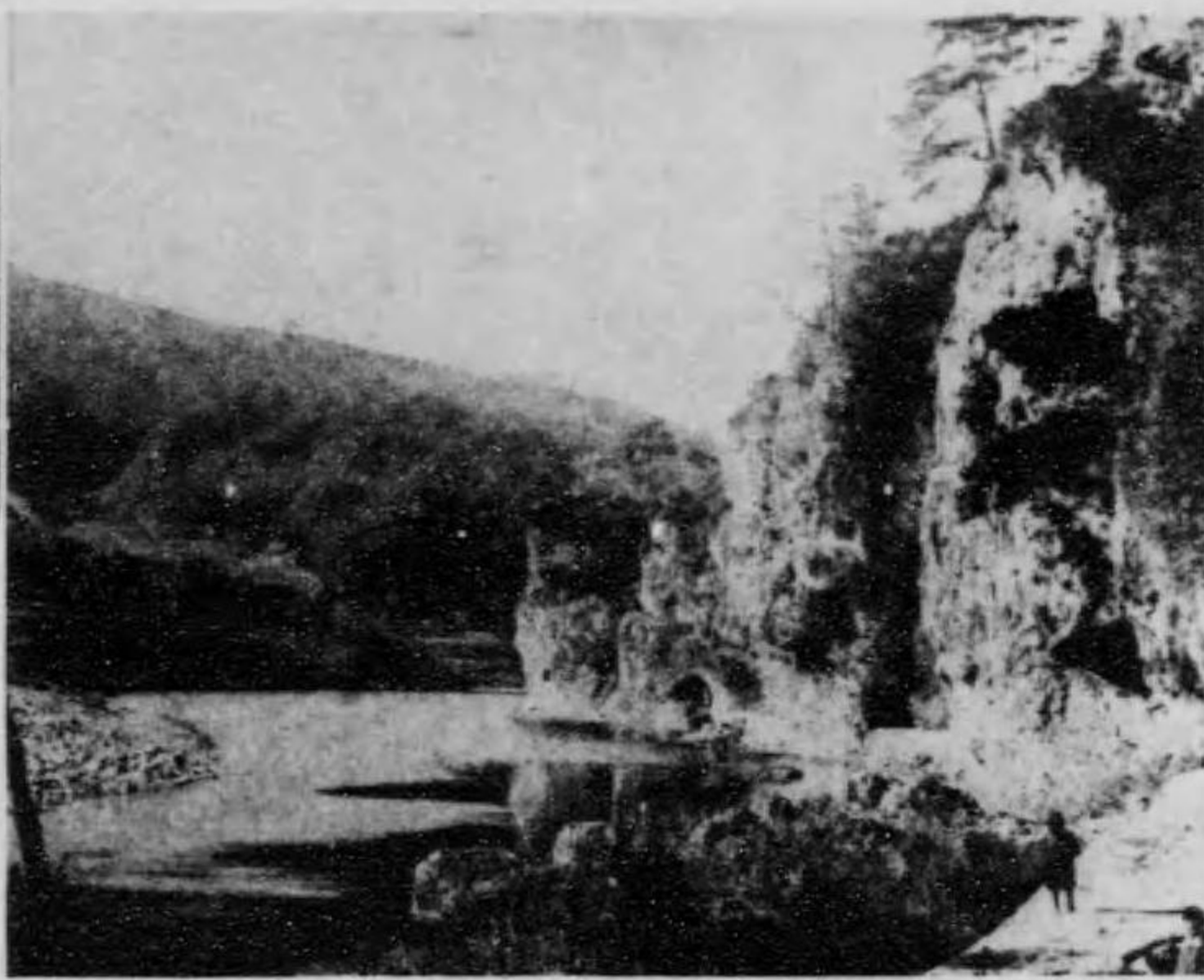
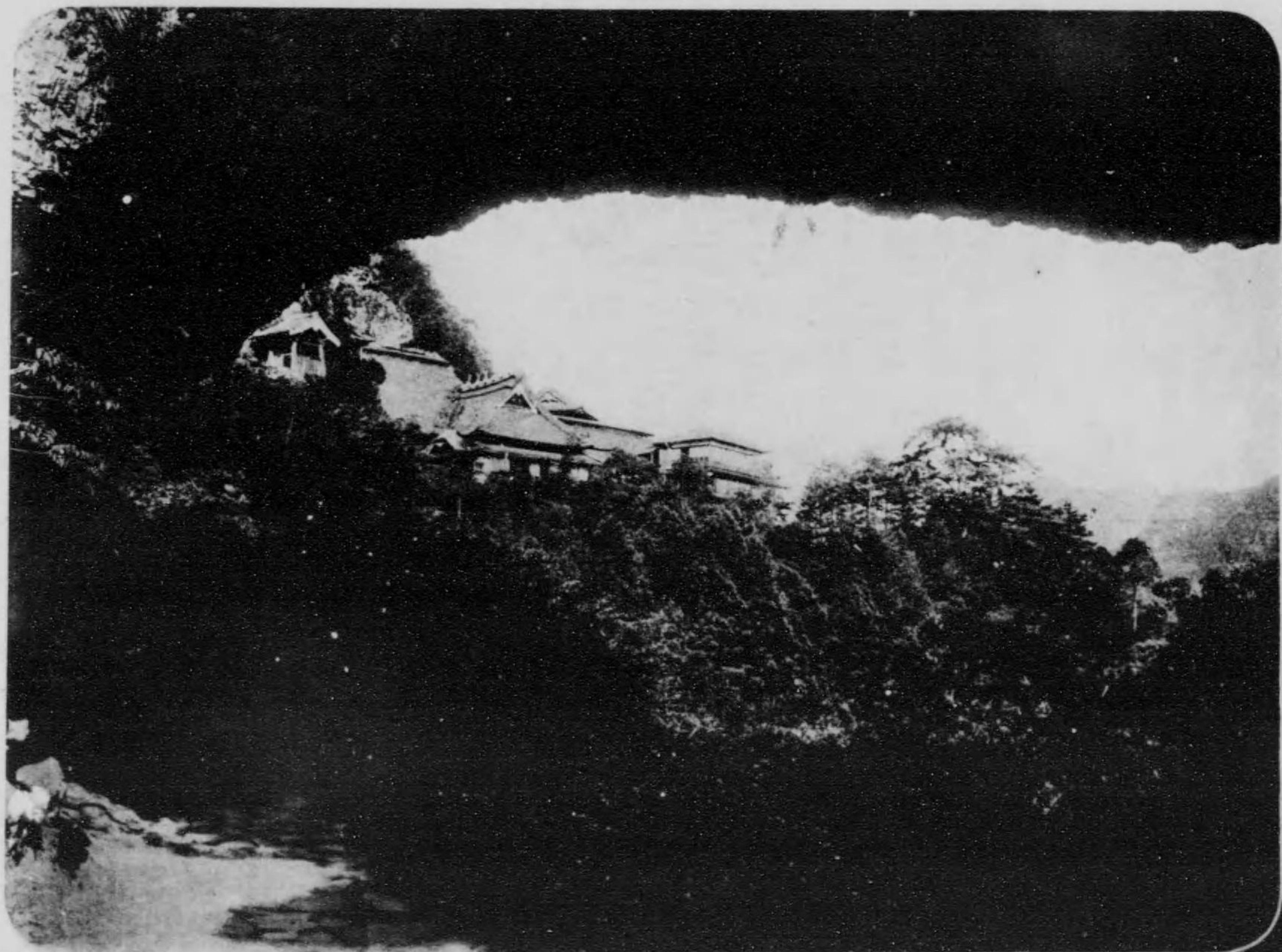


映海司門

春祭を始め一年八十餘回の祭禮あり、就中儀式の盛大にして参拜者殊に多きは陰曆正月三日の鎮疫祭とす、其他春祭、冬祭御田植祭、御祓祭、蟲振祭、仲秋祭等なり。

して曰く「本國の東三萬里集真島あり、島上凝霞臺在り臺上手段池より王子を出す制度に由らずして自然黑白分明なり」云々是れ探るに足ざる記事なりと雖も、佐賀の關舊望樓下に白濱黒濱の二濱あり、

を創建し、神功皇后の甲を神靈と爲せり。文治元年には源範頼及義經、建武三年には足尊氏、永祿十二年には大江廣元慶安二年には小笠原氏、明治元年には毛利氏等孰れも社殿を改造せり。



り 踏 結

岩 犬

坂 佛

● 耶馬溪擲筆峯 (豊前)

頼山陽一たび耶馬溪に遊びて「之を海内第一と謂ふも或は誣ひざるなり」と激賞したる以來、耶馬溪の名は噴々として

石頗る奇怪を極む。

御新木にそなふる妻木おひつれて

真坂の洞を出づる山が

日野 資枝

本田 親雄

し、土、石を載する者、石、土を挟む者、

全石なる者、金石破裂して洞穴を成す

者、兩石相闘ひ、其一仆れんと欲する

者、石敷層、累りて夏雲の状を爲す者

あり、而して樹、石罅よりして横生縦



石頗る奇怪を極む。

●耶馬溪擲筆峯 (豊前)

頼山陽一たび耶馬溪に遊びて「之を海内第一と謂ふも或は誣ひざるなり」と激賞したる以來、耶馬溪の名は噴々として天下に傳へらるゝに至りたり、溪は豊前國下毛郡山國川に沿へる一帶谿谷の稱なり。素と山國谷と呼ばれたりしが、文政年中頼山陽茲に遊び耶馬溪の名を付せしより以來此の名を命せらるゝ事となれり。溪の長さは十五里に亘り、其支流を合すれば百里に垂んとすと云ふ。鐘山の支脈山國川と縈曲並馳して自然の奇觀を呈し其間奇峯突兀、怪巖縱橫、迅流奔湍し、山容水態樹姿石狀、變幻極まりなく、能く筆舌の名狀し得る所にあらず、就中植田驛の邊、羅漢寺曾木橋より其南屈知林、柿坂驛に至るの間最も絶勝とすべし。

●羅漢寺 (豊前)

耶馬溪橋を渡りて左折し、玖珠郡の舊道を進むと少許にして一古刹あり。即ち是れ羅漢寺なりとす。仁王門左右の峻坂を案内路と云ふ。道頗る險惡なり、境内には古羅漢、飛來峯、天人橋、降龍川等の二十四勝あり、若し夫れ無漏窟に入らんか、五百羅漢を始め種々なる佛體石像を安置す、眞に羅漢寺の稱に背かず、而して洞より透して羅漢寺を望む絶勝また言ふべからず。

●鮎 歸り (豊前)

鮎歸りは耶馬溪の起點にして是より嵐光水色漸く奇容を究めんとす、此地より耶馬溪の終局彦山の麓まで約十八九里と註せらる。犬岩の勝また此間に在り、其奇狀變態一々名狀すべからざるものあり

す(但し原漢文なり)

歳の戊寅、鎮西に遊ばんとして海を過ぎ南彦山を雲際に見み、已に其異有るを覺ゆ、既にして二肥薩隅を經、還て豊後の隈邑に寓し、臘月五日豊前に入る、一水北來するに遇ふ、蓋し源を彦山に發する者なり、沿ふて而して東する事數十里、昏黑左右の峯巒皆凡に非るを覺ゆ、小溪相迫る處は山腹を鑿つて衝を作り、人膺を穿つて明を取る、余炬を買ひ以て入る、隔に遇ひ月溪水に在て朗然たるを窺ひ見て民家に宿す。翌大霧霽るを待ち乃ち發し、復た溪に沿ふて東す、愈よ東すれば愈よ奇、群峯水を挾んで撥凍し、春筍の矗立する如

宛然石屏風 修長還屈曲 丹青不可描 苔色天然綠

懸水三十仞 疾雷聞數里 盛暑涼生秋 倚杖夫誰子

●佛 坂 (豊前)

佛坂は山國川を渡り進む事二里許の所にして、眞坂の洞より約半里の地なり岩

日野 資枝

御薪木にそなふる妻木おひつれて 眞坂の洞を出づる山がつ

本田 親雄

佛坂越へつゝ見れば名にも似ず 鬼の住むらん岩屋なりけり

し、土、石を載する者、石、土を挟む者、全石なる者、金石破裂して洞穴を成す者、兩石相闘ひ、其一仆れんと欲する者、石數層、累りて夏雲の狀を爲す者あり、而して樹、石罅よりして横生縱生、倒生して而して上指し、叢生して石を蔽ひ、石と勢を争ひ、而して之に勝んと欲する如く、石又樹中より奮躍して而して出づ、而して石蔭皆苔、紫綠相間はる、或は半面を没し、或は全身を没し、又樹を撥けて石を攻むる者の如し、大抵峯勢石皴董巨が刻意の圖の如し、時に窮冬、多くは老木葉脱し槎牙瘦古皆倪黃の筆法、而して苔の枯感蒼渴せる者、王叔明也、古人の筆墨吾を欺かず、柿坂に至り、孤店に憩ふ店、石壁の數丈なるに面し、飛泉懸る焉、仰げば則ち更に高峯なり、其幾十丈なるを知らず、余急に佩ぶる所の酒瓢を釋き、命じて之を尋めしむ、窺突蕭然、會々一獵師、新に豪猪を獲たり割て而して之を煮る、肪脆水の如く、數大白を連引す、又行く、溪又數曲、峯勢に隨つて上下す、或は激雷噴雪、或は淳膏凝碧、峯影之が爲めに或は碎け或は全く、水山を妬んで而して其影を亂すに似たり。屈智林に至る云々。(以下略)

頼山陽

峰容面々趁看殊 耶馬溪山天下無

安得彩毫如董巨 生練一丈作橫圖

耶馬溪九首(其一) 梁川 星巖

雲吐霧吞峰出沒 故人曾說雨中奇

吾行遺恨君知否 不見群龍隱躍時

同(其二)

曾讀黃溪諸勝記 恨無畫卷併傳之

異哉吾黨山陽子 雙筆能將一手持

范緩倪迂黃太癡 諸家風趣趁看移

南宗畫訣君休說 耶馬溪山是我師

●別府温泉 (豊後)

温泉場として古來著名なる別府は豊後國速見郡鶴見山の東麓に在りて別府灣に瀕す、大分を距る三里四丁、豊前街道に當り、海陸の交通頗る便なるが上に氣候溫和、空氣清鮮にして避暑避寒共に好適の地なり。温泉は山麓、谿間海濱到る所に涌出す。殊に海濱河中に噴出する所には四時浴するを得べく、頭を除きて全身を砂中に埋めて温を取る者多し、所謂是れ砂風呂なるものなり。別府温泉の主なるものは不老泉、靈潮泉、楠湯、乾液泉等とす、泉質の多くは炭酸泉にして温度は百度より百三十二度に至る、別府町の南方を濱脇と云ひ。茲にも亦温泉所々に湧出す。別府港は明治三年の開築に係り東西百間、南北八十間の埠頭あり、港口は東南に開き水深千潮三尋を下らずと云ふ。

別府沿海、温液涌於潮中、浴客候潮水之退、烘脊熨腰、穿沙蘸身、頗妙於痼疾、

梅 外

潮退風喧落日斜 海汀一帶也繁華
浴沙人臥半身出 恰似春泥著落花

●別府温泉海地獄 (豊後)

別府温泉は全区を八湯に別つ、曰く龜川、曰く柴石、曰く鐵輪、曰く明礬、曰く別府町、曰く濱脇、曰く觀海寺、曰く堀田とす、海地獄は鐵輪の北方に在りて坊主地獄紺屋地獄と共に常に硫氣芬々として漲れり。又鐵輪の地は到る處天然蒸氣を噴出し人家の軒前竈下に小さき孔を穿ちて蒸氣を導き、釜を懸けて蔬菜を烹る、是を名づけて地獄の火と稱す。

草場 佩川

山河廻合別區寰 開府何年卜此間
無復王官敷教化 唯令吾輩訪孤嫠

老牛羸馬輪租稅 殘刹荒祠接閭閻
日暮和烟鐘磬響 蕭寥相送市人還

●柞原神社 (豊後)

大分縣柞原即ち八幡村大字八幡に在り縣社にして仲哀天皇、應神天皇、神功皇后を祀る、境域面積四千百十七坪、本殿、拜殿、渡殿、廻廊、東西脇殿外十一棟あり、境内末社十五社を數ふ。社記に據れば承和三年三月右大臣藤原夏野勅を奉じて國司大江守久に命じて本社を創建す、後屢々勅願の事あり、神領若干を寄附せらる。大友氏以降歷代領主の尊信厚く、古文書什寶等鮮からず藏す、就中寶物として著名なるは後陽成院宸翰、古青磁花瓶二個、古刀六十口等あり。神社は二葉山の高丘に在り、本社の祭日は陰曆二月初卯祭及六月の名越祭にして毎年八月十四日より二十日迄一週間仲秋祭を執行す

應神祠

廣瀬 淡窓

閑步尋風景 城邊處々留 魚鱗千戶市
蚩吻幾層樓 邦祀應神帝 人話大友侯
女兒知教令 不敢出門遊

●柞原神社大樟樹 (豊後)

柞原神社の境内に二株の樟樹あり。一株は周圍十七間に及ぶ。傳ふる所に據れば、天長四年十月延曆寺の僧、金龜和尚豊後國宇佐祠に詣り、經を誦し行を勤み神託の感あり、乃ち此地に來り古樟樹を望見し、神殿の驗ありしを以て是に於て祠を建て國司大江朝臣守久を以て之を奏す、因て官社に預る、建久以還、大友氏世々之を修理し、應永七年式部大輔親世普賢堂を祠側に建て天正十二年左京大夫義鎮爲めに洪鐘を鑄る、寛永十七年、日根野吉明講堂を建立せるの日、其臣平岡なる者をして廟祝とせしめ歴世の勅書教書、許多を輯録して以て之を與へたりと云ふ。

●鶴谷城址 (豊後)

海部郡なる佐伯市街の西北、城山に在り、即ち佐伯城の一稱なり、山上老樹鬱蒼として今尙城の一部を存す。

史を按するに、慶長六年毛利民部大輔高政、佐伯の地二萬石を給せられ其翌七年茲に築城し、三層の天主閣及び高櫓を作る、城山の周圍二十七町に達す。結構頗る宏壯なり。麓より牙城に至る直立五十間、柞車禮の町を眼下に望むべし。高政始め柞車禮に封を受けたりしも其地利の宜しからざりしを以て移りて佐伯に築城せりと云ふ。城山の東麓に臨濟宗の一刹あり、善賢寺と云ふ、毛利氏累代の菩提所たり、慶長十年三關和尚の開基にして弘法大師の地藏尊を安置す。寺北に陸軍墳墓地あり、是れ西南戦役の際、重岡、仁田原等に於て戦死せる官軍の將士を葬れるものなり。蓋し此地は明治十年五月二十五日に於ける激戦地たりしなり。因に云ふ、柞車禮は佐伯氏の故墟にして佐伯町の西方一里に在り、佐伯惟治の據守せし所にして、惟治宛死し、其靈柩を爲す後土人祠を建て富尾神と稱し歲時祭祀すと云ふ。

●長曾我部信親墓 (豊後)

海部郡戸次村の左方、一丘上に在り、墓石の高さ六尺許、墓側に亭々たる一老松鬱然として峙ち、轉た當年英雄の最期を偲ばしむ。信親は元親の長子なり、天正十四年、豊臣秀吉、大友宗麟を征討せんとして之を信親及仙石秀久に命ず。信親軍を率ゐて赴き大友氏と大に戸次川に戦ひたるが、敵の爲に敗られ、味方の潰走するを見て信親大に怒り憤然として馬首を廻し再び敵陣に突入し奮戦して遂に壯烈なる戦死を遂ぐ、時は天正十四年十二月十二日、信親享年僅に十八歳なりき。



長曾我部信親墓



門御暮日宮幡八原柞



樹樟大



址丸の三城谷鶴



穿ちて蒸氣を導き、釜を懸けて蔬菜を烹る、是を名づけて地獄の火と稱す。
草場 佩川
山河廻合別區寰 開府何年ト此間
無復王官敷教化 唯令吾輩訪孤鰥

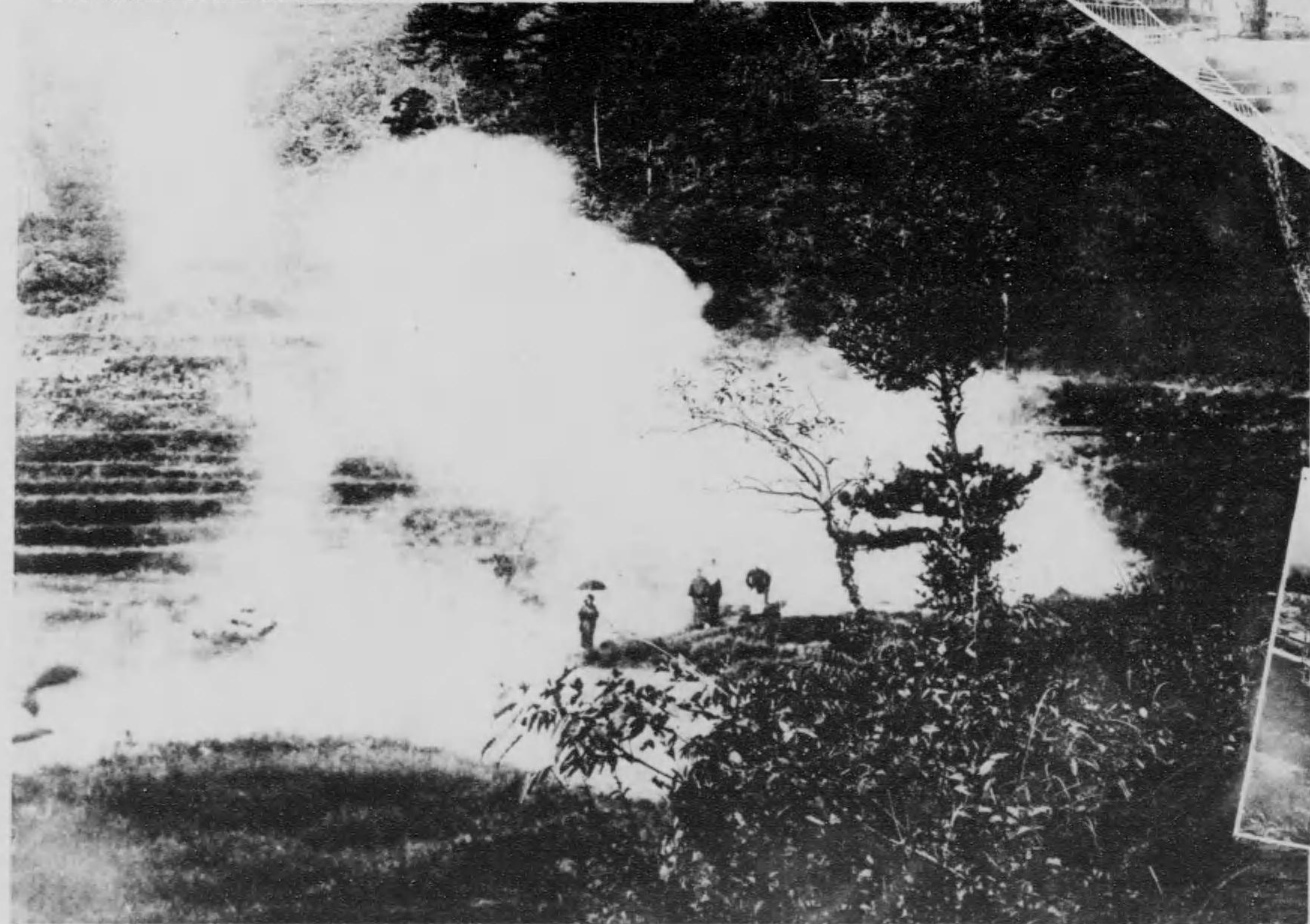
義鎮爲めに洪鐘を鑄る、寛永十七年、日根野吉明講堂を建立せるの日、其臣平岡なる者をして廟祝とならしめ歴世の勅書教書、許多を輯録して以て之を與へたりと云ふ。

が、敵の爲に敗られ、味方の潰走するを見て信親大に怒り憤然として馬首を廻し再び敵陣に突入し奮戦して遂に壯烈なる戦死を遂ぐ、時は天正十四年十二月十二日、信親享年僅に十八歳なりき。

長曾我部信親墓



景全府別



煙噴獄地海府別

山 布 山



大 分 城



● 大分城址 (豊後)

現に大分縣廳の在る所、是れ大分城址なり。大分城は素と府内城と稱す。慶長

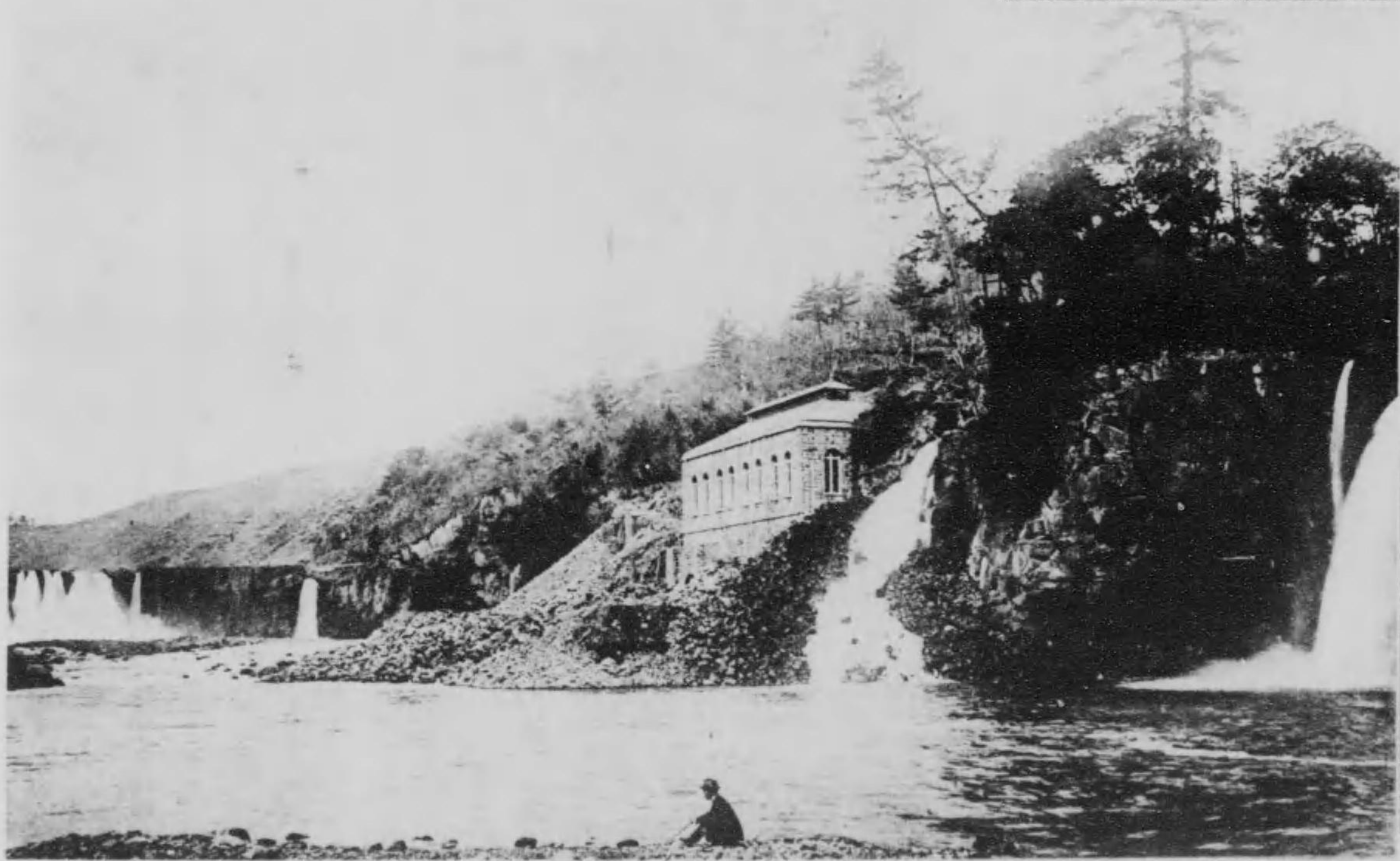
若 谷 河 笠 結 島



春 日 公 園



上ノ一三二



瀧 雄 の 隨 沈

百雉城樓水一方 鷗鷺近映女牆翔
碁灣湖退石華白 春峰沙暄松露香
富國有人來獻策 擔簦選士去踰疆
觀風且自西郊始 樵牧魚鹽是樂鄉

深からざるも多くの良港を有す。灣内加
賀岬より深江鼻に至るの間は絶壁連続し
東方高崎山嘴の突出する所又峻崖にして
沿岸水深し、南方には四極山笠も西方に



●大分城址 (豊後)

現に大分縣廳の在る所、是れ大分城址なり。大分城は素と府内城と稱す。慶長年間、福原通高府城を茲に移築す、爾後府内城と稱す、城は平地に在りて遶らすに塹壕を以てし、石を疊みて壁と爲し、櫓櫓あり。明治維新後、大分縣廳を茲に置けり。

史を按ずるに、慶長二年福原直高、府内貳萬石に封せられしが、城狹隘にして地利不便の爲め、請ふて城を移築し、四年四月に至て新城竣工して移り居れり。此地素と荷落しと呼びたりしも其名不祥なりとて直高之を荷揚と命じぬ、五月家康直高を舊封に復し、府内城を小早川長敏に與へたり、其翌年、關ヶ原の役起り、小早川、福原ともに西軍に應じて敗後除封せらる、後ち竹中重隆茲に封せられ、寛永十年其子重次除封され、日根野織部之に代り、明曆二年嗣子なきを以て除封され、萬治元年大給忠昭茲に移封し爾後世襲して以て明治に及びたり。城壁濠塹の堅牢にして樓櫓門堞の堂々たる頗る美觀を以て稱せらる。

明治十年三月中津の士族増田宗太郎徒黨を嘯集して薩軍の西郷に呼應すべく中津支廳を襲ひ其一隊は大分に向ひ、縣廳を犯さんとしたるが、縣官等は舊城を守り奥少佐兵を率いて擴尾に屯し敵に備ふる所あり、且淺間、日新の兩艦海上を警戒したるを以て、終に賊の襲ふ所とならず廳下は安靜に歸するを得たり。

府内侯延見、城中賦此奉呈

廣瀬 淡窓
參差樓櫓表層城 三匝池廻一碧清
夾道檜松森有影 趨朝劍佩肅無聲
會盟自古尊同姓 班爵于今重大名
豈料不才勢下間 野人增喚作先生
府内 秋 梅 庵

百雉城樓水一方 鷗鳥近映女牆翔
碁灣潮退石華白 春峰沙暄松露香
富國有人來獻策 擔簦選士去踰疆
觀風且自西郊始 樵牧魚鹽是樂鄉

●由布嶽 (豊後)

速見郡に所在し鶴見嶽の西方に位し、共に同一の火山脈に屬せる熄火山にして所々に温泉湧出す、海拔四千八百尺、峰頭二個に岐れ、兩々屹として相峙す、西を西嶽と云ひ、東を東嶽と云ふ。其間相距る數百丈山勢頗る峻嶒なり、山嶺は四時雪を戴き其狀芙蓉に似たるを以て一名を豊後富士と稱す。頂上に深さ二十餘丈、高四丈四尺、廣さ二丈の一石室ありて常に金石糸竹の聲を聞くと云ふ、又半腹稍平かなる所に一池あり濶さ百歩許あり、呼んで池城と云ふとぞ、此峰古くより古綿山と書せり。萬葉集に左の歌あり。

おして出る時はすべなみ豊國の
木綿山雪の消ぬべくおもほゆ
又橘爲仲家集にも左の歌を載せたり。

神代よりおほくの年の雪つもり
白くも見ゆるゆふの嶽かな

由布嶽麓に鑛泉あり、温湯と云ふ、又嶽下池とも稱す、廣漠なること湖の如し、慶長年間地震の際嶽麓の民家數村地下に湮滅し池亦没して僅に二百歩を残す、池中に魚鱈御魚産し大さ皆尺餘なりとぞ。

●函白灣 (豊後)

是れ別府灣の一名なり。函白の稱は蓋し天文年中、明人阮林なる者白杵に來寓し屢々此地に遊び其形狀に因みて命じたるなり。又豊後灣とも云ふ。東國東郡の御野岬、北海郡の地藏岬と相對して其灣口を扼し西方に入る事十裡南北廣さ十里あり。灣内又美濃岬、加賀岬突出して、更に杵築灣を形成す、此灣素と瀬戸内海の陥没地域に當り兩岸砂洲遠く海水甚だ

深からざるも多くの良港を有す。灣内加賀岬より深江鼻に至るの間は絶壁連續し東方高崎山嘴の突出する所又峻崖にして沿岸水深し、南方には四極山聳ち西方には由布嶽を望み、雄峻なる風趣太だ掬すべきものあり。

廣瀬 淡窓

一面滄波夕照開 群山倒影碧崔嵬
松隨沙荷雲蓋出 潮抱洲心宛轉來
暮市無人爭利至 秋原有客賽神回
三旬遊樂今將盡 蓬萊風光却却哀

●沈墮の瀧 (豊後)

大野郡大野村字矢田に在り。大野、緒方の二川相合して一となり猛然として懸崖より落下す。高き九丈餘、濶さ一百餘歩、其潭の深きこと測り知るからず、崖上には磊々たる老石怪岩鋭鋒の如く突起並列して以て水を激す、水は分れて十三條となる、遠望恰かも水柱の聯立するが如く近づけば白龍雨を犯し轟々然として萬雷の哮叫するに似たり、壯觀言語に絶す、而して大水の際には合して一條となる、之を雄瀑と稱す、又一町を隔て、雄瀑あり、高き七丈亦雄壯の觀あり

●蓬萊公園 (大分)

大分市の東方に位置し、縣立師範學校と相隣りす、境域約方二町、園中春日神社あり、此祠貞觀二年國司藤原世敏勅許を得て造營する所に係る。此地素と小丘にして其狀伏龜に似たるより蓬萊山と號けたりき丘上に登れば直ちに城中を下瞰すべきを以て、嘗て加藤清正茲に臨みて軍事上大不利なるを告ぐる所ありしかば城主は命じて之を毀たしめ、更に小丘を城南庄原に築造し蓬萊山と稱せり、即ち是れ今の蓬萊公園なりとす、附近春日浦を控へ風光頗る明媚にして雅人の杖を曳くもの甚だ多し。

●佐賀城址 (肥前)

龜甲城と稱せる佐賀城址は赤松町に存す、面積凡そ三萬餘坪に亘り、現今蕪城内と稱する南半部は即ち其城址なり、本丸は今の師範學校男子部、女子部の構内にして、當時の書院は女子部として使用せられ、御居間の一部は音楽教室として使用せらる、天主閣は本丸の西に在りしと傳ふるも其址を留めず。

唯だ城門のみは嚴然として存し坐ろ當年を偲ばしめ、二之丸は今の監獄署構内三之丸は共進會場の東部なり、抑も佐賀城は龍造寺家象の創めて築ける處にして其舊隆信に至り天正四年を以て四方の外郭を經營し、子政家孫高房に傳ふ、然れ共多病能く守ること能はず、族鍋島直茂能く之を扶け且つ朝鮮の役其切の戦役に於て威名ありしかば終に之を讓與せり慶長十三年直茂規模を擴大にし十六年之を子勝茂に傳ふ封三十五萬七千石子忠直之を享け次で子元茂は小城七萬三千石に直澄は蓮池五萬三千石弟忠茂は鹿島二萬石に封せられて支藩となり、共に相繼ぎて明治維新に至れり。

明治七年前參議司法卿江藤新平秋田縣令島義勇相合して亂を爲し、二月十三日兵を擧ぐ十五日縣令岩村高俊陸軍少佐山川浩を率いて佐賀城に入る、此役兩軍激戦の結果二之丸三之丸皆な兵火に罹り、現存するものは僅かに牙城の一部門を留むるのみ、城門猶彈痕を存し見る者をして轉た肌粟を生せしむ、佐賀城の大手は町に臨み弱手は田野に接し其要害堅固なりしかば、九州に於ける名城の最なるものと稱されたり。

●松原神社 (佐賀)

松原神は市の中央松原町に在り、明和年中鍋島治茂封を襲ぐや不遷の廟を建て

鍋島直茂及夫人等を祭り、直茂の法號日峰崇和に因みて日峰社と號す、先是城内に祖先龍造寺隆信及其子政家孫高房を祭れり、天保年中之を春日村敷山に移し敷山社と號せしが明治六年に至り之を日峰社に合祀し杉山社と稱し殿宇を改造す、左に龍造寺直茂及高房の廟たる勝茂をも合祀せり、同七年舊藩士寺岡叟即ち直正の國家に功勞ありしを欽仰し、官に請ひ別に一社を本社と稱し境内南方に建て原松社と稱せるを同八年縣社に列せらる、社殿壯嚴、南に神苑あり、境内廣く鬱鬱たる老樟低く地を蔽ひ、園内幽邃を極む。

●鍋島閑叟銅像 (佐賀)

舊佐賀藩主としての鍋島直正侯は、其號閑叟を以て世に知らる、人は遺傳、境遇教育に依りて發達し進歩す偉大なる人物も此三大要素の養成する所たらずんばあらず、由來鍋島家は祖先以來三百年の間、其藩主に庸愚の人なし、茲に於てか系統遺傳に於て他に超越せり、長崎防禦の重大責任に當り百餘年前より外國の形勢に對し『藩力を傾けたる事』は世既に之を知る然るに此間長く續ける太平は江戸をして情氣充滿の天地たらしめ、滔々たる華奢の風は亦四方に傳播せる結果、各藩概ね悪影響を被り就中對外的重任を負へる佐賀藩の如き内外に廢したるもの少なからず、遂に疲憊極點に達したりき、直正侯の生れたる時は此天下多事の秋なりしかば、侯の教育に當れる人々は能く藩侯の旨を奉じ、重きを勤儉力行に置き、徐々天下の形勢を説き現下の疲憊状態をも告げ、以て幻君をして緊張せしめたり、侯は家庭に於て既に業に非常の困難を感じ、其強き鍛錬は亢奮となり耐忍となり、憤怒となり涙となりて遂に意思強固の君たるを得、其言ふ所行ふ所のもの、藩中の好範となれるのみならず、亦以て世の好範となり、其の上に誠忠を致せる偉勳に至りては世既に之を知る。

●江藤新平碑 (佐賀)

市の晩年は明治元年議定職となり從二位に敍せられ中納言たり、同二年六月開拓使長官に任せられ北門鎮鎗の重任に當り大納言なりしが、同年正月十八日病に依り薨去せらる、銅像は松原神社の社頭に立てり、其衣冠端麗たる英姿、人をして襟を正さしむ。

市内舊城内共進會の西方森林中に在る江藤新平碑は、礎石高く龜を刻み其上自然石を建て、碑と爲せるものにして最も壯觀を極む、新平諱は胤雄南白と號せり、三條實美以下七卿太宰府に謫居する新平之に従ふ、鍋島閑叟侯新平の奇才を愛し明治政府に薦めて中辨と爲せり三年十一月佐賀藩保守黨の爲めに櫻田門内に要撃せられて傷く、幾許ならずして文部大輔となり元老院副議長より遂に司法卿となり參議に進む。征韓論の時冠を掛け佐賀亂を起せる事世の知る所なり。

●高傳寺 (佐賀)

惠日山高傳寺は市街の南邊遠からざる所に在り、禪宗にして天文二十一年鍋島直茂の父清房の創建に係り、勝茂藩主となるに及す大に之を經營し、年々夥多の金穀を施入し、子孫世々墓所とす、明治四年其裔、祖光の墳墓數十所に散在するものを此に移せり、龍造寺隆信の墳墓亦此に在り。

●蓮池公園 (佐賀)

蓮池公園は蓮池町の南平野の間に在り、元藩主の城廓内の地にして、之を小城櫻岡公園に比すれば規模稍や小なりと雖も、假山林泉の風致、老松古樟の鬱蒼たる矚目快哉を叫ばしむ、地方稀れに見るの公園たり。



佐賀城



高傳寺



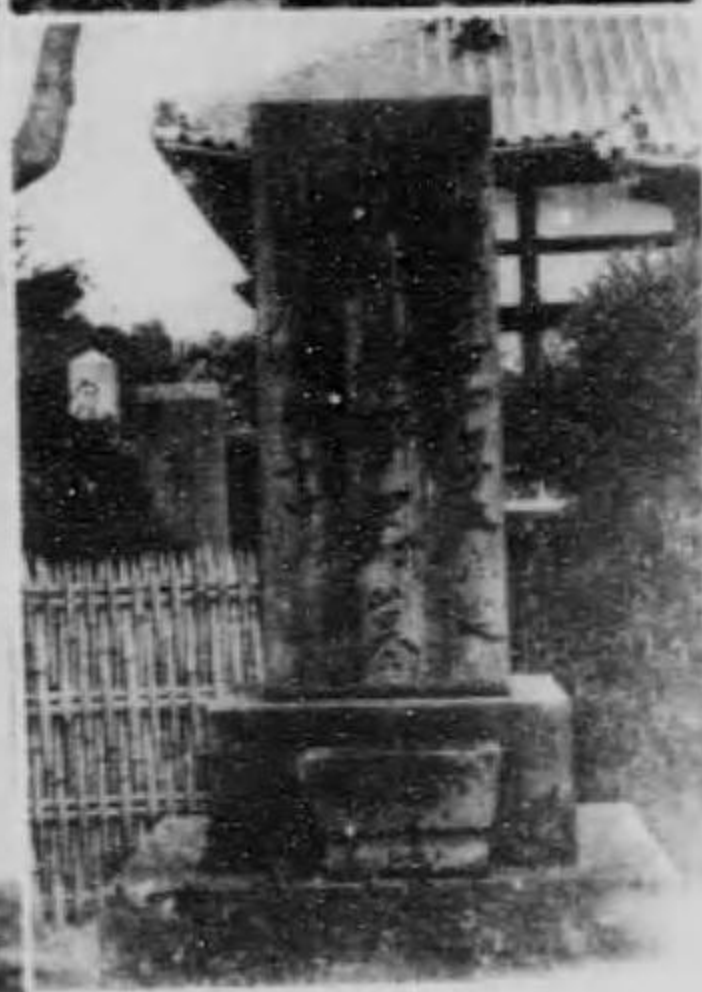
●松原神社 (佐賀)

松原神は市の中央松原町に在り、明和年中鍋島治茂封を襲ぐや不遷の廟を建て

じ、其強き鍛錬は亢奮となり耐忍となり、憤怒となり涙となりて遂に意思強固の君たるを得、其言ふ所行ふ所のもの、藩中の好範となれるのみならず、亦以て世の好

櫻岡公園に比すれば規模稍や小なりと雖も、假山林泉の風致、老松古樟の鬱蒼たる矚目快哉を叫ばしむ、地方稀れに見るの公園たり。

江藤新平墓



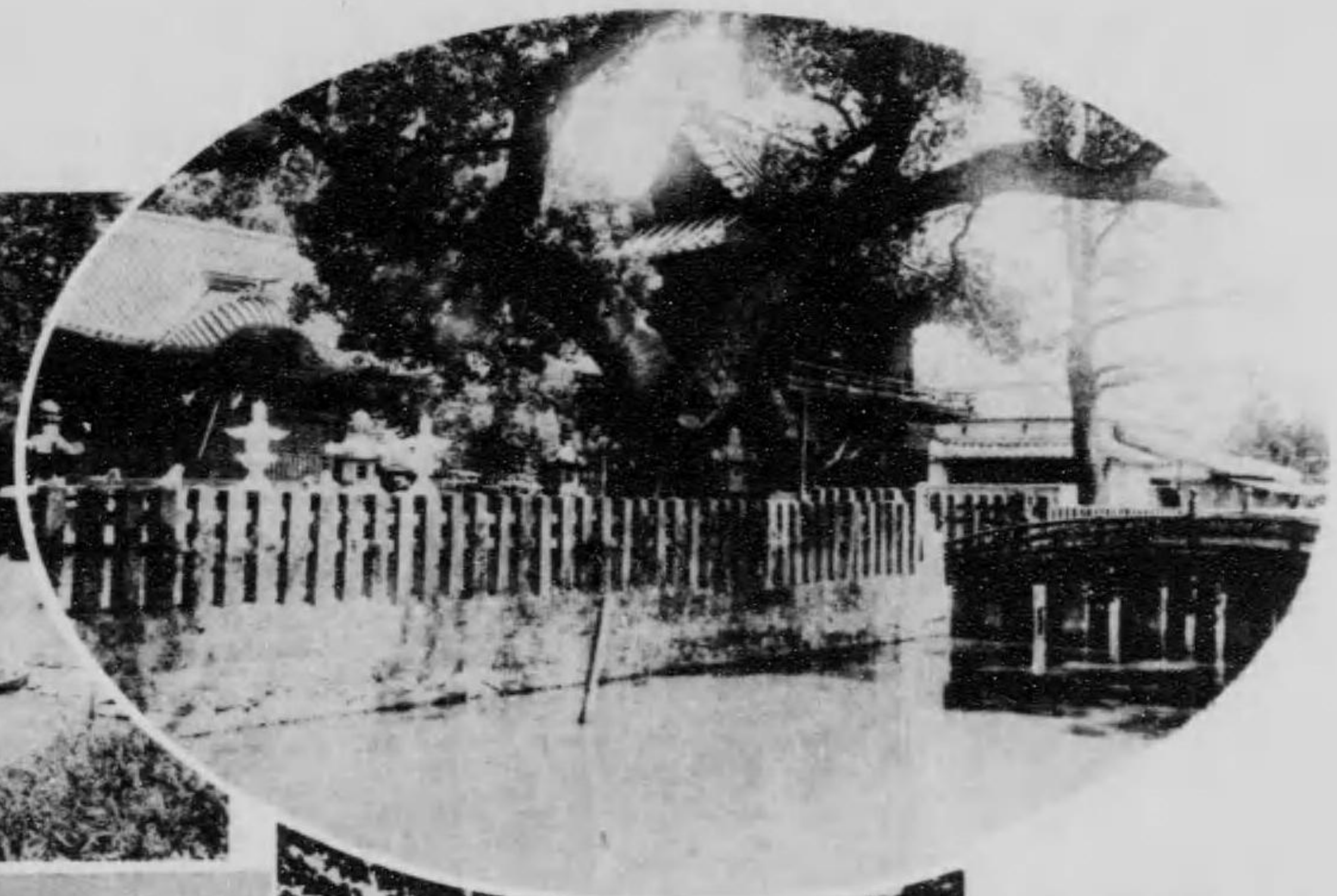
蓮池公園

鍋島兩叟銅像

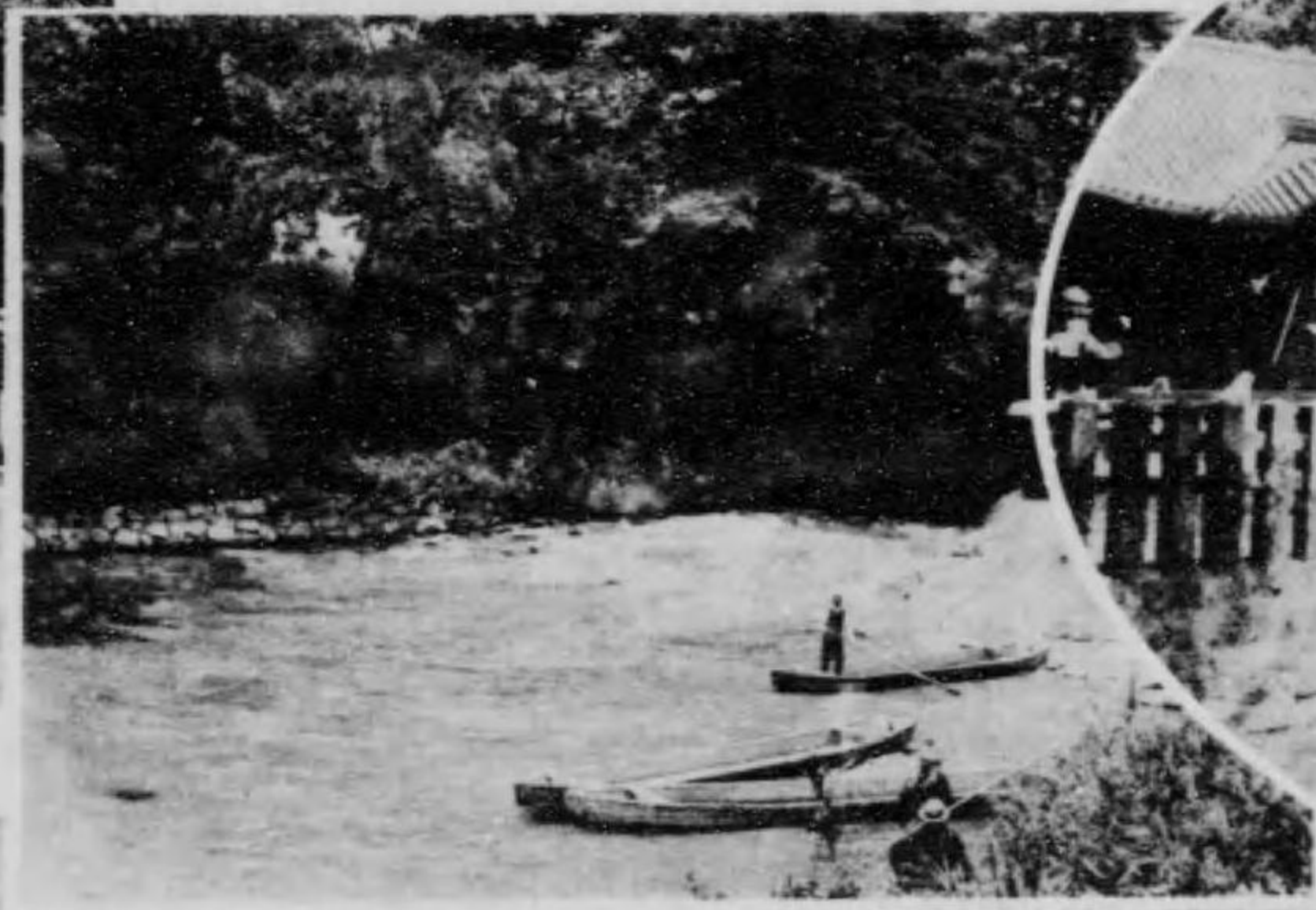


上ノ二三三

奥賀神社樓門



多布施川石樋



寶相院



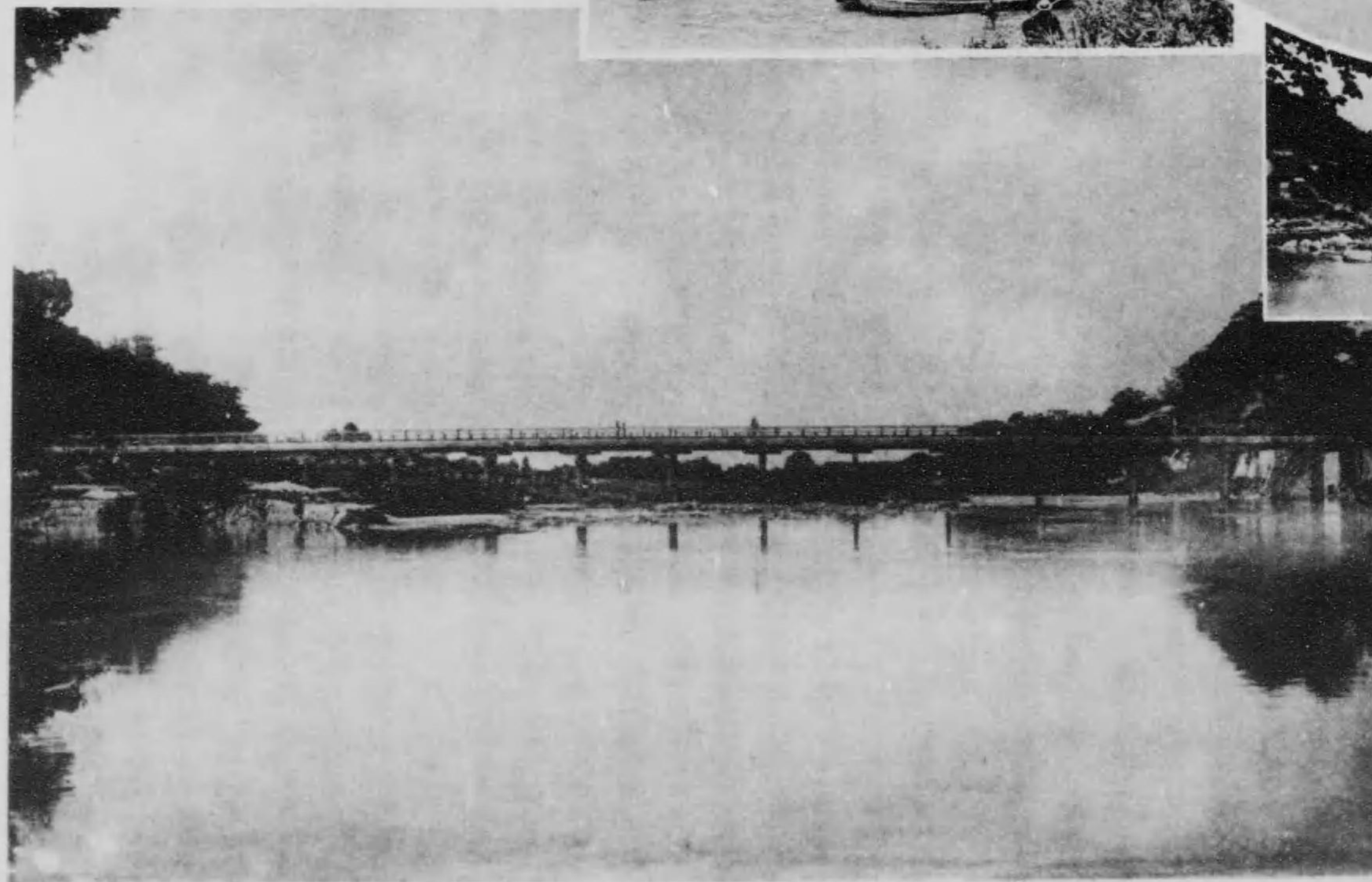
結染



矢の根石



水巧碑



川上橋

●川上川と鮎築 (肥前)

川上川は佐嘉川と稱し、佐賀郡三瀬村大字藤原の東、背振山の麓に源を發し、西南に流れ無津呂川と合して、又南に流

於ける石開丘上に在り、石礎十數級、繞すに鐵柵を以てせる碑石にして、之を他の銅像碑石等に比すれば其偉功に相應せざるの憾ありと雖も、個は是れ故人の人格に對する敬意より出でたる構造と首肯す

士多かりしが、就中清正は彼れの爲人を熱愛せり、又天草志妓の亂を生せし時、成富は一方清正の援軍と相俟つて奮戦す清正爲めに感狀を發し贈るに黒絲笠を以てし、後、太閤の雄圖に會ふや、鍋島直茂



川上川と鮎築 (肥前)

川上川は佐嘉川と稱し、佐賀郡三瀬村大字藤原の東、背振山の麓に源を發し、西南に流れ無津呂川と合して、又南に流れ古湯に至り、更に東流三反田に出て川上春日二村の間を貫き佐賀市に向ひ、夫れより東に折れ蓮池に至り、千年川を廻り南を趨りて海に入る、其川上村に於ける川幅は殆ど一町餘、之に架せる橋を韓人橋と言ふ。

其韓人橋の上流數十町の處を堰き止めて大なる築を設け鮎漁に備ふ、毎年盛夏の候之を架し晩秋之を撤す、其産額一年五千圓に上ると、築は兩岸より濁を以て漏斗状を描き、流れを防ぎて中央に幅丈餘の水路を排き、水勢を奔流せしめ、竹の筏を以て柵を作り、鮎を此上に陥る、築上築下水面の高低二丈許あり、盛夏の候扁舟に棹、築下に鵜飼を爲すことも興味あり、仲秋稍や朝冷を覺ゆるの時、築上に遊べば瞬間數百の鮎は飛んで築上に落ちるの状更に一層の愉快を感ず、此川の鮎は一尺二三寸を大とし七八寸は中、五六寸を小とす、其味ひ淡美にして香氣あること多く他に類を見ず。

川上は峯巒秀麗の地、流水亦清冽、櫻樹兩岸に臨み、寺院山上に屹立し神社河畔に在り、風景としては佐賀市郊外に之を凌駕するものなく、鮎の生産に於ても縣下唯一の漁場たり、川上の名世に知らるゝは此景あり此鮎あるが爲めなり。又實相院は川上の山上に在る名刹にして、和銅五年行基僧正の開基に係る、境内一町餘、其仁王門に神通密寺の勅額を掲ぐ、北に山を負ひ東に川上川を控へ風景頗る絶佳の地なり。

成富兵庫水功碑 (肥前)

偉人成富兵庫の水功碑は佐賀郡北村に

於ける石岡丘上に在り、石礎十數級、繞すに鐵柵を以てせる碑石にして、之を他の銅像碑石等に比すれば其偉功に相應せざるの憾ありと雖も、個は是れ故人の人格に對する敬意より出でたる構造と首肯す乃ち功を誇らず名を賣るを好まざりし偉人成富は、後世に於て銅像となり大碑石となるを喜ぶ人に非ざりき、唯だ國利國益の爲めに不言實行を敢てせるに過ぎず碑前に立ちて當年の設計たる石岡を眺め且つ亦他方面に施せる水利土工を顧みれば儼首三拜を禁じ得ざるなり、人心腐敗して自己を利する爲めに他を顧みざる者多き今日、特に隠れたる偉人を憶ふ。

成富兵庫守茂安は鍋島麾下に於ける勇將たり經世家たるの技倆を有せる大人物なりしも、功名を意とせざる彼れに在りては將となりて食祿を食らんより、寧ろ卒と伍して活躍を試み、功を兼に分ち、喜びを他に與へんとせり、是れ彼れが高官將位と遠ざかり、獨り渾身是膽の主義を取りて、兵馬倥傯の間に介在し、盡すべき時に盡せること他に超越す、世人が此人を知らざる所以は此間消息を知らざるに由る、一世の傑物たる豊太閤は成富兵庫守を深く信じた一人にして、其柱石たりし加藤清正の如きは亦肝膽相照せる間柄なり、之に依りて見るも彼れの偉大なる人物たりしを窺ひ得可し。

九州の地に武威を振へる少貳例れ大内衰へて大友再び擡頭し來りて島津は別に武を東九州に試み、肥筑の野は龍造寺大友の對戰場となりし時成富年僅かに二十當時の太守龍造寺隆信は驍勇の士にして副將鍋島直茂と相倚り、大友軍の主力を失はしめ進んで隣藩の諸國を屠る、成富亦此戰に参加し粉骨盡瘁して二將をして領域に安んぜしむ、次で關白秀吉の討薩に従ひ彼れの武勇は關東上方武人間に喧傳せらる、乃ち言ひ寄りて懇情を結ぶの

士多かりしが、就中清正は彼れの爲人を熱愛せり、又天草志妓の亂を生せし時、成富は一方清正の援軍と相俟つて奮戦す清正爲めに感狀を發し贈るに黒絲燈を以てし、後、太閤の雄圖に會ふや、鍋島直茂は加藤清正に伍して第一軍の先鋒たり、成富拔擢せられて其先手となり、軍船彼の地に着き間もなく一番首の譽あり、彼の兩度の大坂陣に當り鍋島家中よりは成富上方陣に在りて激戦を重ねたり、天正、文祿、慶長、元和の年を通じて彼れが戰場に臨んで斬斷擄撃を以て殊功を樹つるも殆ど枚舉に遑あらず、嘗ては太閤の上使黒田孝高をして無双の武邊者と歎せしめたり、秀吉も亦名護屋陣營に彼れと相見へて武功武者振の拔群なるに贊賞措かず酒盃を與へて之を記念とせり、尙ほ彼れの武功を記さんとするも餘白なければ省略す。

天下の形勢變遷し來りて家康權を専らにせんとするや、成富武を收めて國利民福を計らんとし、弓箭の武人變じて土木の夫となり、蹟を垂るゝもの全肥二十有餘所の多きに亘る、千葉坂口間の築堤治水の如きは、工を急にせば農民課税に苦むを察し、十二年長きに亘り一部々々寛やかに工事を進め、水功碑の在る北村石岡の偉觀は現今猶ほ無比の水利工事と稱せらる、又永池の水溜は郷民々に至るも成富を祀りて之を頌し、佐賀、神埼、三養基の各郡に至れば、成富兵庫守茂安の名を移して兵庫村、茂安村と稱す、三百年來彼れの成せる鋤耕作水の便を得て鼓腹擊壤せる農民の心は堯恩舜德を仰ぐの心にも例ふべきなり、三十六萬石の鍋島家中は後年西國大名中屈指の富強を成せり、

戰國の武人「心を經濟に馳せ手を河中の間に」下して濟世致富の偉績を遺す、偉人と稱する所以は武名に非ずして彼れが晩年の功業に在り。

●唐津港 (肥前)

東は小城郡に連り、南は杵島郡に接し東北は筑後の怡土郡に界し、西南は西松浦郡に交はる、東松浦郡は西北一帯の地全く海に接す、一郡を分ちて唐津町、名古屋村外十九村と爲し、郡衙は唐津町に在り。

唐津港は西の濱を隔て、西港と相連り汽船常に碇泊し煤煙蒼波を蔽ふ、明治三十二年港を開きてより船舶の出入一層の頻繁を加ふ、松浦地方各地の炭礦より來れる石炭は皆此港に集まり、『唐津炭』の名を以て輸出せられ、實に當港輸出品の第一位を占む、港は自然に二區に分る、一を東港と言ひ、高島、鳥島を以て北面の風波を防ぎ松浦川之に注ぐ、即ち唐津町及東浦島村の海岸なり、松浦川には帆船林立壯觀を極む、一を西港と言ひ唐房灣とも言ふ、大島東北に横はりて風波を防ぐ、唐津線は久保田より來りて此港頭西唐津に達す、之れ唐津村佐志村の海岸にして共に水深く波靜かに海陸の設備亦完全なり、又舊城址の西方より大字妙見に至る一里有餘の海岸は砂白く遠淺なれば干潮の時は數町の沖に至るを得、此海岸に沿へる西の濱には海水浴場の設備あり北に大島、鳥島、高島の三島横はり、遠く翠を曳ける虹の松原を右方に望み、左には西の松原遠く妙見に連なるものあり風景最も佳絶なる地なり。

●虹の松原と領巾振山

(肥前)

唐津町の東、松浦灣長汀二里餘の間、萬松一路自沙の上に翠を連ねて、玄海の清波に浮び、領巾振山の晴風に映するもの、之れ即ち虹の松原にして、其清麗の景、優艶の狀、三保の松原、舞子須磨と相譲らず、若し夫れ夕陽燃ゆるが如く海

に映じて、波爲めに紅なるの時、海濱二里の沙地白く、竝松萬株翠滴りて紅白青の色を重ね、宛然たる二里の大虹を爲す唐津の虹の松原か、虹の松原の唐津か、洵に是れ天下稀に觀るの絶勝なり。

領巾振山は松原の南に在り、全山玄武巖より成り山形卓の如く最も美容を備ふ山の西北端一老松の蟠踞する處、特に眺望の美に富む、此山に關する古歌を掲ぐ
音に聞き目にはまだ見ず佐容比賣が
ひれふりきとよ君松浦やま
蟬の羽の衣に秋を松浦灣

ひれふる山の暮ぞ涼しき

朝臣を祭れり、創建は第一殿を神功皇后元年と爲し、第二殿を天平勝寶四年八月と爲す、現在社殿の數は本殿二字、攝末社合せて五宇、拜殿一宇、結構壯麗を極む、此社の宮殿は往昔金銀を以て鑿められ、七堂伽藍、釋迦堂、鐘樓華表等在りて供田壹萬石を有し、四十八森の稱ありしを中古悉く頽衰に歸し、今は僅かに三分一を保てるに過ぎざるも寶物中に觀るべきもの多し。

●松浦川 (肥前)

松浦川の源は二あり、一は杵島郡宮野に發し、一は東松浦郡巖木村の東、佐禮嶽に發し、曲折して相知村に至り相合し鬼塚村に至り波多川を容れ、虹の松原の西に出で唐津港に入る、流域凡そ十里餘なり。

沈めけむ鏡の影や是れならむ

松浦の川の秋の夜の月

此歌は定家の詠めるものにして其鏡に就ての傳説は『大伴狹手彦任那國を鎮め兼て百濟國を救はん爲めに詔を承けて此村に至り、篠原長者の女佐用姫を妻とす其容色他に勝る、別れに臨み鏡を取りて婦に與ふ、婦別れを悲みて栗川を渡る時與ふる所の鏡を抱きて川に沈めりと傳ふ

夫れより此所を鏡の渡と言ふに因めるものならん。

領巾振山の麓に鏡神社在り、郷社にして、第一殿を息長足姫命を奉り第二殿に藤原廣嗣を祭る。

●玄海洋の奇巖 (肥前)

西唐津より北海六哩の邊奇巖四方に點在す、其大小幾多の奇巖は皆な是れ玄海洋より成る百容千態のものにして、周圍凡そ十數丈のものあり屋舎の如きものあり、樓門の如きものあり、怪獸の如きものあり、湊村北方の海岸に聳立する立神岩の如きは高數十丈、能く潮風の搏撃に耐へて巍然たり、又神崎には七ツ竈と稱する奇巖ありて斗壁峭立、先端分岐して稍や三叉狀を成し、其東なる又の基脚に七個の横洞竝列して竈を竝べたる如く見ゆ、之れ七ツ竈の稱ある所以なり、波瀾靜穆の日小舟に乗じて此に遊ぶ者多し、之より北呼子に至る間一里餘の處斷崖絶壁峭然として連續す、此總ての崖壁は盡く玄武巖なるを以て遊子をして思はず。

『我國にもフキンガル窟在り巨漢の石道在り』と絶叫せしむ、筑前志摩の芥屋の大門より十海里を隔てたる此方面は恰も五百羅漢を海上に排置せるやの大觀を成し曰く玄武巖洞、曰く天狗巖、曰く獅子巖、曰く玄武門、曰く何々と名稱を有するもの枚擧に遑あらず、實に玄海洋は航海者の樂園たり好同伴たりと言ふを得べし。

神后三韓征伐の折艦裝を調へ、皇軍の勝利船中の安全を祈られたる舊蹟として傳へらる、神集島は湊村の東北に在る島嶼なり、湊は一に鰐ヶ浦とも言ふ、舊記に神后鰐ヶ浦より船出し給ふとある所、三韓よりの貢船此浦に來れるより初めて湊の名を附せりと傳ふ、又上記せる七ツ竈巖の竝立する處を土器崎と呼ぶ、是亦神后出征の際勝軍を祝し神酒を給はりし土器を遺せるより此稱ありと云ふ。



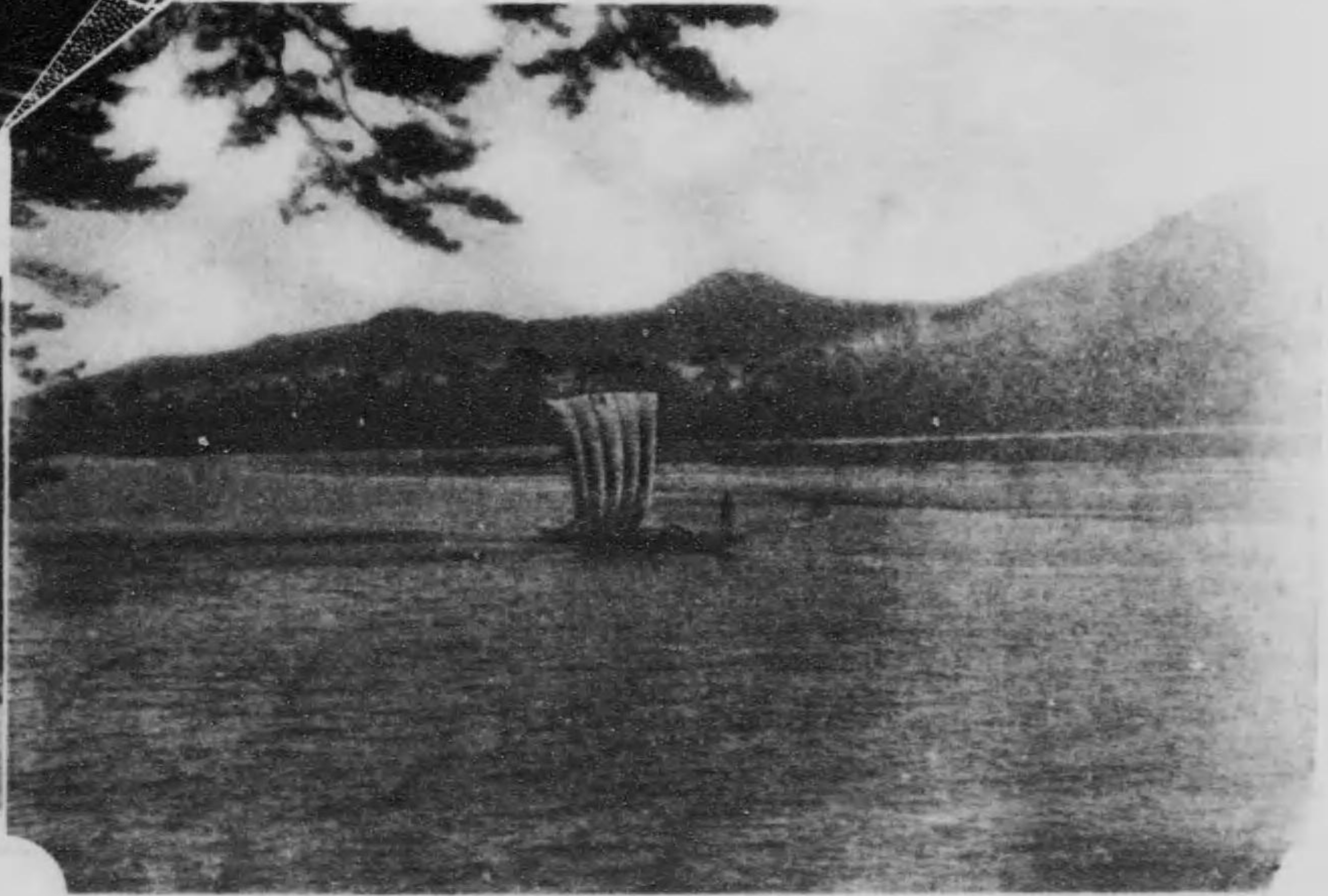
唐津港



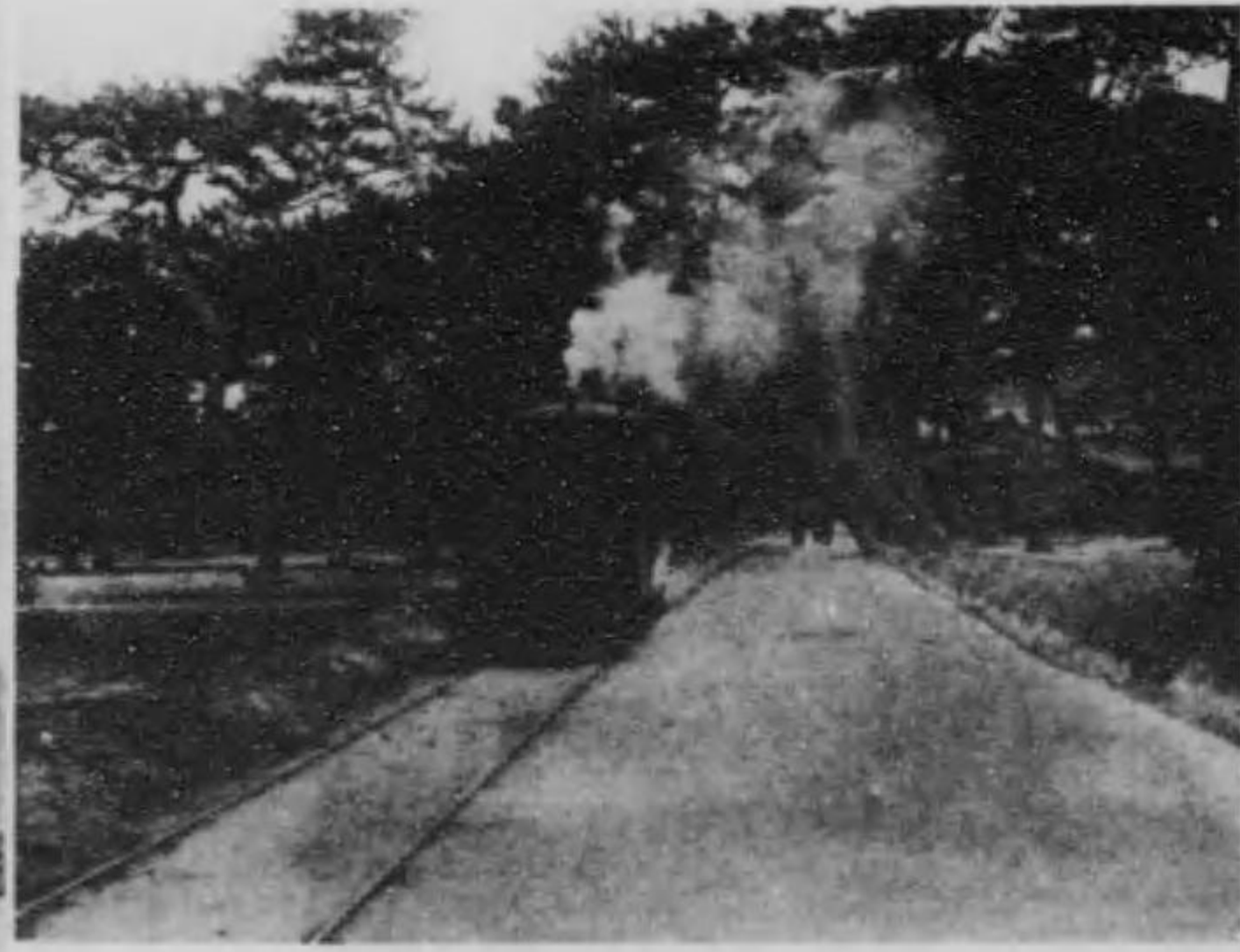
立神岩



七ツ釜より玄海を望む



松浦川及飯中庵山



虹の松原



花武門

上ノ一三五

松一路自沙の上に翠を連ねて、玄海の清波に浮び、領巾振山の晴嵐に映するもの、之れ即ち虹の松原にして、其清麗の景、優艶の状、三保の松原、舞子須磨と相譲らず、若し夫れ夕陽燃ゆるが如く海

兼て百濟國を救はん爲めに詔を承けて此村に至り、篠原長者の女佐用姫を妻とする其容色他に勝る、別れに臨み鏡を取りて婦に與ふ、婦別れを悲みて栗川を渡る時與ふる所の鏡を抱きて川に沈めりと傳ふ

韓よりの貢船此浦に来れるより初めて湊の名を附せりと傳ふ、又上記せる七ツ竈巖の竝立する處を土器崎と呼ぶ、是亦神后出征の際勝軍を祝し神酒を給はりし土器を遺せるより此稱ありと云ふ。

大村灣玖島岬



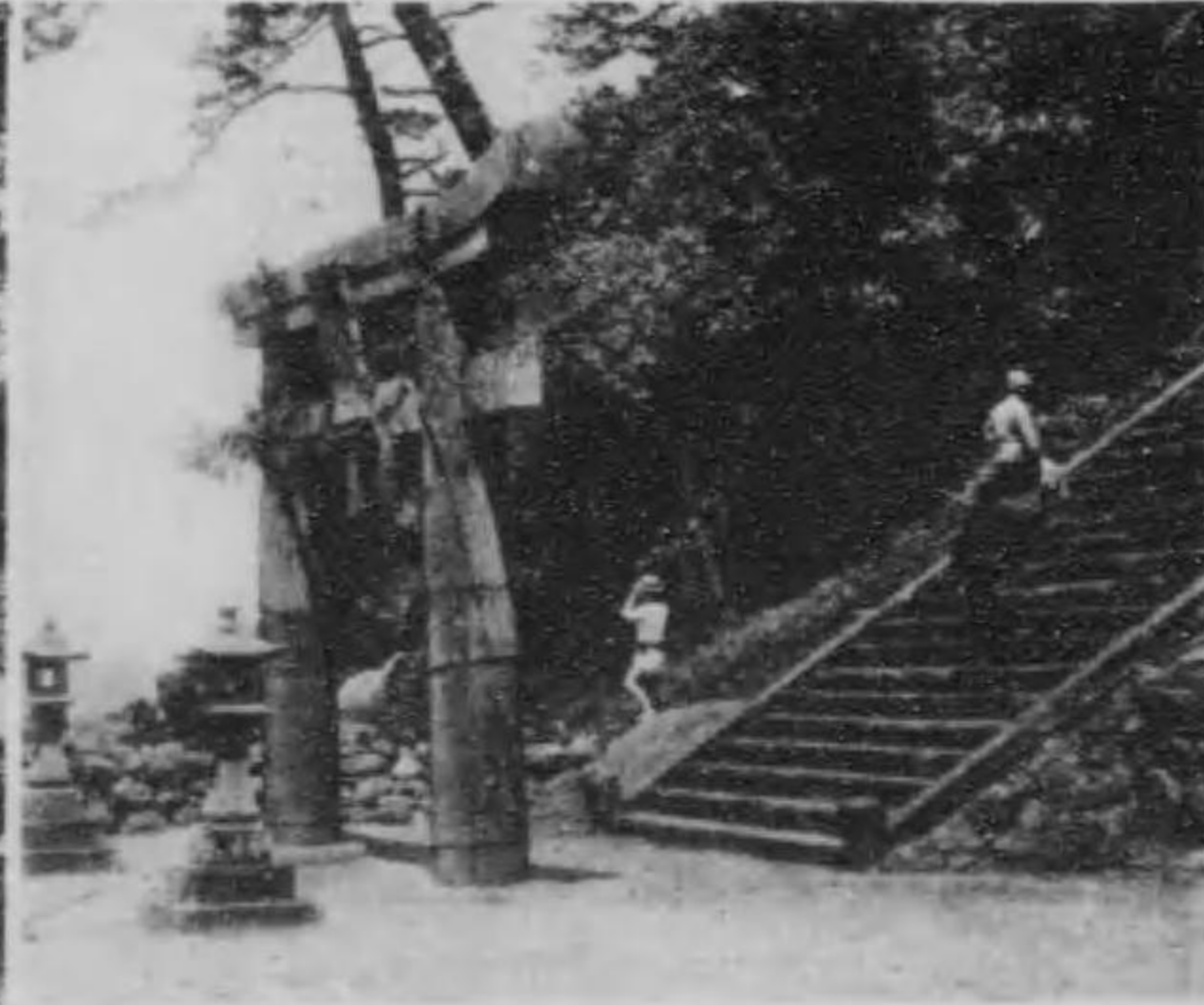
呼子港

大村灣頭より葦島を望む



佐世保市街

田島神社



平戸灣



●佐世保港 (肥前)

我海軍第三海區としての軍港佐世保は、早岐より西五哩半、山峰三面を圍み

便局。宇地嶽神社、市役所、裁判所、稅務署、砲兵聯隊、衛戍病院等を始め壯大なる工場ありて軍港の設備に缺くるものなし、巨艦水雷艇小汽船等常に深碧な

●平戸港 (肥前)

長崎港の未だ開けざる以前に於て貿易港たりし平戸は、北松浦郡第一の繁華地なり、名古屋城址より海上十三里、長崎



●佐世保港 (肥前)

我海軍第三海區としての軍港佐世保は、早岐より西五哩半、山峰三面を圍み南に港灣あり、元は一寒村に過ぎざりしも明治十九年海軍鎮守府を此に置かれしより人家頗る増加し、山を拓き卑を埋め、廳院廠舎鬱然として起り、従つて商厦櫛比遂に一大市街を成すに至れり。

此港は大村灣の外灣にして、針尾島の西岸より北方に彎入し、灣門は針尾島の西三海里西微南に開く、水尻崎を東角とし、向後崎を西角とす、而して第三海區の管する所は、下關海峽西口名古屋崎より、西南九州の沿岸、日向郡井崎まで、及び壹岐、對島、五島、沖繩等の海面に亘る、鎮守府の要塞の設備ありて其砲兵聯隊は第六師團の所管たり。

西方一嶺脈を隔て、相浦あり、此浦は佐世保港西方の屏障にして、俗に九十九島と稱され大小幾多の巖礁灣内に簇集し風光最も佳なり、龜井南冥の詩に『平門九十九名山。遊倦扁舟發夕還。皓月前峰猶未落。紅輪飛上碧波間』とあるは相浦以西佐々浦並に平戸海峽の岸邊を賦せるものならん。

明治二十七八年、同三十七八年兩度の戦役に於て、我艦隊は先づ纜を佐世保港に解き、其光榮ある征途に上りたりき、鎮守府は佐世保川北より市中を貫流して其河口に出でたる所に在り、佐世保驛は沙見町にありて一條の道路は直ちに旅客を其繁華なる市街に導く、本島町に本願寺別院あり其後に佐世保要港司令部あり、名切川に架したる橋を渡れば榮町、常盤町、松浦町の一區は市中最も繁盛なる商業市街を成し、相生町高砂町は其北に連りて其繁華亦之に次ぐ、鐵橋佐世保橋は佐世保川に架せられ、前に巨大なる鎮守府の洋館巍然として全港を壓す、郵

便局。宇地嶽神社、市役所、區裁判所、稅務署、砲兵聯隊、衛戍病院等を始め壯大なる工場ありて軍港の設備に缺くるものなし、巨艦水雷艇小汽船等常に深碧なる海波の上に浮べり。

●大村灣の風光 (肥前)

東南諫早地頭より西北伊之浦瀬戸に至る間、約二十二海里の長さに亘り其横最も廣き所十三海里餘に及ぶ巨灣之を大村灣と稱す、此灣の外港は即ち佐世保灣にして、西に向ひて港門を開く海深く十二呎より十五呎に至る、群山環繞して灣内常に穩かなり、琴の浦又は鯛の浦とも呼ばれ、元は彼杵海を以て著る灣内恰も湖池の如し。

遠 越 帆

行盡西州地欲無 山圍又開一寰區
帆橋矗立灣成港 島嶼回環海似湖
冀北如今生駿馬 日南終古出明珠
羔裘退食人多少 好佐賢侯勞廟諫

灣頭に立ちて右顧左盼すれば、西彼杵の峻山群峰は相連りて此灣に臨むの觀あり、前面碧波浩蕩の間には大小幾多島嶼の點在するあり、汽船の東航西航するあり、水雷艇の遊弋するあり、小舟を浮べて繪を垂るるものあり、白帆の波上に隱れ見出沒するあり、眼界に入るもの盡く畫材たり、就中畫けるが如き裝島の嫣然として相對するの狀は此灣好個の對照と言ふべく、一望際涯なき肥筑の野に飽きたる旅客は茲に出で、此漫々たる風光を觀初めて心神を慰め得るなり。

大村町は東西三町南北十一町の市街にして。歩兵第二十三旅團及第四十六聯隊の兵營あり、縣立大村中學玖島學館、東彼杵郡役所等ありて佐賀長崎間に於ける般賑地なり、又大村氏の居城たりし城址を存す、又玖島城址は灣内に存して玖島岬亦當年の古蹟たり。

●平戸港 (肥前)

長崎港の未だ開けざる以前に於て貿易港たりし平戸は、北松浦郡第一の繁華地なり、名古屋城址より海上十三里、長崎港を距ること亦海上三十三里、其長狹なる海峽を過ぐるものは、潮流急駛せる峽門の北に當りて、高陵の上、長松の海風に亂立する間に、數層の古城閣僅かに一兩基を存し、其廢殘せる白堊の蟹風療雨に曝さるゝを眺め得べし、是れ即ち往古の平戸城址にして、久しく松浦氏の治する所たりき、弘安の役蒙古の襲撃を受けし以來、西肥の要津外國往來の門戸を成り交易を開始し、遂に地界を劃して此に居るに至れり、今日猶其居留地跡を存す、此港の海頭に數百の島嶼星散羅列し最も風光に富む、乃ち九十九島の勝景中其最なる所なり、平戸は又夙に捕鯨を以て聞ゆ。

●呼子港 (肥前)

呼子港は唐津港を距ること西北四里の所に於て、地は呼子灣の長く彎入せる處に位し、前に加部島の危大なる青螺を見る、唐津港との間には馬車往來し、大阪長崎間の定期船は壹岐を経て常に此港に寄港す、由來漁業を以て聞ゆ。殊に平戸と同じく捕鯨業者多く、六千有餘の人口を有する般賑地たり。

●田島神社 (肥前)

呼子港の對岸加部島に在る田島神社は國幣中社にして三女神を奉祀し、相殿に大山咋神、稚武王命の二神を祭り、縣内第一の古社を以て稱さる。蒲山松杉鬱蒼、松浦灣一帶の風光を一時の下に集むる勝地なり、境内に末社佐用姫神社在り社殿に『効忠貞之節』の額を掲ぐ。

●名護屋城址 (肥前)

克く内を裁定せる英傑豊太閤は、老來
盡々壯なる元氣抑ふべからずして、外
に征明討韓の令を下すに至れり、治に居
て亂を忘れざる勇將強兵は此令を聞くや
血湧き肉躍り各其先鋒を争ふ、百萬の批
練東西南北より動き始め、先づ肥前名護
屋より順次遠征の途に上る、秀吉亦此に
下りて總軍大統の任に當らんとし行營を
築き、以て士氣の振興を計り常に籌略を
按じ氣既に宇宙を併合す。

當時海陸軍の根據地たりし名護屋は、
鐵裝の兵船碧海の上に隊を聯ね、陸兵亦
行營の周圍に屯營して實戰に臨むの日を
俟つ戰捷の報屢々達する毎に喊聲起り天
地を震撼するの概ありしは想像に難から
ず、其活天地たりし名護屋は今僅かに
城址の一端のみを遺し、海風當年の壯觀
を賸り、此に逍遙する者をして往事の茫
々たるを思はしむ、此好個の史蹟特に記
すべきものなきは吾人の最も遺憾とする
所なり。

名護屋港の形勢は波戸崎より南東に走
る海岸と、加部島西岸とに由りて港門を
成し漸次其幅を減じ南方に深入し、西側
に名護屋村あり、此港と呼子港との間の
斗南北端は加部島に對し高潮に半没する
石段にして、狭窄の一水道あり、濶さ半
鏈中央の水深十六尋及十二尋、小船は此
水道に由りて兩港間を往來すとは水路志
の記する所、而して名護屋城は其築造の
時に於て未だ他に設けざりし天守閣を設
けたる程なれば結構の雄大なりしこと論
なし、秀吉病に罹らずんば前後數歳に亘
れる駐韓軍は萬遺憾なき解決を告げ、更
に進んで征明の實を擧ぐべきを爾かする
能はざる間に秀吉の薨去を見、彼れが計
畫せる壯舉は家康の繼承する所となりし
も、秀吉の雄圖と元氣とを繼ぎ以て遠征

する事は家康としては直ちに實行し得ざ
りしなり、是れ兩人者の性質全然相反し
前者の激濁たる果斷は、後者の深思熟慮
となり、而かも亦前者の海外雄圖は後者
として容易に與すべからざるものに屬す
秀吉家康の爲す所獨り這事に於て異なる所
あるのみならず、大概其撰を異にせり。

草場 船山

興亡今古不可期 取快一時是男兒
結髮起身奴隸伍 隻手折盡扶桑枝
餘波直及鴨綠水 決潰八道東海歸
飛花撲杯芳山宴 想見戰血紅陸離
豐圖一旦將星落 北風吹送班軍旗
群隊噴噴放談議 或曰黠武或兒嬉
或曰漫被黠兒賺 末勢不振國本痿
嗚呼燕雀何知鴻鵠志
英雄襟懷本落落 不因得喪爲喜悲
偶經舊墟欽偉略 寧將涕淚洒殘碑
陞然大笑臨渤海 水天一碧騰雲飛

●廣澤寺の蘇鐵 (名護屋)

豊太閤在陣中の別殿たりし池福山廣澤
寺は名護屋村に在り、寵妻廣澤局此に住
めり、太閤總軍大統の任に忙殺せらるゝ
傍ら勞を當寺に慰する時加藤清正朝鮮よ
り携へ歸れる一株の蘇鐵を獻す、太閤其
珍樹を喜び自ら鋸を取りて之を庭園に植
へ日々愛觀せり、今や軀幹蟠屈數十枝に
分れ、老姿趣きありて國內無比の大蘇鐵
と稱さる、又千利休手植の竹なるものも
あり、當寺より近き法光寺に太閤手植の
櫻及曾呂利新左衛門の築ける假山を存
し、家康竹之丸の陣地に在りし時別殿と
せる遺跡龍泉寺には、假山昔の儘に存し
尙は其守本尊とせる阿彌陀佛を藏す。

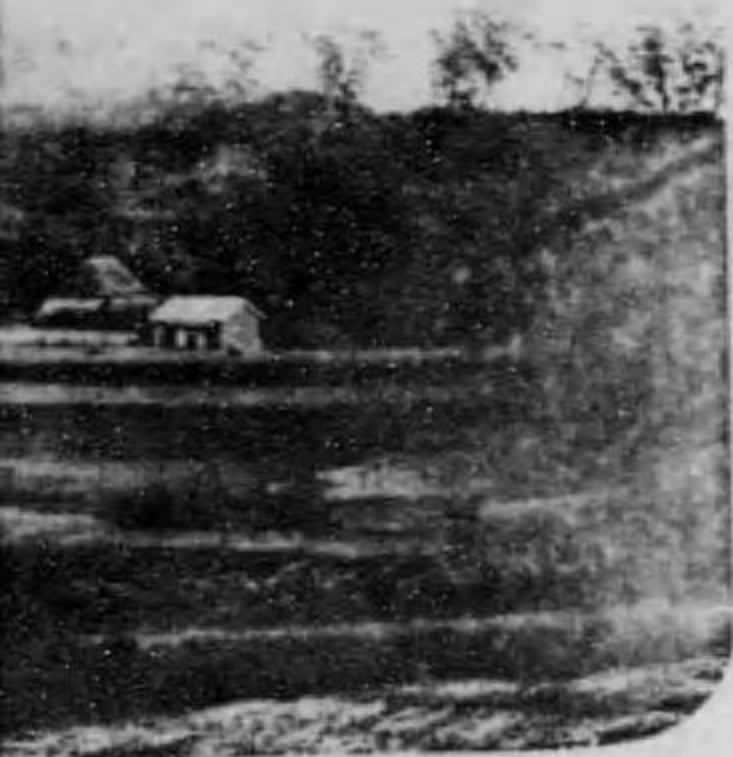
名護屋城址は唯だ礎石に其跡を留むる
のみにして、松嶺徒らに風に鳴り波濤遠
く海岸を搏つのみ、今に於て形を存する
ものは此方面の寺院に之を見るのみとな
れり。

●島原灣と舊城址 (肥前)

筑紫海諫早灣の南、天草群島の北に當
る南高來郡は、即ち島原半島にして、其
西北頸幅二十町餘の地に於て北高來郡と
接続し、南北七里東西四里、東面は島原
灣に向ひ、南面を早崎海峡と言ひ西面を
千々岩灘と言ふ、島原市街は東岸に在り、
有名なる温泉嶽は半島の中央に蟠屈して
其秀容は到る處より之を仰ぐを得。

島原町は東西一里、南北一里九町餘、市
坊十六を有し南高來郡役所及縣立島原中
學校の所在地なり、町は島原町と島原港
とに區別せられ、舊城址は町内に在りて
今猶四圍に濠渠を存す、港は町の南に連
り港口には温泉嶽、眉山の爆裂に歸因す
る岩塊より成れる大小の島嶼星羅棋布
し、白沙青松曲州瓊浦の光景は宛然松島
の觀あり、港内水深く碇泊に便なるを以
て帆船林立し汽笛の音絶へず、定期船は
長崎、口之津、茂木に達するものと、熊
本縣長洲、三角に達するものあり、港の
埠頭に白色射光六海里に達する燈臺あ
り、市街の東に權現山あり小丘を成し、
山頭に靈丘神社あり境内綠樹蒼鬱として
遙かに筑後肥後の山影を望み海上の眺望
亦絶佳、遊ぶ者をして去るに忍びざらし
む、今ま此境内一帶を島原公園と稱す、
越遠帆觀溫泉嶽の長歌あり。

海驛鳴鶴報五更 艤船曉辭佐嘉城
波平殘夢猶堪續 欹枕臥聽柔櫓聲
蓬窓四顧無纖點 風帆直指西南行
神耶鬼耶仙耶佛 有物雲中形勢驚
漸近漸驚翠螺巒 明粧儼然暎初日
非是羅襪去凌波 恐向金蓮花上過
如媚如顰還似笑 怪看兩頰生微渦
俄爾天晴渺海水 只見溫仙空際時
霧閣雲窓何在哉 同舟齊喚君磨矣
山素無容亦不粧 人自多情枉斷腸
御想爲雲爲雨元幻耳 開口大笑楚襄王



廣澤寺跡

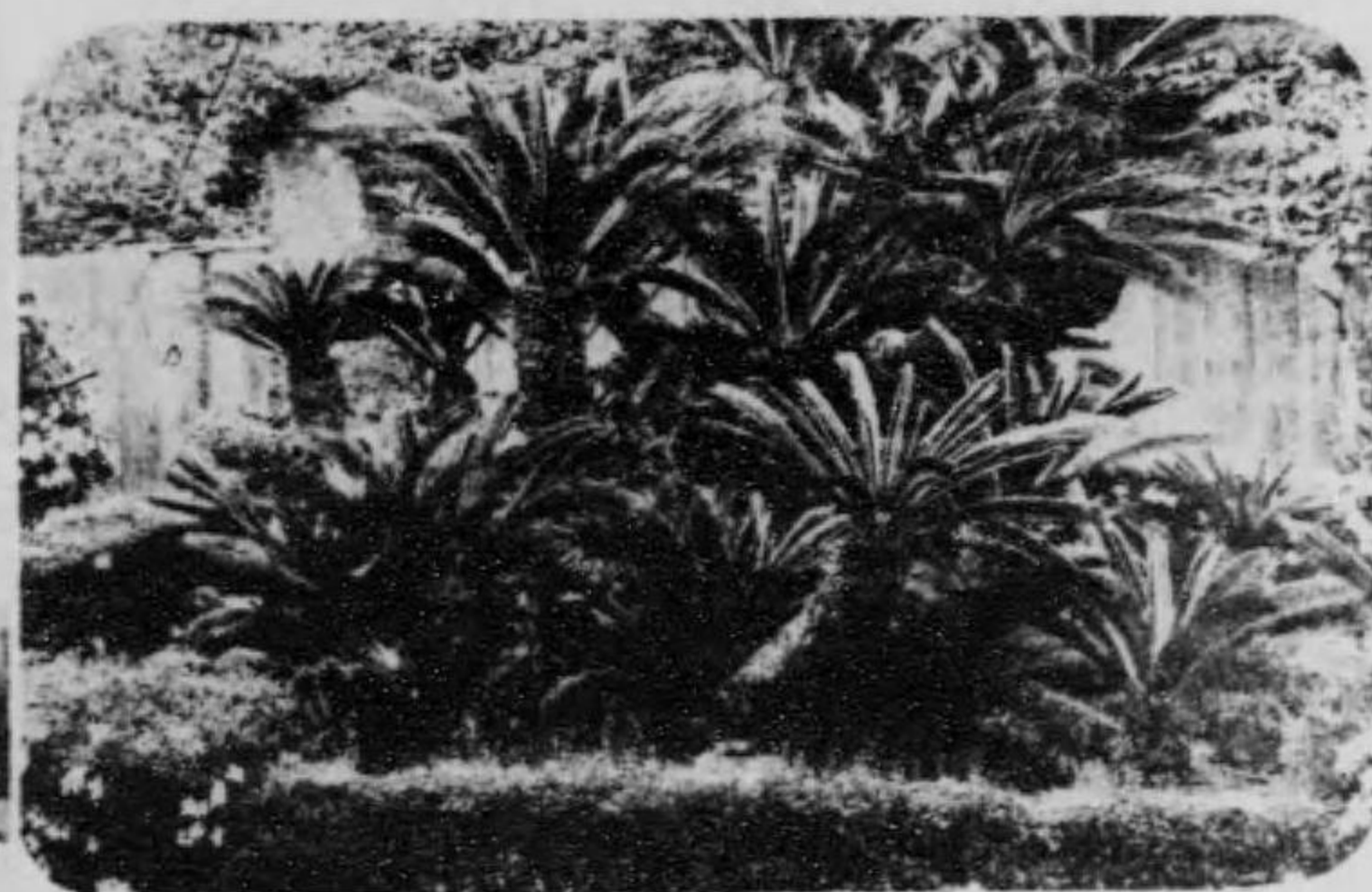
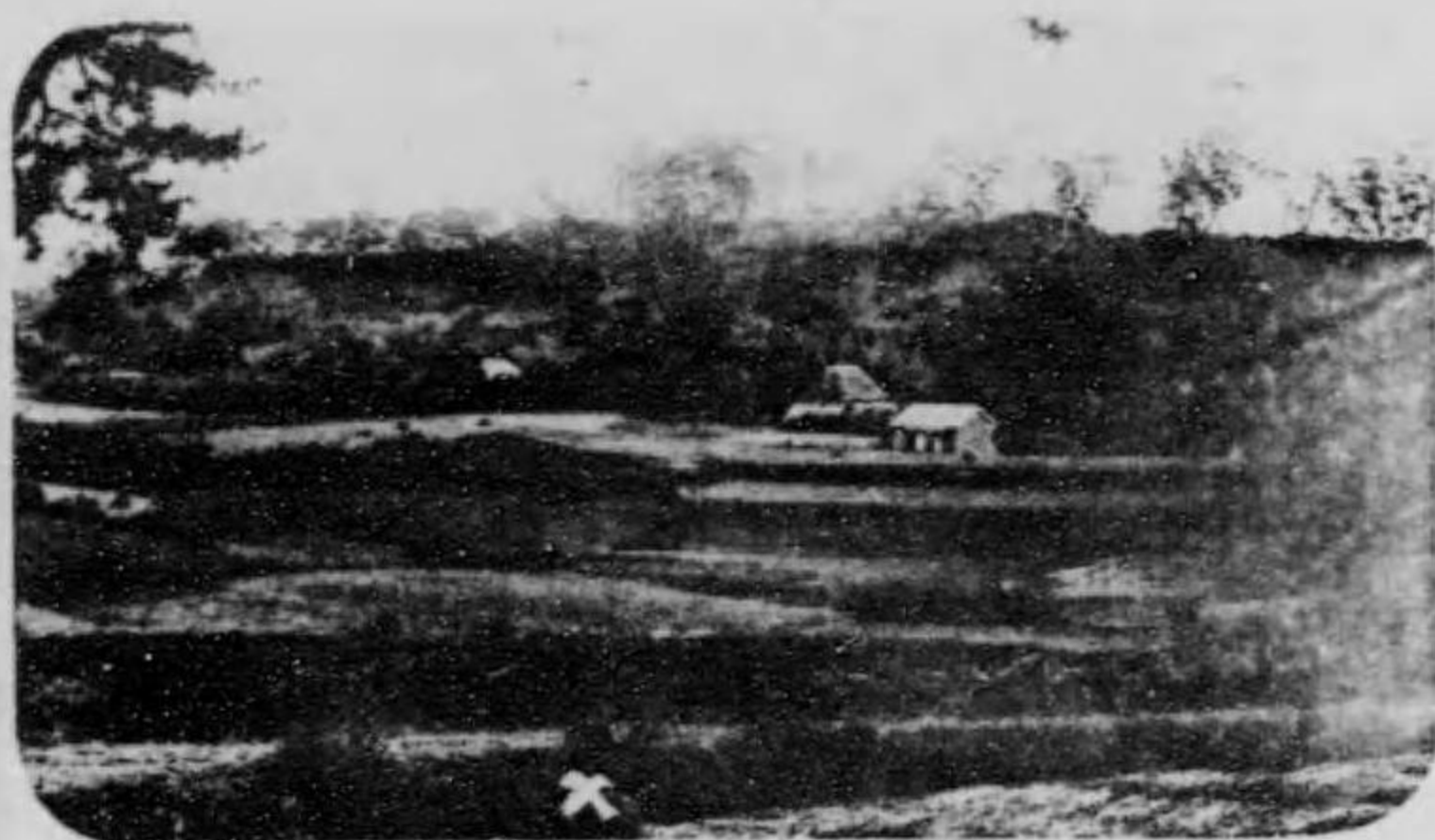


名護屋城本丸址

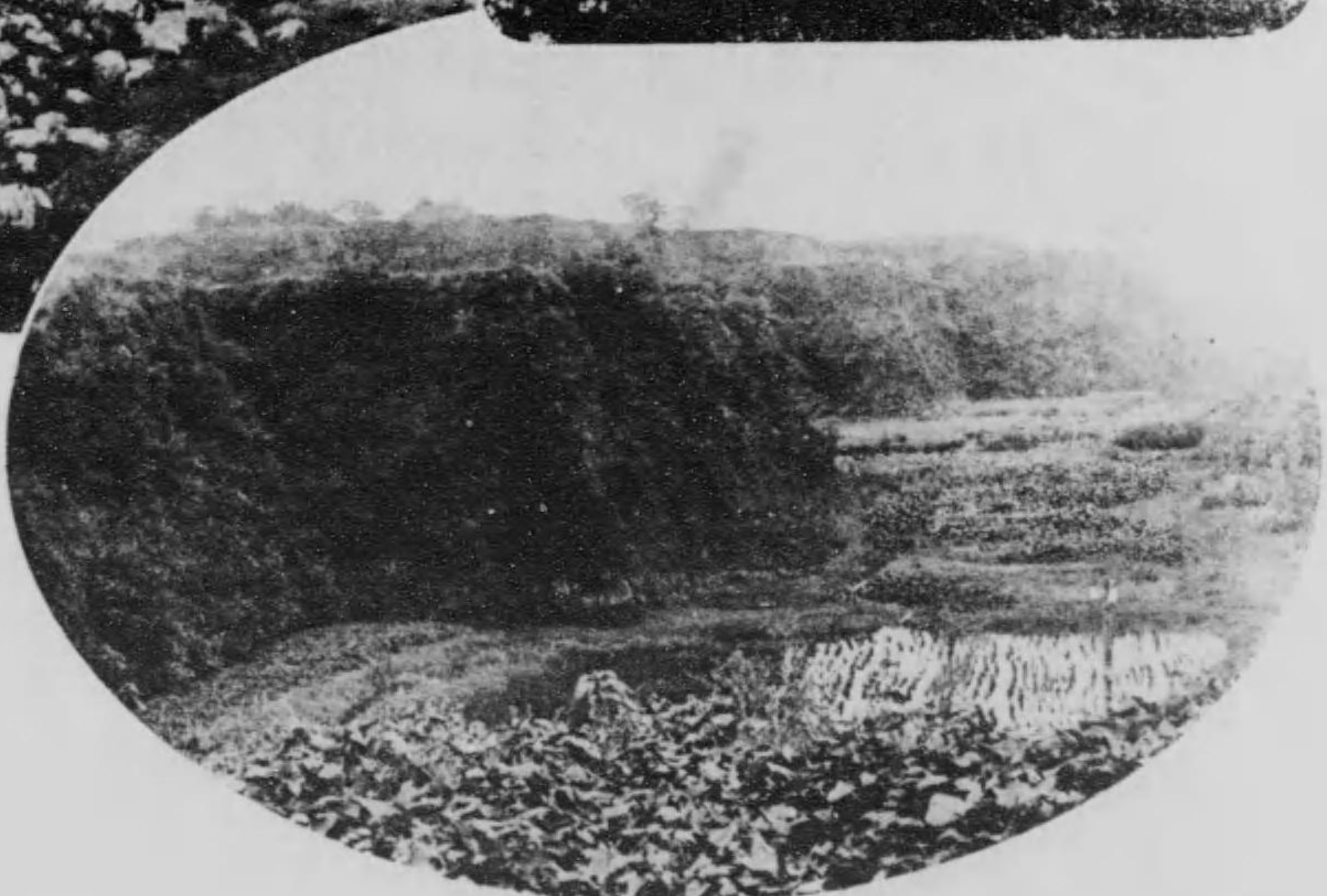


島原灣

名護屋城址



廣澤寺跡



島原古城址

能はざる間に秀吉の薨去を見、彼れが計
畫せる壯舉は家康の繼承する所となりし
も、秀吉の雄圖と元氣とを繼ぎ以て遠征

名護屋城址は唯だ礎石に其跡を留むる
のみにして、松籟徒らに風に鳴り波濤遠
く海岸を搏つのみ、今に於て形を存する
ものは此方面の寺院に之を見るのみとな
れり。

如媚如嬾還似笑 怪看兩頰生微渦
俄爾天晴渺海水 只見溫仙空際時
霧閣雲窓何在哉 同舟齊喚君廢矣
山素無容亦不粧 人自多情枉斷腸
卻想爲雲爲雨元却耳 開口大笑楚襄王

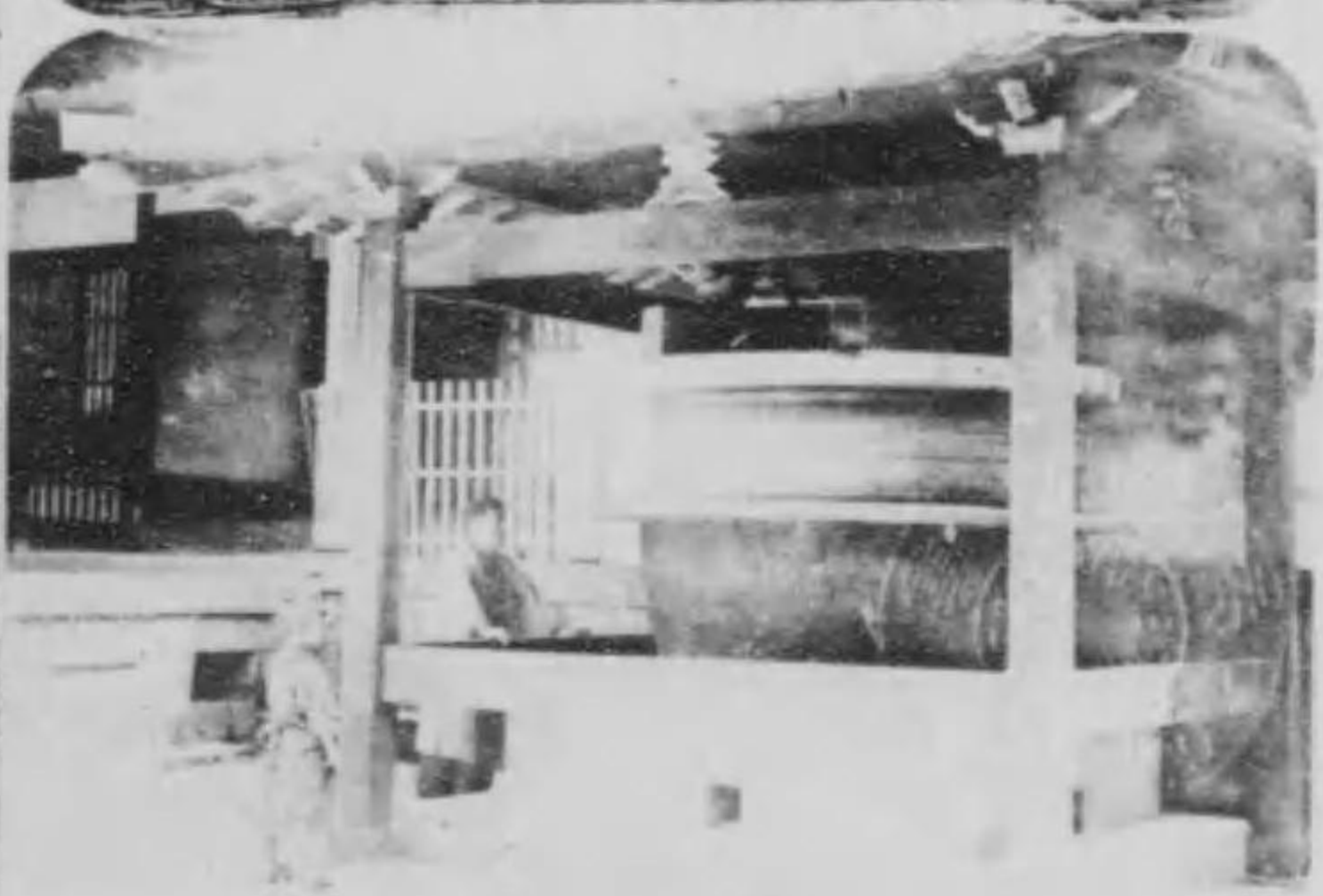
高 鉾 島



諏 訪 神 社



諏 訪 神 社 拜 殿



崇 福 寺 大 釜

上ノ一三八



長 崎 港

一三八

● 長 崎 市 (肥 前)

長崎市は西彼杵郡の北端に位し、其西南は長崎灣に臨み、東南北の三面は全く丘陵に圍繞せられ、長崎街道は東より、汽

場の鐵丸なり、岸近く安置せる周圍五尺八寸餘の大丸にして『石火矢』の玉なりと傳ふ。

● 諏 訪 神 社 (長 崎)

此地元某寺の境内なりしを、公園としてたるものなれば、高丘あり細徑あり清泉あり、老松あり、巨樟あり、風致超に富む。

● 崇 福 寺 の 大 釜 (長 崎)



●長崎市 (肥前)

長崎市は西彼杵郡の北端に位し、其西南は長崎灣に臨み、東南北の三面は全く丘陵に圍繞せられ、長崎街道は東より、汽車の線路は北より、茂木街道は西南より集まりて市に集中す。

往昔徳川氏外國奉行所を此地に置き、外國通商の事を管せし所にして、我國の西洋的文明は此地を過ぎて來らざるものなく、洋學初學者は必ず此地に來りて外人と接するを例とせり、故に外國の歴史にも此地の事を記せるもの多く、日本を知る者に長崎港の名を知らざる者なし、港内水深く大船も岸頭まで來り泊ることを得、市街は港の右岸なる一帯の山麓に在りて、人家櫛比、帆檣林立、實に我國港灣中屈指の名に負かず、市の左岸は稻佐郷と稱し、其處には三菱造船所を始めとし、製氷會社、煉瓦製造所等ありて、其造船所の錚々たる機關の響きと、港内に來往する幾多汽船の汽笛とは、塵ろに無限の活躍を偲ばしめ、烟突よりの烟は常に天に漲る。

先づ停車場を出で、南方に進めば大浦居留地には各國の商館、領事館等あり、新地の居留地には多く支那人の逍遙するを見る、續き出島、大波止場、江戸町、外浦町、櫻町、船大工町等市中屈指の繁華地あり、長崎縣廳は外浦町に在りて郵便電信局税關等は皆な海岸通に在り、思案橋を渡れば長崎病院、招魂社等在り坂を下りて有名なる丸山に出づ、我國砲術の祖たる高島春帆の居址は此丸山に存す、高野平には祇園神社、玉園山に諏訪神社等あり、其他控訴院、裁判所、警察署、中學校等到る處に櫛を並べ、商估を列ね百貨一として辨せざるなく、銀行、諸會社、新聞社等孰れも宏壯なる建物ならざるはなし、市中最も屬目し易きは大波止

場の鐵丸なり、岸近く安置せる周圍五尺八寸餘の大丸にして『石火矢』の玉なりと傳ふ。

●諏訪神社 (長崎)

國幣小社諏訪神社は市の東北玉園山に在り、建御名命、八坂刀實命を祭神と爲し、傍らに伊弉諾尊伊弉册尊を配祀す。寛永元年の創建にして市中第一の大社なり。境内は往昔に在りて壹萬七千餘坪ありしも、維新後上地して、今保つ所は四千餘坪に過ぎず、寶物中の重なるものは蜀江錦裝束翁面尉面及御宸筆親王御筆蹟並に公卿等の遺墨なり、大祭は十月一日より十三日に亘る、長崎市に於て最も觀るべきものは此祭禮なりと傳へらる。

先づ長崎八十餘町を七分して、各十餘町を一組とし、順番を定め年々一組毎に祭禮を引受くる事とす、其番に當れる町々は神前に踊を献する例にして、三四箇月前より警古を積み準備を整ふ此踊の蓋は寛永十二年丸山町寄合町より官廳に乞ひて遊女を出し、猿樂の曲舞或は小舞を爲せるに始まり、之より諸町之に倣つて兒子をして種々の踊を爲さしめたり、當日は未明より番に當れる各町より踊り出し、花街の分を真先とし引續き順を追ふて社前の坂下に詰め、各笠鉦を備へて踊の連中之に從ひ以て夜の明くるを待つ笠鉦とは竹を組んで五尺許の大笠と爲し羅紗、天鵞絨の類を用ひて之を蔽ひ、周圍には下がりとして人物鳥獸花卉樂器等を縫箔したる美麗なる衣片を垂れ、臺上には町名に因める種々の造物を載せ、之に各自の町號を大書し、大力の男下がりの中に入り軸を持つて踊の先に立つ、而して暁光漸く市街に遍き頃『師匠出せ〜』の聲の下に奇極まる踊は始まるなり。

神社の隣地に長崎公園在り、其地高燥、眺望富瞻、市中唯一の勝區たり。

此地元某寺の境内なりしを、公園としてたるものなれば、高丘あり細徑あり清泉あり、老松あり、巨樟あり、風致超に富む。

●崇福寺の大釜 (長崎)

長崎の支那寺を以て開ゆる崇福寺は今籠町に在り、黄檗派の禪刹にして、三門、二之門、本堂、開山堂、天后堂、觀音堂、拜殿、方丈、庫裡等の堂宇は總て支那式建造なり、其構造の宏壯雄偉なる殆ど市内伽藍の魁と言ふべし、五千有餘坪の境内には老樹蒼鬱として古刹を彩り、寶什亦少なからず、就中六佛畫、天部像、無名開山書等世に知らる、又寺内に『聖壽山崇福寺施粥巨鍋天和二年次王成仲春』の銘を鐫れる大釜を保存す、即ち饑饉の際粥を炊ぐに用ひしものなりと言ふ。

●高鉦島 (長崎)

高鉦島は神之島の南東に在り、航海者は此島を以て長崎港口の最好標とす。外交志稿の記事に徴すれば『承應二年幕府平戸藩主に命じて、砲臺七所を長崎に築き海警に備ふ、太田尾、女神、滿珠島、神崎、白崎の四所形勢接續、咽喉を扼す、高鉦、長刀岩、陰尾の三所長崎入港の門戸たり、控禦の方漸く備はる云々と見ゆ、又舊佐賀藩主鍋島齊正(閑叟)香燒高鉦の二島に於ける海門設備は未だ全からずと爲し、砲臺を神之島及伊王島に築かんと請ふ、幕府之を許さず、齊正以爲らく、幕府因循、空しく歳月を過ぐ、若し此二島を乞ひ得れば、一番の力を以て之に備へんと、嘉永三年に至り幕府之を許す、齊正時を移さず乃ち山を削り海を埋め、神之島及四郎ヶ島を接續せしめて砲臺を築き、高鉦伊王二島の設備をも嚴にしたり。

●熊本城址（肥後）

熊本城址の所在は市の中央にして、地は丘陵に倚り坪井川其東畔を流れ、白河の水は更に其東南を繞り街衢は其南岸に亘る、城西は井芹川の隘谷を以て花岡山一帯の山脈と相隔離す。

足利氏の末葉應仁文明年間菊池の一族出田筑後守秀信始めて隈本城を築く、今の千葉城にして本城の東端別に一小丘を成し、坪井川を隔て、藪之内町に臨む、即ち第六憲兵隊本部の在る所なり、大永享祿年間に及んで鹿子木親良人道寂心大友の旗下に屬して此に在城し、西南の一丘に移り改築す、之れ所謂古城と稱する所なり、加藤清正の來りて國に就くや、寂心改築の隈本城より東北に當る茶臼山を撰み、慶長六年先づ工を起し同八年に至り規模宏大の城廓成り、改めて熊本城と命名せり。

築城當時の本城は、三之九百間の石垣は飯田覺兵衛、三之九乾の礮三階の矢倉は森本儀大夫之を築き、東南坪井川の流に沿ひ、西南一部は巨濠を控へ、一部は井芹川を隔て、遠く島崎村の森を望む、北の方一部は絶壁により、一部は巨濠を隔て、錦山に連る寛永九年加藤氏封を奪はれ細川氏之に代り、明治四年鎮臺兵入るに至るまで二百三十九年なり、十年の役陸軍少將谷干城此城に據り、以て薩軍の東進を防ぐに當り、會ま二月十九日城中火あり、城屋樓櫓悉く灰燼に委し、剩す所唯だ三之御天主と稱せられたる宇土矢倉のみ、現時第六師團司令部を城上に置き、突兀たる壘壁空しく當年の偉業を追想せしむ、歩兵第十三聯隊、輜重兵第六大隊、衛戍病院等亦城内に在り、城内の境域廣潤にして周圍凡そ四十町餘、本臺上に峙立する銀杏樹の如きは清正手植と傳へらる、銀杏城の名は此樹によりて起る。

●所謂熊本籠城（肥後）

征西戦記は當年の狀況を記して曰く「賊の熊本城を攻るや、極めて猛烈、全力を遣さず、日夜屍を踏んで肉薄すれ共、城兵能く殊死鏖戦し數旬の久しき、勁敵をして一郭をも陥ること能はざらしめしは、金湯重鎮の固めに由ると雖も、抑も又將士奮勵の力其多きに居れり、城中兵燹燼灰の餘、大小彈痕蜂窩の如く、甚だしきものは霹靂の墜碎せしに似たり、其況慘憺、觀者をして爲めに肝膽を寒からしめたりき」と

谷將軍の戰略中に
日夜士氣奮勵を是れ勉むと雖も、賊徒素より強兵の名あり、且つ彼れ怒氣激發の初め、其鋒當るべからざるものあり、加之城下の士族の聲息を賊徒に通ずる者少なからず、咫尺城市すら形情此の如し如何でか出城を得ん、賊脚下に生ずるの憂なきに非ず、又殊死の兇賊を平原廣野に禦ぐ、其勝算固より期し難し、一旦迎へ戦つて敗る、時は、兵氣沮喪して大に賊勢を長するに足る、又本臺の存亡、西國一般の人心に關す、要は之を失はざるに在り。
此一節によりて其當年の苦心を察するに難からず、然れ共名城ありて名將たり得たる事も忘るべからざる事に屬す。

僧 五岳

四面皆賊簇如雲。城在雲中紛紛分。滿目今日真火國。市郡村落一時焚。城兵如魚在釜中。賊將心居泰山安。破裂丸飛烈焰迸。雲梯笑渠學魯般。忽合萬雷發自地。火牛何必待田單。六十日間無虛日。攻守一日幾艱難。軍糧如山亦亦盡。頼有我兵力未殫。雖力未殫色欲榮。千竈絕煙兵氣酸。都督大兵知在近。吶喊聲隔一山開。城兵募地出擊賊。賊軍敗走如倒瀾。嗚呼日本國中已無城。唯有此

城遺賊氛。守賊者誰谷干賊。築城者是當年鬼將軍。

●水前寺（熊本）

水前寺は熊本市の勝地として名あり。所在は市の東郊出水村にして、此に「水前寺の御茶屋」なる成趣園在り。

寛永九年細川忠利入國の時、豊州羅漢寺の僧玄宅なる者隨從し來り、畫圖湖の源頭を相して水前寺を創立す、後、細川家の茶屋となり、成趣園を築かれ寺は園の西域隅に移り、玄宅寺降龍山と改む。

明治十年十月七日一社を此に建て出水神社と名け、細川氏祖先の靈を祭り今は縣社となれり、地は清冽なる泉水を湧出し、假山泉石の觀美を極め善を盡す、其湧泉砂取町を横斷し南流して江津湖となる、細川氏の撰べる十景は如左

阿蘇白煙。龍田紅葉。瀬田山雪。國分晚鐘。前林梅花。飯田夕陽。巖泉清流。健宮晴嵐。水隈亂螢。松間新月。

●本妙寺（熊本）

本妙寺は市の西北花園村に在り、地を發星山と號す、京都日蓮宗本國寺の末寺にして、日真上人の開基なり。

門内一條の大道敷くに甃を以てす、甃を狹みて寺院並び櫻樹相列る、行くこと數町峻嶮に達す、之を胸突磴と言ふ、磴盡きて又磴、登ること稍緩なり、左右石欄を設け無數の石燈を列せる所即ち清正廟とす、廟は結構壯麗丹雘の美を極む。

蒼樹鬱然たる幽境、賽者陸續として詣拜す、其題目の聲晝夜絶へず。

頼 山 陽

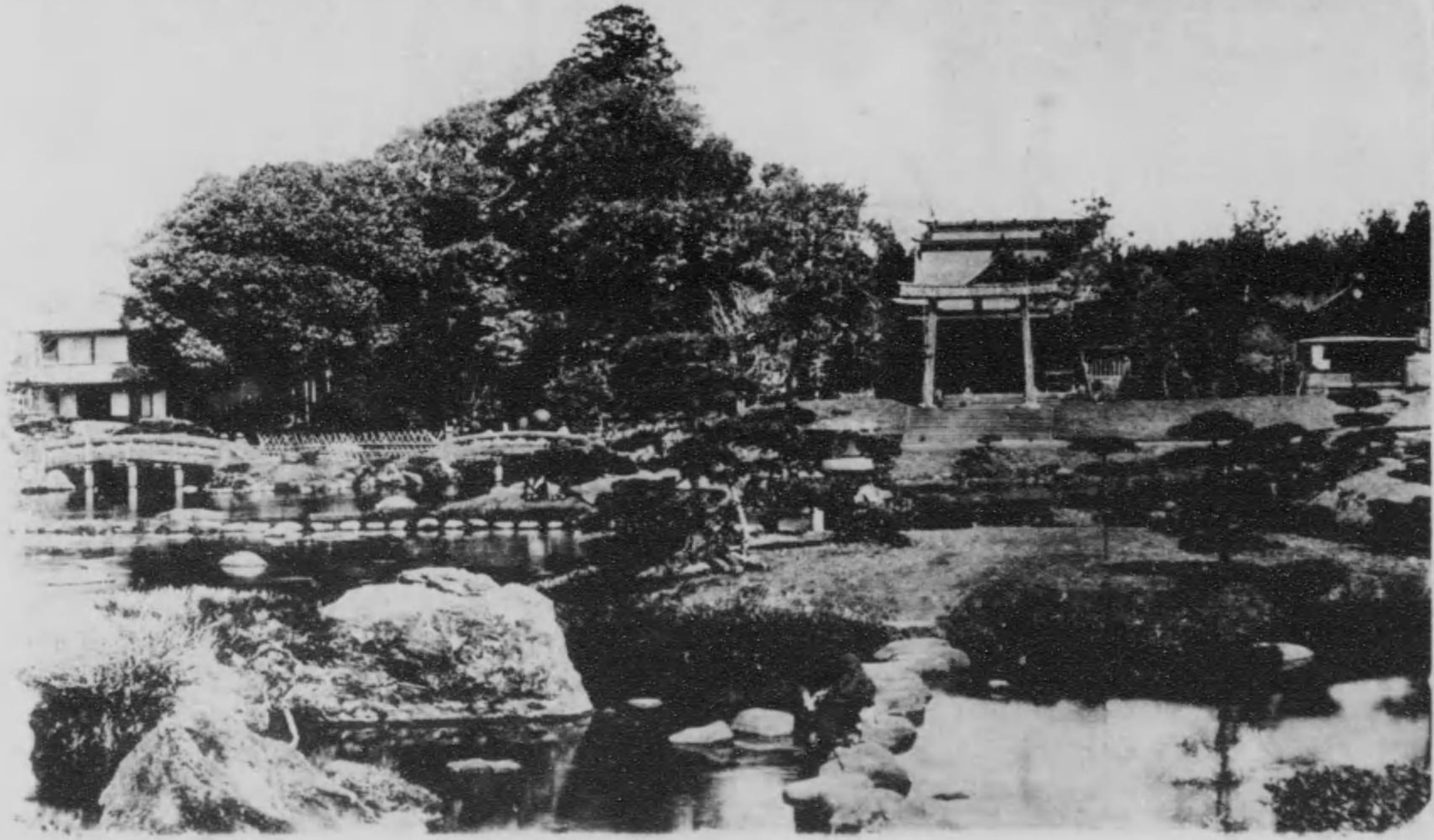
提封當日關榛蕪。形勝居然虎負嶋。熊府城樓營百雉。鷄林毛羽捕双雛。鐵戈冒雪纒存指。銅面衝風故惜巖。眇視鼓與人競禱。威靈却不庇遺孤。

茲に掲ぐる加藤清正筆蹟は中澤廣勝氏、細川忠興夫人筆蹟は細川侯の珍藏也。

城 本 熊



寺 妙 本



園 庭 寺 前 次



加藤清正筆

細川忠興筆

同夫人筆

想せしむ、歩兵第十三聯隊、輜重兵第六大隊、衛戍病院等亦城内に在り、城内の境域廣潤にして周圍凡そ四十町餘、本臺上に峙立する銀杏樹の如きは清正手植と傳へらる、銀杏城の名は此樹によりて起る。

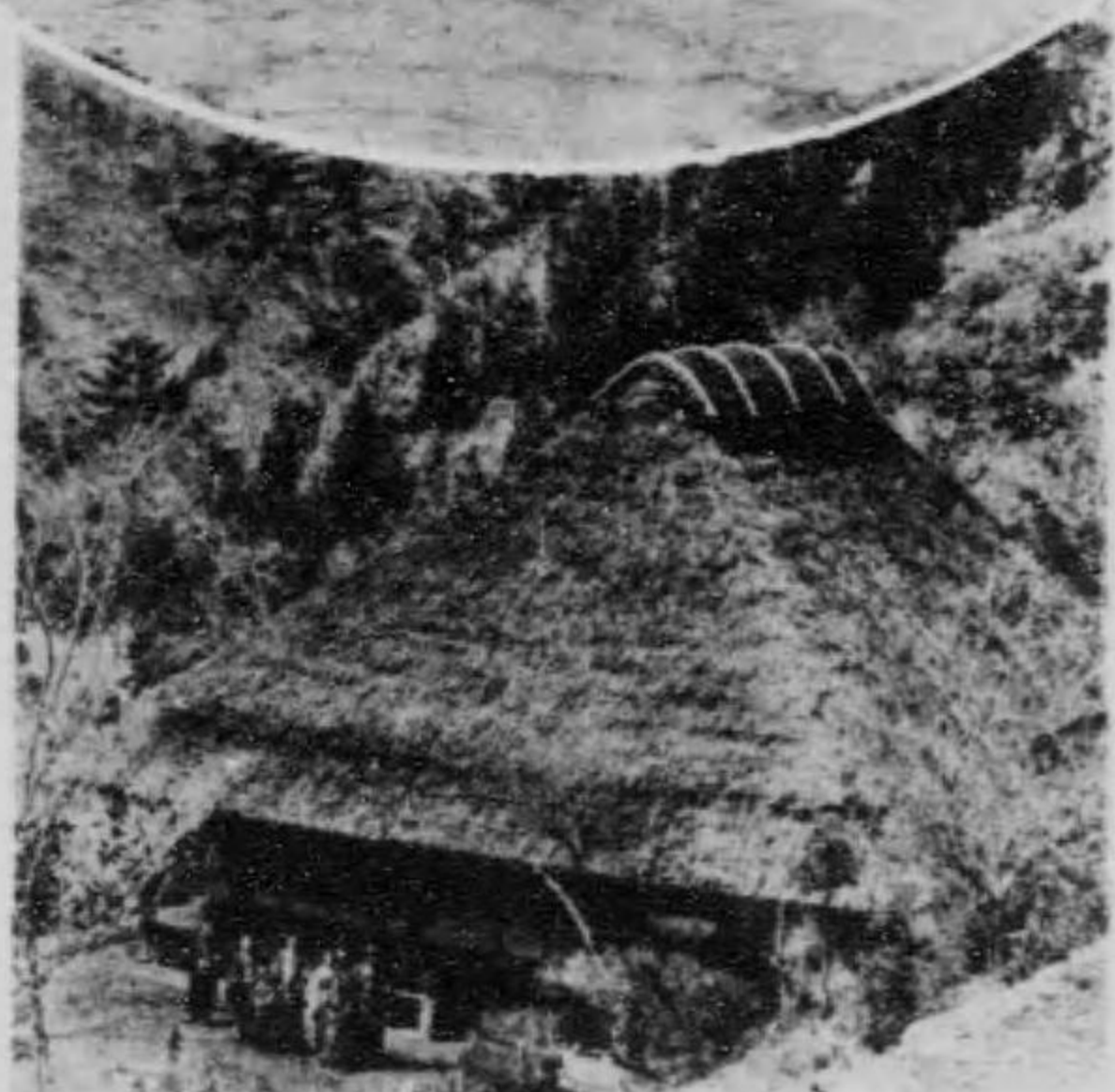
日。攻守一日幾艱難。軍糧如山亦盡。頼有我兵力未殫。雖力未殫色欲染。千竈絶煙兵氣酸。都督大兵知在近。哨喊聲隔一山聞。城兵爲地出擊賊。賊軍敗走如倒瀾。嗚呼日本國中已無城。唯有此

熊府城樓營百雉。鷄林毛羽捕双雉。鐵戈冒雪纒存指。銅面衝風故惜巖。眇視跋興人競縞。威靈却不庇遺孤。玆に掲ぐる加藤清正筆蹟は中澤廣勝氏、細川忠興夫人筆蹟は細川侯の珍産也。

川 摩 玖

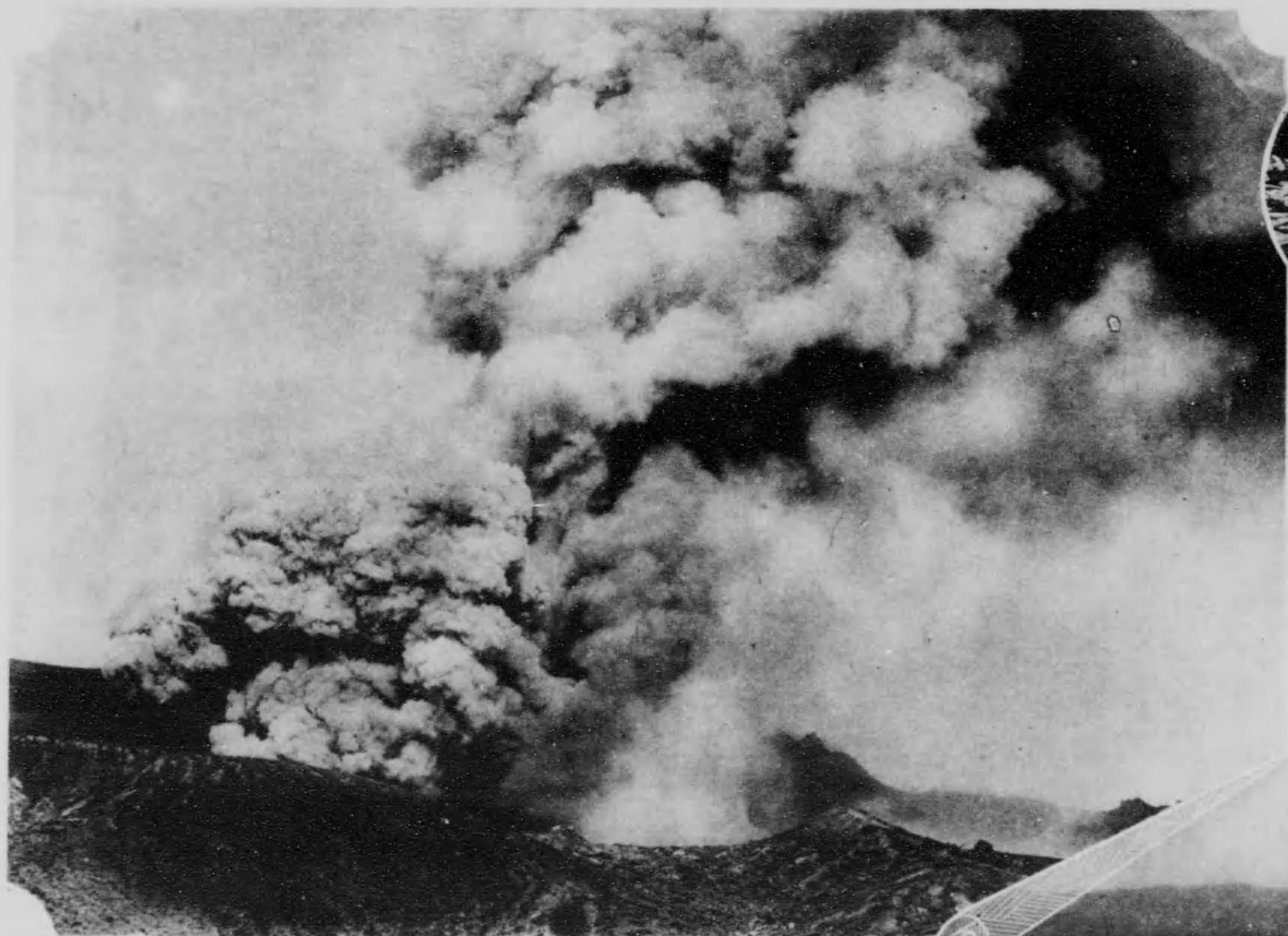


五 家 莊



湖 の 拜 造 川 摩 玖

景 の 火 噴 山 蘇 阿



望 遠 山 蘇 阿

● 阿蘇山 (肥後)

海拔五千三百餘尺の阿蘇山は、九州中央の活火山にして、盤踞數里に亘り峰を

の弓白羽の箭を以て猪鹿の類を射て神前に供し、魚鳥は同じく神領の地より之を供せり、狩獵には種々の儀式慣例ありて、建久四年源頼朝富士の牧狩の時も當地狩

蓋ふこと數丁、舟楫皆な其中を通りて過ぐ、所謂鎗倒の稱ある所なり、其對岸に二椗岸の時つものあり、一は姑蘇しと言ひ、其高さ大凡壹千尺急突屹立亭々とし

●阿蘇山 (肥後)

海拔五千三百餘尺の阿蘇山は、九州中央の活火山にして、盤踞數里に亘り峰を五個に分つ、即ち第一峰を高岳と言ひ、最も西に當る往生嶽を第二峰とし、第三根子岳は最東に在り、餘脈南北に横走して豊後國との分水嶺となり、第四峰御岳は一に中岳と稱され、現に硫煙を噴出しつゝあり高岳往生嶽の間に在る櫓尾岳を以て第五峰とす。

五峰中に於て其巔、鋸の如く。犬牙錯出するものを根子岳とす、五岳を圍繞する連山は學者の所謂「噴火孔の障壁」たり之を外輪山と稱され五岳は其中に噴出せし火山口なり、此火山口と外輪山との窪地は阿蘇及南郷の兩谷にして火口原と呼ぶ、東西七里南北四里を繞る溪水は集まりて白川黒川の二水となり、更に合して一大幹流となり外輪山の一隅立野村なる火口瀬を破りて西流し遂に白川の大を成すに至る。

●其噴火口

古來阿蘇の御池或は神靈池と稱されたる中岳の噴火孔は南北の二方に廣くして中に狭く、其狀曲玉に似たり、孔内は絶壁削立し僅かに西方の岩崖より孔底に下るを得、底の北部に大小の噴孔あり、熱水沸然として湛え、蒸氣鬱然として昇る、之に伴ふて發する諸種の瓦斯は互に相混化して硫黃明礬の類常に生ず、此地昔は神聖にして侵すべからずとせしも、今は所在の住民此の堆積する硫黃を採りて硫黃製造の原料に供す。

又下野狩場の舊蹟は杵峰岳の西麓長野に在り、往古健甞龍命の遊獵地にして、命薨じて阿蘇宮に鎮座後は、阿蘇鷹山下野の三馬場に於て毎歲二月卯の日、大宮司及神官等の宮人各々風折烏帽子狩衣に夏毛の行脚を佩き腰に幣帛を差し、白木

の弓白羽の箭を以て猪鹿の類を射て神前に供し、魚鳥は同じく神領の地より之を供せり、狩獵には種々の儀式慣例ありて、建久四年源頼朝富士の牧狩の時も當地狩獵の式を習ひ用ひたりと。

一休 和尚

閑語九州第一山 三池煙波大空間

應斯此境明神地 多少旅人更匪攀

長 球 陽

蘇山何屹岬 其嶺衝碧霄 欲攀層峰

凸 先渡深溪回 寧借祖龍手 山已

半緒類 稜々懸巖尖於劍 行雲當之

裂有聲 神威太赫々 拜來心肅而

天風吹不斷 雲煙無歇時 惟石欲躍

如猛虎 吾非飛將爾何怒 浩然振衣

跨虎頭 長嘯聲冷萬山秋

(續松葉集)

すめらぎの狩せし時に二神の

あはれそめし阿蘇のみやしる

●球磨川 (肥後)

筑紫三大河の一たる球磨川は、一に九

萬川と稱され其源泉甚だ多しと雖も、片尾山及五家の庄より出づるものと市房山より發するものとを以て重なるものとす

源を片尾山より發するものは、快駛迅急三十有六里にして岩野村に出で、此に市房山より來るものと會し、木上村に至りて五家の庄に出づる川邊の流と合す、兩崖の長巒短嶽高低相列りて老松古杉其間に點綴し、人吉より下流三里、淺村に達して兩岸相近く河幅緊縮す、更に流る

ること三里、河は一大石灰岩層を貫流して過ぐ此層は大なるもの七八里に連り、厚さ八九町に及びて、其質緻密消磨し難し、河の古生層の間を横ざるや、兩岸の山巒高く聳ゆるものと雖も其傾斜は甚だ緩急、而かも一度石灰岩の部に至りては突兀として時に或は直角或は水流深く涯を穿ちて大洞穴を成し、石根上より之を

蓋ふこと數丁、舟楫皆な其中を通りて過ぐ、所謂鎗倒の稱ある所なり、其對岸に二惟岸の時つものあり、一は姑落しと言ひ、其高さ大凡壹千尺急突屹立亭々として群山を睥睨す、一は之と一小溪を隔てて清正公石と言ふ、神瀬に至りて水流急に右に折れ、怪石亂れ立ちて水波頻りに驚き暗礁水に立ちて船底常に轟然聲をなす、是れ世に二股の瀬と稱する川中第一の難所なり、此急流は駿河の富士、羽前の最上と共に天下三急流の一たり。

●遙拜の堰 (肥後)

遙拜の堰なるものは高田村大字豊原に在り、球磨川の水を引きたる大堰にして、南を高田池、北を太田池と言ふ、水口斗門ありて啓閉自在なり、俗に之を蜘蛛成と稱す、南岸に朱雀天皇の天慶八年八代郡主の阿蘇宮を勸請し阿蘇の噴煙を望みて遙拜せしと云ふ遙拜神社あり、堰の名は之れより起れり。

●五家の庄 (肥後)

五家の庄は八代郡の東部に位し、全く深山の中に在りて柿迫村より至る事を得るも、下益城郡球磨山より津留川を廻りて至るを普通とす、地は川邊川の上流樞木川の沿岸に位して、二尾田、椎原、樞木、葉木、久連木の五集落より成り、四面全く高峰峻嶺を以て之を圍み、風俗亦從つて他と異り、自づから山中の別天地を成す。

傳説に依れば、元暦元年三月平惟盛同清經の紀州熊野より連れ來り、子孫連綿此處に住し、世間と交通を絶ち以て今に至れりと言ふ、山中に小松を姓とする者多し、戸數二百餘人口九百八十餘、常に霧厚く雲深く殆ど太古の趣を成せり、地、碗角にして米を産せざるを以て、住民は小豆稗を以て常食とす、今は小學校の設備あり。

●鵜戸神宮 (日向)

官幣大社鵜戸神宮は鵜戸村吹毛井の東北鵜戸岬の絶端に位し、境域六萬七千六百五十餘坪を有し最も莊嚴の地たり。

内海港より至るの路は七浦七阪の嶮を経て至るものにして全く車を通せず、本社は鵜戸岬絶端の嶮崖を下りたる所に在り。吹毛井よりすれば初め石階を登り、一の華表を過ぎ、之より更に石階を下ること數十級、先づ社務所あり、境内瀟灑一點の塵を留めず、前に日向灘の烟波瀾渺として天を浸すを望み、漸次奥に進めば路は白木造りの神橋に盡きて、前に一大巨巖の窟を成して屹立するを見る、神社は其巖窟の中に鎮座し、御手洗に滴る清水は玲瓏透徹、真に詣者をして神悸の思ひあらしむ、加ふるに海波澎湃として巖石を打ち、深潭、碧を湛へ、白帆日に映じ、風光の雄大亦多く他に見るべからざるものあり、窟は東南に面し東西二十一間、南北十一間、高一丈八尺、以て其如何に雄大なるかを知るべし、往昔は「鵜戸大権現」と稱し桓武天皇の御宇僧快久此に寺を建て、勅號を賜ひ、「鵜戸山仁王護國寺」と稱し、山中に十二支院を置けり慶應三年に及んで寺を廢し新たに神宮を置き今日に及べり。

神宮より登ること三町餘にして絶巖に至る、此所を速日嶺と稱す、此地勢隆起して圓形を成せる所あり「皇尊の山陵」と傳ふ、之れ日本紀の「葬於吾平陵」ならんとの説あり今ま陵墓傳説地として存せらる、島隱漁集に題鵜戸神廟の詩あり。
扶桑開闢帝王城 神武靈蹤今古驚
定有龍灯照深夜 海濤打岸怒雷聲
伊東三位の飢肥紀行中此方面を詠める歌に「哀れとも思ふや祖母の懐を葺不合の神風の聲」之れは祖母が懐と言ふ所を詠めるものなり、又「里人に問はずばいざ

や白波の玉依姫の宮の浦とは」と見ゆ。

●意原の橋橋 (日向)

橋の小戸の楹原と言へる地は何れなりしか、唯だ宮崎町と大淀村との間「大淀川」に沿へる地ならんとの説あるのみ、今其所に架しある長橋を橋橋と稱す、之れ神代に於て此邊を橋の小戸と呼びしとの傳説に基く。因に橋の小門址は筑前國筑紫郡小戸にありて「小戸之楹原」と言ふ附記して識者の判断を俟つ。

宮崎より凡そ一里の所に楹村あり、此地青松白沙の勝區にし殊に一つ葉の松を以て開ゆ。

●油津港 (日向)

油津港は飢肥の南二里、酒谷川の海に注ぐ所にして、其港内濶ければ數多の巨船を容るべく、細島、外の浦と共に、國內の良港と稱せらる、飢肥地方の産物は大半此港より輸送す、細島鹿兒島を始め神戸大阪等に汽船の定期航海あり、逐年般販を極め經節を以て名あり、

●梅ヶ濱の風光 (日向)

梅ヶ濱は油津港より鵜戸に至る間の海濱にして、東は川を隔て、平山、風田の海濱に連り、白沙青松相映じ大小の奇巖汀沙の間に列峙し、晝圖も及ばざる風光佳絶の地なり、又油津港より南すれば海灣の出入犬牙錯雜し大堂、目井津、外之浦等の諸邑相連る、就中外之浦は良港にして海水深く灣入し、昔は日向灘沿岸に於ける無双の良港として船舶常に輻湊せらるも、慶安三年堤を築きし以來漸次埋没し今は和船碇泊の小港たるに至れり、此海岸は亦宮崎縣下屈指の勝地にして海山の壯觀他に超越す、梅ヶ濱の白沙青松を訪ふ者必ず此に遊ぶ、附近清武村中野の西に當る岡阜には清武城址あり、高十五

丈巖約四町餘、窪隆ありて數區に分つ、之れ伊東氏の領せる所にして、後鳥津氏に歸し、又再び伊東氏に復し川崎駿河守稻津掃部助之を守れり、其稻津掃部助の墓は此城址より四町餘の所に在り、掃部助は伊東家の重鎮として聞へ、膽略あり兵機に富める武將にして、關原戦後伏見城の經營に參加し勢威甚だ隆なりし爲め同僚に讒せられしより、清武城に據りて叛きしが、利あらずして自殺せり。

安井息軒宅址は中野村十字街の西に在り、息軒八世の祖を朝秀と言ふ、慶長年間伊東氏に仕へ、其支孫朝宜兵學を以て鳴り、之を清武に移して子弟を教へしむ、息軒に至るまで五世此に居る、息軒後江戸に出で儒名天下に鳴る、今猶は其家塾たりし明教堂の遺址は當年の兵學鼓吹を偲ばしむ。

●日向の月知梅 (日向)

日向の月知梅を以て名ある古梅は、東諸縣郡高岡町大字高濱に在り、此古梅、天明年間までは唯だ一株なりしも、其繁衍するに従ひ、枝々地に垂れ根を生じて蔓延し、遂に高一丈八尺方二十間餘に亘れり、此地は元香積寺の庭園にして、寺は伊東氏の女を葬りし所、其臣小森某の孫利國追悼の爲めに植へたる梅なり。花は八重にして白し、蒂は淡青なり、花時爛熳雪の如く芳香馥郁たり、島津家久此に遊び

老龍盤屈歲寒枝 遠出人間託佛祠
移植春風今歷歲 當初唯有月明知
の詩を賦して寺僧に與へたるより月知梅の名現はれ、兒湯郡新田の座論梅と共に日向の名樹に數へらる、其座論梅も月知梅と同じく元一株の梅なりしが漸次一反餘歩に及び、宛然數頭の龍蛇蟠繞するに似たり、花は單瓣白色流水梅林を繞りて風致に富む。

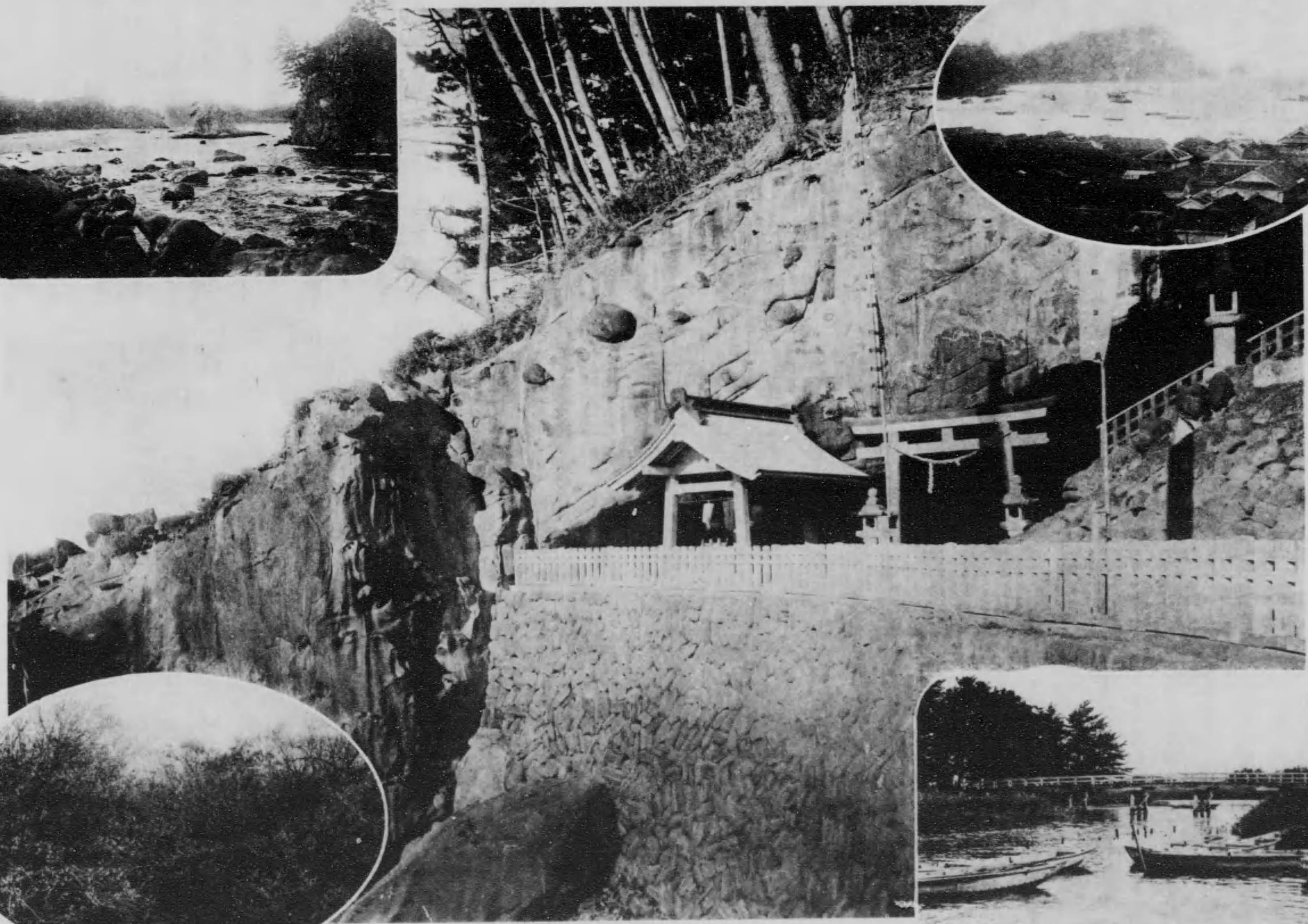
油

梅

油津港



梅ヶ濱海濱



鶴戸神社参道



月知梅



植原橋

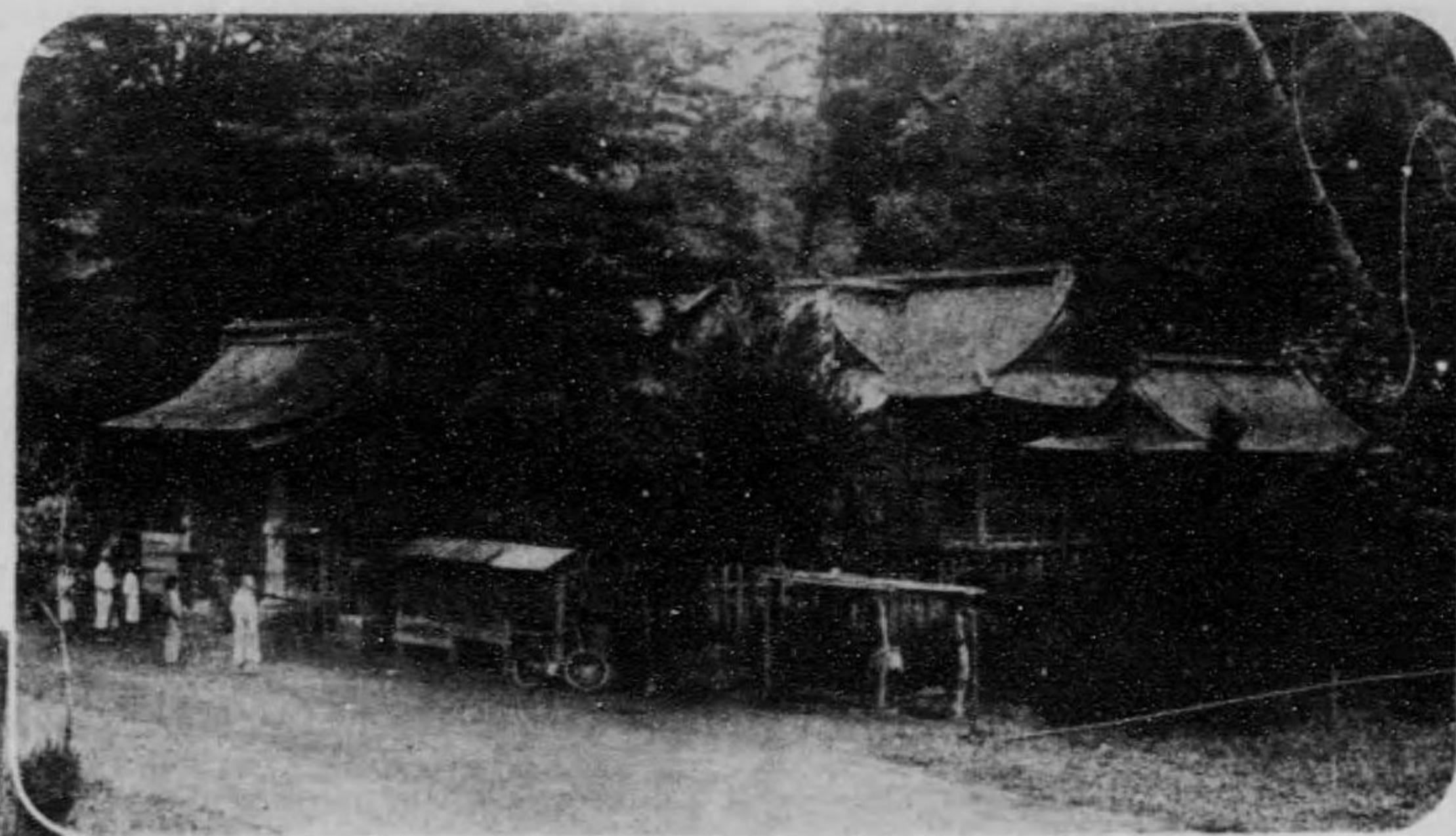
上ノ一四一

の神風の聲』之れは祖母が懐と言ふ所を 訪ふ者必ず此に遊ぶ、附近清武村中野の 西に當る岡阜には清武城址あり、高十五 に似たり、花は單瓣白色流水梅林を繞り て風致に富む。

道杉の社神野狭



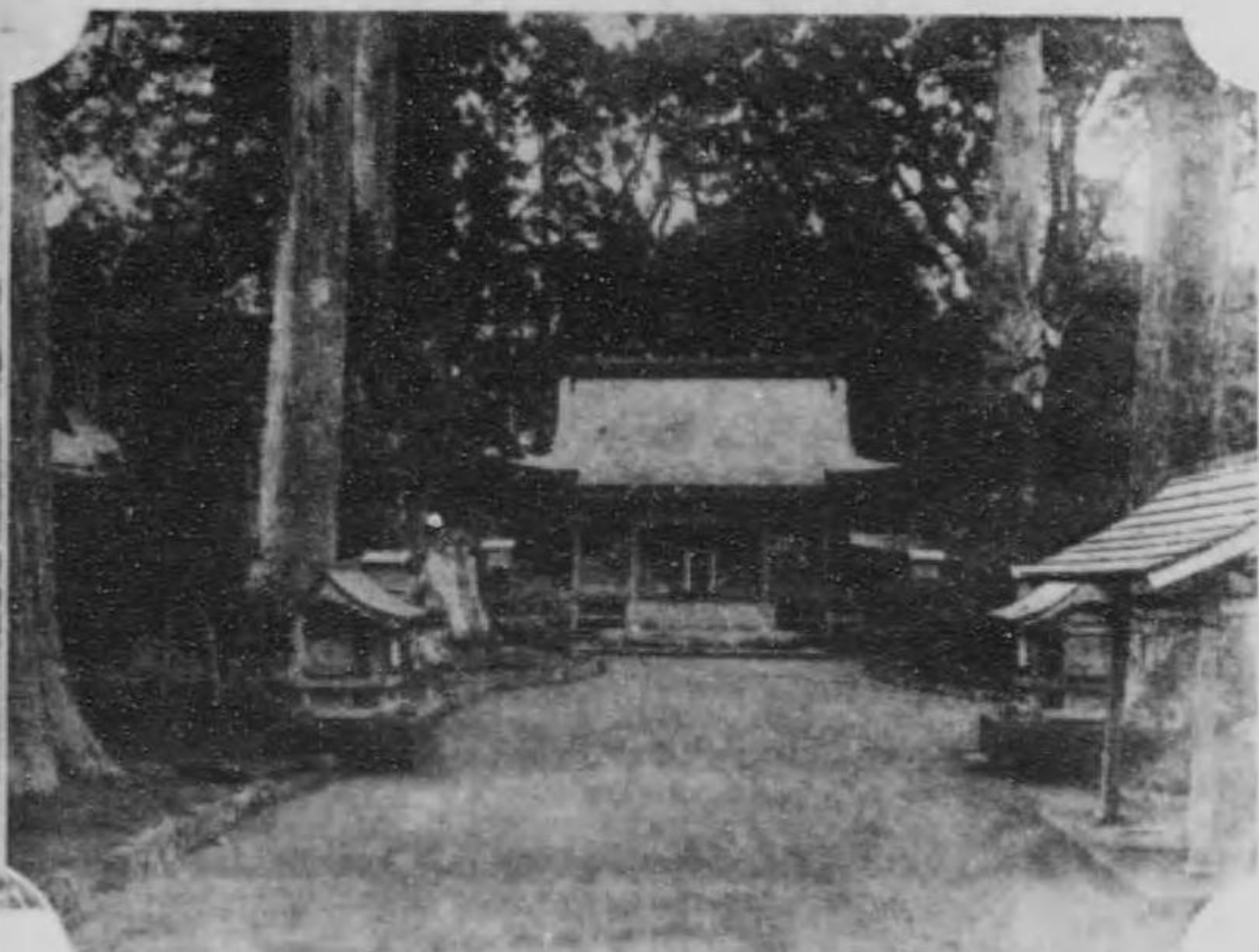
社神戸岩の天



字文古代神



址宮原ヶ天高穂千高



社神野狭

ノ一四二

●高千穂の宮址(日向)

射し最も頑強に抗戦せる戦蹟たり。

●神代の高千穂(日向)

神武天皇降誕地としての狭野は霧島山の東峰に當る山麓にして、宮之宇都又は

●高千穂の宮址(日向)

天孫降臨の靈蹟地として傳へらるる高千穂は、日向國西臼杵郡三田井方面に於ける『山中の大聚落』にして今ま高千穂村と總稱す、延岡を距る十三里餘、肥後阿蘇郡馬見原より三里餘、石器時代の遺蹟及高千穂皇神、二上峰、四皇子峰、天岩戸等皆な此方面に在り、而して瓊々杵尊を奉祀せる高千穂皇神は三田井の南、樓欄山に鎮坐し二上神社とも言ふ。神祇志料續後紀に『承和十年、無位日向國高智保皇神奉授從五位下』とあり三代實錄は『天安二年日向國從五位上高智保神授從四位上』と記す、又四皇子峰に關して人類學會の發表せるものには『三田井並に高天原と四皇子の峰と言ふ三つの小高き地あり、頂上に樹木繁生す、此邊石鏃石斧の破片散亂す、五箇瀬川水底は盡く堅石にて、兩岸共絶壁なり、絶壁より落ちる水ありて其下に凹みたる池あり、大さ三反歩もあらむ、水の深さ一尺餘其中央の小高き島に石の小社あり、般馭盧島と言ふ。三田井村には鶴背不合尊の御墳と言ふものもあり。總て此邊多く穴居の痕跡(堅穴)並に古墳の如きものを散見すべし』云々。

●天の窟戸(日向)

三田井の北、岩戸川の東北岸断崖の半腹に磐戸神社在り、天然の岩窟、側に雜草茂り樹木生ひ人跡至る能はず、近年上記(うへつふ穴)と言ふもの、神代字を刻みたる石も此に藏す、岩窟の奥行五間幅十間餘あり、此所より五町の下流に三十間餘の石張り出せる所あり、之を天之浮橋と呼ぶ、岩戸は篠戸村の谷なる一村にして、水源は祖母ヶ嶽、尾平山に發し、南に流るゝこと六里にして五箇瀬川に入る、其五箇瀬に臨める七折は西南の役、三田井を失ひたる薩人等此方面に退き、

射し最も頑強に抗戦せる戰蹟たり。

●神代の高千穂(日向)

日向に於ける高千穂宮址を記したる序に大隅の斐山『高千穂峯、樓欄峯』に關する事を記すべし、斐山即ち今の霧島山も亦是れ天孫降臨の地として傳はる、地理纂考に依れば霧島の東西二峯即ち二上峯なり、或は曰く太古は東嶽に矛峯火氣布峯相並びしが、其一峯の添ひ立てる火氣布崩れ、今日の狀となる、韓國嶽にも別峯ありて、添の峯とも二上峯とも言ひけん、されば太古は峯二つ添ひ立しが一峯づゝ、殘れるなれば、神代に二上と言ひしも今の東西の峯なること疑ひなしと言ひ、又大日本地名辭書は此山炎上の概略は續紀に延暦七年七月己酉、太宰府云、去三月四日戌時、大隅國贈噉郡曾乃峯上、火災大熾、響如雷動、及亥時、火光稍止、唯見黒烟、然後雨沙、峯下五六里、沙石委積可二尺、其色黒焉、と見へ社傳には仁安二年を始とす、一説に天永三年壬辰二月三日とす、其後文暦元年大に炎上祠宇皆燒ぬる由社説に見へたり、其後久しく總て天文二十三年より又火發りて、明和九年まで二百三十餘年の間に燃し事凡そ十餘度なり、近くは享保元年九月六日よりの炎上甚しく、東霧島神社、狹野神社、瀬戸尾神社及高原高崎小林等の諸郷、民屋山林盡く焚たり、又翌年正月燒石虛空より墮ち、明和九年には諸縣郡の諸邑民屋田園災を被むること十三萬六千三百區と言ふ、今ま高千穂山の四方圓などの崩れたる跡を見るに、厚薄はあれ共六尺許焦土幾重も斯くの如くにて、實に數度の炎上を知るに足れり、されば瓊々杵尊の天降坐しは古書共に『斐の高千穂山』とある如く此山なる事疑ひなし云々と。

●狹野神社(日向)

神武天皇降誕地としての狹野は霧島山の東峰に當る山麓にして、宮之宇都又は權現が宇都と稱し、其曠野の中に四方四段餘稍や高き所を相傳へて皇居の址と言ふ、又此四段餘の中に四方二間餘殊に高くして兩石あり、地より現はるゝこと三尺、圍一丈餘、霧島山度々の炎上に山中の岩石皆な焦れて色變するも、此兩石は變せず土人『御降誕址』なりとて牛馬を繫がす常に神幣を立て、標と爲す、地は宮崎縣西諸縣郡高原村大字浦牟田に屬し、官幣小社狹野神社此に在り、社傳に曰く當社は初め天皇御降誕の地に鎮坐ありしを、元暦元年甲午十二月二十八日、霧島山大きに燃へ、神社寺院悉く燒亡して、神與東霧島神社に災を避け給ひ、年久しく東霧島神社と同殿なりしを、天文十二年高原郷の麓に假宮を造營し、慶長十七年今の所に神社及寺院を改造せられ、享保元年九月霧島山噴火して山野其害を被り本社又修繕せられたりとあり。

祭神は天津彦火瓊々杵尊、木花開耶姬命、彦火々出見命、豊玉姬命、鶴背不合尊、玉依姬命、吾平津姬命等にして、孝昭天皇の御宇創建に係り、曾て國主島津家の崇敬深く社殿の修營は悉く國家より行ひ別當職たる佛華寺神德院の寺領を五百石と爲したる程なりき、故に社殿、拜殿、舞殿、寶殿始め末社の建造物等最も壯麗なりしが維新以來は保護の事なく、自然社殿庭苑共荒廢に傾きたるより有志者相謀り宮崎宮と共に本社の改修を企てたり、即ち現今の社殿は神武天皇降誕大祭の際宮崎宮の神殿拜殿を此に移し、境内七百四十余坪を尙ほ擴大して神苑をも清酒にしたらば、一層の神韻を添ゆるに至れり本社一の華表より社前に至るまで路の兩側に老杉千數百株、列を爲し、幹は各圍り一丈餘に出で其蒼鬱たる狀、遠くより之を見るを得べし。